# 光に選ばれし勇者達

BREAKERZ

果てなく広がる大宇宙。無限に存在する平行世界。この物語は光に選ばれた少年達が少女達と時に戦い、時に支えられながら光の巨人となって戦い、勇者へとなる英雄譚である。

平成ウルトラマンシリーズと作者の好みの作品とのクロス作品です。原作主人公が変身したり、オリジナル主人公が変身したりとやりたい放題にします。ついでに連載ですが短編小説です。

とりあえず出る作品は。

最弱無敗の神装機竜

ハンドレッド

魔装学園Ｈ×Ｈ

艦隊これくしょん（アニメ）

To LOVEるダークネス

ゆらぎ荘の幽奈さん

ご注文はうさぎですか？

魔法少女まどか☆マギカ

ストライクウィッチーズ&ブレイブウィッチーズ
デート・ア・ライブ
天華百剣
閃乱カグラ
ド級編隊エグゼロス
アズールレーン（アニメ）
作者の好みです。
カップリングも作者の好み、ハーレムあり、原作キャラ改変&アンチ・ヘイトするかもしれません。気晴らしに書いた物です。それでもいい方はどうぞ。
注意:追加&修正度々行います。

# 目次


最弱無敗の古代巨人―ティガ― 1
最弱無敗の古代巨人―ティガ―Ⅱ 11
最弱無敗の古代巨人―ティガ―Ⅲ 27
最弱無敗の古代巨人―ティガ―Ⅳ 35
最弱無敗の古代巨人―ティガ―Ⅴ 51
最弱無敗の古代巨人―ティガ―人物設定 65
ダイナ・ハンドレッドⅠ 73
ダイナ・ハンドレッドⅡ 85
ダイナ・ハンドレッドⅢ 95
ダイナ・ハンドレッドⅣ 107
魔装学園H×G―ハイブリッド・ガイア― ガイア編 131

魔装学園Ｈ×Ｇ ガイア編Ⅱ 147
魔装学園Ｈ×Ｇ ガイア編Ⅲ 163
ティガ・ダイナ・ガイア 大激戦 ウルトラの友情！ ｃｈａｐｔｅｒⅠ 185
ティガ・ダイナ・ガイア 大激戦 ウルトラの友情！ ｃｈａｐｔｅｒⅡ 219
ティガ・ダイナ・ガイア 大激戦 ウルトラの友情！ ｃｈａｐｔｅｒⅢ 247
ティガ・ダイナ・ガイア 大激戦 ウルトラの友情！ ｃｈａｐｔｅｒⅣ 273
ティガ・ダイナ・ガイア 大激戦 ウルトラの友情！ ｃｈａｐｔｅｒⅤ＆エピローグ 305
艦隊コスモスⅠ 333
艦隊コスモスⅡ 351
艦隊コスモスⅢ 367
艦隊コスモス番外編 吹雪の１日秘書艦 389
To ＬＯＶＥる ＮＥＸＵＳ 411

ゆらぎ荘のマックス 417
ご注文はメビウスですか？ 427
ウルトラマンゼロ☆マギカ 449
ストライクギンガⅠ 463
ストライクギンガⅡ 479
ストライクギンガⅢ 507
ブレイブビクトリーⅠ 541
デート・X・アライブⅠ 551
デート・X・アライブⅡ 569
デート・X・アライブⅢ 581
天華百剣―オーブ―Ⅰ 595
閃乱ジードⅠ 603
閃乱ジードⅡ 623

R／B・エグゼロスⅠ
R／B・エグゼロスⅡ
アズールレーンＴ Ｓｔｏｒｙ０Ⅰ
アズールレーンＴ Ｓｔｏｒｙ０Ⅱ

709 693 655 645

# 最弱無敗の古代巨人$$ティガ$$

まずは最弱無敗の神装機竜とウルトラマンティガです。
ルクスハーレムです。
後ルクスの機竜$$バハムート$$をパワーアップさせます。設定は後書きで。
OP『ＴＡＫＥ　ＭＥ　ＨＩＧＨＥＲ』
挿入歌（バハムート時）『飛竜の騎士』
挿入歌（ティガ時）『ＢｒａｖｅＬｏｖｅ，ＴＩＧＡ』
ED『ライムツリー』

---

世界の五分の一を束ね、世界最強と謳われ、圧倒的な軍事力を背景に数百年の間圧政を敷いた『アーカディア帝国』は反乱$$クーデター$$により滅ぼされた。
それを成し遂げたのは、たった一機の『漆黒の機竜』。
その正体は今も謎のまま。

人々は『畏れ』と『敬意』を込めて伝説となった『機竜使い~~§§~~ドラグナイト~~§§~~』をこう呼ぶ。

『黒き英雄』とーーーーーーーーーーーーーー。

*

アーカディア帝国が滅んで五年の月日が流れた。かつての『アーカディア帝国』は『アーカディア旧帝国』と呼ばれ、現在は『アティスマータ新王国』になり、それなりに平和を謳歌していた。

だが人々は知らない、

この平和はほんの少しの亀裂で脆く崩れる『薄氷の平和』だと言うことを。
古代からの魔物達が今目覚めようとしていることを。
今はまだ、誰も知らない。

*

王都から離れたここ、五つの市街区から成る十字型の城塞都市『クロスフィールド』。そこから離れた場所にある山で一人の少年が歩いていた。
「フウ、今回の依頼§§雑用§§は『山で食べられる茸を探して来てくれ』って、赤ん坊の世話で動けない奥さんからの依頼§§雑用§§はもうすぐ終わるな」
茸が大量に入った籠を携えた少年は銀の髪に灰色の瞳。小柄で線は細く整った顔立ちをした一見すると女の子にも見えるが少年の首には『咎人の証である黒い首輪』を着け『二本の剣』を腰にぶら下げていた。少年は額に浮かんだ汗を拭いながら山を散策していた。
何故このような少年が山を歩き、依頼§§雑用§§をこなしているのかと言うと、それは彼が『国民に対しての奉仕と協力』がこの国で『特別な立場』にある少年の

義務であり目的だからだ。

『ク・・・ルク・・・・・・ス・・・・・・クス・・・ル・・・ルクス・・・』

「今誰か僕を呼んだ？」

ルクスと呼ばれた少年は『声』がする方へ歩いていった。すると光の三角垂の建物ピラミッドが目の前に現れた。

「!?これって遺跡ルインが!?でも、こんなところに遺跡ルインがあるなんて・・・・・・・」

『ルクス・・・ルクス・・・ルクス・・・』

『声』は光のピラミッドから聞こえた。ルクスは何故か分からなかったが、その光のピラミッドの中に入っていった。そこにいたのは。

巨人！

余りにも大きな巨人の石像が三体そこに並んでいた。

「巨人！・・・でもこれって石像なのかな？」

ルクスはその巨人達に近づく。すると真ん中の巨人の額が光、ルクスの胸元に当たる。

「!?」

攻撃を受けた?!と思ったが違かった。何故ならルクスの身体に、心に『暖かく力強い何か』が入っていった。

『ルクス・・・光を・・・光を掴め』

謎の『声』がルクスの心に染み込むと光は一層眩しくなりルクスは思わず目を閉じる。再び目を開けたルクスの目の前には『光』も『巨人』もいなくなっていた。

「あれ？僕は今を？・・・ん？なんだこれ？」

ルクスの手には『白いスティック』がいつの間にか握られていた。

「一体、なんだったんだろう？」

不思議に思うルクスだが、陽も沈み始めたので『白いスティック』を胸の内ポケットに入れて急いで依頼人の所に戻る。依頼人に茸が入った籠を渡し、依頼を終えたルクスは今晩の寝床を探して都市を歩くのだが。

運悪く寝床が無く途方にくれていたとを知り合いの酒屋の娘に頼み快く泊めて貰えた。

『二本の剣』を壁に立て掛けベッドに寝そべりながらルクスは『白いスティック』を眺め、『光のピラミッド』と『巨人』の事を考えていた。

「あれって幻？それとも夢でも見てたのかな？でも僕、こんな物ﾓﾉ持ってなかったし、あれはやっぱり・・・」

そこまで考えてルクスは久しぶりの柔らかいベッドと茸探しの疲労から強烈な睡魔に襲われる。

「まあ良いや。明日も依頼があるし・・・今日は・・・もう・・・寝る・・・か・・・」

『スティック』を枕元に置いてルクスは眠りにつく。すると『白いスティック』が淡く光り、光は粒子になって立て掛けられた『二本の剣』の内、『黒い剣』へと流れてゆき『黒い剣』は銀の光と赤い光と青紫の光に包まれる。

所変わってここは『アティスマータ新王国』の王都付近の平原で人知れず『巨大

な生物』が大地から現れた。二本の足で立ち硬い外骨格を鎧のように纏い、蜥蜴のような頭部も鎧のような外骨格に覆われた『巨大な生物』が唸りを上げる。

「グワアアアアアァァァ！！！！」

『巨大な生物』『ゴルザ』の叫び声は王都の機竜使い~~§§~~ドラグナイト~~§¿§~~達にも届き、何事かと彼等が『ゴルザ』のいる方向に目を向けるがそこには『ゴルザ』は消え、地面に巨大な『穴』だけが残っていた『ゴルザ』は『ある場所』を目指して地中を突き進む。

さらに場所は変わり、『アティスマータ新王国』のある大陸から数千キロ離れた小島で山崩れが発生し、山の中から『巨大な鳥』が現れた。

「キュアアアアァァァァァァ！！！！」

腕に刃を携え、肩や頭部に刃を生やした『巨大な鳥』『メルバ』が唸り声を上げながら『ある場所』に向かって飛翔する。

かつての『アーカディア帝国の王子 ルクス・アーカディア』は知らない、今晩泊めて貰った酒屋の娘に翌日再び会うことに、そしてその時に起こる騒動によって、

自身の人生に大きな、とてつもなく大きな『変化』が訪れる事を。そして自分の目の前に現れた『巨人』と『二体の怪獣』が自分のとてつもない『戦い』の幕開けを告げる事を。

ルクスだけでは無く、これからルクスが出会う多くの少女達。

金の髪をサイドポニーにした真紅の瞳をしたルクスよりやや小柄で色白で『旧帝国』とも『新王国』とも関わり深い『姫君』。

水色の長髪をしたすらりとした細身の身体と、端麗な顔立ちをした冷たい瞳をし、『巨人』と関わりがある少女も。

ルクスと関わり深い、小柄な体型に不釣り合いな豊満な胸をし、桜色のふわりとした髪をツインテールに柔らかな雰囲気漂い『旧帝国』から『おぞましい行い』を受けた少女も。

金色の長髪に豊麗な体つきをし、目元は凛々しく騎士然とした美麗で『不器用な生き方』しかできない少女も。

異国の黒い長髪をした色白で均整の取れた体つきをし、左右の瞳の色が違う異国

風で自らを『殺人人形』と名乗る少女も。

ルクスと同じ、銀の髪に灰色の瞳をした少女§§§妹§§§も。

これからルクスに出会い、己の『運命』に立ち向かう事になる少女達の誰もが、これから起こる。新王国だけではなく、『世界』をも巻き込んだ『巨大な運命』の動きを。

今はまだ、誰も知らないーーーーーーーー。

---

ー《バハムートティガ》ー

ルクスがティガに変身するようになり、その影響で進化した機竜。制限時間やルクスの負担も無くなり、マルチ・パワー・スカイの三形態にチェンジして戦う。

ー《バハムートティガ・マルチ》ー

バハムートの鎧に銀の線が走り、通常のバハムートよりもパワー・スピード・ガードがパワーアップした一番バランスの取れた姿。

ー《バハムートティガ・パワー》ー

バハムートの鎧に赤の色が多くなり、赤と黒のツートンカラーになった姿。スピードが遅くなったがパワーに優れ機竜を纏ったフィルフィ以上のパワーを持ち、剣にも付加され上級階層§§ハイクラス§§の大型幻獣種§§アビス§§も一刀両断できる。

ー《バハムートティガ・スカイ》ー

バハムートの鎧が青紫と黒のツートンカラーになった姿。スピードに優れ、神装機竜の中でもトップレベルの速さを持つが攻撃力が弱くなる。しかしヒット&ウェイ戦法を得意とするルクスにとっては一番相性が良い。

今回はここまで、ティガの設定が朧気なのでこんな風になってしまいました（ＴＯＴ）

だが後悔は無い!!

# 最弱無敗の古代巨人$|$ティガ$¿$II

ティガ編中盤です。
今回は朱の戦姫の所まで飛ばします。

---

「(何なんだコイツら?!)」
内心ルクスは今現在の自分の目の前で起きた状況に困惑していた。
「ガアアアアアアアアアアァァァァァァ!!!!」
「ピュギャアアアアアアアアァァァァァァ!!!!」
自分の目の前にいるのは、『巨大な鎧を纏ったような生物』と『刃のような翼を持った巨大な鳥』が暴れていたのだ！
話は先日の夜。『ピラミッドのような遺跡$|$ルイン$¿$』で謎の『巨人の像』を見つけ、謎の『白いスティック』を手にした日の晩に寝床をくれた酒屋の娘と再会

した時、彼女の手荷物のポシェットをいきなり近くにいた猫が奪いルクスがその猫を追いかけ初めたのが全ての発端だった。

そのまま猫と追いかけっこを繰り広げていたルクスは何故か、貴族や上流社会のご令嬢が住まう。

城塞都市『クロスフィールド』・王立士官学校§§アカデミー§§。

そのアティスマータ新王国が設立させた機竜使い§§ドラグナイト§§を育成する『女学園』の『女子寮』の屋根に、しかも『入浴室』の屋根に登ってしまい（ルクス本人は猫に追いかけるのに夢中で気付かなかった）、あろうことかその時屋根を踏み破ってしまい、ちょうど入浴中だった令嬢達のいるところに落ちてしまい。『痴漢』やら『覗き魔』やら『下着ドロ』と呼ばれながら逃げていた（弁解する余裕も無く、装甲機竜§§ドラグライド§§を纏った少女達に追いかけられた§§襲われた§§からだ）のだが遂に捕まり、牢屋に閉じ込められたのだ。

そして学園の学園長であり元皇族のルクスの数少ない顔見知りである。『レリィ・アイングラム』から『他国に負けない機竜使い§§ドラグナイト§§を育成する手助け』として学園で働かせようとしたのだ。

ルクスは王都のコロシアムで月一で行われる装甲機竜§§ドラグライド§¿§を用いた公式模擬戦§§トーナメント§¿§で『無敗の最弱』と呼ばれる凄腕だったのだ。

だが、それに異議を唱える者がいた。ルクスが入浴室の屋根を踏み破って入浴室に落ちて最初の犠牲者になった少女、『新王国第一王女リーズシャルテ・アティスマータ』である。彼女は男性であるルクスが女学園に編入する事に反発し（女学園なので生徒の大半は反対しており彼女は代表）。ルクスと模擬戦をし、その実力を認めたら働く事を認めると言ってきたのだ（実力重視の学園ならば仕方ない事なのだが）。自分に負ければ犯罪者として牢獄行き、勝てば無罪放免で働いて良しの、ほぼ選択の余地無しの条件なのでルクスも了承した。

リーズシャルテが決闘を学園長室の前で立ち聞きしていた野次馬達に伝えその場を去り、ルクスも部屋を退室すると自分の〝妹〟である『アイリ・アーカディア』と再会し、小言を言われた。

そして学園敷地内にある装甲機竜§§ドラグライド§¿§の演習場。観戦席では多くの生徒達が観戦し、ルクスとリーズシャルテが対峙するリングと観戦席の間には強靭な格子が張られ、更に生徒の機竜使い§§ドラグナイト§¿§数名が常に障壁を展

開しており巻き添えの心配は無い。

ルクスは遺跡$|$ルイン$¿$から十数年前に発掘された装甲機竜の中でも三種の汎用機竜、飛竜機竜$|$ワイバーン$¿$、陸戦機竜$|$ワイアーム$¿$、特装機竜$|$ドレイク$¿$の内の一つ飛竜機竜$|$ワイバーン$¿$を纏ったが、リーズシャルテは世界にそれぞれ一種しか存在が確認されておらずその機体性能は汎用機竜を遥かに凌ぐ稀少種の装甲機竜、神装機竜《ティアマト》を纏ってルクスとの戦いが始まった。

汎用機竜を使っているにも関わらずルクスは神装機竜のリーズシャルテと互角以上の戦いを見せ、その実力に敬意を持ったリーズシャルテは神装機竜にのみ装備された特殊能力『神装』を用いた。《ティアマト》の『神装』は重力を制御する《天声$|$スプレッシャー$¿$》を放ちルクスの動きを封じた。

だが突然《天声$|$スプレッシャー$¿$》が解除された。ルクスはリーズシャルテを見て直感する、神装機竜には根本的な危険がある。それは、暴走。リーズシャルテの顔色は憔悴と動揺に染まるが一刻も早く模擬戦を終わらせようとするが。その瞬間異変が起きた。

演習場上空から人ならざる闖入者が突っ込んできた。人類の天敵とも言われる

『幻獣種$$アビス$$』が現れた！十余年前に遺跡$$ルイン$$から時おり現れるようになった謎の幻獣。人間・動物見境無く襲い掛かり尋常じゃない強さと不可解な生体、そして特殊能力。ほとんどの大国は遺跡$$ルイン$$近くの関所に砦、城塞都市を幾重にも置き機竜使い$$ドラグナイト$$を配備している。この城塞都市$$クロスフィールド$$も遺跡$$ルイン$$と王都の間にある防衛拠点なのである。

　パニックになる生徒達を女教官達が落ち着かせ避難させようとする。幻獣種$$アビス$$が観戦席を狙おうとするもルクスの奮戦で幻獣種$$アビス$$を粉砕する事ができたがーーーーーーーーー。

　脅威はまだ終わっていなかったーーーーーーーーー。

突然地面が盛り上がりその中から『巨大な生物』が、空から『刃のような翼を持った巨鳥』が現れ大気を奮わすほどの大声を上げる！その大きさは城塞都市を遥かに凌ぐ巨体。その姿はまるでおとぎ話か伝説に出てくる怪物達。ルクスのお陰で恐怖から解放された気分だった生徒達の心は一瞬で『絶望』に変わった。生徒達の中には「こんなの夢だ」とか「ああ私死ぬんだ」、「もう終わりだ」と絶望に染まる生徒達と教官達。

『巨人な生物 古代怪獣ゴルザとメルバ』は城塞都市の近くの山に攻撃を始める。ゴルザは額から振動破のような物を飛ばし、『光のピラミッド』が姿を表す！

「何だあれは!? 遺跡$|$ルイン$¿$か?!」

「シャリス！何かアイツらあの遺跡$|$ルイン$¿$を狙ってない?!」

「Ｙｅｓ.どうやら今のところ我々には興味を示していないようです」

シャリスと呼ばれた蒼髪に凛々しい顔立ちの少女に茶髪なポニーテールにした活発そうな少女ティルファーの近くに装甲機竜を纏った冷静な雰囲気漂う黒髪の少女ノクトがルクスと同じ銀髪に灰色の瞳をした『ルクスの妹アイリ・アーカディア』

を連れてきた。そんな中、レリィ・アイングラムは先日、王都で囁かれている『ウワサ』を思い出していた。

「(『この星に〝大異変〟が起こり〝大地を揺るがす怪獣ゴルザ〟、〝空を切り裂く怪獣メルバ〟が復活する。〝大異変〟から世界を守れるのは〝守護神ティガの巨人〟だけ』王都で眉唾に囁かれているウワサの怪獣。あの二体がゴルザとメルバなの？)」

ゴルザはピラミッドを破壊しその中にいた〝二体の巨人の像〟を白日に晒す。生徒達と教官達は〝二体の巨人の像に驚くがルクスだけは違う箇所を見ていた。

「あれ？〝もう一体の巨人〟は？」

幻獣種$§$アビス$§$との戦いでワイバーンを消耗させてしまい。動けなくなったルクスと暴走ギリギリのリーズシャルテはリングに降りてことのあらましを見守っていた。

巨人の像が完全に姿を表すとゴルザとメルバは、巨人の像を破壊する！像を破壊した二体は今度は学園の方に近づく。

「!?やめろ・・・・・・」

「ルクス・アーカディア？」

「やめろ！！！」

ルクスは思わずワイバーンでゴルザとメルバに果敢に挑もうとする。リーズシャルテや他の機竜使い~~§§~~ドラグナイト~~§§~~も動こうとするが、二体の威圧感に圧倒されてしまい、一瞬遅れる。ゴルザは蝿でも払うかのようにルクスを攻撃するがルクスはそれを回避、しかしメルバの瞳から放たれた光線が迫ってくる！ルクスは障壁を張って防ごうとするも限界だったワイバーンでは防ぎきれず光線を受けてしまった！

「ルクス・アーカディア！！！」

「兄さん!!」

『！！？？』

リーズシャルテが、アイリが、シャリス達が、桃色の髪の少女が、蒼色の髪の少女が、ワイバーンが燃えて落下するルクスの姿を捉えた。

ルクスは自分が落下している事を理解している。何とかしようにも身体はまともに動かずどうしようもなかった。

「（もう駄目なのか・・・・・・・）」

薄れる意識の中、ルクスの目の前に『白いスティック$$/$$スパークレンス$$¿$$』が現れた。スパークレンスはルクスに呼び掛けるように光り、ルクスは思わずそれを手にする。するとあの時の〝声〟が再び頭に響く。

『ルクス・・・光を掴め！ティガへとなれ！』

「（僕に・・・僕に光を掴む〝資格〟なんて無い・・・でも・・・今光を手にして皆を救えるなら・・・・・お願いだ・・・僕に・・・・・・・）僕に光を！！！」

ルクスがスパークレンスをかざすとスパークレンスの先端が開きそこから光が溢れる。ルクスが落下した直後、ゴルザとメルバの目の前に光が降りて来た！

『！！！！』

『！！？？』

二体はその光を睨み。リーズシャルテ達はその光を刮目する。光は一気に〝人型〟になりその勇姿を現す！

そこにいたのは銀の身体に赤と青紫のラインが入った胸にクリスタルとプロテクターを装備した巨人だった！

『ヂェアッ!!』

「何だ！あの巨人は?!」

リーズシャルテが驚き、他の機竜使いSSドラグナイトSS達も驚いていた。巨人はゴルザとメルバに向かって構えた！その姿を見てレリィは直感する。

「（まさか、あれが〝ティガの巨人〟？）」

巨人、ティガはゴルザに向かいゴルザのチョップや膝蹴りをゴルザに叩き込む！襲い掛かるメルバに蹴りを叩き込む！メルバは仰向けに倒れゴルザは額から振動破を放つがティガはゴルザの頭部を抑え振動破を阻止する。そのままゴルザと取っ組み合いになる。メルバは翼は開きティガに襲い掛かる。

『ウワッ！』

ティガは地面に転がりその隙にゴルザが振動破を放つがティガはバク転で次々発射される振動破をかわす。メルバが刃を生やした腕でティガに襲い掛かるがティガは腕を抑える。その隙に再びゴルザは額から振動破を放ちティガの背中に当たる！

『ウワァァァッ!!』

膝をつくティガの頭をメルバが抑え殴り飛ばす！

『グワアアッ！』

倒れるティガにゴルザとメルバが近づく。リーズシャルテ達は敵か味方か現状分からないティガに加勢するか迷っていた。

ティガは膝を付いたまま構え、ゴルザとメルバを見据える。二体一で自分達の勝利を確信しているのかゴルザとメルバは勝利の雄叫びを上げるが。

ティガの額が赤く光る。するとティガの身体が赤一色になる。これが状況に応じて姿を変える、ティガの『タイプチェンジ』の一つ、パワーに優れた『パワータイプ』だ！

『デアッ！』

パワータイプティガ（Pティガ）は二体に向かう！ゴルザは振動破を放つぎPティガは片手で防ぎメルバも瞳から光線を放つもこれも両手で防がれる。

『ハアッ！』

ゴルザはPティガに襲い掛かるがPティガはゴルザにカウンターの要領で肘鉄をゴルザの腹部に浴びせる！仰け反ったゴルザの胴体を両手でガッチリ抱き締め鯖折りをする！

ゴキゴキゴキゴキゴキ！！！

ゴルザの背中から骨の砕ける音が響く！

『ギャアアアア！！！』

悲鳴を上げるゴルザの頭を背負い投げの要領で投げ飛ばす！

『ヂェアッ!!』

地面に叩きつけられるゴルザ、次はメルバが襲い掛かる！Ｐティガは襲いくるメルバに回し蹴りをするがメルバは上空へと飛び上がる！メルバは上空を飛んで行きゴルザは地面を掘って退散する。

「あっ！アイツ逃げるぞ！」

リーズシャルテはＰティガに思わず伝える。Ｐティガがゴルザを追おうとするもメルバが光線で攻撃する。

『グワッ！』

メルバは上空を旋回し、ゴルザは完全に地面に潜った。するとＰティガの胸のクリスタルが赤く点滅する。

ピコンピコンピコンピコンピコン

「何？このピコンピコンって？」

「Ｙｅｓ.あの巨人の胸元から聞こえてきます」
「何だか、良い予感はしないな」
そう、このカラータイマーが点滅する時はティガの活動時間が残り少ない事を告げているのだ。メルバはＰティガに向かって中点直下する！
『ピヤアァッ！』
するとティガの額が今度は青く光る！今度は青紫に染まった姿に変わる！これが速さと俊敏性に優れた『スカイタイプ』である！スカイタイプティガ（Ｓティガ）は飛び上がりメルバに向かって蹴りを放つ！先程と違い速い攻撃にメルバはかわせずモロにくらい地面に落下する。
Ｓティガはヨレヨレで立ち上がるメルバに向かい両手を広げ両手と胸のクリスタルにエネルギーを貯め両手を頭上に上げて合わせまるで手裏剣でも投げるかのようにエネルギー弾を放つ！これがティガ全タイプな共通する技『ハントスラッシュ』である！
『ピギャアアアア！！！』
『ハントスラッシュ』を受けたメルバは跡形もなくコナゴナになった！

「やっ・・・やったのか？」

リーズシャルテの声を皮切りにシャリス達や他の生徒達も歓声を上げる！

『・・・・・・・』

Sティガは無言でリーズシャルテ達を見据える。リーズシャルテ達は今度は巨人が敵か？と身構えるが、ティガは彼女達に向かって静かに頷き。

『ヂュワッ!!』

と大空の向かって飛んでいった。

唖然、呆然と巨人の去っていった方向を見据えるリーズシャルテ達。だが、〝ルクス・アーカディアは死んだ〟と思った彼女達は悲しみを浮かべる。しかしノクトが。

「皆さん、あれを・・・」

リーズシャルテ達はノクトが指差した方へ目を向けるとそこには！

身体を引きずりながらこちらに手を振るルクス・アーカディアの姿があった！

リーズシャルテ達はルクスの元へ向かうがルクスは手に持っていたスパークレンスを眺める。

「僕が巨人になったのか？」
『ルクス・・・光を掴め！ティガへとなれ！』
「ティガ・・・あの巨人の名はティガと言うのか？」
これが『ルクス・アーカディア』、『ウルトラマンティガ』の最初の戦いであった。

---

次でバハムートのパワーアップを御披露目してからティガ編終了させようと思います。原作一巻を目安にしたいと思います。

# 最弱無敗の古代巨人$|$ティガ$¿$Ⅲ

ー6年前 アーカディア帝国ー

それはまだ『アーカディア帝国』が存在していた時代、ルクス・アーカディアは十二の若さで『帝国史上最年少で機竜使い$|$ドラグナイト$¿$の免許』を取り、その表彰の為に宮廷に招かれた機会を利用し、『一応』父親である皇帝陛下に、『男尊女卑の制度強化法案』、『軍事拡大による重税』、『貧しい市民を使った劇薬の人体実験』等、その全てを取り下げてほしいと奏上したが、皇帝陛下はルクスの話に耳を傾ける処か話すら聞いてくれなかった。

そして、王宮の離れの屋敷で黄昏ている第七皇太子殿下に声を掛けたのは同じ銀髪の第一皇太子殿下であった腹違いの兄『フギル・アーカディア』だけだった。フギルは自分の考えを真摯に聞いていてくれた。帝国は腐敗してしまった。汚職、格差、圧政、重税、弾圧と数え上げたら切りがない位に狂った国をルクスは憂いていた。

フギルも自分と同じ考えを持っていたが、「自分達にはどうすることもできない」

と現実に見切りを付けそうになった。だがルクスはそんな兄に自分の考えを淡々と話す。「兄は自分のようにこの帝国を憂いている」と信じていた。

だが、この時のルクスは知らなかった、兄フギルの恐ろしい『本性』を。

ー現在 学園の医務室ー

ルクスは幻神獣[illegible]アビス[illegible]との戦闘と古代怪獣ゴルザとメルバとの巨人[illegible]ティガ[illegible]へと変身した初戦闘で気を失っていたルクスは倒れる前にリーズシャルテ達が自分に向かって降りてくるのを思い出していた。寝ているベッドの近くに二本の機攻殻剣[illegible]ソード・デバイス[illegible]が、枕元には巨人[illegible]ティガ[illegible]に変身する時に使った白いスティック[illegible]スパークレンス[illegible]が置かれていた。リーズシャルテが自分の看病をしており、リーズシャルテはルクスを『信頼できる人物』と考え、自分の『秘密』をルクスに話す。リーズシャルテの下腹部に『ある印』があった、それがルクスに決闘を挑んだ理由。

『旧帝国[illegible]アーカディア帝国[illegible]の紋章』が刻まれていた。

『新王国の姫の身体に旧帝国の印がある』。そんな事が世に知られれば『裏切りの証』か『血統の詐称』かあらぬ疑いを招きかねない高度に政治的な事実であった。震えるリーズシャルテを見たルクスは自身の機攻殻剣§§ソード・デバイス§§に誓って誰にも口外しないことを誓った。そしてルクスはリーズシャルテの計らい？で整備士見習いから城塞都市王立士官学園§§クロスフィールドアカデミー§§に士官候補生の生徒として編入する事になった。唖然とするルクスにリーズシャルテは自身を級友らしく『リーシャ』と呼ぶ事を許された。

その翌日。ルクスは妹の『アイリ・アーカディア』から『ゴルザとメルバ』との戦いで心配を掛けたのでたっぷり小言を言われて精神ボロボロの状態でリーシャのクラスに編入するとそこには。

学園長にしてアイングラム財閥の長女のレリィ・アイングラムの実妹でルクスの幼なじみ、桃色のふんわりとした髪を二つのリボンでまとめられ、ぼんやりとした雰囲気に幼さの残る顔に小柄な身体に不釣り合いな豊満な胸をした少女『フィルフィ・アイングラム』と再会した。フィルフィは幼い頃の名で『ルーちゃん』と呼びルクスに『フィーちゃん』と呼ばせていた。お陰でクラスメート達に少し笑われ

た。

授業が終わるとクラスメート達がこぞってルクスに近づき、国民に雑用と言う名の奉仕を義務付けられ付いた名が『雑用王子』のルクスに依頼と言う名のデートの申し込みをする女子が殺到した。

元々ルクスは良い上に機竜使いSSドラグナイトSSとしても優秀なので女学園故に異性と関われない令嬢達から狙われるのは仕方ないことだ。

そして騒ぎを納めるために茶髪のポニーテールをした活発そうな少女、二年でクラスメートのティルファー・リルミット（彼女はルクスの起こした騒動でルクスを追い回し、『ゴルザとメルバ』の騒動では生徒達の避難を率先して行っていた、因みに彼女はルクスを『ルクっち』と呼ぶ）が雑用依頼の箱を出して騒動を納めたのだが。

リーシャがルクスを『専属の世話係』をやってほしいとその対応で困っているルクスを庇うフィルフィとで睨み合いが始まり（睨んでいるのはリーシャでフィルフィがボーッとしていた）、それを止めたのは。

腰まで届く水色の長髪にすらりとした細身の身体、端麗な顔立ちに冷たい瞳をし

た完璧な美術品のような美貌の少女、北の大国、ユミル教国からの留学生で伯爵令嬢の『クルルシファー・エインフォルク』だった。

彼女はルクスを案内すると言って連れ出し屋上に向かいある程度の話をするとクルルシファーはルクスにある『二つの依頼』をする。

「『黒き英雄』を探して、私はその人に用があるの。それともう一つは、『あの巨人』の事を調べてほしい」

「『巨人』って、あの怪物達を倒した？」

「ええそうよ、私はあの『巨人』に興味があるの」

そう言ってクルルシファーは屋上を去って行った。『黒き英雄』と『巨人』、ルクスにとって他人事ではない二つの依頼を受けた。

その夜、女子が全員入浴が終わった大浴場を掃除しているルクスは以前レリィから聞いた『噂』を思い返していた。レリィ曰く。

『三週間程前に王都近くに隕石が落下して、その隕石から謎の物体が発見されたの。その物体からある『予言』があったそうよ。〝大地を揺るがす怪獣ゴルザ〟と、〝風を切り裂く怪獣メルバ〟、そして〝守護神ティガの巨人〟ってね。勿論王都の学士

達は眉唾と言ってたけど、あの時現れた怪物達が怪獣ゴルザとメルバで二体と戦ったのがティガの巨人だと思うわ』

ルクスは懐にしまってあるスパークレンスを取りだし、思わず口ずさむ。

「何故、君は僕を選んだの？僕に『守護神の力』を得る『資格』なんて無いのに」

すると大浴場の扉が開きルクスは慌てるがそこにいたのは。

ルクスと同じ銀髪に灰色の瞳をし、銀髪をセミロングにしたルクスの妹、一年の『アイリ・アーカディア』と彼女の友人の黒髪のボブカットで感情の乏しい表情をした一年の『ノクト・リーフレット』が現れ、更に蒼髪の男っぽい口調の麗人、三年の『シャリス・バルトシフト』だ。

実は三年のシャリスと二年のティルファーと一年のノクトは学園で衛兵の手が回らない場所を中心に警備などを行っている自警団『三和音~~ss~~トライアド~~ss~~』であるのだ。

アイリから雑用が終わったら女子寮の大広間に来て下さいと言われ、ルクスはこれを了承する。

雑用が終わったルクスは大広間に行きアイリの案内で食堂へ向かう。食堂の扉を

開けるとそこには。

アイリや三和音$$トライアド$$にクラスメート達や他のクラスの生徒、クルルシファーにフィルフィやドレスアップしたリーシャがルクスの編入祝いが行われていた。

唖然とするルクスにドレスアップしたリーシャは言う。

「わたしたちはお前を歓迎するぞ。ルクス・アーカディア・・・此度は大義であった」

そう言ってルクスにグラスを持たせ、シャリスが音頭をとる。

「それでは、ルクス・アーカディアの編入を祝って、乾杯!!」

『乾杯!!』

ルクスは涙混じりに微笑みながらリーシャに言う。

「ありがとうございますリーシャ様っ、嬉しいです・・・!!」

その顔を見てリーシャは照れ笑いを浮かべる。ルクスの懐のスパークレンスもルクスを祝福するように淡く輝いていた。

後日、廊下で寝ていたルクスをフィルフィが自分の部屋に連れ込み（勿論善意）、同じベッドで寝て、起きたルクスと討論にな、そしてそれを兄を探していたアイリに見られてしまい、アイリの兄への信頼が少し落ちたのは言うまでもない。

---

今回でティガを終わらせようとしましたが、モチベーションが上がらずこうなってしまいました。次回こそ終わらせたいです。

# 最弱無敗の古代巨人$|$ティガ$¿$IV

今回、ウルトラ怪獣が出てます。ヒント『最初の怪獣』。

---

フィルフィとの朝のやり取りを妹のアイリに見られ、小言を言われたながらルクスの本日の仕事場に案内していた。旧帝国の皇族であるルクスとアイリには新王国から『莫大な借金』があり、ルクスは雑用で、アイリは『遺跡$|$ルイン$¿$』で発掘された古文書の読解や装甲機竜$|$ドラグライド$¿$の指南書の更新で借金返済をしていた。因みにフィルフィとの同室をアイリがフィルフィの姉であり学園長であるレリィに報告したらルクスに「妹をよろしくね」と言われたらしい。ルクスは「何考えてるんだ」と戸惑い、アイリは「兄さんより学園長を諫めなければ」と思ったらしい。

アイリと別れたルクスは本日の仕事場である装甲機竜$|$ドラグライド$¿$の工

房アトリエ（装甲機竜ドラグライドの存在と技術はどの国においても『最高機密』である）に付き中に入ると乱雑に散らばった工房アトリエのソファーに白衣を着たリーシャがいた。

信じられない事に、リーシャは学園の工房アトリエの所長を務めていた。リーシャは独自で装甲機竜ドラグライドを作り出す程の機竜の技術者として途方もない才能の持ち主だったのだ。リーシャはゴルザとメルバとの戦いで激しく損傷したルクスのワイバーンを修理し、ルクスに渡した（修理されたワイバーンはドリルが装備され、激しく魔改造されていたがルクスがリーシャに頼み元に戻してもらった、リーシャがしつこくドリルを装備にと薦めたが却下された）。

その後リーシャに連れられルクスは王都の防衛拠点である城塞都市クロスフィールドで士官候補生でも特別に戦闘許可を持つ特殊部隊、装甲機竜ドラグライドを扱える遊撃部隊『騎士団シヴァレス』にルクスを推薦したが、騎士団シヴァレスはそれ相応の実力が無いと入れない上に、現在三年生はシャリス（勿論騎士団に在席している）を含んだ数名以外は王都に演習に行っており、『アティスマータ新王国』の『四大貴族』の一角ラルグリス公爵家の令嬢に

して『学園最強』の異名を持つ三年生で騎士団長『セリスティア・ラルグリス』はかなりの男嫌いと言われており、ルクスの実力に半信半疑の騎士団員達を納得させる為、リーシャは模擬戦を行う。

リーシャとルクスのチームでルクスが殆ど戦おうとせず、模擬戦はリーシャが勝利を納め、ルクスの入団は反対多数で却下された。因みにルクスの入団に賛成だったリーシャを含め、神装機竜《テュポーン》の使い手であるクルルシファーと神装機竜《ファフニール》の使い手であるフィルフィは賛成派であった。

リーシャは追加の依頼として、ルクスを城塞都市に案内（俗に言うデート）をしようとしたが、財布を忘れていまい、ルクスに奢られる羽目になった。ルクスはリーシャの技術者としての功績を誉めるが、途端にリーシャの顔に影が射す。

「私の問いに答えてくれ、ルクス・アーカディア。王女とはなんなんだ？」

リーシャは話す、母は病死していており、父アティスマータ伯はクーデターで負った怪我が元で玉座に就く前に亡くなり、リーシャの叔母であるラフィ女王が国を継ぎ、リーシャは英傑の忘れ形見として王女に就いた『それだけ』の存在だと。周りの人間達はリーシャに王女らしい、立派な人格者であることを強要し、それが

リーシャの『責任』で『使命』であると責め立てた。そしてリーシャはクーデターが起こる前に旧帝国に誘拐されクーデター計画を進めていたアティスマータ伯との取引材料にされようとしたが、リーシャの父はリーシャを見捨てられ、リーシャは『旧帝国の所有物』にされた証である刻印を烙印された。それからリーシャは監禁され『妹』はクーデターの時に殺されてしまい、叔母には子がいなかっ為にリーシャを養子にし王女の座に就かせた。旧帝国の烙印を押された事実を伏せて。

だからリーシャはルクスに怒っていた、『旧帝国の烙印』を『旧帝国の王子』に見られたから。リーシャは父の判断をとても勇敢で称えられるべき事だと思っていたが。

「だけど・・・それでも私はっ・・・・・・私は助けてほしかったよ、『国』じゃなくて『私』を選んでほしかったんだ・・・!!」

「・・・・・・・・・」

リーシャの言葉をルクスは黙って聞いていた。

「だから私はお姫様じゃない、そんな資格なんてないのさ」

自嘲気味に呟くリーシャは、話を変えるように自分が何かとルクスを誘うのかを

話す。二ヶ月後に行われる各国の機竜使い$$ドラグナイト$$達による『全竜戦』で勝利し、『遺跡調査権』を獲得する為に最強の部隊を作るためにルクスの力が必要と考えたからだ。そしてゆくゆくは自分の初めてのパートナーとしてとも考えているが。

学園に戻ったルクスは取り敢えず応接室に泊まり、備え付けのソファーに寝転がりながら五年前の事を夢に見てた。信頼していた第一王子のフギルに裏切られ、帝国を崩し、皇帝を含んだ多くの機竜使い達を死なせ、慚愧に崩れるルクスをフギル・アーカディアは嘲笑いながら言う。

「お前が理想を果たせなかった理由はな。お前は何も世界が分かってない。『王の器』なんかじゃないのさ。『最弱』よ」

それから七日後に意識を取り戻したルクスが聞いたのは。

『帝国軍敗北』、『帝国アーカディア帝国滅亡』、『革命$$クーデター$$成功』、『帝国軍皇族並び要人のほとんどの死亡』、『戦いに参加した約千二百名の機竜使いの戦死』。

ルクスが信じた『理想の決着』なんてどこにもなかった。

夜が明け、夢から覚めたルクスは自分に毛布をかけてくれていたクルルシファーと少し話しをするとルクスに言う。

「私はある時全ての理由を失ってしまったのよ・・・ただ一つ私の中に残っている『真実』、それを知る鍵が『黒き英雄』と『あの巨人』なの。だから私は・・・それらを追っている・・・ねぇルクス君、あなたに聞きたいことがあるの」

すると突然鐘の音が鳴り響いた、それは『敵襲』を知らせる『警報』だった。

ルクスは『新王国 第四機竜格納庫』で城塞都市そして王都へ大型幻神獣~~§§~~アビス~~§§~~が侵攻していることを聞かされる。『第六遺跡~~§§~~ルイン~~§§~~箱庭~~§§~~ガーデン~~§§~~』から現れた巨大なスライムのような幻神獣~~§§~~アビス~~§§~~を迎え撃つためリーシャ達『騎士団』が討伐へ向かった。元々城塞都市は王都の防衛拠点であり、新王国で機竜使いが不足しているために候補生であるリーシャ達『騎士団』が駆り出されるのは当然の事である。クルルシファーは留学生であるために幻神獣との直接戦闘に関わる義務は無いと本国から言われていた。だがルクスは。

「(『戦える人間』が『戦わない』なんて・・・)」

『戦わない』自分がこんな事を考えるなんてと考えるルクスだが、それでも納得で

きない表情を浮かべるが、クルルシファーやアイリに説得され大人しく待つが『出現頻度の低い』幻神獣の一週間に二度も現れた事や、逃げ出した『怪獣ゴルザ』の事もあり不安を拭えなかった。

そしてルクスの不安は『最悪』の形で当たった。今まさに空を飛ぶ『青い球体』がリーシャ達のいる場所に迫っていた。

外に出たルクスはフィルフィから『笛』の音が聞こえると聞き、かつてフギルも『幻神獣を呼び寄せる笛』を所持していたことを思いだし、さらにクルルシファーから大型幻神獣$§$アビス$§$が自爆しそこから30強の幻神獣$§$ガーゴイル$§$が発生し『騎士団』は半壊状態になりクルルシファー達も城塞都市からの撤退することになると告げられる。

リーシャ達を助けに行こうとするルクスをアイリが止める。

「この世界にはどうしようにもならないことだってあるんです！いくら頑張っても覆せないものが!!私達は大義の為に戦ってるのではなかったのですか!?ここで死ぬつもりなんですか!?目的を忘れないで下さい！私達はこの国のために「それは違うよアイリ」・・・」

アイリの言葉をルクスが遮る。

「僕の目的は帝国を討つことだ、僕か、大切な人を奪うあの敵をたおすことだ。大丈夫だよアイリ。僕は君を一人になんてしないから・・・」

そう言ってアイリの頭を撫でながらルクスはアイリから離れる、そして向かう『戦場』へと。

リーシャの前に幻神獣ガーゴイルを笛で使役する機竜使いの男が佇んでいた、王都から配備された警備部隊隊長、その正体は『アーカディア帝国近衛騎士団長ベルベット・バルド』である。この男の目的は『旧帝国の復権』がである、シャリス達は機体が大破してしまい撤退していた、リーシャは殿を務めた。

リーシャの《ティアマト》はほぼ大破し追い詰められ、追い討ちをかけるように旧帝国の反乱軍が現れた。幻神獣アビスの残党十数体に汎用機竜が約百機、更にベルベットは追い討ちをかける。

「俺だよ!! お前の腹に帝国の印を入れたのはな！！！」

「あ・・・あ・・・あ・・・あああああああああああああああ！！！」

忌まわしき記憶が甦り、悲痛の悲鳴を上げるリーシャは五年前の記憶が甦る。

『自分に機功殻剣§§ソードデバイス§§¿§§を渡した男』、そして『帝国を滅ぼした英雄』の事を。

リーシャはベルベットに言う。

「所詮旧帝国に良いように使われ、今も誰かにうまいこと言われて乗せられているだけの下っ端に過ぎない」

と、安い自尊心を刺激されたベルベットの『機竜息砲§§キャノン§§¿§§』を放たれるが、『何か』が防いだ。リーシャが目を向けるとそこには。

「《ワイバーン》・・・？」

「・・・すみませんリーシャ様。せっかく直してもらったのに・・・・・・壊されちゃいました」

「ルクス・・・！！！」

ルクスは『黒い機功殻剣§§ソードデバイス§§¿§§』を抜刀し、詠唱する。

「『顕現せよ、神々の血肉を喰らいし暴竜。黒雲の天を断て』！！！」

そして解き放つ！

「《バハムート》接続・開始§§コネクト・オン§§！！！」

その姿を見てリーシャは呟く。

「お前は・・・黒き・・・英雄・・・？」

「時を喰らって加速しろ《バハムート》、《暴食ﾘﾛｰﾄﾞ・ｵﾝ・ﾌｧｲｱ》」

その時、一瞬で襲いかかってきた反乱軍を薙ぎ倒すルクス。

その光景を遠距離で見ていたノクトはアイリに聞き（シャリス達を撤退させるために学園に戻った時に連れてきた）、アイリも答える。ルクスが旧帝国を滅ぼした英雄『黒き英雄』であると。『旧帝国』を滅ぼしたのが『帝国の王子』である事にノクトは驚く。さらにアイリは言う。

「〝封印と解除〟、あるいは〝抑圧と解放〟の神装。《暴食ﾘﾛｰﾄﾞ・ｵﾝ・ﾌｧｲｱ》ーーーーあれが《バハムート》の持つ圧縮強化の神装です。更に兄さんは敵の攻撃予備動作を見切り、相手が仕掛けた瞬間《暴食》での斬撃でそれを追い抜く事ができる。兄さんの間合いで剣を振りかぶれば、銃のトリガーに指をかければ、その瞬間勝負が決まる。その技の名は・・・『即撃』！！！」

しかしそれほどの強さがあるのに何故『無敗の最弱』なんてとノクトが質問にアイリが答える。相手を確実に撃破するためにその隙を完全に突かなければならな

い、敵の動きを完全に見切るために果てしない修練をつまなければならないのだ。それ故ルクスは《バハムート》でも同じ感覚で扱えるように調整した《ワイバーン》を使って王都のトーナメントで今のスタイルが生まれたのだ。全ては《バハムート》を使いこなすために。

「つまり兄さんは・・・最強を為すための最弱！！！」

ベルベットはリーシャにやったように時間を稼ぎ『機竜の起動時間』を消費させようとするが、アイリはノクトの『竜声~~§§~~通信~~§§~~』でルクスの機竜適性値は女性より上と告げる。

ベルベットは目の前の現実を認めたくないのか、ルクスが何者なのかと喚きだす。

「僕の顔に覚えはないか？ベルベット近衛騎士団長よ」

その時ベルベットは気付いた、彼がルクスが、『アーカディア帝国第七皇太子殿下 ルクス・アーカディア』であると。ベルベットは帝国側であるはずのルクスが何故新王国側に付くのか理解できずまたもや喚くが、ルクスはリーシャに『あること』を告げる。

自分は母を失い、身近な大切な人達を失うのが怖く、大義の為に強くもなれず、

全ての人を救おうとしたが失敗し、二度も繰り返さないように使命を果たすために『雑用王子』として隠れていたと告げる。

「だけど・・・やっぱり助けたい。新王国の王女に相応しいあなたに、認めてほしいと思ったんです」

「ルクス・・・」

「だから・・・僕は英雄なんかじゃない、帝国を滅ぼす、最弱の機竜使いドラグナイトだ」

ベルベットの反乱軍は一斉にルクスに襲いかかるが、相手は弱冠12才で最強の機竜使いになった少年、ベルベットの反乱軍はまるで相手にならず全滅した。

「嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ！！！！」

ヤケクソになったベルベットは笛を鳴らし幻神獣ガーゴイルを呼び寄せルクスにけしかけるが、ルクスの懐に忍ばせていたスパークレンスが光る。するとルクスを中心に光が溢れリーシャ達やベルベットも目をつむる。

ルクスが目を開くと白い世界で『巨人ティガ』が目の前にいた。ルクスはティガの『心』を感じた。

「ティガ・・・『力』を貸してくれるの？」
　ティガは黙って頷く。
「僕に・・・君の『力』を振るう『資格』なんてない、でも、リーシャ様を皆を守れるなら、お願いだ！僕に『力』を！！！」
　ティガが光輝くとルクスは光に包まれる。
　リーシャ達が目を開くとルクスの《バハムート》の姿が変わっていた。装甲はそのままだが、『黒き英雄』の証である黒い装甲に幾つもの『銀の線』が走った《バハムート》に。
　これが、ティガの『力』を受け入れた新たな《バハムート》、《バハムートティガ・マルチ》だ！
　ルクスは今までよりもスピードが増した《バハムート》で幻神獣~~§§~~ガーゴイル~~§§~~を圧倒する。
「機竜が進化したのか？」
　リーシャは先程と違う《バハムート》に驚き。
「アイリ、あれも《バハムート》なのですか？」

「いいえ、私も知りません。《バハムート》にあんな力があったなんて・・・」

ノクトとアイリも驚きを隠せなかった。だがそれ以上に驚いていたのはベルベットだった。自分達が『敗北』した事実を受け入れられないように「嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ」と壊れた人形のように憐れに呟く。ルクスはベルベットに向かって真っ直ぐ言う。

「さようならベルベット。僕はもう皇族としてあなたを裁く事はできないけれど、僕はここで戦います。僕が王子だった帝国じゃなくて、貴方達じゃなくて、僕が認められたいと思う彼女達の為に・・・」

ルクスの言葉が届いていないのかベルベットは『現実』を否定していた。そんな無様な男を尻目にルクスは彼女の元へ向かい、姫君に手を差し伸べる、その手をとってリーシャは呟く。

「・・・・・がとう・・・ーーーありがとう、ルクス・・・・・・」

涙を浮かべながらも笑顔を見せるリーシャをルクスは優しく微笑む。

しかし。

ドオオオオオオオオンンン！！！！

「「！！！？？？」」

突然『青い玉』が上空から二人の近くに落ちてきたルクスもリーシャも、遠くから見ていたアイリとノクトも『それに』目を向けるとそこには。

背中を棘に覆われ黒い寸胴体型に細く小さな手をした横に広がった口をした『怪獣』。

『宇宙怪獣ベムラー』。

「ギュアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

ベムラーの叫び声が城塞都市の空に響いた。

---

今回はここまで、前書きの答えは昭和ウルトラマン最初の怪獣ベムラーでした。

次回で『最弱無敗の古代巨人$|$ティガ$¿$』を終わらせたいです。後、登場人物紹介もします。

# 最弱無敗の古代巨人$¦$ティガ$¿$V

突然現れた『宇宙怪獣ベムラー』は、城塞都市を目指して暴れだす。
「ギュアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」
「!?リーシャ様！すみません!!」
「!?コラ、ルクス！こんないきなり――――」
ベムラーの雄叫びで正気に戻ったルクスはリーシャを抱き抱える。《バハムートティガ・マルチ》のスピードであっという間にアイリとノクトのいる地点に到着する。
「兄さん！リーシャ様！」
「Ｙｅｓ、お二人共ご無事で」
二人の無事な姿を確認し、安堵するアイリとノクト。だが、リーシャとルクスは暴れる『ベムラー』を見る。
「このままでは奴$¦$ベムラー$¿$は、城塞都市$¦$クロスフィールド$¿$に攻めてくるな」

「・・・・・・・・・・・・」

《ティアマト》が大破し、マトモに戦えないリーシャは歯痒そうに顔をしかめる。

ルクスは隠してあったスパークレンスを見つめ、決意を持って顔を上げる。

「ノクト、リーシャ様とアイリを連れてここから離れて」

『!?』

ルクスの言葉にリーシャ達は驚く。それはつまり、『ルクスが『ベムラー』と戦う』という意味だからだ。

「何を言っているルクス！お前が戦うと言うのか!?」

「無茶です兄さん！もう《バハムート》の限界時間は・・・「そんなのとっくに過ぎてるよ」!?」

装甲機竜や神装機竜には稼働限界時間があり、これを過ぎれば機竜が『暴走』を起こす危険性がある、男性より機竜との適性が高い女性でも、この危険性はあるのだ。更にルクスは先程の戦闘で暴食ʂʂリローデッド・オン・ファイアʂʂを連発した事によりルクスは相当の身体に負担がかかっている筈なのだが。

「でも、不思議なんだけど、暴食ʂʂリロード・オン・ファイアʂʂを連発したのに、

まったく大丈夫なんだ（ティガの力が働いているのかな？）」

　ティガの力を受けた《バハムートティガ・マルチ》には起動時間も負担も無くなったのだ。ルクスが《バハムート》に起こった事を推測していると、ルクスから退避しているシャリス達の護衛を頼まれていたクルルシファーがやって来た。

「クルルシファーさん、ノクト、リーシャ様とアイリを連れてここから離れてください。僕はここでアイツ$$ベムラー$¿$を足止めします」

『!?』

「本気で言っているの？」

　クルルシファーの問いにルクスは頷く。

「このままじゃ、アイツ$$ベムラー$¿$は間違い無く城塞都市に攻めてきます。今マトモに戦えるのは僕とクルルシファーさんとノクトだけ。だけど、留学生のクルルシファーさんを危険な目に合わせられない。それにあんなのが出たんだ、王都の機竜使い達もすぐにやって来ます。でもそれまでアイツをこの場に抑えておかないといけない。だから、僕が少しでも足止めします。リーシャ様達は急いでこの事を学園や王都の機竜使い$$ドラグナイト$¿$に伝えて下さい」

リーシャもアイリもノクトもクルルシファーも納得できない心情だが、ルクスの言っている事は正論なので言い返せなかった。やがてため息混じりに頷き。

「・・・分かった、ルクス。直ぐに救援を呼んでくるからな！」

「兄さん、言っても無駄でしょうけど、無理はしないで下さいね」

「Ｙｅｓ．ルクスさん、ご無事で」

「私はノクトとお姫様と妹さんを護衛するわ」

そう言ってクルルシファーはリーシャを、ノクトはアイリを機竜の腕に乗せて飛んで行った。ルクスは飛んで行ったリーシャ達を見送り、懐に隠していたスパークレンスを取りだし握り締める。

「ティガ・・・僕は〝咎人〟だ。〝守護神の力〟を、〝光〟を掴む資格なんて僕には無い。正しい事をしたつもりが、僕は旧帝国を滅ぼした咎人・・・そんな僕が〝守護神の力〟を持つなんておこがましい事なのかもしれない・・・でも・・・リーシャ様達を守りたいんだ・・・だから・・・僕に・・・僕に〝光〟を！！！」

ルクスはスパークレンスを持ち、時計回りに両腕を回しスパークレンスを天に掲げると、スパークレンスの先端部分にあるティガの胸部プロテクターに酷似した

パーツが左右に展開し、レンズ部分から放たれた光がルクスを包み込む！

その光は学園に着いたリーシャ達やシャリスにティルファー、フィルフィ等の士官候補生にも届いた。

「何だ、この光は!?」

「この光は・・・あの時の・・・」

「見て！皆!!」

リーシャとクルルシファーやアイリ達がティルファーの指差す方に目を向けると、ベムラーの近くに現れた。巨人に目を向ける。

「あれは！」

「Ｙｅｓ・あの時現れた」

「〝守護神ティガ〟・・・」

夕暮れに染まる世界で雄々しく立ち構えるティガの勇姿がそこにあった。

ベムラーは突然現れたティガに対し、野生の本能かティガを〝敵〟と認識した。

「ギュワアアアアアアアアアアアア！！！！」

「ディヤ!!」

ティガはベムラーに飛びかかるがベムラーはティガに向けて青い火炎弾を連続で放つ。だがティガはそれらを苦もなくかわす、かわされた火炎弾はティガの後方で爆発する。その爆発を利用し、ティガはベムラーに向けてキックを放つ。

「チェイッ！」

ティガのキックで怯むベムラー。

「ギュウウッ・・ギュガアアアアアアアアアアアアアアッ！！！」

ベムラーは今度は青い火炎弾を乱射してティガに放つ。ティガは後方へ滑空しな

がら、火炎弾を避ける。
「へァッ！」
ティガは勢いを付けてベムラーに接近し、肉弾戦に持ち込む。
「ギュアアアアッ！」
「テァッ！ジェアッ！ハッ！」
正拳、裏拳、肘打ちと肉弾戦を仕掛けるティガにベムラーは再び火炎弾を放つも、ティガは火炎弾のスピードを見切って空中に跳び難なくかわし落下する力を利用してベムラーに踵落としを浴びせ、距離を取る。
「ギュウウウワアアアアアア！！！！」
ベムラーは渾身の力を込めてティガに火炎波をぶつけようとする。
「フゥゥッ・・・」
するとティガは両腕を腰の位置まで引き、前方で交差させ両腕を広げた後。
「デュワアアアアアアッ！！！」
Ｌ字型に腕を組んで白色の長高熱光線『ゼペリオン光線』を放つ！
ベムラーの『火炎波』とティガの『ゼペリオン光線』がぶつかるもティガの『ゼ

ペリオン光線』は『火炎波』を突き破り、ベムラーの腹部に当たる。
「グゥワアアアアアアアアッ！！！！！」
『ゼペリオン光線』を浴びたベムラーはそのまま爆散した。
ティガは爆散したベムラーを見届けると、城塞都市に、学園にいるリーシャ達に目を向ける。そこには、ティガの勝利を喜ぶリーシャ達の姿があった。ティガはその姿に頷くと。
「シュワッ！」
そのまま天高く飛んで去っていった。
リーシャ達はその姿を見送ると一騎の機竜が近づいてきた。
「あっ、ルクっちだ！」
ティルファーに言うとおり、神装機竜《バハムート》を纏ったルクスが学園に向かって飛んで来ていた。

その翌日、ルクスは学園長であるレリィに呼ばれ、学園長室を訪れた。中に入るとアイリやクルルシファーやフィルフィ、三和音$§§$トライアド$§;§$の三人を含む多くの生徒達が自分を拍手して迎える。戸惑うルクスにリーシャが説明する。

「新王国の王女たる私から・・・咎人の貴公に君命を授けよう。貴公の協力で私は命を救われた、この城塞都市を、ひいては我が国を守ることができた。貴公の身に確かな力と正義があることをこの私が認め称えよう。そしてわたし達の雑用王子として、初めての男の生徒として、本来ここにいることは許されないお前を私達が認めよう。だから、私からの命令だ。お前はここに残ってくれ」

リーシャは少し顔を赤らめ照れながらルクスに自分の機功殻剣$§§$ソードデバイス$§;§$を差し出す。

「受け取ってくれるか？英雄。私の剣を」

新王国の王女から機功殻剣$§§$ソードデバイス$§;§$を差し出される。それはその人物が信頼できる人物として認めた確固たる証明なのだ。ルクスは涙混じりに笑いながら膝をつきリーシャの剣を恭しく受け取り。

「ーーーー仰せのままに、我が姫君よ」

強き瞳でリーシャに誓うのであった。レリィ達はルクスに向けて再び拍手を送るのであった。

「ほ、本当なら、巨人の方にも礼を言わなければならないのだがな」

「ハ、ハハハハハ」

拍手が終わるとリーシャは照れ笑いを誤魔化すようにもう一人の功労者であるティガの事を持ち出す。ティガ本人であるルクスは苦笑いを浮かべた。

「う〜んリーシャ様、〝巨人〟じゃなくて、ちゃんと名前で呼んで見ませんか？何か巨人じゃしっくり来ないんですよね」

「Ｙｅｓ・王都ではあの巨人を〝守護神ティガ〟と読んでいるそうですが」

「〝守護神ティガ〟っというのも何かしっくり来ないし、ティガってだけでは物足りないな」

三和音はティガの呼び方に意義を唱える。

「ルクス君、何度も巨人に助けられた貴方はどう呼ぶ？」

「え？・・・・・・・」

「そうですね、あの巨人は兄さんが無茶をやると出てきますからね。兄さんが名付

け親になったらどうですか？」
「ルーちゃん何て呼ぶの？」
「そうだな、ルクス。お前があの巨人の名前を付けてやれ」
えぇぇーとなるルクスだが、少し考えてふと呟く。
「《ウルトラマン》・・・」
『え？』
「《ウルトラマンティガ》なんてどうですか？」
「《ウルトラマンティガ》か・・・うん、巨人とか守護神よりかは呼びやすいな」
「よーし！んじゃあの巨人の名前は《ウルトラマンティガ》にけって～～い♪」
リーシャが認めた事で、王立士官学校$§§アカデミー$¿$§と城塞都市$§§クロスフィールド$¿$§では、〝あの巨人〟を《ウルトラマンティガ》と呼ばれるようになった。ルクスは懐に隠してあるスパークレンスに向けてボソッと呟く。
「(これからよろしくね、《ウルトラマンティガ》)」
ルクスの呟き答えるように、スパークレンスは淡く光るのであった。

『黒き英雄』と『古代巨人』は出会い、やがて新王国だけではなくこの世界に襲いかかる『大異変』にルクスとウルトラマンティガ、そしてリーシャ達と後に出会う少女達も立ち向かわなければならないのだ。

果たして、『黒き英雄』は今度こそ『真の英雄』になれるのか。

それはまだ、誰にもわからないーーーーーーーー。

ー『最弱無敗の古代巨人$|$ティガ$;$』ー

たとえ力が強くても、一人きりじゃ戦えない、愛する仲間と掴め、未来と光をーーーーーーーー。

人物紹介はその内やります。
次はハンドレット×ウルトラマンダイナです。

# 最弱無敗の古代巨人$$ティガ$$人物設定

『最弱無敗の古代巨人』はこれで終わりです。

---

ルクス・アーカディア　CV　田村陸心

本作の主人公。『旧帝国 アーカディア帝国』の第七皇太子にして旧帝国を滅ぼした『黒き英雄』。だが旧帝国の皇子が旧帝国を滅ぼしたと言う余りにも特殊な問題の為にその事は女王と四大貴族の一部しか知らない。帝国を変える為に戦い無血の戦争を目指すも、兄フギルの奸計により、多くの生命を失った。その責任と旧帝国の皇子の為に新王国から莫大な借金を背負いそれを払う為に『雑用王子』として国民に奉仕するようになり、現在は機竜使い$$ドラグナイト$$を育成する、王立士官学校$$アカデミー$$に編入する（因みに女装した姿は誰も目から見ても女の子にしか見えない特技を持っているが本人は嫌がっている）。

普段は汎用機竜《ワイバーン》を使うが、本来は神装機竜《バハムート》を使う、ティガの力を受けた《バハムートティガ》で《バハムート》の使用時間と負担がなくなった。

ウルトラマンティガへと変身するようになり、《大異変》と《怪獣騒動》、そして新王国だけでなく《世界》の命運を賭けた戦いに身を投じる。

持ち前のお人好しと天然ジゴロで多くの少女（全員美人）から好意を寄せられているが、唐変木と自分を『咎人』と考えているため自分の幸せを無下にしがちな為に中々好意に気付いていない。後にリーズシャルテの『専属騎士』並びに『怪獣対策騎士団ＳＳガッツＳＳ』の『団長』になる。

リーズシャルテ・アティスマータ（通称リーシャ）ＣＶ　Ｌｙｎｎ

『アティスマータ新王国』の王女。かつて旧帝国に捕らえられて『烙印』を押されてしまいそれを隠している。直情的で抜けたところがあるが。腹の探り合いや交渉に長けた部分がある。装甲機竜ＳＳドラグライドＳＳの整備士や技術者としては天才的な才能があり、機竜使いＳＳドラグナイトＳＳとしても『朱の戦姫』と呼ばれ神

装機竜《ティアマト》の使い手。なのだが、私生活がだらしない所がある。ルクスへの好意を素直に伝えずにいる。普段は尊大な態度を取っ手いるが根っこは年相応の少女で仲良くなれば気さくな性格である。自分は王女としてあろうとするが、王女としての自信が今一つ無い。

後にルクスを自分の専属騎士にし、《ウルトラマンティガ》がルクスだと知ると《全竜戦》の後、度重なる『怪獣騒動』と『大異変』を警戒し『怪獣対策騎士団$§§ガッツ$¿$§』を設立し、団長役をルクスに任せ$§§押し付け$¿$§自分は『ガッツ』の司令官兼技術顧問になる。

クルルシファー・エインフォルク　CV　藤井ゆきよ

北の大国、ユミル教国からの留学生でルクスのクラスメイト。神装機竜《ファフニール》の使い手。沈着冷静で機竜使い$§§ドラグナイト$¿$§としてもリーズシャルテと拮抗する実力者。エインフォルク家から「在学持に有力貴族と恋仲になり政略結婚せよ」と言われている。しかし実は彼女はエインフォルク家の本当の子供ではなく、自分が何者なのか知るために遺跡$§§ルイン$¿$§を目指す。《ウルトラマン

ティガ》を初めて見たときに自分の中の〝何か〟を感じてティガを追っている。ルクスとは「婚約騒動」を期に恋人候補になる。

後にルクスがティガだと知り自分の事や、ルクスを助ける為に『怪獣対策騎士団ＳＳＳガッツＳＳＳ』に所属し、参謀的ポジションになる（因みにスレンダーなプロポーションをしており、〝胸〟の事を言われると冷酷になる）。

フィルフィ・アイングラム　CV 久保エリカ

アイングラム財閥の次女であり、ルクスの幼馴染みで学園長であるレリィ・アイングラムの妹。神装機竜《テュポーン》の使い手。ボーとした天然マイペースな女の子で小柄な体型に似合わず大食いで暇さえあればオヤツのドーナツを食べているが、以外と頑固者で芯のしっかりしている。小柄な見た目に反してパワーファイターであり、武術を学んでおり大の男が束になっても敵わないほどの実力者。ルクスにはアピールなのか、子供の頃の感覚なのか分からないモーションをかけてくる。彼女がいなければルクスは道を踏み外していたとの事。実はフィルフィは旧帝国時代に帝国側から幻神獣ＳＳアビスＳＳの細胞を移植する非人道的な人体実験の

被害者、ルクスに救出させるもルクスとフィルフィは当時の記憶が朧気である。実は初めて《ウルトラマンティガ》を見たときに直感的にルクスがティガであると見抜いていた。

後に『怪獣対策騎士団$$ガッツ$$』に入団し、相も変わらずマイペースを貫いている。

セリスティナ・ラルグリス（通称セリス）CV種田梨沙

アティスマータ新王国の四大貴族ラルグリス家の公爵令嬢。神装機竜《リンドヴルム》の使い手で『学園最強』の称号を持つ三年生。生真面目かつ自己鍛練を欠かさないストイックな性格で圧倒的な強さを持つがゆえに一人になりがち（ほぼボッチ状態。その愚痴を野良猫に話したりぬいぐるみに話したりと残念な面がある）。『男嫌い』と言われるのも圧倒的な強さと彼女自身が『男性が苦手』と言う事もありそう言われるようになった。学園に戻ってきた時にルクスを学園から追い出そうとし、更に《ウルトラマンティガ》を『得たいの知れない存在』として捕獲もしくは排除をレリィに進言したが、『ルクスの退学』は彼女を慕う妹分の後輩から唆され

たのと彼女の真意は自分の機竜の師匠がルクスの母方の父、つまりルクスの祖父であり、師匠の孫であるルクスを危険から遠ざける為に考えたからであり、『ティガの捕獲・排除』もその妹分が紹介された人物（正体はキリエル人）に唆されたからである。その騒動で妹分に騙されていた事やキリエル人に利用されていた事を知り気落ちするもルクスに励まされティガに助けられ、ルクスのアカデミー在学とティガが味方である事を認める（実はセリスはルクスに『男性の事を教えてもらう（苦手を克服する為である）』という事を皆の前で話しリーシャ達を混乱させた）。
後にルクスがティガであると知り、ルクスorティガの助けになる為、『怪獣対策騎士団$|$ガッツ$¿$』の副団長になりルクスがティガに変身している間の現場指揮を行う。

切姫夜架　CV石上静香
かつて『帝国の凶刃』と云われた暗殺者。神装機竜《夜刀ノ神$|$ヤトノカミ$¿$》の使い手。物腰柔らかく見えるが妖艶な色香を漂わす。自らを『壊れた人間』・『人殺しの人形』と言われるほどに倫理観が狂った所を持つ、『旧帝国』に使え、『汚れ

仕事』を行いその恐ろしさから『旧帝国』が滅んだ時から投獄されていたが『ルクス達の敵』から解き放たれ、『旧帝国』への忠誠は衰えておらず『黒き英雄』であり《ウルトラマンティガ》の力を持つルクスにその力を使って『旧帝国』の再興を進言するも拒絶され敵対するが、ルクスが夜架のような少女が生まれないような『理想の国』を実現しようとするルクスに忠誠を誓う。リーシャ達（主にセリス）をルクスの子供を授かる存在としてある程度の仲間意識を持つ。

『怪獣対策騎士団$|$ガッツ$¿$』に入団し主に隠密機動として行動する。

アイリ・アーカディア　CV小澤亜季

シャリス・バルトシフトCV内山夕実

ティルファー・リルミットCV井澤詩織

ノクト・リーフレットCV高橋李依

ルクスの妹であるアイリと学園の名物トリオの三和音$|$トライアド$¿$の三人。

共に『怪獣対策騎士団$|$ガッツ$¿$』へと入団し、アイリは解析班、シャリスは副団長補佐、ムードメイカーのティルファー、アイリのサポートのノクトも『怪獣災

害』と『大異変』へと関わっていく。

---

今回はここまで、何度か編集・加えていきます。
次回、『ハンドレット』×『ウルトラマンダイナ』。何時になるかわかりませんが、お楽しみに。

# ダイナ・ハンドレッドⅠ

ウルトラマンダイナ×ハンドレットです。
ストーリーは『ハンドレットＲａｄｉａｎｔＲｅｄＲｏｓｅ』にしてますのでクレアがメインヒロインです。エミリアもちゃんとヒロインですからあしからず。

---

その世界は脅威に晒されていた。《侵略者§§サベージ§§》と呼ばれる謎の生物達により、多くの国と人々の生命が脅かされていた。そんな世界で、《侵略者§§サベージ§§》と戦う事ができる人間達がいた。
隕石の欠片から発見された特定の人間が触れることで様々な形状に変化する赤い鉱石ーヴァリアブルストーンを原料とする武装兵器《百武装§§ハンドレット§§》。
それを用いて武装し《侵略者§§サベージ§§》と戦う者達を人々は何時しかこう呼ばれるようになった。
武芸者§§スレイヤー§§とーーーーーーーー。

そして、ここに《侵略者$|$サベージ$¿$》と同じく人類の脅威とそれに立ち向かう勇者が生まれようとしていた。

宇宙からの複数の〝飛来物〟が地球に落下した。落下した〝飛来物〟は突然溶け始め一ヶ所に集まりその形を変え岩のような体皮に三本脚のアメンボのような〝異形〟の姿に変わる。そして〝異形$|$グランビア$¿$〟は近くにある空港に向かって進行した。

ー皇国ヤマト（日本）の空港ー

異形$|$グランビア$¿$に襲撃された皇国ヤマトの空港で二人の少年少女が避難しようとしていた。黒髪に精悍な顔つきの高校生位の少年、長い黒髪をストレートに伸ばし儚げな雰囲気をした〝車椅子に乗った〟中学生位の少女。

少年の名は『如月ハヤト』

少女の名はハヤトの妹である『如月カレン』

彼等は十年以上前に海外で《侵略者$|$サベージ$¿$》が初めて地球に攻めてきた《第一次遭遇$|$ファーストアタック$¿$》の被害に合い両親を失い、それから施設

で育ってきた。幼い頃から身体が弱く車椅子生活をしてきた妹の為にハヤトは〝ある場所〟に向かおうとしていたのだが、突然現れたグランビアから避難しようとしていた。

「兄さん、あれは$|$グランビア$?$一体何なんでしょう⁉」

「分からない、でも急いで避難するんだ！」

だが二人が向かおうとした通路が崩壊する。

「きゃあああああああああああ‼」

「カレンッ⁉」

崩壊の衝撃波で車椅子から吹き飛ばされ気絶するカレン、ハヤトはカレンに近づき気を失っているだけだと確認するとホッとするが、壊れた天井からグランビアが目の前にいた。

「こんな・・・こんな所で・・・俺は絶対に・・・諦めてたまるか！！！！」

するとハヤトの頭上に〝光〟が舞い降りハヤトの身体は光に包まれる。

「何だこれ？・・・・ウオオオオオオオオオオ！！！」

グランビアの足元が突然光が溢れグランビアの脚を破壊し吹き飛ばす。吹き飛ば

されたグランビアの胴体と足は地面に溶け込んだ。
そしてそこから〝光の巨人〟が現れた。
「テヤッ！」
銀の身体に赤と青のラインが付き、額の角にクリスタルを付けた雄々しく立つ巨人だった。
溶けたグランビアの残骸が再び一つになり、今度は巨大な岩のような怪獣、〝ネオグランビア〟へとその姿を変えた。
「ピギュワアアアアアアアアアア！！！」
「フッ！」
雄叫びを上げるネオグランビアに構える巨人。巨人はネオグランビアに近づき、腹部に蹴りをぶつけ、更に顔部分を殴り付ける。
「ハッ！デヤッ！」
蹲ったネオグランビアの頭部を両腕で抑え持ち上げる。豪快に振り回しぶん投げる！
「デヤァッ!!」

投げられたネオグランビアは土煙を上げながら倒れる。
「ピギュワアアアアアアア！」
動かなくなったネオグランビアにゆっくりと近づく巨人。
だが、ネオグランビアは突然起き上がり、鼻の角から雷のような光線を放つ。
「ハッ！」
しかし、巨人はジャンプしてこれを回避する。ネオグランビアは身体全体を起こす。巨人は急降下キックをぶつけようとするがネオグランビアは湾曲シールドを張り巨人を弾き飛ばす。
「グァ!?」
弾き飛ばされた巨人は倒れるが直ぐに起き上がるがネオグランビアは自らの腕を鞭のように伸ばし巨人の身体に巻き付け電撃を浴びせる。
「グッ！グァァッ！」
巻き付けられた腕からの電撃と光線により劣勢にぬる巨人は倒れる。追い討ちをかけるように飛び掛かるネオグランビアを倒れながらも蹴りをお見舞いしネオグランビアをぶっ飛ばす。

「ピギュワアアアアアアアアアアアアアア！！！」

「フゥゥーーー、デヤッ！」

倒れた隙に立ち上がり、巨人は両腕を伸ばし大きく円を描くように回して手裏剣を投げるように光線$|$『ビームスライザー』$¿$を放つが湾曲シールドに阻まれる。

「フゥゥゥーーー、デヤッ‼」

二発目の『ビームスライザー』を受けてネオグランビアのシールドが破壊された。

巨人は両手の手首を合わせ、十文字にして放つ必殺技『ソルジェント光線』を放つ！

「デヤッ！！！」

「ピギュワアアアアアアアアアアア！！！！」

『ソルジェント光線』を腹部に浴びて、ネオグランビアは爆散した。

戦いが終わると巨人は光に包まれその姿を消した。だが、人々は見た。ネオグランビアを倒した巨人の〝強さ〟と〝勇姿〟を。

気絶しているカレンの側にハヤトが現れる。ハヤトは自分の身に起きた事に困惑していた。

「一体・・・俺はどうなってしまったんだ？・・・」

するとハヤトの足元に光る物があった。ハヤトの手の平サイズの赤い長方形で下部分に巨人の顔が刻まれた物体§§リーフラッシャー§§を手にするハヤト。

「・・・俺が・・・〝光の巨人〟？・・・そんなバカな・・・冗談だろ？」

するとハヤト達がいる所に救助隊が駆けつけ保護されるハヤトとカレン。これから事情聴取とカレンの回復を考えると数日後に控えた〝入学式〟に間に合うかなと、ハヤトは不安であった。

ー？？？　ー

どこかの執務室で金の髪をツインロールにした豊満なプロポーションを赤い制服で包んだ気品ある少女が中学生位の小柄な少年のヤマトで起こった事件を聞いて怪訝そうに整った顔をしかめる。

「〝クリス〟、その報告は冗談ではないのね？」

「はい〝クレア〟様、僕もヤマト政府から送られた映像を見るまではとても信じられませんでした」

〝クレア〟は〝クリス〟から渡されたタブレットに映る映像を見て訝しそうにする。そして自分の座る執務机の側に控えている青い制服を着た茶髪のショートヘアーに眼鏡をかけた知的な少女と同じく青い制服を着た凛々しい雰囲気と褐色の肌に緑色の髪をポニーテールにしたグラマラスな少女にもその映像を見せる。

「〝エリカ〟、〝リディ〟、貴女達はどう見る？」

「正直信じられません。こんな生物や巨人がいるだなんて」

「只でさえ《侵略者$|$サベージ$?$》の対処で忙しいと言うのに、《侵略者$|$サベージ$?$》以上の巨体の生物にそれと戦う巨人ですか・・・」

「この巨大生物は最近、月面や地球軌道上に現れた〝球体〟と関係しているのね？クリス」

「はい、その〝球体〟が地球に落下した直後の地点からこの巨大生物が現れた事から恐らく・・・・・それと、この襲撃で〝こちら〟に来る筈だった、武芸者$|$ス

レイヤーSS候補とその妹が事情聴取を受けているそうです」
「あぁあの〝期待の新人〟ですか。それは災難ですわね」
「如月ハヤト、皇国ヤマト出身で剣道有段者で適正試験では歴代一位の反応数値を示しています。幼い頃に両親を亡くし入学まで妹と共に施設暮らし、その妹は現在ワルスラーン社の医療チームのもとで治療予定です」
「・・・〝妹〟」
エリカからの報告の一部分に僅かに反応するクレア。
「・・・既に生徒からはクレア様を凌ぐとかウワサに・・・」
「だがそれはあくまでも適正数値が高いだけで・・・！」
〝世界的エース〟であるクレアを尊敬する二人はクレアを凌ぐと言われているハヤトに渋い顔を浮かべるが。
「いいでわありませんか、優秀な武芸者SSスレイヤーSSが増える事は喜ばしい事、そう思いませんか？」
「「・・・は、はいっ！」」
毅然とし懐の深いクレアの言葉にリディとエリカは頷く。が、エリカは。

「ですがクレア様、一年生で優秀な武芸者§§スレイヤー§§が現れれば他の一年生や上級生達の気が緩みます」

「・・・・・確かにそれは言えますわね」

「ですから、ここは一つデモンストレーションをやってみてはどうかと・・・」

「エリカ、どうするの？」

はい、と頷くエリカはクレアに〝作戦〟を伝える。

「・・・他の生徒達の気を引き締めるのに良いかも知れませんわね。分かりました。準備をお願いしますよ、クリス、エリカ、リディ」

「「お任せください」」

クレアは椅子から立ち上がり、窓から広がる青空を眺めながらいずれ来る如月ハヤトに思いを馳せる。

「さぁ、来なさい若き武芸者§§スレイヤー§§。この『無敗の女王§§パーフェクトクイーン§§クレア・ハーヴェイ』がその実力試させて貰います！」

『薔薇の守護者§§ローズ・ガーディアン§§』とも呼ばれる世界的エースは知らない、この『如月ハヤト』が自分の運命に大きく関わって行くことを彼女も、そして

ハヤト自身を知らない。

ハヤトのハンドレットもパワーアップします。

# ダイナ・ハンドレッドⅡ

今回はハヤトのハンドレット強化です。

---

「どうしてこうなった？・・・」

如月ハヤトは困惑気味に呟く。数日前、自分は〝光の巨人〟に変身してネオグランビアを倒した。事情聴取と妹のカレンの回復で時間を取られたが、なんとか《百武装ﾊﾝﾄﾞﾚｯﾄ》の開発研究機関と武芸者ｽﾚｲﾔｰ育成する施設。〝海上学園都市リトルガーデン〟に着艦した。

海上学園都市リトルガーデン

総面積四平方キロメートル以上、リベリアｱﾒﾘｶ合衆国に本社を持つ兵器開発の民間軍事会社ワルスラーン社が管理運営をしている。

妹のカレンの治療と夢に出てくる〝胸元に縦に走った傷の少女〟の事を知る為に

ここで武芸者ss-ssスレイヤーss-ssとして入学する事になったハヤトは歴代で最も高い適正数値を叩きだし、〝期待のルーキー〟と無責任な風潮が広まってしまった。

そして今、自分はウェットスーツのような服、ハンドレットのパフォーマンスを最大限引き出す専用ジャケット《ヴァリアブルスーツ》を着て目の前の相手を見る。金色の髪をツイルロールにし、豊満なプロポーションを赤い朱と黒のヴァリアブルスーツに包んだ気品ある美人、〝世界的エース〟にしてリトルガーデン生徒会長〝クレア・ハーヴェイ〟と戦おうとしていた。

「心の準備はできまして？」

「まぁそれなりに・・・・」

ハンドレットを展開したクレアがハヤトに向けて戦闘を開始する。

「さぁ如月ハヤト。貴方の力、見せてみなさい！」

何故こうなったかと言うと。

リトルガーデンに着艦したハヤトはカレンを病院に送り（その際、カレンの担当看護婦の柏木ミハルと言う穏やかな巨乳美人にハヤトが見惚れてカレンに睨まれた）、カレンから黒魔術か白魔術で無事を祈ると言われ少々の不安があったが。ハ

ヤトは訓練生用の寮に到着した。

そんなハヤトに抱きついてきた少女のように可憐な容姿をした同じ新入生でブリタニア連邦グーデンブルグ王国出身の銀髪の少年〝エミール・クロスフォード〟。

そして自分達に近づいてきた、自分達と同じ新入生で一年のリーダーでリベリア合衆国出身の金髪長身の伊達男〝フリッツ・ブランツ〟。

入学式が始まる講堂前にいた茶髪のポニーテールに小柄な体型のフリッツの幼馴染みの〝レイティア・サンテミリオン〟と出会い入学式に出た。

入学式が始まっり滞りなく進み〝生徒会長〟であり海上学園都市艦艦長のクレア・ハーヴェイの話が始まる時、繁華街に出て遅刻した女子生徒二人が入ってきて、時間厳守を守れなかった二人に〝放校処分〟を言い渡した。

その決定に意義を唱えたのはエミールだった、エミールはワルスラーン社の令嬢であるクレアは七光りで女王になったと噛みつきそこから何故かハヤトとクレアが決闘デュエルをすることになり。

ハヤトが勝てば二人の処分は免除、負ければクレアの付き人になると言う本人の意志を無視してトントン拍子に話が進んでしまった。

結局ハヤトが決闘をする事になりハヤトはエミールと共に研究室に赴き小柄な体型に白衣を羽織った技術主任〝シャーロット・ディマンディウス〟と猫耳メイド服の〝メイメイ〟と出会い。専用ハンドレット《飛燕》を手に入れ展開しエミールも専用ハンドレット《全てを覆い隠す霧～アームズシュラウド～》を展開して訓練を始めた。

訓練後、風呂から上がったハヤトはエミールが実は〝女の子〟であったと知る、複雑な事情があるので黙ってほしいと頼まれ了承するハヤト。

そしてクレアとの決闘の為にエミールと共に闘技場に向かった。リディに案内され更衣室で着替え、自分が決闘する原因になった少女達から謝罪とエールを受けた後、エリカに案内される、会場から聞こえる歓声からクレアは武芸科だけでなく他の学科やリトルガーデンに住む人達から絶大な人気があり、かつ入学式の事もいずれ戦場に出る一年生を叱責し、教育が目的であった為である。

そして闘技場に付いたハヤトの前にクレアが立ちハンドレットを展開する。

「《百武装展開～ハンドレット・オン～》！」

展開されるはクレア・ハーヴェイの専用ハンドレット《気高き戦姫～アリステ

リオン§;§》。腕と背中に武器を展開させる。

「《百武装展開§;§ハンドレット・オン§;§》！」

片腕と武装のみ展開したハヤトとクレアが対峙する。クレアはハンデとして〝全身武装〟せずに戦うと宣言する。

そして二人の決闘が始まった！

ハヤトは先手必勝でハンドレットを操るエナジーを足に集中させてクレアに突っ込むも勢い有り余ってクレアを押し倒し、その豊満な胸を揉んでしまった。ハヤトは慌てて立ち上がり胸を抑えて涙目の上目遣いで睨むクレアに弁解する。

「わ、悪い・・・！まだ力の制御ができなくて！だから、その・・・事故ってことで、許してくれ・・・ませんよね・・・？」

「他人に・・・他人にむ胸を触られたことなんて今まで一度もなかったですのに・・・ましてや揉みしだくなんて・・・許せるわけないでしょう！」

「ですよね！」

クレアは背中のキャノンをハヤトに向けて放つ！ハヤトも交わしエナジーバリアを展開し防ぎながら善戦するがそこは技術と経験の差でクレアに追い込まれる。

「勝負のゆくえは見えましたわね。ギブアップしますの？」
皆が不安そうに見つめるがハヤトは立ち上がる。
「・・・まだだ・・・俺はまだ闘える・・・最後まで闘う」
そのハヤトの〝想い〟を感じたか、更衣室のハヤトの上着の内ポケットにあるリーフラッシャーが淡く光る。
クレアはハヤトの姿に敬意を込めてバスターキャノンを展開する。
「これで終わりですわ！如月ハヤト！」
バスターキャノンから放たれたエネルギー波がハヤトを襲うその瞬間！ハヤトの意識がブラックアウトした。

ー？？？　ー
ハヤトが目を開けるとリーフラッシャーと〝光の巨人〟が目の前に現れた。
「ここは？お前はあの時の・・・なぁ、どうして俺を選んだんだ・・・？」
〝巨人〟は何も言わずリーフラッシャーをハヤトに渡す。すると〝巨人〟の心が

ハヤトに届いた。
「力をくれるのか？」
『・・・・・・・・・』
巨人はハヤトに向かってサムズアップをする。
「分かった・・・本当の闘いは、これからだぜ!!」
ハヤトがリーフラッシャーを掴むと途端に光に包まれる。

ー闘技場ー
クレアの顔は驚愕と困惑に染まった。バスターキャノンから舞い上がった土煙が晴れるとハヤトの姿がなかったからではない。
エミールやリディにエリカ、フリッツとレイティア、モニターで観戦していたシャーロットとメイメイも身を乗り出してモニターに顔がくっつかんばかりに近づける。
如月ハヤトが〝全身武装〟をしていただけではない、ふと唖然としたその他の生

徒達の誰かが呟く。
「翔んでる・・・」
連鎖するように他の生徒も呟く。
「翔んでる・・・？」
「如月ハヤトが・・・翔んでいる！」

何と！全身武装したハヤトは空を飛んでいたのだ！
「・・・俺は、飛んでいるのか・・・？・・・マジかよ・・・！」
試しにハヤトは空中を飛んだ、上に、下に、右に左に重力から解き放たれ子供の頃に夢見た空を飛んでいるのだ！
「・・・ハッ・・・ハハハ・・・イィヤッホゥオオオオオオオオオオオッ!!」
ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！
会場が騒然とした！ハンドレットは〝空を飛べない〟、それは武芸者なら誰でも知っている〝常識〟、それを彼は、如月ハヤトは見事に打ち破った！
勿論クレアも突然の展開に唖然としていた。

「(空を飛ぶハンドレットなんて・・・どの国にも存在しませんわ・・・そしてそれを操る如月ハヤト・・・彼は一体・・・？)」

「行くぞ！クレア・ハーヴェイッ!!」

が真っ直ぐに自分に向かってくるハヤトの姿を見ると正気に戻り。

「(このわたくしが負けますの・・・？・・・いいえ、いいえ！わたくしは絶対無敗の女王$|$パーフェクトクイーン$¿$・・・！) 女王であるわたくしが新入生に負けてたまるものですかっ!!」

思わず〝全身武装〟したクレア・ハーヴェイとそれを見て笑みを浮かべた如月ハヤトがぶつかり闘技場は光と土煙に包まれた！

---

ー飛燕・閃光ー

〝全身武装〟した飛燕に金のラインが走った状態。パワーとスピードとガードがパワーアップし、一番バランスの取れた姿。更に現在世界初の飛行能力を持つハン

ドレット。

ー飛燕・奇跡ー

〝全身武装〟の飛燕に蒼のラインが走った状態。自身の半径百メートル以内に瞬間移動する事ができ、自分に触れた人間も移動する事ができる。更に広範囲にバリアを張り、遠隔バリアを展開し、相手の攻撃を跳ね返す事も可能。

ー飛燕・剛力ー

〝全身武装〟した飛燕に赤いラインが走った状態。スピードは本来の飛燕位まで遅くなるが圧倒的なパワーを誇り、大型サベージも粉砕することができる。

今回はここまでです。

# ダイナ・ハンドレッドⅢ

「はっ・・・!!・・・う・・・俺は・・・」
「気がつきましたの？」
目を覚ましたハヤトはベッドに横たわっていた。そのベッドの傍らにクレア・ハーヴェイがいた。
「会長・・・そっか・・・俺負けたんですね・・・エミールたちの退学は・・・！」
「取り消しましたわ」お願いしますせめてもう少し・・・・・・え？取り消し？なんで・・・？」
戸惑うハヤトにクレアはため息混じりに話す。
「決闘~~SS~~デュエル~~SS~~を始める前にしたお話をもうお忘れですの？理由は一つ、わたくしが約束を破ったからですわ」
クレアは決闘~~SS~~デュエル~~SS~~で起こった事を説明する。
『ハヤトが全身武装した事』
『全身武装したハヤトが世界初の〝飛行する〟ハンドレットを纏った事』

『飛行したハヤトと〝全身武装した〟クレアが接戦を繰り広げるも〝経験〟と〝技術〟で辛くもクレアが勝利を納めた』

『決闘$|$デュエル$¿$終了で初めての戦闘の疲労でハヤトが倒れてしまった』

　そして現在に至る。

「・・・・・・・・・えっ？　俺が、全身武装を？」

「えぇ・・・貴方はそれでわたくしを追い詰めました。覚えていますか？」

　ずいと近づいてきたクレアに頬を染めながら、ハヤトはしどろもどろに言う。

「うぅん・・・なんて言いますか・・・空を飛んでいてテンションが舞い上がっちゃってて・・・すみません・・・ほとんど覚えてません・・・」

「・・・・・如月ハヤト」

　クレアはハヤトの両肩を掴み詰め寄る。

「貴方はいったい何者ですの？」

「はい？・・・何者って俺は・・・」

　煮え切らない態度にイラッと来たのか思わずハヤトを押し倒し。

「ぐえっ」

「初めての決闘で全身武装を行い、尚且つ世界初の〝飛行能力〟を発現させ、わたくしを追い詰める。普通ではありませんわ！さぁ、如月ハヤト、おとなしく白状なさい！」

「ちょ・・・だ、ダメです！会長 これまずいって！」

「何がダメだとおっしゃいますの!?」

「この距離近すぎだって!!」

「？ なんですの？距離が近す・・・ぎ・・・」

そこで初めてクレアが自分がハヤトを押し倒してるのに気づいた。

「(かあああああああああああ)」

クレアの顔が赤くなり。

「あ」

パァン

「いてーーーーっ」

乾いた音が、夜の病院に響いた。

それから病室を出たクレアの前に、リディとエリカに抑えられたエミールがい

た。エミールはハヤトに何かしたら許さないと言って病室に入ると顔に手形を付けたハヤトに「会長に何をしたの？」と疑われたが、ハヤトは「無実」と言っていた。

そして、クレアはリディの運転する車の中で。

「（ハンドレットの全身武装・・・天才と呼ばれたわたくしですら展開するのに一月はかかりました、それも〝飛行能力〟まで・・・反応値が高いからすぐに展開できるというものではないのです・・・けれど・・・もし彼が〝あの子〟とおなじヴァリアントであったならば）・・・可能性はありますわね・・・」

「クレア様？」

「リディ、エリカ、わたくしは決めました。如月ハヤト・・・彼をセレクションズにスカウトいたしますわ」

だか、リトルガーデンの近くの海域で人知れず、宇宙から飛来した〝浮遊体〟が海底火山を吸収しながら〝何か〟が生まれようとしている事に、誰も知らない。

そしてその翌日。ハヤトとエミールはリトルガーデンの街を歩いていた。エミールは自分が男に男装しているにも関わらずハヤトの腕に抱きつき、まるで恋人のように歩いていた。

ただでさえ、クレア以上の反応値を見せ、世界的エースのクレアと初決闘で接戦をし、さらに〝世界初〟の飛行ハンドレットを展開した事で有名になったハヤト、中性的な美少年（本当は美少女）のエミールが仲睦まじく歩いているのだ。目立たない訳がない。

するとクレアから電話がかかり、闘技場に向かうと。

「それで？わたくしが呼んだのは如月ハヤトだけですけど・・・？」

「会長はハヤトに何するかわからないからね！僕がハヤトを護らなきゃ！」

「エミール・・・」

「・・・・・・」

無理矢理付いてきたエミールにハヤトもクレアも呆れる。

「コホン・・・如月ハヤト、実はあなたにお願いがあるのです」

「お願い・・・ですか？」

「ええ あなたに生徒会直属の選抜部隊『セレクションズ』に加入してもらいたいのです」

「セレクションズ・・・？」

首を傾げるハヤトにエリカが説明する。

「このリトルガーデンを運営するワルスラーン本社からの指示に従い、学生の身分のまま一人前の武芸者§§スレイヤー§§同様の任務をこなすのです。任務には各種施設の警備や要人の警護、無論サベージとの実戦も含まれます」

「実戦・・・」

実戦と聞いて言い淀むハヤトにクレアが言う。

「これは強制ではありませんわ、けれどわたくしはこう思いますの。『ノブレス・オブリージュ（高貴なる者に伴う義務）』。力を持つ者は力なき人々のためにその力を振るうべきだ・・・と」

「・・・・・・（力を持つ者は力なき人々のためにその力を振るうべき・・・お前もそう思うか・・・？）」

ハヤトはポケットに入れてあるリーフラッシャーに、〝巨人〟に語りかける。そんなハヤトを無視してエミールがずいと前に出て。

「だったら僕もハヤトと一緒に参加するよ、人手が欲しいんでしょ？」

「お前にその資格はない、サベージと対等に戦える能力を有する者でなければ足手

まといになる」
　リディに却下されむぅとなるが、直ぐに不敵な笑みを浮かべ。
「それなら・・・ボクも会長と決闘§§デュエル§§すればいいのかい？」
　自分の百武装§§ハンドレット§§『全てを覆い隠す霧§§アームズシュラウド§§』を部分展開する。
「なっ・・・！無礼だぞエミール・クロスフォード！」
「お待ちなさい」
「会長・・・」
　前に出ようとするリディを止めクレアが前に出る。
「いいでしょう、貴方の力見せてみなさい」
　クレアも『気高き戦姫§§アリステリオン§§』を部分展開して構える。
「もちろん・・・そのつもりさ！」
　飛び上がり攻撃するエミール。え
「エミール！」
「会長・・・！」

エミールの攻撃で土煙が上がるが、それが晴れると。

「!!」

クレアの展開したパーツが盾となりエミールの攻撃を防いでいた。

「この程度ですの!?」

「だったら・・・これでどうだぁっ！」

不敵な笑みを浮かべるクレアにウォーハンマーを叩きつけ再び土煙が舞うが・・・。

「!!」

クレアはエミールの後ろに立ち花の形をした追尾兵装~~ビット~~ビットをエミールの周りに展開させていた。

「貴方の力、なかなかのものですわね。ですが、実戦での経験がまだ足りませんわね。研鑽なさい！」

堂々と言うクレアの出で立ちはまさに〝女王〟と呼ばれるにふさわしい威厳があった。

ビーッビーッビーッビーッ

突然エリカとクレアの携帯端末から警報が鳴る。

「警報・・・か？」
「クレア様！本社より出動命令です！」
「・・・わかりましたわ」
ハンドレットを解除するクレア。
「!?ちょっと待って！僕はまだまけたわけじゃ・・・」
「緊急事態ですわ！」
「うっ・・・」
食い下がろうとするエミールを戦士の一瞥で黙らせるたクレアはエリカとリディと共に急行する。
「エリカ、リディ行きますわよ」
「「はいっ」」
「ま、待ってください！緊急事態ってどうしたんです!?」
「・・・ワルスラーン本社からです。ツヴァイ諸島にサベージが現れたと連絡が入りましたわ」
クレアからの言葉に驚くハヤト。

「サベージが出現・・・!?」
「わたくしたちはこのあとすぐに出撃態勢に入ります」
「じゃあ俺達も・・・」
「いいえ、今回はわたくしたちだけで対処いたしますわ」
「えっ!?」
ハヤトとエミールの動向をクレアは却下した。
「あなた方の能力は認めます。ですが、実戦経験はほぼ皆無、いきなり出撃など荷が重すぎですわ」
「・・・・・・」
正論を言うクレアにハヤトは黙るが、ポケットのリーフラッシャーを握りながら言う。
「・・・会長は言いましたよね『ノブレス・オブリージュ』って、力を持つ者は力無き人々のためにその力を振るうべきだって、実のところ力無き人々・・・って言われてもピンと来ないんです・・・だけど、このサベージがもしもリトルガーデンを襲いに来たら・・・学校のみんなや妹だって危険にさらされてしまうかもしれな

い」

ハヤトは拳を握る。

「俺に何ができるからわかりませんが、だけど・・・今の俺にできることをさせて欲しいんです（そうだろ、〝巨人〟・・・！）」

「（ハヤト・・・）//」

「・・・・・・はぁ・・・わかりましたわ、二人ともついてきなさい」

そしてハヤトとエミールはクレアと共に戦地に赴いた。

しかし、ハヤトのポケットの中にあるリーフラッシャーが〝何か〟を警告していた。

「（・・・・・・〝何か〟が起きようとしているのか・・・？）」

海底火山から生まれようとする〝何か〟が胎動している事に今はまだ、誰も知らない。

# ダイナ・ハンドレッドⅣ

今回でダイナ・ハンドレットを終わります。

---

ーリトルガーデン近海・海底ー

ハヤト達がツヴァイ諸島に向かって直ぐに海底から〝何か〟が生まれようとしていた。

「グルルルルルル・・・！」

ーツヴァイ諸島・αポイントー

サベージの襲撃にあったポイントに先に来ていたリトルガーデン副会長エリカ・キャンドルと同じく副会長のリディ・スタイバーグがハンドレットを展開してサベージと交戦していた。

「今ですリディ！」

「任せろ！はあああっ！」

突撃槍の武装をサベージに突き刺す。そしてその上空を低空飛行している軍用機からクレアが戦況を分析する。

「リディとエリカは先行してαポイントに集まっているサベージの討伐に向かっています。わたくしたちはここのβポイントに集まっているサベージの討伐を・・・」

「それなら早速出ようよ」

「エ、エミール・クロスフォード!?」

クレアの指示を遮りエミールが軍用機から飛び降りる。

「会長との決闘§§デュエル§§が僕の本気と思われたらたまらないからね！僕だってサベージと戦えるところを見せてやる！百武装展開§§ハンドレットオン§§！」

それが〝慢心〟であることに自覚が無いエミールは、ハンドレットを展開し、枝切りハサミのような武装でサベージに切りかかる。

ギャアアアアアアアア

悲鳴を上げるサベージから弱点である〝核§§コア§§〟が剥き出しになった。

「核§§コア§§さえ壊せば・・・サベージは倒せる！」

武装を大型弓に変えてサベージを狙い撃つ！
「これで、おわりだぁっ！」
射ぬかれた矢は核$|$コア$¿$を貫きサベージが爆散した。

ー屋上ー
エミールが交戦している場所近くの屋上に降り立ったクレアとハヤト、クレアの通信機にエミールの通信が入る。
「≪こちらエミール、サベージの討伐に成功！≫」
「無茶なことを・・・」
「よかった・・・」
独断専行したエミールにクレアは呆れ、ハヤトはホッとしていた。
「≪ちょっとハヤト、何会長といい雰囲気に・・・≫」
「!!エミール後ろだ！」
「!?うあ!?」
ハヤトの叫びで後ろを向いたエミールに新たなサベージが襲われ壁に叩きつけら

れる。

「う・・・」(ガク)

そのまま気を失った。

「エミリアァァァァァ!」

全身武装『飛燕・閃光』を展開したハヤトは縦横無尽に飛び回りながらサベージを切りまくる。

「ウオオオリャアアアアアアアアアア!!」

気絶したエミールを介抱していたクレアはハヤトを見つめる。

「ヴァリアントウイルスの暴走を起こしていない?(如月ハヤト、彼は一体?)・・・!?」

ハヤトの後ろから更にサベージが現れ、大口を開けてエネルギー波を撃ち込もうとする。

「ハヤト!!」

「っ!?(しまった!)」

エネルギー波がハヤトを呑み込む。が、ハヤトは自分の身体に衝撃が来なかった。

「・・・(あれ、何か柔らかい)!?か、会長・・・」
「無事のようですわね・・・よかった・・・」
目を開けるとハヤトを抱き締めているクレアがいた。自分を庇って負傷したクレアをお姫様抱っこしたハヤトは上空に逃げる。
「このままじゃまずい、何か方法はないんですか」
「・・・・・・////」
人生初お姫様抱っこに硬直するクレアにシャーロット博士からの通信が入る。
「≪この現状を打破する方法はあるよ≫」
「シャーロット、方法とはなんですの?」
「≪如月ハヤトとクレア・ハーヴェイが〝キス〟をするんだ≫」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
沈黙する二人。が直ぐに顔を赤くして。
「シャ、シャーロット!あなた何を言って・・・」
「≪如月ハヤトが何者であるかキミは理解しているはずだろう。ならば、ボクが言っ

ていることもわかるはずだ、時間はないよクレア≫」
「・・・・・・・・・わかりましたわ・・・////」
顔を赤らめるクレアはハヤトに向き合う。
「・・・通信聞いていましたわね如月ハヤト」
「は、はい」
「これは任務上必要なことなのです。だからその・・・キスも・・・犬に噛まれたと思って・・・」
「会長は・・・会長は嫌じゃないんですか？」
こんな状況で、自分を気づかうハヤトにクレアはときめき。
「わたくしは・・・貴女が嫌でないのなら・・・」
二人の唇はソッと重なった。
「んぅはぁ・・・」
くちゅくちゅと二人の唾液が混ざる音が響く。
「(ヴァリアントウイルスは唾液を通じて他人に分け与えることが可能・・・つまり、わたくしとヴァリアントである如月ハヤトがキスをすることで、一時的にわた

くしはヴァリアント能力を得ることができる・・・！）」
唇を離した二人の口から唾液が糸のように伸び切れた。
「会長・・・？」
クレアは自身に流れる力を感じていた。
「（これがヴァリアントの力・・・体の底から力があふれてくるようで・・・）負ける気がいたしませんわ」
全身武装を展開したクレアがサベージを見据える。
「覚悟なさい！シェルターごと破壊してさしあげますわ！」
バスターライフルを展開して放つ！
ドオン！！！
サベージを討伐したクレアがハヤトに向き合い。
「これでサベージ討伐完了ですわね」
振り向いたクレアのにこやかな微笑みにハヤトは見惚れ。
「会長・・・！・・・・!?」
ギョとなったハヤトは顔を赤らめて慌てる。

「あぁああのあの会長・・・！スーツ・・・ヴァリアブルスーツが・・・！」
「スーツが？・・・!?／／／／／」
胸元を見るとスーツが破れクレアの白く豊満な胸が晒されていた。
「キャアアアアアアアア・・・・・・」
それを通信越しから聞いていたシャーロットは気絶したエミールの介抱をメイメイとし、呆れながら呟く。
「？まったく・・・あの二人、いったい何をやってるんだか」
胸元を隠しあたふたするクレアにクリスから通信が入る。
「《クレア様！聴こえますか!?》」
「あぁ！クリス、一体どうしたのですの!?」
「《大変です！リトルガーデン近海に巨大生物が現れました！》」
「巨大生物？」
「《先日ヤマト皇国に現れた巨大生物と同クラスの生物が、リトルガーデンに進行しています！》」
「なんですって!?」

「っ!?」
「《残った武芸者$|$スレイヤー$¿$が対処と避難誘導を行っていますが、このままではリトルガーデンが・・・！》」
「(・・・リザ・・・！)」
「(リトルガーデンが・・・カレン！)」
　ハヤトは腰パーツからリーフラッシャーを取り出しじっと見つめる。
「(お前の力を貸してくれ、理由なんてどうでも良い！俺に妹を、リトルガーデンに住む皆を守るための力があるなら！本当にあるなら！)会長！俺が行きます！」
「!? 何を言ってるんですの！いくら飛行能力があるからと言っても貴方だけでは・・・！」
「嫌、行けます。俺が、皆を守ります！俺が戦います!!」
「如月ハヤト・・・」
　ハヤトは右手に持ったリーフラッシャーを左胸に当て。
「(そういえば、俺はお前の〝名前〟知らなかったな。名付けていいならそうだな・・・お前の名は・・・！)」

リーフラッシャーを前方に突き出しハヤトは叫ぶその〝名〟を！

「ダイナアアアアアアアァァァ！！！！」

折り畳まれたクリスタル部分が展開し、ハヤトの身体を光が包み込む！

「なっ!?」

驚くクレアは眩い光に目を閉じるが、開くとハヤトを包んだ光が遥か彼方の空を飛んでいった。

「如月ハヤト・・・」

ーリトルガーデンー

岩石のような身体が赤く発光する怪獣、『溶岩合成獣グラレーン』は謎の球体が海底火山を吸収して生まれた怪獣。グラレーンは足元の海を沸騰気化させながらリトルガーデンに歩を進めていた。勿論、市民や一般学生達が避難する中、ハヤトの妹のカレンも看護師のミハルと共に避難しようとしていた。

「大丈夫よカレンちゃん！」

「は、はい・・・！」
　フリッツとレイティアも今はまだハンドレットを使えないので避難誘導の手伝いをしていた。
「クソ、こんな事しかできないとは！」
「ごねるなレイティア！今俺達にできる事をやるんだ！」
「そうは言うがフリッツ！」
『グオオォォォォォオオオオ！！！』
『っ!?』
　グラレーンの雄叫びに竦み上がる人々がグラレーンを見ると腹部が強く赤く発光し、火炎を放射した！火炎はリトルガーデンのバリアに当たるもその威力でリトルガーデンが大きく揺れた。
『うわあああああああああああああ！！！』
『きゃあああああああああああああ！！！』
　人々の悲鳴が響き、グラレーンは更に攻撃を仕掛けようとするが、グラレーンの前に光が降り立つ！

「・・・なんだ・・・」
「これは・・・」
「光・・・・・・」
カレンが呟くと光の中から〝巨人〟が現れた！
『グワワ！』
『フッ！』
指令室でその姿を見たクリスは軍用機でこちらに向かっているクレアに連絡する。
「クレア様！ヤマトに現れた〝巨人〟が現れました！」

ー軍用機ー
クレアはリディとエリカ、シャーロット博士とメイメイ、気絶したままのエミールと共にリトルガーデンに向かっていた。
「《クレア様！ヤマトに現れた〝巨人〟が現れました！》」

「なんですって!?（まさか、如月ハヤト、貴方が？）」
「≪クレア様？≫」
「「「??」」」
　クリスとシャーロット博士達が呆然とするクレアに首を傾げる（因みに、シャーロット博士達は土煙が邪魔になりハヤトが〝巨人〟になったのを見ていない。クレアからハヤトはリトルガーデンに飛んでいったと言われている）。
「・・・（頼みますわ、如月ハヤト、いえ）クリス、その〝巨人〟の名は〝ダイナ〟ですわ」
「≪〝ダイナ〟・・・？≫」
「そう、『ウルトラマンダイナ』ですわ!!」

ーリトルガーデン近海ー

『ハア！』
『グオオオ!!』

　構えたダイナにグラレーンは襲いかかるがダイナは頭と右腕を抑えて押し出す。

『ジャア！』

『グオオオオオオオオオオオオ!!』

雄叫びを上げたグラレーンの腹部が赤く発光する。その発光熱でダイナは手を離す。

『グワッ!?』

怯んだダイナにグラレーンは左右の腕でダイナを殴り付ける。

『デア！デア！』

殴り飛ばされたダイナは海面に倒れる。倒れたダイナにグラレーンは火炎放射をみまうが回避され海面を燃やす。回避するダイナを追って更に火炎放射で攻め立てるグラレーンは狙いをダイナからリトルガーデンに変えて火炎放射の構えを取る。

『・・・!!・・・』

カレン達は攻撃が来ると思い身構えるが。ダイナは。

『ヘア！フウウウウウウウウ！デヤァ!!』

構えたダイナの頭部のクリスタルが光輝き、ダイナはその姿を変える。青と銀のツートンカラーの姿、奇跡の力を持つフォーム『ウルトラマンダイナ・ミラクルタ

イプ』へと。ウルトラマンダイナ・ミラクルタイプ（ダイナM）は飛び上がり、グラレーンとリトルガーデンの間に立つ。その様子をちょうど軍用機から眺めていたクレアが呟く。

「色が・・・！」

グラレーンはダイナMに向けて火炎放射を放つ！ダイナMは両手を前方に突き出しバリアを張る。

『デヤァ！アアアアアアア、テヤ!!』

『グオオオ！！？？』

攻撃を防がれ怯むグラレーンの後ろに流れるような高速の動きで回り込むダイナM。

『グオオオ!!』

『ハアアアアアア、デュワ！』

ダイナMは右手を頭部のクリスタルに当ててエネルギーを溜め、右手を突き出しグラレーンに打ち出す。打ち出されたエネルギーはグラレーンを拘束し空中に持ち上げ、空中で逆さに吊るす。

「・・・・・スゲェ・・・！」

リトルガーデンから見ていたフリッツは思わず呟いた。

『!!』

グラレーンはダイナMに向けて火炎放射を放つが、ダイナMは空いた左手でバリアを生み出し防ぎ、逆にエネルギーを吸収して。

『デヤァ！アアアアアアアアアアア!!ジャヤア!!』

エネルギーを吸収し終えたダイナMは右手を頭上に突き出し振り回して、吸収したエネルギーをグラレーンに打ち返した！これが相手の攻撃を吸収して打ち返しすダイナMの技『レボリウムウェーブ・アタックバージョンタイプゼロ』。

チュバアアアアアアアアア!!

『レボリウムウェーブ・アタックバージョンタイプゼロ』を受けたグラレーンは空中で爆散した。

ダイナMはリトルガーデンの方を向くと唖然とした人々に向かってサムズアップする。

「シュッ！(グッ！)」

ー軍用機ー
クレア達は勝利を納めたダイナＭを見ていた。ダイナＭの戦いぶりに呆然とするリディとエリカ、解析しようとするシャーロット博士とメイメイ。クレアがソッと呟く。
「青い巨人は、超能力戦士・・・！」

ーリトルガーデンー
ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！
リトルガーデンでは、人々が勝利を納めたダイナＭの雄姿に歓声を上げていた。

ーリトルガーデン近海ー
「シュワッ！」
ダイナＭは飛び上がり、手から放つ青い光で海面を燃やしていた火炎を消火しそのまま空の彼方に消えていった。

だが、リトルガーデンの人々はこの直ぐ後、クレアから〝巨人〟の名を知り、感謝を込めて〝巨人〟をこう呼ぶ。

『ウルトラマンダイナ』と。

ー地球軌道ー

地球軌道にいた謎の球体$|$スフィア$?$が集まり一つとなると何処かへ姿をくらませた。

ー後日 リトルガーデン ウェストサイドー

顔を青くしたハヤトがクレアと向き合っていた。

「・・・・・・・・・あの・・・会長・・・俺にお話って・・・」

クレアはキッとハヤトを睨み。

「如月ハヤト、あの巨人、ダイナの事やら色々聞きたいことがありますが。まずは、入学してからあなたはわたくしの初めてを奪ってばかり・・・」

「嫌、そのダイナの事に関しては・・・」
アワアワするハヤトだが、クレアは顔を赤らめ恥じらい。
「お姫様抱っこなんて初めてでしたのに・・・」
「そっちか！」
「もちろんわたくしの・・・キ、キスだって初めてでしたのよ」
「任務上必要なことって言ってたじゃないですか！」
言い訳するハヤトの手をグッと掴むクレア。
「・・・わたくしの初めてのキスの思い出を、血なまぐさい戦場だけにするおつもりですの？」
「会長・・・」
「せめて2回目は海の見える美しい場所で・・・なんて思ってもいいのではないですか？」
「会長・・・」
ゆっくりと二人の顔は近き、そして唇が・・・。

「待ったーーーーーーーーーー！」
「「(びっくぅ)」」
突然空気の読めない大声に反射的に離れた二人が目を向けるとそこには。息切れするエミールと涙目のエリカ、冷静に見ていたリディがそこにいた。
「エミール！」
「エリカ！リディまで!?」
「ま、まだクレア様の唇にすら触れたことがないのに・・・！２回目もなんて～・・・」
「おっと」
クレアに恋慕の感情すら抱いているエリカはフラ～と倒れそうになり、尊敬はしているがそこまでの感情は抱いていないリディが冷静に支えた。そんな二人をよそにエミールはずんずん近づき。ギャンギャンクレアと喧嘩をする。
クレアはエミールの本名『エミリア・ハーミット』であり、男装した女子であると言うことをシャーロット博士から問い詰めて教えてもらっていたのだ。だが、エ

ミリアは開き直ってハヤトとイチャイチャしようとするが。
「如月ハヤト！あなた、私の裸まで見ておいてなんの責任も取らないおつもりですか！」
「裸・・・」
「ハヤトが会長の裸を・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・」かあああああ
思わず言ってしまったクレアは顔を赤らめる。
「いえ、その、そういう意味ではなく・・・」
「ハヤトと会長、そこまで進んで・・・〃〃〃」
「違うと言ってますでしょ！」
クレアはキッとハヤトを睨み。
「あ、あなたはわたくしに辱しめばかり・・・!!」
「いやいや俺、本当に何もしてませんよね!?まっ、待って待って！」
「お黙りなさい！」

パァン

「いってーーーーーーーーーーっ」

小切りの良い平手打ちの音がリトルガーデンの空に響いた。

この後、如月ハヤトは世界的歌姫や戦う為に生まれた武芸者$|$スレイヤー$¿$と戦い、『1人の女性』の悲しい憎しみから生まれた戦いにその身を投じる。

ハヤトはリーフラッシャーの眺めながら巨人ダイナに語りかける。

「会長を、皆を守るためにこれからよろしくな、ウルトラマンダイナ！」

『熱き闘志の巨人』と共に、彼は『英雄』となる。

ー『ダイナ・ハンドレット』ー

何の為に、誰の為に、あの力はあるのだろう？正義は何だ？本当の愛は何だ？

その答えを見つけるために少年はこの力を振るう。

「ダイナアアアアアアアアアァァァァァァ！！！」

人物紹介はその内に。

次は、ウルトラマンガイア（アグルも）と魔装学園Ｈ×Ｈ~~§§~~ハイブリッド・ハート~~§.§~~です。

# 魔装学園Ｈ×G$¦$ハイブリッド・ガイア$¿$ ガイア編

ガイア編とアグル編の二つがあります。
最初は本編が始まる数年前、主人公が中学生の頃から始めます。
〝宇宙怪獣〟は、〝異世界怪獣〟に変換します。

---

その少年は母親から実験を受けていた。
「どう、〝傷無〟？」
「お母さん、ボクどうなっちゃうの？」
真っ白でなにもない実験室、そこで日々、母親は自分の息子、〝傷無〟を使って実験に明け暮れた。
『ハート・ハイブリッド・ギア』と言う異世界のテクノロジーを活用した、最新鋭の技術の塊らしい。
コアと呼ばれる小さなカプセルのような物を傷無の体の中に埋め込む手術をさ

れ、そのコアの力によって鎧のようなプロテクターと武器が自分に着装されるということ。

母親は傷無の脳波を調べる実験の最中に、機械に不具合が生じ、傷無の脳波にある映像が現れた。

『暗黒の空』

『岩とマグマの大地』

『異形の巨大生物』

そして、その生物と戦う『赤く輝く光の巨人』

幼い傷無はその巨人を見てふと呟く。

「ウルトラ・・・マン？」

『・・・・・・』

『巨人』は傷無の存在に気付いたのか、傷無の方を向き、ジッと見つめる。すると、傷無の意識が遠退き、現実に戻ると、その光景を忘れていた。

そして再び母親との実験の日々が始まった。自分が実験をすると母親が喜ぶ、ただそれだけが、幼い少年の誇り。母親に頼られていることが誇らしかった。世界で

唯一ハート・ハイブリッド・ギア所持者であることが自慢だった。母親の役に立っていることが嬉しかった。

だが・・・・・・。

「お母さん、待って!!」

その少年は、去り行く母親の背中を追いかけた。

「〝傷無〟、あなたのスペックでは、もうこれ以上の〝実験〟は意味がないわ。あなたはもう必要ないの」

背を向けたまま母親は、我が子に見向きもせず去って行く。

「まって！お母さん！ぼく、もっとがんばるから！だから!!」

転んでしまいそれでも必死に母親に手を伸ばす幼い少年に、母親は何の感情も籠っていない冷徹な言葉を浴びせる。

「じゃあね、傷無。さようなら」

「お母さん！お母さーーーーーーーん！！！」

傷無と呼ばれた少年の必死の声は空しく響いた。

ハッと〝飛弾傷無〟は幼い頃の記憶を夢に見て目を開く。

「久しぶりに見たな・・・」

黒髪の短髪に整った顔立ちの少年、傷無は同じように母親に捨てられた〝姉〟と住んでいる家の窓から街を見た。

〝超大型浮体式海洋構造物~~SFS~~メガフロート~~SFS~~・日本〟。フロートとは海の上に作られた巨大な都市である。東京フロート、大阪フロートなど、各都道府県が作ったフロートが接続し、巨大な構造体となったのが、このメガフロート日本だ。

その大きさは東京二十三区に匹敵する巨大さだが、アメリカなどの超大国に比べれば規模は小さく、メガフロートの大きさはその国の国力を表し、各国がそれぞれ

に独自のメガフロートで、世界の海を漂っている。
国土を失った世界中の国家は今や、そのメガフロートが国そのものであり、国土の全てである。メガフロートの乗組員と住人が現状安否が確認できる国民の全て。
世界中の海を航海するメガフロートに領海の意味はない、世界地図も存在しない、全ては世界が一変した〝あの日〟から始まった。
『第一次異世界間衝突』
十五年前に、何の脈絡も前兆も無く唐突に世界中で異世界との衝突面$§$エントランス$¿$が出現し、そこから魔術と科学が融合した〝魔導兵器〟と〝超巨大生物$§$怪獣$¿$〟が現れ、未だに各国を蹂躙している。傷無自身、先日年の離れた姉(五歳位)と、本国からメガフロート・日本にやって来た。異世界との衝突面$§$エントランス$¿$が開いてたった二週間で、百の都市と五千万人の命が失われ、人類は異世界の軍隊に対してまったくの無力だった。こうして異世界とのファーストコンタクトは最悪の形で終わる。
そして約半年後、『第二次異世界間衝突』が発生した。
第一次とは比較にならない規模の衝突は、各大陸、島国、例外なく衝突面が発生

し、異世界の魔導兵器と怪獣が押し寄せてきた。人類の通常兵器では対抗することはできず、瞬く間に軍隊は滅ぼされ、世界は支配された。

各国は箱舟や戦闘の切り札としてメガフロートを建設し、都市機能・政治・経済、全ての社会機構を備えたミニチュア、それがメガフロートである。本来の国土を捨てた各国は、メガフロートで海の上を漂う移動国家となった。しかし、メガフロートに乗れなかった国民は、旧国土に取り残されたまま、その人々がどうなったか、現在では知る術はない。陸地は電波遮断され通信も出来ず、本国に近付くと魔導兵器、怪獣、艦隊が現れ、安否の確認もできない。

メガフロートに住まう人々は再び本国を取り戻し、残された人々を救い、自分達の街や家に帰る事を願っている。

「ん?・・・・・・あれは・・・・!」

ふと傷無が空を見上げると、そこに衝突面$|$エントランス$¿$が現れた。そしてその中から〝巨大な結晶〟が現れ、浮遊していた。〝ソレ〟が何か知っている傷無は、嫌、メガフロート日本に住む人々全員が知っていた。直ぐに避難勧告が発令され、人々は避難しようとする。

浮遊していた結晶は地上に近付くと目映く光り、周辺の建物を破壊する。地上に到達した結晶はメガフロートの道路を破壊し、結晶を内部から破壊しながら〝ソレ〟は現れた。

『ギュワアアアアアァァァァァアアアアアア！！！』

頭頂部が鋭利に伸び、顔の周りや肩に鋭利な武器を持ち、両手にはこれまた鋭利な鉤爪を持った怪獣。

『異世界戦闘獣 コッヴ』

コッヴは鋭利な鉤爪を振り回し、建物を破壊する。傷無は避難の波に飲まれ、一人取り残された。傷無はコッヴを睨み破壊されるメガフロートを見て拳を握る。

「どうしたら・・・どうしたらいいんだぁぁあああああああああ！」

傷無が叫ぶと、傷無の周りの景色に異常が起きる。

『飛び散る建物の破片』、『舞う土煙』、『風で飛ぶ新聞』、全てが時が止まったかのように凍り付いた。

「・・・・・・・???」

戸惑う傷無の足元の道路が、傷無を囲むように円型に光り、大きな穴となった。

「うわあぁっ!?」
傷無はそのまま落下し、穴は塞がった。奈落の底に落ちるように落下する傷無。
「うわあぁぁぁああああ!!」
悲鳴を上げる傷無、暗い穴が光りに満ちる。
「何処に向かってんだよおおおぉぉぉおおおおおおおおおおお！！！」
光る穴から出ると、空に浮かぶの目の前に幼い頃に出会った『光の巨人』が目の前にいた。
「君は!?・・・そうだ・・・思い出した！君はウルトラマン！」
『光の巨人ウルトラマン』はジッと傷無を見つめる。
「ウルトラマン！地球が危ないんだ！俺は、〝君〟になりたい！俺は〝優れた人間〟でもなければ、〝特別な存在〟でも無い！・・・でも、君の〝光〟が欲しい！俺に力を!!」
ウルトラマンは傷無に向けて両手を伸ばす。
「俺を・・・試しているのか？・・・」
傷無もウルトラマンに向けて両手を伸ばす。すると傷無の身体はウルトラマンに

近付き、ウルトラマンの胸の宝石に吸い込まれる。すると傷無の身体を光が包む。
「この〝光〟・・・とっても暖かくて・・・俺を包んで・・・違う、〝光〟が俺の中に入ってくる・・・！」
傷無の身体は〝光〟に包まれ、目が眩み再び景色が目に入ると、傷無がメガフロート日本を〝見下ろしていた〟。
コッヴの目の前に赤く輝く光りが現れる。
『ッッッ！！！？？？』
目が眩み、怯むコッヴ。光は人の形になり、降り立つ。
『ヅアっ‼』
そして、メガフロート日本に住む人々は見た。その〝巨人〟を。銀の身体に赤い模様が入り、金のラインが走り、胸に青く光る宝石を付けた巨人を。
道路を揺らし現れたその〝巨人〟にコッヴは雄叫びを上げる。
『ーーっ‼ーーっ‼ーーっ‼』
ー？？？　ー

その光景をメガフロートのある場所で見ていた、黒髪に服の上からでも解る程の完璧なセクシーボディの女性と金髪に眼鏡の小柄な少女も見ていた。

『光の巨人・・・？』

「・・・・・・・」

眼鏡の少女は端末越しに呟き、黒髪の女性はジッと〝巨人〟を見つめる。

ーメガフロート日本ー

現れた〝巨人〟、〝ウルトラマン〟は自分の身体を戸惑うように見つめ、コッヴは雄叫びを上げて走り出す。

『・・・!!』

〝巨人〟はコッヴに向かって走り出す。

『デュワっ！』

コッヴと組み合うウルトラマンはパワーのあるコッヴに押し出され、投げ飛ばされる。

『ウワァッ！』

投げ飛ばされたウルトラマンは転がり、四つん這いになり、その腹部をコッヴが蹴り上げる。
『グワッ！』
『ギュワアアアア！！！』
蹴られながら立ち上がろうとするウルトラマンをコッヴは更に蹴り上げる。
『ウワッ!!』
倒れるウルトラマンを更に攻撃しようとするが、寸前でウルトラマンは転がり、攻撃を交わし転がりながら立ち上がる。
『(負けない！俺は、ウルトラマンなんだ!!)』
ウルトラマンとなった傷無は構え、コッヴに立ち向かう。
コッヴは鋭利な鉤爪で攻撃しようとするが、ウルトラマンはその腕を受け止めて、肘鉄で攻撃し腹部を乱打する。
『デュワっ！タァッ！タァッ！タァッ！タァッ!!』
更に蹴りをおみまいし、後ろに引かせる。
『ーーっ!!ーーっ!!』

コッヴは鉤爪で攻撃するも、ウルトラマンはバックステップで交わし、コッヴの頭頂部を手刀で攻撃するが鉤爪に捕まる。

『デュワっ！』

鉤爪から離れ攻撃しようとするがコッヴは攻撃を交わされるが、回し蹴りをおみまいする。

『ギュワアアアア！！！』

コッヴは鉤爪を使い攻撃するが、ウルトラマンに受け止められ、反撃を食らう。

後方に下がるコッヴの頭頂部が光り、エネルギー弾をウルトラマンに浴びせる。

『ウワアアアアアっ!!』

次々と放たれるエネルギー弾にウルトラマンは後ろの建物を壊しながら倒れる。

『ギュワアアアア！！！』

これ幸いと倒れたウルトラマンにのし掛かるコッヴ。両手の鉤爪で動きを封じ、口で食いちぎろうとするが、ウルトラマンは何とか防いでいた。

『グウウウウウッ!!』

ウルトラマン$|$傷無$¿$の脳裏に幼い頃に見た、ウルトラマンの技が浮かんだ。

『デュワアアアッ!!』
『ギュワアアアア！！！』
のし掛かるコッヴを蹴り飛ばす。蹴り飛ばされたコッヴは転がる。
『デュワっ！ハアッ！』
起き上がったウルトラマンと同じく起き上がったコッヴが構え向き合う。
『ギュワアアアア！！！』
コッヴは再びエネルギー弾をウルトラマンに浴びせようとするが。
『デュワっ！デヤッ！ハアッ！』
エネルギー弾を腕で弾き飛ばす。
『ジュワッ!!』
両手を大きく広げ、赤い閃光がウルトラマンを包むと、力を込めるように蹲るとウルトラマンの頭頂部に光が集まり赤い光の鞭のようにしならせた〝光の刃〟、『フォトンエッジ』がコッヴを貫く。
『ーーーーーーーッ！！！！！』
『フォトンエッジ』を浴びたコッヴは内側から爆発し、塵となった。

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！

ウルトラマンの戦いを見ていた人々から喝采がウルトラマンに送られる。

ピコン！ピコン！ピコン！ピコン！

胸の宝石が青から赤く点滅し、警報のような音が響いた。

『ジュワッ!!』

ウルトラマンは自身の身体を光らせるとその姿を消した。ウルトラマンの足元に、傷無がいた。

「・・・・・・・・・」

傷無は自身に起こったことに戸惑うが、目の前に〝小さな光〟を見つけると、近くに落ちていた小瓶に光を入れる。

「俺が・・俺が、ウルトラマンになったのか・・・？」

戸惑いながら、傷無はその場を離れた。

ー傷無の家ー

その日の夕方、運良く被害は少なく、傷無の家にも傷ひとつ無かった。

「ああうん、こっちは大丈夫だから、姉ちゃんも心配しないで・・・あぁ、あぁ、それじゃあね」

別のフロートで仕事している姉と連絡を終えた傷無は小瓶の中の光を見つめる。

「俺が、ウルトラマンになるなんてな・・・ウルトラマンってだけじゃ物足りないな・・・・・そうだ、〝ガイア〟・・・この地球を守るウルトラマン。お前の名前は『ウルトラマンガイア』だ！」

小瓶の光が強く光る。まるで喜ぶかのように。

「・・・ッ!?」

すると、傷無の頭に何かが走った。それは新たな怪獣の〝気配〟だと、傷無は直感した。

「行かなくちゃな・・・一緒に戦おうぜ！『ウルトラマンガイア』！！！」

小瓶を持って高く掲げると傷無の身体が光に包まれ、何処かに飛んでいった。

傷無は知らない、この事件から数年後に待ち受ける、自分のハート・ハイブリッド・ギアの隠された機能と〝姉〟の仕事。自分の運命に大きく関わってくる少女達、自分と戦うことになる女戦士達、地球と異世界の戦争に自分自身がその身を投じていくことを・・・。

そして、自分の母親と〝殺し合う残酷な運命〟を・・・。

---

傷無の強化はいずれ。

# 魔装学園Ｈ×Ｇ ガイア編Ⅱ

かなりいい加減に書いたかも・・・・・・しかし後悔しない！

---

飛騨 傷無がウルトラマンガイアに変身して、異世界からの怪獣と戦うようになってから数年、高校生となった傷無は、姉である〝飛騨 怜悧〟に呼ばれ、メガフロート日本から隔絶された特殊なフロート、『戦略防衛学園アタラクシア』にやって来のだがーーーーーー

「帰りたい・・・・・・」

傷無は、現在アタラクシアの大講堂で男子から〝羨望と嫉妬〟の視線を女子から〝嫌悪と侮蔑〟の視線に晒されていた。

何故こうなったかと言うと、姉からの連絡でアタラクシアのあるフロートにやって来た傷無は道に迷いさ迷っていると、フロートの外縁部に来てしまい、そこで一人の女の子と出会う、銀色の長い髪にルビーを嵌め込んだように赤い瞳の超絶的美

少女『千鳥ヶ淵 愛音』。だが、この少女、口を開けば毒舌、会話のあげ足取り、中二病混じりの会話の残念な美少女だった。

彼女の会話に辟易していた傷無の耳に空襲警報が鳴ると愛音は着ていた制服を脱ぐと均整の取れたプロポーションに大きな胸をした芸術品のような肢体を包むパイロットスーツを着ていた。愛音はハート・ハイブリッド・ギア魔導装甲『ゼロス』の装着者であった。

傷無を置いて飛び立った愛音を見送った傷無が走ると開けた公園に出る。そこでは、異世界からの兵器『魔導兵器』と始めてガイアに変身した時に戦った『コッヴ』に似た怪獣が現れた。

傷無は森に姿を隠すと懐から、ガイアのライフゲージに似たアイテム、『エスプレンダー』を取り出し、真上に掲げると、『エスプレンダー』から光が溢れ、傷無を包むとウルトラマンガイアに変身した。

『シュワッ！』

『エスプレンダー』は、科学者だった〝母親〟からの遺伝なのか、〝ガイアの光〟を傷無が自作した作品に入れて、完成したガイアの変身アイテムだった。

「見て〝ハユル〟、ウワサのヒーローさんよ・・・」
「コードネーム〝ウルトラマン〟、数年前から異世界怪獣と戦う謎の巨人ですか・・・」
『魔導兵器』と戦っていた青いハイブリッド・ギアを纏う金髪の女子と、赤いハイブリッド・ギアを纏う黒髪の女子がガイアを見つめる。一人は探るように、一人は睨み。
『コッヴ』に踏み潰されそうになった『金髪に小柄な少女』を助けたガイアはそのまま『コッヴ』と戦闘を開始した。
ガイアの登場にアタラクシアの生徒達から歓声が沸き上がる。
「デヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！」
『コッヴ』とは一度戦った経験から難なく倒し、『魔導兵器』も全滅させた事を確認するとガイアはそのまま消えて傷無の姿に戻る。だが、傷無が少し歩くと愛音が倒れていた、徐々に衰弱する愛音を介抱していると、更に『魔導兵器』が数体程、空から現れた。
ガイアに変身するか迷う傷無に、姉である怜悧からハート・ハイブリッド・ギアの通信機能を使って、何もない空間からモニターウィンドウが表示されるフロー

ティングウィンドウが表示され指示を受ける。

《傷無、愛音の胸を揉め！》

「イヤなんでだよ！」

思わずツッコンでしまったが、姉からの命令に基本逆らえない傷無は愛音の胸を揉みしだいた。更に怜悧からの指示で愛音の身体を愛撫すると、傷無の身体からピンク色の粒子が、愛音の身体から青い粒子が発生し、混ざり合い二人を包むと、愛音の瞳が恍惚とした色になりそうになるが、怜悧から「ほっぺたをはたけ」と指示されはたいたら正気に戻った愛音に殴り飛ばされる。しかし。

「そんな・・・どういう事？ ハイブリッド・カウントが上がってる・・・もう、使い果たしたはずなのに」

《愛音、貴様に向かってアルバトロスが降下中だ。殺れるか？》

『魔導兵器アルバトロス』が降りて来て愛音と対峙するが、愛音は難なく倒した。

「(俺が言うのもなんだけど、滅茶苦茶だ・・・)」

唖然とする傷無に愛音が近づく愛音、そこから更に怜悧から指示を受けて、愛音は傷無を大講堂まで引きずった。

そこで傷無は、自身の姉である飛騨怜悧が、アタラクシア学園の校長で、メガフロート日本の司令官である事を知り、更に先程愛音にした『行為』を全校生徒の前で晒され冒頭に至る。

傷無のハート・ハイブリッド・ギア『エロス』の隠された機能。他のハート・ハイブリッド・ギアのエネルギー$$ハイブリッド・カウント$$の補給能力『接続改装』とパワーアップである『絶頂改装』。これらを行う為には、ハイブリッド・ギアの心臓とも言えるハート・ハイブリッド・コアを持つ二人の男女が、心と体を一つにし、愛情と快楽を共有する事である。

早い話が、エロい事をする事。

そして傷無は『世界で唯一ハート・ハイブリッド・ギアを纏う男子』で『ハート・ハイブリッド・ギア〝エロス〟を纏うエロス魔人』と呼ばれるようになった。

それからは、教室二年甲組(しかも女子しかいない)についても周りからの侮蔑の視線に晒され、寮(これまた女子寮)の自分の部屋に入った傷無は、姉からアタラクシアのハイブリッド・ギアチーム『天地穹女神$$アマテラス$$』の隊長になるよう言い渡され、更に世話役の候補生まで送られた。

傷無は、『天地穹女神~~SS~~アマテラス~~SS~~』の隊員と候補生を読み上げる。因みに愛音と他の二人とは顔を合わせた(当然警戒されていた)。

『千鳥ヶ淵 愛音』、『ゼロス』のパイロット。銀色の長い髪に赤い瞳に均整の取れたプロポーションに大きな胸をした芸術的美少女であるが、口を開けば毒舌に中二病混じりに上から目線と残念美人。アタラクシア学園に入学する前の経歴無し。

『ユリシア・ファランドール』、『クロス』のパイロット。アメリカのハイブリッド・ギアチーム『マスターズ』のエースパイロットだったが、日米合同で日本に留学してきた。長い金髪に愛音以上のグラマラスナイスバディのブロンド美人、陽気な性格に高い自信とそれに裏打ちされた実力と能力を持つエース。

『姫川 ハユル』、『ネロス』の装着者。事実上日本のエースと呼んでも過言ではないアタラクシアの風紀委員長。長い黒髪にスレンダーなプロポーション(胸は他の二人に比べて平均サイズなのを気にしている)。潔癖で生真面目な性格で、風紀を乱す事を許さない。故に傷無を警戒している。

「(あ〜あ、只でさえガイアで忙しいってのに、ハイブリッド・ギアの新米隊長かよ・・・)」
「隊長、どうしましたデスか?」
「嫌、何でも無いよシルヴィア」
『シルヴィア・シルクカット』、イギリスからの留学生で『天地穹女神$!$アマテラス$¿$』候補生。傷無の世話をする中等部の女の子。金髪のボブカットにし、語尾に『デス』と付け、純真無垢な性格をした、傷無にとって癒し要員。
「(本当、シルヴィアがいて良かった・・・)ん? シルヴィア、生徒手帳落として・・・ん、これってウルトラマン?」
シルヴィアの生徒手帳からガイアの写真がはみ出ていた。
「あ、隊長もウルトラマンファンですか!?」
「ウルトラマンファン?」
「はい! アタラクシアの初等部や中等部の生徒にはウルトラマンさんのファンがいてファンクラブもあるデス! シルヴィア、今朝ウルトラマンさんに助けて貰って、〝名誉会員〟になったデス! とっても嬉しいデス!」

「(あ、そうか、アタラクシアに来たときに助けた女の子ってシルヴィアだったんだ・・・)」

はしゃぎながら説明するシルヴィアに相づちを打つ傷無。

「シルヴィアは、ウルトラマンが好きなのか？」

「はい！　とっても大好きデス！　シルヴィア、いつもウルトラマンさんの活躍中継を欠かさず見てるデス！」

「そうか・・・」

ウルトラマンさんご本人として、少し誇らしく感じる傷無は、思わず呟く。

「ガイアが人気者なのは、嬉しいな・・・」

「ガイア・・・？」

「あぁ、俺が勝手に命名したんだ、ウルトラマンだけじゃ物足りないからな、地球の守り神になって欲しいって願って付けたんだ、ウルトラマンガイアってな・・・」

「ウルトラマン、ガイア。はい！　シルヴィアも、これからウルトラマンさんの事をウルトラマンガイアさんって呼ぶデス！」

翌日、〝名誉会員〟であるシルヴィアの話から、アタラクシアでは、ウルトラマ

ンの事を、『ウルトラマンガイア』と呼ばれるようになった。

そして傷無は、初任務で愛音、ユリシア、ハユルと共に、インドネシア沖の無人島に資源調査の任務に赴いた。初めて『エロス』を纏い、空を飛ぶ傷無は、ガイアで空を飛ぶ事は慣れているので普段通りの態度であった。

「(傷無の奴、随分冷静だな・・・)傷無、ハイブリッド・ギアで空を飛ぶ感想はないのか？」

司令室で傷無達の様子を見ていた怜悧は傷無に連絡する。

《「あぁ、別に無いよ」》

「少しははしゃいでみたらどうだ？初めて空を飛んだのだろう？」

《「え、あ！そ、そうだな、ちょっと現実感が無くてさ・・・(やっべー！ガイアに変身すると空を飛んで戦う事もあったから慣れてたんだ・・・！)」》

愛音達も妙に落ち着いている傷無を訝しげに見つめる。ユリシアと傷無、愛音とハユルの組に別れて、調査を行う。

白い浜辺に付いて調査機器を作動されて置くと、ユリシアは傷無の戦歴を聞くが、

傷無は『魔導兵器』の撃墜数０と聞き、拍子抜けと謂わんばかりの態度を取る。

だが、『魔導兵器』ではなく、『異世界怪獣』の撃破数なら、ユリシアは０だが、傷無は既に40体以上は倒している。

調査機器の片付けをする傷無は、浜辺に座るユリシアに話しかける。

「ユリシアは、怪獣を倒した事は無いのか？」

「・・・残念ながらね、怪獣の身体は頑丈だからわたくしのクロスでも、表面を焦がす事は出来ても倒す事は出来ないのよ。『魔導兵器』はともかく怪獣の方は、人類は未だに倒す事が出来てないの。まあ、例外はいるけどね・・・」

「ウルトラマンか・・・」

「そう、数年前から突然現れた謎の巨人、怪獣のみを攻撃するから国連は〝今のところ〟は、巨人を味方と見ているわ」

「（〝今のところは〟って事は、もしガイアが敵となったら攻撃するって事か・・・）」

そして傷無は目を疑った、ユリシアの後ろに魔導兵器ブルーヘッドがいた。

すぐさまユリシアに言うとユリシアは即座に攻撃してブルーヘッドを倒すが、衝突面§§エントランス§§が発現し、ブルーヘッドとアルバトロスが次々と現れる。

傷無は怜悧達に連絡するも異世界衝突面により通信障害が起きて通信が繋がらない。ユリシアは傷無を足手まといと考え、一人で戦おうとする。傷無も戦おうとするもユリシアに「足手まとい！」と言われ下がる。

そしてユリシアが一人でブルーヘッドとアルバトロスを辛くも撃破するが、ハイブリッド・カウントもギリギリの所で突然、カテゴリーＡ級の魔導兵器『竜騎兵§§§ドラグリエ§§§』大軍で現れ、窮地に立つがーーーーーーっ！」

「ユリシアーーーーーっ！」

「キ、キズナ!?」

傷無が飛んで来た。傷無は通信が元に戻り、怜悧に通信を送るも、ユリシアが窮地に立っていると聞き、駆けつけたのだ(怜悧は愛音とハユルを向かわせているから戻れたが)。

すると、傷無の風景が変わった、竜騎兵が、ユリシアが、海の凪が、全て停まった。

「(この感覚・・・初めてガイアと出会った時の感覚に似ている・・・ハッ！ガイア!?)」

傷無は、エスプレンダーを取り出すと、エスプレンダーが光っていることに気付く。

「(ガイア・・・俺に力を貸してくれるのか・・・？)」

肯定するように点滅するエスプレンダーを傷無は胸元に付ける。すると、エスプレンダーが傷無のエロスとくっ付き、エロスの装甲が黒と赤のツートンカラーになった。

「(〝フォトン・エロス〟・・・！)」

再び、世界が動き始めると、傷無は真っ直ぐに竜騎兵に突っ込む。

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアっ！」

グシャアン！

傷無が、拳で殴り付けると、竜騎兵の装甲を簡単に砕き撃破した。

「(戦える！　良し！)」

ガイアとして戦ってきた経験から直ぐに気持ちを切り替えて他の竜騎兵に向かう。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

オオオオオオオオオオオッッ！！！！」

今までのエロスと桁違いのスピードとパワーで次々とドラグリエを撃破する傷無。

「・・・・・・・・・・」

ユリシアも、魔導兵器の事を良く知らない、全くの素人で足手まといと見下していた傷無の奮闘に呆然となっていた。

ーアタラクシア司令室ー

しかしそれは、現在映像で確認している怜悧とアタラクシアの研究主任にして怜悧の友人である識名京も同じだった。

「ケイ、エロスには武装が無いのでは無かったのか？」

『うん、那由多博士からのメッセージでは・・・』

怜悧と傷無の母親、二人を捨て、現在行方不明になっている科学者 飛騨那由多からエロスの能力を知ったから怜悧は断腸の思いで傷無をアタラクシアを呼び寄せた。そのメッセージには、エロスに武装は無いとはっきり書かれていたのに、現在傷無は、カテゴリーＡのドラグリエをたった一人で撃破している光景に唖然とし

た。

l傷無ｓｉｄｅｌ

「コイツでぇエエエエエエエエ！ラストォオオオオオオオオオオッ!!」

ドカアアアアアアアアン！！！

最後のドラグリエを破壊した傷無はユリシアの方へ歩いていく。

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア（やっぱり、ガイアで戦うのと違うな・・・）ユリシア、大丈夫か・・・？」

「大丈夫かって、キズナ・・・貴方どうして？」

どうして助けてくれたの？と聞こうとすると、傷無は苦し気な表情を無理に笑顔にして当たり前のように答える。

「女の子が、危ない目に遭ってるんだ・・・当たり前、だろ？」

「（それだけの理由で？ろくに魔導兵器と戦ったこともないくせに・・・わたくしを守ってくれたの？）「ドサッ」キズナっ!?」

唖然とするユリシアの近くで傷無は倒れる。

「悪い、少し疲れた・・・」
初戦闘（生身）でカテゴリーＡ級と戦った疲労で倒れる傷無にユリシアはソッと寄り添った。

そして、遠くから傷無の戦いぶりを見ていた愛音とハユルも傷無の奮戦に呆然となる。
「彼は・・・一体・・・？」
カテゴリーＡ級の部隊を全滅させた傷無にハユルは戸惑いを浮かべ。
「・・・・・・・・・・」
愛音は苦々しく傷無を睨んでいた。まるで、欲しい物を持っている人間を羨むようにーーーーーー。

---

『フォトン・エロス』

傷無のハート・ハイブリッド・ギア『エロス』の胸元にエスプレンダーを嵌め込んだ状態。黒と赤のツートンカラーになり、全ての能力が現地球側のハート・ハイブリッド・ギアでは、トップクラスの戦闘力を持ち、ハイブリッド・カウントの消費も少ない。しかし、ガイアの力とエロスがまだちゃんとリンクしていないので1日約一分しかなれない。これから少しずつ長くなる。更に使用するとパイロットである傷無の体力消費が激しいので最後の切り札として扱う。

# 魔装学園Ｈ×Ｇ ガイア編Ⅲ

傷無の初任務が無事？に終わりを告げてから、ユリシアの態度が一変した。これまではどこか見下していた感じがあった傷無に対して、明らかに好意的にアプローチをするようになった。

その事を姫川に咎められて火花を散らせたが、担任が来たことにより話が終わった、だが、愛音の表情は険しくなっていた。

学校が終わり、部屋に戻った傷無はベッドに横たわり一息付く。

「ふう・・・（『フォトン・エロス』、姉ちゃん達はエロスに隠されていた機能って言ってたけど・・・）」

傷無は枕元に置いたエスプレンダーを眺める。

「（あれもきっとガイアが俺に与えてくれた力。俺は、この力の使い方を誤っちゃいけないんだ・・・！）っ、誰だ!?」

ガイアとして数年間戦い続けて来た傷無は力の使い方を理解している。ふと誰かの気配を感じて上体を起こすと。

「あら、気づいていたの？」

「千鳥ヶ淵!!」

何と愛音が傷無の部屋に来ていた。何でもシルヴィアを言いくるめてスペアキーを借りて入ってきた。傷無の生活の唯一の癒しであるシルヴィアを騙した事を怒る傷無を無視して、愛音は服を脱ぎ、『背徳武装（接続改装を激しくする事で得ることが出来る武装）』を手にするために傷無に迫るが。

自分と気持ちが通じてない異性と『接続改装』なんて出来ないと言われてしまい愛音は去っていった。その寂しそうな後ろ姿を傷無は訝しそうに見つめた。

後日、ユリシアと京都フロート、沖縄フロートでデートをした傷無は愛音の事を聞いてみたが、ユリシアも知らないと言われ、数日間愛音を尾行し、姫川にも聞いて調べたが、何も分からなかった。

そして遂にケイの所に行き、愛音に関する情報を聞こうとしが、その権限があるのは怜俐だけと言われ、怜俐からその場に来た怜俐に聞く。

「あいつ愛音は他人も自分も死ぬことなんて何とも思っちゃいない、あいつの頭の中にあるのはより強力な武器を手に入れることだけで、俺たちの悩みなん

かくだからないと思っている、戦闘能力を上げて生き残りたいのかと思ったらそうじゃないんだ、訳が分からない、だから俺はあいつの事が知りたいんだ！」

「・・・・・・いいだろう、教えてやる」

　怜俐の話しによれば、７年前本土の東京の皇居の周りを囲む堀に『千鳥ヶ淵』と言う名の堀があり、そこに浮かんでいる少女がいるとの通報が入り、保護された少女それが『千鳥ヶ淵愛音』だった。病院に送られ目を覚ました少女は自分が何者であるのか、どこから来たのか、名前すら分からない有様だった。家族からの捜索願いは無く、日本中の学校や入国監理局にも問い合わせたが手がかりは無かった。

　ただ一つ、ＨＨＧ$$ハート・ハイブリッド・ギア$$の適合性が異常になほど高かった。たが、ゼロスは近接戦闘専門のギア、ギアの特性の差が、ユリシアや姫川に遅れをとっている。それが彼女の戦闘能力を上げたい理由。

　だが、話はそれで終わらなかった。保護されて間もない愛音を引き取ったのが、怜俐と傷無の母、『飛騨那由多』だった。『千鳥ヶ淵愛音』の名も彼女が付けた。那由多博士は愛音をＨＨＧの研究開発に従事させ、丸一日実験台にさせられ、学校に通い始めたのは高等部に入ってから、それまでラボの実験室に閉じ込められ孤独に

過ごしていた。
あるのはＨＨＧと那由多博士だけ、優れた才能はライバルに追い抜かれ、那由多博士も行方不明になってしまい、本当に孤独になってしまった。
傷無が愛音の身の上話に愕然とすると突然敵襲警報がラボに鳴り響く。
アタラクシアから二百キロ先に二千メートル級の戦艦と千メートル級以下の艦船が30隻、うち半分は空母、残りは護衛艦。今までよりも大艦隊にアタラクシアは防衛体制をとり、天地穿女神$|$アマテラス$¿$各員は出動する中、傷無だけは怜俐に待機を命じられた。
「今お前が行っても意味はない、今はまだ待て」
「意味がないって何だよ!? 俺だって『フォトン・エロス』を使えば！」
「『フォトン・エロス』は一日に一度、しかも使えるのは一分のタイムリミットがあるだろう、当面Ｃ級以下の魔導兵器は出てこない。敵の降下部隊が出てきたらお前の出番だ。それまで調子を整えておけ」
「くっ・・・」
怜俐の言葉に反論できない傷無は歯噛みしながらポケットの中のエスプレンダー

を握りしめた。

戦況を見ていた傷無は愛音が無茶な戦いをしているのが映った。敵艦隊の射程範囲にアタラクシアが入ろうとし、艦砲射撃が始まり、アタラクシアの外壁が破壊される。愛音達が何とか旗艦らしき艦を攻撃しようとするも、砲撃に阻まれ動けずにいたが、愛音が単独で飛び込み、攻撃範囲のまで後少しの所で横から護衛艦からの砲撃で撃墜された。

「千鳥ヶ淵いいいいっ！！！」

「待て傷無！」

止める怜俐の言葉を振り切って、傷無は指令室を飛び出す。

「待ってろ千鳥ヶ淵！『フォトン・エロス』!!」

ｌ愛音ｓｉｄｅｌ

「（ここはどこ・・・？あたしは・・・誰なの・・・？）」

暗闇に一人佇む愛音の目の前に光が見える。

「(光・・・？そっちへ行けばいいの？)」

「千鳥ヶ淵！」

「・・・・・・飛騨・・・くん？」

目を覚ました愛音の目の前に自分の名を呼ぶ傷無がいた。撃墜された愛音は傷無に助けられラボの調整室にいた。

敵艦隊はアタラクシアかる五十キロ程度の距離におり、砲撃は止んだが魔導兵器が降下された。ユリシアと姫川は戻っているが、それでも戦場に行こうとする愛音を傷無は止めた。だかーーーーーー

「あたしにはＨＨＧしかないの！ＨＨＧであたしが他の人より劣る事なんて許されないのよ！それが・・・戦うことすら出来ない？ギアを着装することすら出来ないですって？そんなのもう・・・存在価値がない、あたしが存在する意味なんかない・・・だったら、生きてる意味もないじゃない！」

「千鳥ヶ淵・・・」

「あたしには何もない・・・何もないのよ・・・自分がどこの誰か知らない、名前

も家も家族も何も覚えてないのよ、あたしはこのラボに連れてこられた、それからずっと那由多博士の実験台となって手伝っていたわ、それより昔のことは知らない記憶にあるのはここで実験台をしていたことだけ、それがあたし全てよ」

　傷無は愛音の姿にかつて母親しかいなく、その母親に必要とされたかった自分と重ねる。話を続ける愛音は昔那由多博士に自分には背徳武装と言う武器があると言われ、それを手にするために傷無に近づこうとしていたと話すが。

「お前自分が可愛いだけじゃねえか自分がちやほやされてないと不安なんだろ!!理想の自分と現実の自分のギャップが受け入れられないだけだ!!自分よりも優れた人間がいるからって拗ねてるんじゃねぇ！」

「・・・っ知った風に聞かないでよ」

「いいか！自分に能力がないと思うならそんな自分に何が出来るか？どうしたら役に立てるか？そういう考え方をしろよ！そうしたらこの世に必要のない人間なんて存在しねぇ!!」

「ああうるさい!!口先だけの説教なんて聞きたくないわ！早くそこを退きなさい！この場で殴り倒すわよ！」

「最後のエネルギーを振り絞ってやることがムカつく男一人を撲殺することか？大したもんだな最強を目指した落ちこぼれ様は」

「本当に死ぬわよ」

「好きにしろ」

傷無を殴り飛ばそうと拳を伸ばした愛音は寸前で拳を止めた。傷無が無抵抗に立っていたからだ。実は傷無は撃墜した愛音を助けるために『フォトン・エロス』を使ってしまい。エネルギーは二%しかなく、『絶対領域』も展開出来なかった。愛音はポロポロ涙を流しながら傷無の胸元を叩く。

「もう！　バカバカ、無能、間抜け、役立ず！　一日一回しか使えないモードを何無駄遣いしてんのよ！　何でもう戦えないあたしのためにそんな・・・ことするのよっ・・・あたしはもう死ぬくらいしか・・・することがないのに・・・」

傷無は優しく愛音を抱き締めながらある事を話す。自分がかつてラボにいた事、愛音がやって来て母親に捨てられた事を、愛音も男の子を覚えていたがそれが傷無で、自分が間接的に追い出した事に驚く。

「本当に誰かさんと同じだぜ、でも過去や能力は問題じゃない、これからどう生き

るかが問題なんだ。俺たちはいつだってやり直せるし、いつだって再スタートを切れる」

『「傷無、人間の価値とは能力が高いか低いかではない。どう生きるかが問題なのだ」』

「(あの時の姉ちゃんがああ言ってくれなければ俺は今頃・・・ーーーありがとうな姉ちゃん)」

　愛音は改めて傷無に頼む。

「傷無・・・あたしとその、接続改装を・・・してくれないかしら？」

「でもお前・・・」

「あたし、やり直せるんでしょ?恥ずかしいけど・・・あなたにならあたし・・・//////」

「分かったよ・・・愛音」

　そして傷無は愛音の身体を愛撫する、すると傷無のピンク色の光と愛音の青色の光が混ざり合い、ゼロスが姿を変え、傷無のエロスも回復する。これが『絶頂改装』。そしてそれにより愛音の背徳武装『全時空粉砕$|$パルバライザー$¿$』が装備された。外に出た二人は空を飛び、旗艦に向けて愛音が『全時空粉砕』を構えエ

ネルギーをチャージする。魔導兵器が襲いかかるが。

「『フォトン・エロス・モードゼロス』!!」

『フォトン・エロス』に青いラインが追加された姿になり、持続時間が長くなり、更に圧倒的なパワーとスピードで魔導兵器を粉砕する。

「(エロスとゼロスのハイブリッド、絶頂改装において相手の能力を複製する、それこそがエロスの真の能力!!『フォトン・エロス』で更に強化することができる!!)」

エネルギーチャージが終わった愛音は通信で旗艦に接近していたユリシアと姫川を射線上から退避させると。

「好き放題やった報いよ、地獄を見せてあげる!」

全時空粉砕ﾊﾟﾙﾊﾞﾗｲｻﾞｰ!

圧倒的なエネルギーの奔流に飲まれた旗艦が粉砕された。愛音は残った艦隊にも『全時空粉砕』を放ったが、〝何かに〟阻まれた。

艦隊の頭上に誰かがいた。

「まさか・・・人間？けど身体の周りに武装のような・・・それじゃまるで・・・

HHG・・・じゃないか・・・・！」
緑色の長髪に芸術品のようなプロポーションをした女性が手をあげると、艦隊はアタラクシアから去った行った。だが、艦隊が去って直ぐに、海が突然沸騰したように泡立つ。
「何だ・・・！」
「海が沸騰しています・・・」
「嫌な予感・・・」
「まさか・・・」
沸騰した海から赤く光る獰猛な目をし、アンコウのような頭部と、ゴツゴツした体皮をした四本足の怪獣が現れた。
『マグマ怪地底獣 ギール』
『グバアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアっ！！！』
「怪獣っ!?」
「敵艦隊から出たのでしょうか!?」
「いいえ違うわ！　あの怪獣、海の中から出てきたのよ！」

「なに？　てことは〝地球産の怪獣〟って事!?」

異世界衝突とそれにより異世界の怪獣が現れてからと言うモノ、地球の環境に変化が現れたのか、地球上の生物が異形に変化・巨大化するのがここ数年で確認された。

「《天地穿女神$$アマテラス$$各員聞こえるか？》」

「姉ちゃん、一体どうする？」

「《・・・・・今、アタラクシアの市民に避難命令を発令しだが・・・最悪、アタラクシアを放棄しなければならないかもしれん》」

「「「「っ!?」」」」

怜俐の言葉に傷無達は息を呑む、このままでは動きの遅いアタラクシアがギールに襲われる可能性がある。可能な限り人命を脱出させてアタラクシアを放棄する怜俐の判断は間違っていない。

「《天地穿女神$$アマテラス$$は可能な限り怪獣の足止めをしろ！　こちらは避難を急がせる・・・！》」

「・・・・・・了解！」

傷無達はギールに向かう、姫川とユリシアが牽制をし、愛音が再び『全時空粉砕』を放つが。

『グバアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアっ！！！』

ギールの身体をエネルギー奔流が襲いかかるが、ギールは多少のダメージを食らった程度であった。

「たくっ、怪獣ってのはある意味魔導兵器より質が悪いわね！」

「アイツら無駄にタフなのよね！」

「無駄口叩いてないで攻撃を続けましょう！私達が退いたらアタラクシアが・・・！」

「所で傷無は・・・？」

「あ、あそこ！」

傷無はギールの周りを旋回し、ギールを翻弄し、正面まで飛ぶ。すると。

『ギュワァッ！ギュワァッ!!』

ギールは二本足で立つと腹部が開き、赤く発光する発光体から火炎弾を無数に辺り構わず発射する。

「うわああああああああっ!!」
「キズナっ！」
「飛騨君っ！」
「傷無あああああああああああああっっ！！！」
『絶対領域』を展開して防御する愛音達だか、近くにいた傷無は火炎弾を防いだが衝撃で海に落ちる。
だがーーーーーーーーーーーー
「(ここなら見つからないな・・・)」
海の中で傷無はエスプレンダーを取り出して構える。
「(行くぜ、ガイアァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアっ！！！)」
エスプレンダーが光ると傷無は光となってギールの後方に移動すると、光の巨人となる。
『デュワっ！』

ーアタラクシア指令部ー

『怜俐、ウルトラマンガイアを確認した』

「わかった、天地穿女神$|$アマテラス$?$は傷無の捜索！怪獣はウルトラマンに『怜俐・・・』なんだケイ？」

『ウルトラマンガイア・・・』

「ああ、そう言えば学生達の間でそう呼ばれていたな・・・ウルトラマンガイアに任せろ！」

ー愛音ｓｉｄｅー

「指令！ウルトラマンに任せると言うのですか!?」

「落ち着きなさいよハユル、怪獣の相手ならウルトラマンの方がなれているわ、わたくし達は撃墜された隊長の救出に向かいましょう・・・」

「しかし！」

「ほら、愛音なんてもう向かっているわよ」

既に愛音は傷無の救出に向かって行った。

「(傷無・・・傷無・・・・!)」

ーウルトラマンガイアｓｉｄｅｌ

『ギュワアアアアアッ!』

『ダァ!』

ガイアはギールの頭部を掴むと上にあげ、顎に膝蹴りをし、ギールの後ろに飛ぶと尻尾を掴むが、逆に振り払われた。

『デワッ!』

『ギュワアアアアアッ!』

ギールはガイアに突っ込むがガイアはギールの首を絞めて頭部を殴る。ギールはガイアは払い、再び突っ込みガイアの腹部に頭突きをする。

『グワッ! ウワッ!』

横たわったガイアにギールは頭突きで攻撃を繰り返す。

『ギュワアアアアアッ!』

ギールは立ち上がったガイアの足に噛みついた。

『グワアアアアッ！！！　ウワッ！』

ギールは噛みついたままガイアを投げ飛ばす。投げ飛ばされたガイアを巨人な水飛沫を上げて倒れる。

『ギュワアアアアアッ！』

『デワッ！』

ギールはガイアに突っ込むがガイアは頭部を掴んで力比べに入った。ガイアの近くに愛音達がいた。

『(まずい、このままじゃ愛音達が・・・！)』

ガイアはギールの頭部を上に上げて下顎を殴り、更に連続でバク宙蹴りをギールの顎に叩きつけ、回し蹴りをおみまいする。

『ハアッ！』

二本足立ちでヨロヨロになるギールを抑え込むとギールの腹部がまた開く。

「っ！　またあの攻撃が！」

「だったら・・・！」

「おみまいしてやるわ！」

姫川とユリシアと愛音がギールの腹部を攻撃すると、ガイアはバク転で回避し、愛音達の攻撃がギールの腹部に当たる。

『ギュワアアアアアアアアアアアッ!!』

腹部への攻撃で悶えるギールを見て、ガイアは必殺の構えを取る。

『ハアッ！ ハアアアアアアアアァ、デヤッ!!』

『ギュワアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！！！』

ガイアの必殺技『フォトンエッジ』がギールに炸裂するとギールの身体は粉々に粉砕された。

『デュワっ！』

ギールを倒したガイアはそのまま空の彼方に消えていった。怜俐がケイにトレースをさせてみたが、途中でロストした。

「行っちゃったわね・・・」

「・・・一体、あの巨人は・・・！」

「・・・・・・って傷無は？」

愛音が海を見ると、傷無が海から出てきた。

「ぷはぁっ！　死ぬかと思った・・・」
「傷無っ！」
「キズナ！」
「飛騨君！」

＊＊＊

そしてその夜、人類が初めて異世界艦隊を撃退した祝勝パーティーがアタラクシアで大々的に行われた。主賓の傷無はバルコニーで一息付くと、各フロートのお偉いさん達を相手に辟易した怜俐が来る。
「お前はいい気なものだな！　小娘共とイチャイチャと！」
「誰がやらせたと思ってんだよ！」
「好きでやらせているとでも思っているのか！」
ブラコンの怜俐（傷無もシスコンだが）からすれば大切な弟を乳臭い小娘共にくれてやらねばならない事にストレスを貯めていたのだ。各地方フロートの知事と懇親会があるので（かなり嫌々）バルコニーを離れる怜俐と入れ替わるようにドレス

姿の愛音が現れ、絶頂改装した時に記憶の一部が戻った事を告げる。
「もしかしたら絶頂改装は記憶の封印を解放してくれるのかもしれないわ・・・だから傷無、あたしとーーーーーー」
「ああーっこんなとこに！まぁったく油断も隙もないわねー」
傷無の腕を豊満な胸の谷間に挟みながらドレス姿のユリシアが来た。
「こらぁ!!なにをやってるのですか！あなたたちは！」
晴れ着姿の姫川が日本刀で傷無に斬りかかるが白羽取りをする傷無。
「まて 落ち着け姫川・・・！」
「これが落ち着いていられますか！今すぐ離れて下さいっ、死刑にしますよ！」
すると愛音が傷無のもう片方の腕に抱きつく。
「ではこうするとその死刑がより確実になるということかしら？」
「おい、愛音まで！は、放せって」
慌てる傷無を見ながら愛音の顔には満面の笑みが浮かんでいた。

傷無と愛音は知らない、この先、二人に訪れる運命を・・・。
傷無は知らない、自身と共に戦うもう一人の〝光の巨人〟を・・・。
『大地の巨人』と『大海の巨人』と共に、彼は、『英雄』になる。

ー『魔装学園Ｈ×Ｇ§§ハイブリッド・ガイア§§』ー
ピンチの連続が彼等に襲いかかるが、彼等は頑張って踏ん張って戦う。
だがそれでもどうにもならない時、彼の名を呼ぶ。
「ガイァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァっ！！！」

---

アグル編はいずれ書きます。
次回はコスモスと海の少女達（ヒント艦隊）が共に戦います。オリジナル主人公です。

# ティガ・ダイナ・ガイア 大激戦 ウルトラの友情！ ｃｈａｐｔｅｒＩ

劇場版みたいなモノです。
『魔装学園Ｈ×Ｈ』が終了し、『最弱無敗』も『ハンドレッド』も間もなく終了しそうなので書きました。

---

〝光に選ばれた者〟がいれば、〝光に選ばれなかった者〟もいるーーーーーーーーー。
「俺は、俺は守れなかった・・・守るって言ったのに・・・誰も、守れなかった・・・!!」
暗い暗い暗黒の世界で、一人の少年が蹲っていた。
《力が欲しいかい・・・？》
「誰だ・・・・・！」
《力が欲しいのかい？ 自分の全てを奪った者達へ復讐する力を・・・？》

「・・・・・・あぁ、欲しい・・・俺の全てを奪った奴等に・・・俺の仲間達を奪った奴等に・・・〝機械神〟達に、復讐してやるっ！！！」

少年は、憤怒の形相を浮かべ、身体に〝白いパワードスーツ〟を纏うと、純白のスーツが強い光を放った！

ー『ウルトラマンティガ・ウルトラマンダイナ・ウルトラマンガイア 大激戦 ウルトラの友情！』ー

ーダイナ・ハンドレッドの世界ー

「キシャアアアアアアっ！！！」

リトルガーデン近海に突如として現れた海老か蟹のような甲殻類の身体に左右非対称の鋏をもった『宇宙海獣 レイキュバス』が現れた。

「シュワッ!!」

リトルガーデンに向かおうとするレイキュバスの前に銀の身体に赤と青のラインが入り額の角にクリスタルが付いた巨人、『熱き闘志の勇士 ウルトラマンダイナ』が立ち塞がった。

「《コイツ、前に倒した蟹野郎か?! 何で復活したのか分からないけど、覚悟は出来てるか!!》」

ウルトラマンダイナである如月ハヤトは、リトルガーデンで訓練に勤しんでいると、突如現れたレイキュバスを見て直ぐに周りから(特にエミリアに見つからないように)離れて直ぐにダイナに変身し、戦闘を開始した。

「シャァッ! デヤッ! シュゥワッ!!」

膝蹴り、正拳、肘打ちでレイキュバスを攻撃するダイナだが、硬い外骨格に阻まれ、レイキュバスにダメージが無かった。

「キシャアアアアアアッ!!!」

「グゥワッ!!」

レイキュバスの右腕の大きな鋏がダイナの首を掴んだ! 首を切断されないよう

に、両手で鋏を押さえるダイナ。レイキュバスはもう片方の鋏を振り回し、ダイナを攻撃する。

「キシャアア・・・・・!!」

「グゥワアアアアアっ!!!」

レイキュバスの瞳が赤く発光すると、火炎弾をダイナの身体にぶつけ、ダイナを怯ませる。

ークレアｓｉｄｅｌ

「・・・・・・・・・・」

リトルガーデンのブリッジでは、金色の髪を縦ロールにし、豊麗で抜群のプロポーションをしたクレア・ハーヴェイがブリッジからダイナとレイキュバスの戦闘を見ていた。

「クレア様・・・・・！」

オペレーターでクレアの秘書である金髪の小柄な少年クリスが、ダイナの状況を静観するクレアを見るが、その視線に気付いたクレアは安心するように微笑む。

「大丈夫ですわ、クリス。確かに以前の戦闘ではダイナはレイキュバスに苦戦しましたが今の彼は、あの時とは違いますわっ！」

ーダイナｓｉｄｅー

「〜〜〜〜〜〜〜〜！！！」

勝利を確信したのか、レイキュバスはダイナに向けて身体を振るわせ笑っているような態度を取るが。

「《舐、めんな、よっ!!》シュッ！」

ダイナの角のクリスタルが光ると、ダイナの身体がより逞しく、赤い身体に変わった！

変幻自在の超能力を駆使する青の『ミラクルタイプ』と対となる、剛力無双の赤の『ストロングタイプ』である。

「シュワッ!!」

ダイナストロングタイプ（ダイナＳ）は首を挟んだレイキュバスの鋏を外し、そのままレイキュバスごと振り回し『バルカンスウィング』を繰り出す！

「ヌゥアアアアアアアアアアアッ！！！」
「キュアアアアアアアアッ！！！」
「《残念だったなレイキュバス！俺も日々、成長しているんだよ!!》シャアッ!!」
「キュアアアアアアアっ！！！」
「フウゥゥゥ・・・シャアアアアアっ！！！」
振り回したレイキュバスを上空に投げ飛ばしたダイナSは右腕から赤色光弾『ガルネイトボンバー』を放ちレイキュバスに当たる、これで決まったと思った次の瞬間！
ビキィイイイイイイイっ！！！
「っ！！？？《何だ!?》」
『ガルネイトボンバー』がレイキュバスをぶつかる寸前、レイキュバスを泡のようなバリアが包み、『ガルネイトボンバー』を防いだ。
ークレアｓｉｄｅー
「何ですの・・・・・？」

「クレア様！ レイキュバス上空の空間に次元振動を確認しました！ 何かが来ます！」
「何ですって!?」

ーダイナｓｉｄｅー

レイキュバスの真上の空間が『謎の魔法陣』が現れ、そこから〝白い甲冑を纏った巨人〟が現れた。
「《白い、騎士・・・？》」
美しくも刺々しさと禍々しさがある白い騎士にダイナＳは唖然となるが、直ぐに構え直す。
「・・・・・・・・・違う」
「《何？》」
「お前ではない・・・・・」
そう言って騎士はレイキュバスを連れて魔法陣の中に入る。
「《待て！》」

「追いたければ来い、〝選ばれし者〟よ。お前も俺の〝標的〟だ・・・・・・！」
「《っ！　会長、聞こえますか？》」

ークレアｓｉｄｅｌ

クレアの頭にハヤトのテレパシーが入った。
「(っ！　如月ハヤト、どうしましたの？)」
《俺はヤツを追います・・・！》
「(何を言ってるんですの?!　あの得体の知れない魔法陣から戻ってくる保証があるか分かりませんのよ！)」
《でもヤツは俺を〝標的〟と言いました。つまり、〝いずれはまた来る〟って事です！》
「(その前に打って出ると言う事ですの・・・？)」
《はい！》
「(・・・・・・先程も言いましたが、戻ってくる保証があるか分かりませんのよ。それでもですの？)」

《大丈夫です、信じて下さい！》
「（・・・・・分かりましたわ。ただし、必ず戻ってくるのですのよ！）」
《分かってます。会長、心配しないで下さい！》
「（〜〜!! 早くお行きなさい！！！　////////）」

ーダイナｓｉｄｅー
「《了解！》シュワッ!!」
ダイナＳはフラッシュタイプにチェンジして白い騎士を追って『魔法陣』の中に入っていった。

ークレアｓｉｄｅー
「ウルトラマンダイナ、〝白い騎士〟とレイキュバスを追いました・・・！」
「（如月ハヤト、必ず戻って来なさい！）」
そして数分後、クレアはエミリアとハヤトの妹のカレンにどう説明するか頭を悩ませるのであった。

ー『最弱無敗の古代巨人ティガ』の世界ー

「ヂェヤッ！」

『超古代の勇者 ウルトラマンティガ』は、疾風迅雷の青紫『スカイタイプ』にチェンジし、『超古代竜 メルバ』と空中戦を繰り広げていた！

「ピヤァアアアアっ！」

「《素早い、でも！》ヂェヤっ！」

ウルトラマンティガに変身するルクス・アーカディアは近くの街にメルバが近づかせないように縦横無尽に飛び回り『ハンドスラッシュ』を放ちながらメルバを牽制する！

ーリーシャｓｉｄｅー

ティガとメルバが空中戦を繰り広げている空の真下では、金の髪をサイドテールにした赤い瞳に均整の取れたプロポーションをしたリーズシャルテ・アティスマー

タ（通称リーシャ）と蒼い長髪に芸術品のようなスレンダーのクルルシファー・エインフォルク。

『怪獣対策騎士団ＧＧガッツＧＧ』の設立者兼技術主任と参謀である二人は、それぞれの神装機竜である『ティアマト』と『ファフニール』を纏い、メルバが街に近づいたら迎撃出来るように待機していた。

「しかし、メルバがまだ存在していたとはなぁ・・・」

「幻神獣ＧＧアビスＧＧだって同じ個体が何体も存在するのだから、メルバもそうなのかも知れないわね。とりあえず、副団長ＧＧセリス先輩ＧＧ達が街の住人を避難させている間、私達はメルバが来たときに備えましょう」

「あの巨体であのスピードの怪獣が後何体もいると思うと、少し気が滅入るな・・・」

「そう・・・・・っ!?」

「クルルシファー？」

そうねと答えようとしたクルルシファーは、突然地上を凝視した。リーシャも釣られて見ると、地面が盛り上がるのが見えて、そこから！

「グワアアアアアアアッ！！！」

「ゴルザだとっ!?」

「待って、あのゴルザ、身体に太い血管みたいなのが張り巡っているわっ！」

地面から現れたのは、『全竜戦』で倒された『超古代怪獣ゴルザ』。だが、今回現れたのは同じ個体が、地下のマグマエネルギーを得て進化した『超古代怪獣 ファイヤーゴルザ』だ！

「グワアアアアアアアッッ！！！」

ファイヤーゴルザはそのままリーシャ達のいる街へ進行してきた。リーシャとクルルシファーはファイヤーゴルザを迎撃しようと構えるが。

突如、上空に『魔法陣』が現れ、そこから〝光〟が飛び出した！

「シェアっ!!」

ドカッ！

「グワアアアッッ?!」

〝光〟がファイヤーゴルザを蹴り飛ばすとファイヤーゴルザは地面に倒れ、〝光〟は〝巨人〟となって大地に降り立つ。

「なっ!?」

「っ!?」

リーシャとクルルシファーが驚愕した。そこに現れたのは、ティガと同じ〝光の巨人〟、ウルトラマンダイナだったのだ！

「《あれは・・・！》」

メルバと戦っていたティガ§§ルクス§§も現れた〝光の巨人〟に驚き、メルバが地上に降りるのを見て、ティガもマルチタイプになって地上に降りダイナの隣に立つ、ダイナ§§ハヤト§§もティガを見て驚く。

「《俺の他にもウルトラマンに選ばれたヤツがいたのか？》」

「《君は、誰何だ・・・？》」

「《ウルトラマンダイナ、如月ハヤト・・・！》」

「《僕は、ウルトラマンティガ、ルクス・アーカディア・・・！》」

ティガとダイナ、ルクスとハヤトはお互いに無言で見つめあっていた。

「ピヤァアアアアアっ！」

「グワアアアアアアアッッ！」

「「ッ!!」」

ティガとダイナのいる地点の前後にいた、メルバとファイヤーゴルザの雄叫びを聞いた二人は背中合わせになって構える。

「《話は後だ！今はこの場を切り抜けようぜ！》」

「《分かった！》」

『超古代の勇者』と『熱き闘志の巨人』の共闘が始まった！

ーリーシャｓｉｄｅー

「ティガと同じ巨人が、もう一体だと・・・?!」

「お姫様。驚く気持ちは分かるけど、副団長達ももうすぐ来るわ、今は皆と合流しましょう・・・！」

ダイナの登場に唖然となるリーシャだが、クルルシファーの言葉で我に返ると、セリス達と合流すべく地上に向かった。

ーティガｓｉｄｅー

「ディヤッ！」

「シェアッ！」
ティガはスカイタイプに、ダイナは『ミラクルタイプ』にチェンジすると、ティガＳは上空に飛び上がる。
「シュワッ!!」
ダイナＭはファイヤーゴルザとメルバをエネルギー波で拘束すると、上空に持ち上げ。
「ディヤッ!!」
ガガガガガガガガガガガガガッ！！！
持ち上げられた二体をティガＳが高速飛行で縦横無尽に飛び回りながら攻撃する！
「シュッ！」
「フッ！」
ダイナＭは拘束を解くと二体は落下し、空かさずダイナＳにチェンジし、落下するファイヤーゴルザを掴み。ティガＳは力強さの赤の『パワータイプ』にチェンジし、同じようにメルバを掴むと、ティガＰとダイナＳは空中でジャイアント

スイングをする！

「ダアアアアアアアアッッ！！！」

「シュワアアアアアアッッ！！！」

「グワアアアアアアアアッッ！！！」

「ピヤァアアアアアアアアッッ！！！」

ティガＰとダイナＳは力を込めてファイヤーゴルザとメルバを投げ飛ばす！

「ハァッ！」

「シャッ！」

「「ギャアアアアアアアアアッッッ！！！！」」

投げ飛ばされた二体は空中で激突し、重なるように地面に落下した！

ーリーシャｓｉｄｅー

セレスティーナ達と合流したリーシャとクルルシファーは初めて共闘して、見事なコンビネーションを見せるティガ~~Ｓ~~ルクス~~Ｓ~~とダイナ~~Ｓ~~ハヤト~~Ｓ~~に唖然となった。

「な、なんてコンビネーション・・・！」
「合って直ぐなのに、まるで熟練コンビのような戦いぶりね・・・」
セリス達もティガとダイナの戦いぶりに目を奪われた。

ーティガｓｉｄｅー
「ハッ！」
「シュッ！」
ティガＰとダイナＳはそれぞれマルチタイプとフラッシュタイプにチェンジすると、必殺の構えをとるが。突如、ファイヤーゴルザとメルバが泡のようなモノに包まれ、空中に浮く。
「≪何なんだ・・・？≫」
「≪気をつけろ、ティガ。黒幕が来る・・・！≫」
魔法陣にまで浮いた二体の前に〝白い騎士〟が現れた。
「・・・・・・・・・」
「≪あの〝白い騎士〟が、ゴルザとメルバをけしかけたのか？≫」

「《あぁ、俺の処でもヤツは怪獣をけしかけたんだ。俺はヤツを追って此処に来たんだ・・・！》」

〝白い騎士〟は、警戒するティガとダイナを一瞥する。

「違う・・・」

「「《っ⁈》」」

「この〝世界〟でも無い。お前達も〝標的〟だが、相手をするのは今ではない・・・」

「《貴方の目的は何なんですか？ゴルザとメルバを呼び出したのも貴方なんですか⁉》」

「《レイキュバスも、お前が蘇らせたのか⁉》」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ティガ$|$ルクス$¿$とダイナ$|$ハヤト$¿$の問い掛けにも、無言を貫く。

「《僕達を〝標的〟と言いましたね？》」

「《何故俺達を狙う⁉》」

「・・・何故か・・・それはお前達が、〝選ばれし者〟だからだッッ！！！」

〝白い騎士〟は左手を上げると、そこから高出力のエネルギー光線をティガとダ

イナのいる地点に放った！
「っ!!」
「っ!?」
ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッッ！！！！！
地面に当たった光線は、地面を膨れ上がらせ大爆発を引き起こした！
『ルクスッ！！！　(ルーちゃん・・・！)(兄さんっ!?)』
リーシャ達の悲鳴が上がるが、煙が晴れるとそこには。
「ハア、ハア、ハア、ハア・・・・・・」ピコンピコンピコンピコン・・・
「フゥ、フゥ、フゥ、フゥ・・・・・・」ピコンピコンピコンピコン・・・
咄嗟にバリアを張って光線を防いだティガとダイナであった。しかし、防ぐのに相当のエネルギーを消費したのか、カラータイマーが点滅を起こしていた。
「フン、さすがに防ぐか・・・」
〝白い騎〟はファイヤーゴルザとメルバを連れて魔法陣の中へ消えようとする。
「《待てッ！》」

「言った筈だぞダイナ。追いたければ来いとな、次の世界で、必ずヤツを見つける・・・！ヤツを、ーーーーーーーーーーッ！！！」

魔法陣の中へ消えた〝白い騎士〟。だが、魔法陣はそのまま空中に漂っていた。

「アァッ・・・！」

「グゥッ・・・！」

ティガとダイナは限界なのか、膝を付くと光となって消えた。

ーリーシャｓｉｄｅー

「ルクス、しっかりしろ！」

「・・・リーシャ様・・・彼は、ダイナは・・・？」

リーシャに肩を借りながら立ち上がった少年、灰色の髪と灰色の瞳をした中性的な美少年ルクス・アーカディア。

「〝ダイナ〟？もう一人の巨人か？それなら心配するな、今セリスから連絡が入ってな。無事のようだ、現在シャリス達が救出に向かった・・・」

「お姫様、ルクス君、もう一人の方も来たわ」
クルルシファーの目線を追うと、シャリス達に連れられた黒髪に精悍な顔付きで黒いパイロットスーツを着た少年、〝如月ハヤト〟が来た。
「君が、如月ハヤト・・・ウルトラマンダイナなんだね・・・」
「じゃ、君がルクス・アーカディア、ウルトラマンティガなのか？」
「うん・・・」
「「・・・・・・・・・・・・・・・」」
無言で見つめ合うルクスとハヤト。
「お前ら、男同士で何を見つめ合っている！」
「「っ！」」
リーシャから突っ込まれ、我に返る二人が周りを見ると、ニヤニヤしている者や、呆れ目の者とおり苦笑いを浮かべた。
「と、とりあえず、如月ハヤトさん」
「ハヤトで良いぜ。見たところ同い年みたいだしさ、話し方も気軽に頼む」
「それじゃハヤト、あの〝白い騎士〟と、君の事を教えて欲しいんだ」

「俺の分かる範囲で言うし、かなり突拍子も無い話だと思うけど・・・」
「構わん、もう一人のウルトラマンが現れたのだ。多少の荒唐無稽の話を受け入れられる」
リーシャの言葉にルクスとクルルシファー達も頷く。
「・・・分かった。俺は、こことは別の世界からやって来たウルトラマンだ・・・！」
それからハヤトは自分の世界の事を淡々と話した。宇宙から襲来した〝侵略者〟サベージ〟と〝スフィア〟の事、ハヤトは〝サベージ〟と対抗するアーマー『百武装ハンドレッド』を使う〝武芸者スレイヤー〟である事、ウルトラマンダイナに変身して〝スフィア〟が集まって生まれる怪獣達や自然に生まれてきた怪獣達と戦ってきた事を。
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』
ハヤトの話にルクスを含んだ全員が、頭を捻らせ、唖然となる。まさか異世界から来た人間だとは少し意表を突かれたからだ。
「それじゃ、次は僕達の世界について話すね・・・」

唖然となりながらも、ルクスも自分達の世界の事を話した。

自分達の国はアティスマータ新王国で、そこに所属する機竜使い§§ドラグナイト§§の訓練生であり、幻神獣§§アビス§§や遺跡§§ルイン§§に潜むラグナロクの事、そして超古代の怪獣達と超古代の巨人ウルトラマンティガとなった事、リーシャ達はティガと共に戦う〝怪獣対策騎士団§§ガッツ§§〟である事を説明した。

「・・・・やっぱり、此処は俺の世界では無いようだな・・・」

「君はどうして〝白い騎士§§ヤツ§§〟を追ってきたんだ？」

「ヤツは言った。〝お前も標的〟だと・・・」

「成る程。貴方はいずれヤツは、貴方の世界や私達の世界にやって来ると思い、先手を打って追って来たのね？」

「あぁ、そしてヤツの標的が誰なのか分かった・・・」

「うん、ヤツは最後にこう言っていた〝次の世界で、必ずヤツを見つける・・・！〟っと。」

『〝ヤツ〟・・・・？』

リーシャ達の言葉が重なると、ルクスとハヤトは上空に佇む魔法陣を睨む。

「ヤツの最初の〃標的〃は、あの魔法陣の向こうの世界に居ます・・・！」
「俺やルクスと同じように、ウルトラマンに選ばれし者・・・！」
ルクスとハヤトの言葉が重なる。

「『ウルトラマンガイア』!!」

―魔装学園H×G$|$ハイブリッド・ガイア$¿$の世界―
此処は『アタラクシア』、現在はほぼ独立国のようになってしまったこの場所の海沿いの区画で一人の青年がいた。
「・・・・・・・・」
黒髪に整った顔立ちの青年。〃飛騨傷無〃は横たわりながら物思いに耽っていた。
異世界『バトランティス』との戦争、地球を含む異世界を支配していた『機械神』との激戦。そして『根源的破滅招来体』と怪獣達との死闘。

傷無は仲間達と、自分と一体となった〝二体のウルトラマン〟と共に戦い、『バトランティス』と和解し、『機械神』達を救い、『根源的破滅招来体』でも最強の存在、『根源的破滅天使 ゾグ』を倒して全ての世界を救った。

だが、『バトランティス』との繋がりであった『衝突面$|$エントトランス$¿$』が消えてしまい、『バトランティス』で出来た仲間達と合う事が出来なくなってしまった。

それだけではなく、現在地球は異世界との戦争が終わっても、復興が進んでいない他国の領土に押し入り、実効支配する国、勝手に国境を作り新しい国を宣言する国、他国の資源の横取り等、混乱に乗じて己の欲望と野望を満たすための人間も多くいる。そして異世界テクノロジーの宝庫とも言えるアタラクシアと魔導装甲$|$ハート・ハイブリッド・ギア$¿$とそのパイロット達も狙われていた。

「(俺達が望んで得た平和って、中々来ないモノだなぁ・・・)」

現在傷無達は他国からの侵略行為(ＩＣＢＭや核ミサイルや無人機の迎撃等)を防ぐ任務から帰還し、久しぶりにのんびりしていると。

「何してるのよ、傷無」

「愛音・・・」

傷無を見下ろすように見つけるのは、銀髪の長髪に赤い瞳、均整の取れたプロポーションに大きな胸をした驚く程の美少女、バトランティス帝国の第一皇女『アイネス・シンクラヴィア』であり、傷無の(一応)正妻である『千鳥ヶ淵 愛音』であった。

「どうしたのよ。こんな所でのんびり寝そべったりして、10代で早めのボケが来たの？」

「そんなんじゃねぇよ、ただ・・・っ!!」

軽口を叩き合う二人だが、傷無が跳ねるように飛び起きると、空を見上げた。

「傷無・・・？」

「何か来るっ！」

傷無が睨む先の空から、魔法陣が展開され、そこから巨大な眼球に手足が生え、角や足に目玉を付けた『奇獣 ガンQ』が現れた！

「キュワアアアアアアアアッ！！！」

「アイツ！ 東京で戦った目玉怪獣じゃない!?」

「『根源的破滅招来体』とすら謂われたヤツが、現れたってことは・・・」
「まさか、『ゾグ』がまた現れるの!?」
機械神達とも遜色無い圧倒的な強さをもった『根源的破滅天使 ゾグ』。倒したら更に力を増し進化するヤツの存在は、愛音だけではなく多くのパイロット達に恐怖を与えた。
「愛音、ユリシアとハユル、シルヴィアやスカーレット達と合流して、避難誘導を頼む！」
「傷無は？」
傷無は右手首に装着された発光体が付いたブレスレット『アグレイター』に触れる。
「俺は、アイツの相手をする・・・！」
「分かったわ・・・傷無・・・」
「何だ愛ンっ!?」
突如愛音が自分の唇を傷無の唇に合わせた、少しして唇を離す。
「気を付けなさいよ・・・////」

「あ、あぁ＝＝＝＝」

いくら恋人同士になっても気恥ずかしさがある二人は顔を赤らめながら離れ、それぞれの戦場に向かった。

「行くぜ、『アグル』・・・！」

傷無は右手の拳を握ると、アグレイターの側面の左右の翼が展開されると叫ぶ、己のもう一人の分身を‼

「アグルウウウウウウウウウウウッ！！！」

アグレイターを付けた腕を胸元に伸ばすと、展開された翼の上部からエネルギー波が発生し、エネルギー波が傷無を包むと、その姿を変えた！

かつてバトランティスに連れ去られ、脱出した際、一時的に力を失った『大地の巨人』に変わり、傷無と共に戦ってくれた『大海の巨人』！

「ジェヤッ‼」

銀の身体に黒と青（群青）のラインが入り、キリッとした目付きの巨人、『青い〝海の光〟の巨人 ウルトラマンアグル』だ‼

ー魔法陣・内部ー

「見つけた・・・ヤツが、〝二人のウルトラマン〟に選ばれし者・・・そして〝機械神〟を倒した者・・・〝飛騨 傷無〟アアアアアアァァァァッッ!!!!」

〝白い騎士〟は憎悪と怒りと怨嗟の込めた声を上げた。

ーアグルｓｉｄｅー

「っ!?」

ガンQと対峙していたアグルの頭上にあった魔法陣から、かつて『根源的破滅招来体』によりバトランティスに送られ、バトランティスの生体兵器として地球$$レムリア$$で猛威を振るった『宇宙戦闘獣 コッヴ』に良く似ているが、細部がより刺々しく強化された。

『宇宙戦闘獣 超コッヴ』が現れた。

「≪コッヴっ!? 嫌、少し姿形が違う・・・!≫」

「キシャアアアアアアアッ!!」

「キュワアアアアアアッ!!」

超コッヴとガンQがアグルに迫る！

「《くっ！一体でも二体でも関係無い！相手になってやるぜっ!!》シュワッ!!」

アグルは二体に向かって走り出した！

ー『最弱無敗の古代巨人$$ティガ$$』の世界ー

ルクスとハヤトは空に浮かんだ魔法陣を睨んで、それぞれ『スパークレンス』と『リーフラッシャー』を持った。

「ルクス、行くのか？」

「はい、ハヤトの言う通りだとすればあの〝白い騎士〟はいずれ必ず僕達の世界にまたやって来ます。それに・・・」

「それに？」

「僕の他にもウルトラマンに選ばれた人がいるなら、力になりたいんです。同じウルトラマンとして・・・！」

「・・・・ルクス、お前は私の騎士だ。だから、必ず戻って来いよ！」

「っ！はい、リーシャ様！」

「ルクス君、気を付けてね」
「ルクス、貴方が戻って来るまで、怪獣対策騎士団ＳＳガッツＳＳの指揮は、私に任せてください・・・！」
「ルーちゃん、頑張って・・・」
「主様と共に行けないのは口惜しいですが・・・」
「全く、本当に兄さんはお節介なんですから・・・！」
「クルルシファーさん、セリス先輩、フィーちゃん、夜架、アイリ、必ず戻るよ」
頼りになる参謀と、先輩にしてガッツの副隊長である『セリスティナ・ラルグリス』と『フィルフィ・アイングラム』と『切姫夜架』、妹の『アイリ・アーカディア』と約束を交わす。
「先に行くぞ、ルクス」
ハヤトはリーフラッシャーを構える。
「ダイナアアアアアアアアアアッ！」
突きだしたリーフラッシャーの折り畳まれたクリスタルが展開し、光が放たれ、ハヤトの身体を包み込むと、如月ハヤトはその姿を変えた。

「シャアッ！」
ウルトラマンダイナになったハヤトは魔法陣の近くまで飛んでいく。
「ルーちゃんもティガって叫ぶ？」
「イヤ、流石にソレは・・・・・」
「良いんじゃないか？　機竜を呼ぶ感覚でやれば」
「え～と、それじゃ・・・・・」
ルクスはスパークレンスを天に向かって突き出し叫ぶ。
「ティガアアアアアアアッ！」
スパークレンスが展開され、光がルクスを包む。
「ディヤッ！」
ウルトラマンティガに変身したルクスも飛び上がり、ダイナと隣り合わせになる。
「「(コクン)」」
二人のウルトラマンは頷き合うと、魔法陣の中へ入っていった。
そして、ティガ§§ルクス§§とダイナ§§ハヤト§§は出逢う、ガイアとアグルに選ばれし者§§傷無§§と・・・・・。

ｃｈａｐｔｅｒＩ『襲来の脅威と集結する守護者』でした。
ウルトラマンゼロは暫く先になると思います。

# ティガ・ダイナ・ガイア 大激戦 ウルトラの友情！ ｃｈａｐｔｅｒⅡ

今回Ｈ×Ｇにオリジナル設定をいれます。

---

ー魔装学園Ｈ×Ｇの世界ー

ウルトラマンアグルに変身した傷無は、突然アタラクシアに現れたガンＱに超コッヴと交戦に入った。

「シェヤッ！」

「キュワアアッ！」

ガンＱが目玉から放つ光線を跳躍でかわすと、がら空きになった頭部を踏み蹴る！

「キュワアアッ!?」

「ジャアアアアっ!!」

今度は超コッヴが腕を振り上げて背後から迫るが、ヒラリとかわしたアグルは回し蹴りを浴びせた！

「フッ！　シュゥワァッ！　ハアッ！　フウゥゥゥ、シュワアアアアアアアッッ!!」

「ジャアアアアアアアアアアっっ！！！」

回し蹴りで怯んだ超コッヴの腹部に正拳や肘打ちを浴びせ、トドメに両手から生み出した光弾『リキデイター』を放つと、超コッヴはアタラクシアから遠くの海へ吹き飛びながら爆散した。

ｌ愛音ｓｉｄｅｌ

ハイブリッド・ギア『ゼロス』を纏った愛音は、避難誘導を終えて、アグルの戦闘エリアまで飛んでいくと、超ゴッヴを圧倒したアグルが見えた。

「傷無・・・・・」

「愛音ーーーーーーー！」

「愛音さーーーーーーん！」

「愛音先輩！」
「ユリシア、ハユル、シルヴィア・・・・」
愛音に向かって飛んで来たのは、『クロス』を纏うグラマラスな金髪美少女の〝ユリシア・ファランドール〟、『ネロス』を纏う黒い長髪の美少女〝姫川ハユル〟、大型ギア『タロス』を纏う金髪のボブカットをしたこれまた美少女の〝シルヴィア・シルクカット〟と合流した。

ーアグルｓｉｄｅｌ
「キュワアアッ！」
起き上がったガンＱが背後からアグルに襲い掛かろうとするが。
「シュッ!!」
ズバンッ!!!
「ッッッ!!!???」
アグルは振り向き様に右手から発生された光の剣『アグルブレード』でガンＱを切り捨てた！ガンＱは悲鳴を上げる間もなく倒れ動かなくなった。

ー愛音ｓｉｄｅー

「(ホッ・・・おっと)あっさり片付いたわね、少しは手こずったりしなさいよ・・・！」

内心の安堵を隠すように不遜な態度を取る愛音だが、ユリシア達はお見通しと言わんばかりに微笑む。

「何言ってるのよ、傷無が今更あんな目玉怪獣やゴッヴの強化版に遅れを取る訳ないでしょう？」

「そうですね、傷無君はウルトラマンとして〝根源的破滅招来体〟や〝機械神〟達と戦って来たんですから」

「隊長、カッコいいデス！〝Ｕ.Ｆ.Ｃ〟のサイトは、大盛り上がりデス！」

『Ｕ.Ｆ.Ｃ』、『ウルトラマンファンクラブ』の通称であり、傷無が〝ガイア〟として戦っていた頃から結成しており、ウルトラマンガイアとウルトラマンアグルは異世界との戦争中の頃や戦争後も現れる怪獣達と戦い、その被害にあっている世界中の人々$|$取り分け子供達$¿$から絶大な人気を誇っている。

「そう言えば最近、Ｕ・Ｆ・Ｃが内部分裂を起こしていると聞きましたが・・・？」
「そうなんデス、今Ｕ・Ｆ・Ｃでは〝ガイア派〟と〝アグル派〟に分かれて内輪揉めになってるデス・・・！」
「ガイア派とアグル派って、変身してるのは同一人物なのに？」
「まぁソレ§§ウルトラマンの正体§§を知ってるのは、このアタラクシアで一部だけですからね・・・」
「それに傷無が〝ウルトラマンの力〟を有しているなんて、各国上層部が知れば、世界中の色々な組織が傷無を狙うわね」
唯でさえ異世界技術の宝庫であるアタラクシアの総指令であり傷無の姉である〝飛騨怜悧〟も各国上層部から〝悪魔〟と言われ〝命〟を狙われている現状、弟の傷無が二人のウルトラマンである事が知られれば〝命〟処かその力を利用しようと考える人間が必ず現れる。故に怜悧は〝最愛の弟〟を守る為に〝怪獣との戦闘〟以外でウルトラマンの力を使わないように、傷無に言っている。
《全員聞こえるか？》
愛音達の耳に総司令である怜悧からの通信が入った。

「総司令、どうしました？」

《気を抜くな、傷無はまだ変身を解いていないぞ・・・！》

愛音達が傷無$|$アグル$¿$を見ると、空中に浮かぶ魔法陣を見据えるアグルがいた。

ーアグルｓｉｄｅー

アグル$|$傷無$¿$は空に浮かんだ魔法陣から来る〝気配〟を察知していた。

「《・・・・・来る！》」

ブォンッ!! ズシィィィィィィンンッッ!!

魔法陣の中から〝白く禍々しい鎧の騎士〟が降り立った！

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「《お前は一体何者だ・・・!? 『根源的破滅招来体』か・・・？》」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「《答えてくれ・・・！》」

「・・・・・お前を・・・」

「《・・・？》」
「お前を殺す!!」
「《っ!?》」
白い騎士は右手に剣を取り出すとアグルに迫る！
ガキンっ！ギギギギギギッ!!
『アグルブレード』をだしたアグルとつばぜり合いになる。
「《何をするんだ!?》」
「言っただろう！俺はお前を殺す！」
「《何故俺を狙うんだ!? そもそもお前は一体！何者だっ!!》ジュッ！タァッ!!」
つばぜり合いを払い、白い騎士の腹部を蹴り距離を空ける！
「シュッ！」
「・・・・・・」
『アグルブレード』を構えるアグルと、手に持つ剣を構える白い騎士。
「俺の名は『ヴァイスナイト』、ウルトラマンガイアとウルトラマンアグルに選ばれし者よ！貴様を殺す者だっ!!」

「テヤッ！」
再び剣でぶつかり合う二人。

ｌ愛音ｓｉｄｅｌ
「『ヴァイスナイト』・・・？」
「直訳すると、『白騎士』ですね・・・」
「そのまんまじゃない・・・」
「あの皆さん！のんびりしている場合じゃないと思うんデスが・・・！」
暢気な先輩達にシルヴィアがツッコム。

ｌアグルｓｉｄｅｌ
ガキン！ブゥンっ！バチンッ！シュンッ！ビシッ！
ピコン ピコン ピコン ピコン ピコン
「クッ！・・・」
アグルとヴァイスナイトの刃がぶつかり合うが、『アグルブレード』はアグルの

エネルギーをかなり消費してまいカラータイマーが点滅を始める。
「《くっ・・・》」
徐々に動きのキレが悪くなるアグルにヴァイスナイトの剣が迫る！
「死ねえええええええええっ！」
「《ちっ・・・ガイアぁぁぁーーーーッ!!》」
アグルと一つになっていた傷無は、『エスプレンダー』を構えて叫ぶ！
すると、アグルの身体が青い光に包まれ、ヴァイスナイトの刃を弾くと、〝青い光〟が〝赤い光〟に変わり、人型になり光が収まるとそこから飛び出したのは！
赤い『大地の光』の巨人 ウルトラマンガイア!!
「シュワァッ！《まだまだぁ！》」
傷無はアグルとガイア。どちらかがエネルギー不足になった時や戦況に応じて二人のウルトラマンの姿を使い分けて戦うのだ！
「フン、二人のウルトラマンに選ばれた者が、見せつけてくれるっ!!」
忌々しそうにガイアを睨むヴァイスナイトは、頭上にある魔法陣に向けて剣を伸ばす！

「来い！　レイキュバス！　メルバ！　ファイヤーゴルザ！」

ヒュン！　ドガアアアッッ！！！

「キュワアアアアアアアっ!!」

「ピギャアアアアアアアアッ!!」

「ゴアアアアアアアアアッ!!」

「≪っ！　何っっ！！？？≫」

魔法陣から『宇宙海獣 レイキュバス』、『超古代竜 メルバ』、『超古代怪獣 ファイヤーゴルザ』が現れた！

「行けっ!!」

「「「ギャアアアアアアアッッ！！！」」」

三体の怪獣がガイアに向かう！

ー愛音ｓｉｄｅー

「傷無っ！」

「怪獣が三体だなんて!?」

「隊長を助けないとデス！」
「皆落ち着いて！ 私達のギアのエネルギーは尽きかけているのよ！」
ハイブリッド・ギアの唯一の弱点は〝ギアの魔力が尽きるとパイロットが死ぬ〟事である。傷無は唯一魔力を回復させる『接続改装』を行えるが、先日も他国からの攻撃を迎撃する為に愛音達も出撃したが、その為エネルギーもかなり消費してしまい、とても怪獣の相手が出来る状態ではなかった。
「でもユリシアさん！」
「あっ！」
「どうしたのシルヴィア？」
「ま、魔法陣から、何かが来るデス！」
「「っ!?」」
シルヴィアが指差す方を見ると、魔法陣の向こうから、〝二つの光〟が見えた！

ｌ怜悧ｓｉｄｅｌ

「・・・・・・・・・・」

アタラクシアの司令室で戦況を見ていた黒髪の長髪に制服越しでも分かる完璧なグラマラスをした美女、傷無の姉である飛騨怜悧は、司令室を出ようとする。

［怜悧、総司令が簡単に行っちゃダメ・・・！］

怜悧と同い年だが、小柄の金髪を肩口まで伸ばしたメガネを掛けた美少女（怜悧と同い年）の識名京（肉声で話すのは恥ずかしいからコンソールで会話する）が怜悧を止める。

「私の〝ゼクロス〟なら怪獣の三体位の相手はできる！」

現存するハイブリッド・ギアの中でも最強の戦闘力を誇る怜悧の〝ゼクロス〟ならば、〝根源的破滅招来体〟とも互角の戦闘力を持つ、普通の怪獣ならばまず相手にはならないが。

［落ち着いて、上空の魔法陣からエネルギー反応が出てる！］

「何っ!?」

ケイからの報告で怜悧はメインモニターを見る。

ーガイアｓｉｄｅー

「ウワアァッ！」

レイキュバスの防御力に攻撃を阻まれ、メルバの高速飛行に翻弄され、ファイヤーゴルザのパワーに押されるガイア。

「フン！ 所詮この程度か・・・こんなヤツに、こんなヤツに〝機械神〟が倒されたとはなぁ・・・！」

「《何、〝機械神〟っ!? お前は、〝機械神〟達を知っているのか!?》」

「あぁ、知っている。〝狂喜の機械神 ホクト〟、〝幻惑の機械神 オシリス〟、〝闘争の機械神 オーディン〟、そして機械神達の頭目、〝最悪の機械神 タナトス〟！ 俺は、奴らを倒した貴様を抹殺する!! 殺れッッ！！！」

ヴァイスナイトが命じると、レイキュバス達がガイアに迫る！

その時！ 魔法陣から〝光〟が降り立った!!

ｌ愛音ｓｉｄｅｌ

愛音達も見た！ その光を!!

「Oh My Got・・・！」
「あれって・・・！」
「うわあああ～～～！」
「ウルトラマン・・・!?」
ガイアともアグルとも違う、2体の〝光の巨人〟を！

ーガイアｓｉｄｅー
「《・・・君達は・・・？》」
ガイアの前に立つは、〝赤と青紫のラインが入ったウルトラマン〟と、〝角のあるウルトラマン〟。
「やはり来たか！〝ウルトラマンティガ〟！〝ウルトラマンダイナ〟！」
「《ティガ・・・ダイナ・・・？》」
ティガとダイナはガイアの両隣に立つと手を差し出す。
「《はじめまして、ウルトラマンガイア。僕は、ウルトラマンティガ、ルクス・アーカディア！》」

「《俺はウルトラマンダイナ。如月ハヤト！》」
「「《一緒に、戦おう！》」」
「《・・・・・・あぁっ！》」
ガイアはティガとダイナの手を握り立ち上がる！
愛音達が、司令室にいる怜悧達が、別区画にいるスカーレット達が、アタラクシアにいる人々が見た！　雄々しく並ぶ三体のウルトラマンを!!
「デュヤッ！」
「シュワッ！」
「セアッ！」
ヴァイスナイトは身体を僅かに震わせる。
「どこまでも、俺を苛立たせる奴らだっ!!　レイキュバス！　メルバ！　ファイヤーゴルザ！」
「キュワアアアアッ!!」
「ピヤァァァァァッ!!」
「グワァァァァッ!!」

「「シュワッ！」」

レイキュバスをダイナが、メルバをティガが、ファイヤーゴルザとヴァイスナイトをガイアが戦う！

「ジュワッ！」

ダイナはストロングタイプにチェンジし、レイキュバスの硬い外骨格に構わず攻撃する！

「ディヤッ！」

ティガは空に逃げたメルバを追ってスカイタイプにチェンジして空中戦を繰り広げる！

「シュワッ！テヤッ！」

ガイアは赤が全面に出たガイアV2モードになり、ファイヤーゴルザとヴァイスナイトの2体を同時に相手にする！

「ウオオオオオオオッ!!」

「フッ！」

斬ッ!!

「グワァァァァァッっ??!!」
ヴァイスナイトの剣をいなし、逆にファイヤーゴルザを切りつけさせた！
「何っ!?」
「デヤァァァァッ!!」
「ぐあああああああああっ!!」
両手から発射される三日月型光弾『クアンタムストリーム』でヴァイスナイトを吹き飛ばす！
「ジュワッ！」
「ヴェイッ！」
「デヤッ！」
ティガSとダイナSとガイアV2はそれぞれが相手していた怪獣を掴み、投げ飛ばすと三体の怪獣はぶつかり合い倒れる。
「「「フウゥゥゥゥゥゥゥ・・・!!」」」
倒れた怪獣達にマルチタイプとフラッシュタイプにチェンジしたティガとダイナ、三人のウルトラマンがエネルギーを貯める！

「「「シュワアアアアアアアアアッッ！！！」」」
「「「ギュワアアアアアアアアアッッ！！！」」」
ズガアアアアアアアアンンッッ！！！
ティガが『ゼペリオン光線』、ダイナが『ソルジェント光線』、ガイアが『フォトンエッジ』を放ち怪獣達を粉砕した！

ｌ愛音ｓｉｄｅｌ
「よしっ！」
「Ｇｏｏｄ！」
「やりましたっ！」
「隊長！二人のウルトラマンさん達もカッコいいデスっ!!」
愛音はガッツし、ユリシアは思わず英語になりウルトラマン達に向けてサムズアップし、ハユルとシルヴィアはお互いに抱き合って喜びを分かち合った。
《油断するな小娘共！まだヴァイスナイトが残っているぞ！》
「「「っ!!」」」

怜悧からの叱責で、愛音達はヴァイスナイトを睨む。

ーウルトラマンｓｉｄｅー

ヴァイスナイトは左手を天に翳すと、レイキュバスとメルバとファイヤーゴルザが爆散した場所から〝青の玉と緑の玉と赤の玉〟が現れ、倒されたガンＱが消滅し、そこから〝紫の玉〟が、アタラクシアから離れ、超コッヴが爆散した地点から〝黄色の玉〟が現れ、ヴァイスナイトの左手に吸収された。

それを確認したヴァイスナイトは剣を構え！

「ウオオオオオオオオオッッ！！！」

「シュッ！」

ヴァイスナイトは剣を振るいガイアV2に迫るが、ガイアV2は『アグルブレード』(V2モード時はアグルの技が使える)を再び展開してつばぜり合いに持ち込む！

「≪まだやるのか!? ヴァイスナイト!!≫」

「当たり前だっ！ 貴様を殺さなければ、俺は！ 俺はぁっ!!」

ヴァイスナイトは怨嗟の声を上げてガイアV2を押さえた！

「《っ！　何を!?》」
「お前を殺す！　殺してやる!!」
ヴァイスナイトはガイアV2を押さえたまま〝魔法陣〟へ飛んでいった！
「《まずい！》」
「《ガイア！》」
『傷無!!/傷無くん！/隊長！』
ティガとダイナ、愛音達が追おうとする！
「邪魔だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッッ！！！」
ヴァイスナイトの左手から放たれた光線が愛音達を襲う！
ズガアアアアアアアアアアンンンッ！！！
『きゃあああああああっ！！！』
「《ユリシア！　ハユル！　シルヴィア！　愛音!!》」
煙が晴れると、ミラクルタイプのダイナがシールドを展開し、パワータイプのティガがダイナMを背中から支え愛音達を守った。
「皆、無事？」

「えぇ・・・」
「何とか・・・」
「ウルトラマンさん達が守ってくれたデス！」
ティガＰとダイナＭは愛音達の無事を確認して頷く。
「ムカつくヤツ等だぁあああっ!!」
「ウワァァァァッ!!」
ガイアV2を連れてヴァイスナイトは魔法陣をくぐり、魔法陣が閉じようとしていた。
「ディヤッ！」
「シュワッ！」
空かさずティガＰとダイナＭが魔法陣をくぐる！　愛音達も追おうとしたが、タッチの差で魔法陣が消えた。
「傷無・・・」
「傷無くん・・・」
「隊長・・・」

「大丈夫よ・・・傷無はきっと、帰ってくる・・・！」

不安そうなユリシア達に、イヤ不安になる自分に言い聞かせるように、愛音は呟いた。

ーガイアｓｉｄｅー

魔法陣の中はまるで〝光のトンネル〟のように長く広がる世界に、ガイアV2とヴァイスナイトがいた！

「《こんのぉ！》シュワッ！」

「《ガイア！》」

「《無事か!?》」

ヴァイスナイトを引きはがしたガイアと合流するティガマルチタイプとダイナフラッシュタイプ。

「《ヴァイスナイト！　お前は何故〝機械神〟を知っているんだ?!》」

「教えてやる、俺の〝世界〟はな、機械神共に滅ぼされたんだ!!」

「《何っ!?》」

「だから俺は許さない！ 俺の〝復讐〟を横からかすめ取った貴様を！ 俺は許さないっ！！！」

ヴァイスナイトが左腕から極大の光線を放つ！

「「シュワァァァァァァァッ!!」」

ティガとダイナとガイアV2もそれぞれの必殺光線を放ち、ヴァイスナイトの光線とぶつかり、四つのエネルギーのぶつかりによって爆発が起きた！

「グアアアアアアアアアっ！！！」

「「ウワァァァァッ!!」」

ヴァイスナイトとウルトラマン達は爆発に呑まれ吹き飛んだ。

ｌ？？？　ｌ

その世界は〝地球ではない何処か〟。巨大な〝柱〟が見える美しい城にいる桃色

の長髪に露出の激しい格好をした少女が執務室から自身が収める国を眺めていた。

「フム。あの戦いから1年足らずで、良くぞここまで復興できたものじゃ・・・」

かつて少女には〝姉〟がいた。だが〝姉〟は突然行方不明になり、少女は幼くしてこの世界でも最大の国の〝皇帝〟として即位し、自分の世界を救う為に〝非道〟を行ってきた。逆らう人間は自分の持つ力で排除してきた。しかし、自分達の世界に〝破滅〟が起きそうになり、別世界へと進行を始め、その世界で〝最愛の姉〟と再会したが、姉は〝ある男〟に心を奪われその事に憎悪を燃やしたが、結局自分もその〝男〟に心奪われ〝義兄〟として慕い愛した。

「あれほど憎んだ相手を〝義兄さま〟と慕うようになるとは、おかしなモノじゃのう・・・」

少女の心にはまだ、もう会えない〝姉〟と〝義兄〟との宝石よりも美しく輝く時間が鮮明に浮かんだ。

「姉様・・・義兄様・・・！」

少女の瞳にうっすらと涙が浮かぶが、不意に後ろから人の気配がして涙を拭い振り向くと、紫色の長髪に20代後半の女性、現在休養中の〝親衛隊長〟がいた。

「なんじゃ、休養中の身でこんな所に来おって。〝あの子〟の方は良いのか？」
「大丈夫です、あの〝四人〟が面倒を見てくれていますからこちらに参ったしだいです・・・」
「全くアヤツらもすっかり子守り役が板に付いたのう。中々〝母親〟を出来ずに困っておらぬか？」
「まぁ、大丈夫です。それにもうすぐ〝アイツ〟も来ますからね。おちおち養生などしていられません・・・！」
〝親衛隊長〟の脳裏に自分と〝同じ男〟との間に〝子供〟を作った、金髪に褐色肌の〝少女〟の姿が浮かんだ。
「そう言えば聞いたか？アヤツの所も〝子守り役〟が張り切っていて、〝母親〟が中々出来ないらしいぞ」
「あの〝戦闘狂〟がすっかり子煩悩になったらしいですね・・・」
「確かにの、〝子供〟の無垢さに〝戦闘意欲〟が浄化されたのかのぅ？」
「かもしれません。ですが！私の子の方が愛らしいですがね・・・！」
「お主もすっかり子煩悩イヤ、立派な親バカじゃな・・・」

妙な対抗心を燃やす親衛隊長に呆れたツッコミをいれる少女。すると、部屋の扉が開き件の〝少女〟が慌てて入室してきた。
「失礼しますっ!!」
「おぉ、久しぶりじゃのう。どうしたのじゃそんなに慌てて・・・」
「大変です！　都市上空に〝時空振動〟が発生しました!!」
「「何っ!?」」
二人と入室してきた女性が外を眺めると、上空の景色が歪み砕け、そこから〝白い光〟と〝紫と黄色と赤の光〟が落下した！
「ヌオオオオオオオオオッッ！！！！」
「何じゃっ!?　あの〝白い騎士〟は!?」
「待ってください！　他にも何か・・・・・・!?」
「あ、あれは・・・!?」
〝白い騎士$|$ヴァイスナイト$¿$〟と対峙するように向き合うは、ウルトラマンティガとウルトラマンダイナ、そしてーーーーーー。
「ウルトラマン、ガイア・・・！」

「この世界、〝バトランティス〟の救世主・・・！」

親衛隊長ゼルシオーネと褐色肌の少女グラベルの頬に涙が流れるが、その顔は〝戸惑い〟と〝喜び〟が混じった顔になり。少女もまた〝歓喜〟に震え、止めなく溢れる涙を流しながら呟く。

「義兄様・・・・・・義兄様ーーーーーーーーーーーッ!!!!」

「シュゥワッ!!」

その少女グレイスは、もう二度と会えないとすら思っていた義兄との再会に歓喜するが、ウルトラマンガイア傷無は、ティガルクスとダイナハヤトと共に、目の前の敵ヴァイスナイトに向かって構えを取った！

---

ｃｈａｐｔｅｒⅡ『集いし三大ウルトラマン』

ー『ヴァイスナイト』の姿ー

ハンターナイトツルギを白と黒カラーリングにして、更に禍々しく刺々しいデザインにした姿。

ウルトラマンオーブダーク愛染マコトが不愉快過ぎです！　紅ガイのパクりと自分の活躍のマッチポンプ、ウルトラマン気取りのクレーマーですねアヤツは、本物のオーブであるガイさんに殴られるべきです!!

# ティガ・ダイナ・ガイア 大激戦 ウルトラの友情！ ｃｈａｐｔｅｒⅢ

遂にハンドレッドも完結しました！
この作品ではハヤトの未来は少し違う設定にするつもりです。

---

『異世界帝国 バトランティス』。傷無達の使うＨ・Ｈ・Ｇ～～ハート・ハイブリッド・ギア～～があり、男性は〝衰退〟し、〝女性しか〟存在しない世界。傷無の恋人である千鳥ヶ淵愛音の故郷であり、かつて傷無達と異世界戦争を繰り広げていたが和解し、機械神を相手に共に戦った。

そしてここに、〝バトランティスの救世主〟である光の巨人、〝ウルトラマンガイア〟が再びバトランティスの大地に現れた！

ーヴァイスナイトVS三大ウルトラマンー

「ウオアァッ！」

「ディヤッ！」

「シュワッ！」

「ジャッ！」

白い騎士ヴァイスナイトとガイア・ティガ・ダイナがお互いを見据えて構えた。

「うおおおおおおおおおおッ！！！」

ヴァイスナイトが左手から破壊光線を放つ！

「ハァッ！」

「シュアッ！」

ティガとダイナがバリアを張り光線を防ぐ。

「シュゥワッ!!」

二人の上に飛び越えたガイアがヴァイスナイトに飛び蹴り、肘鉄、正拳、回し蹴りをしてヴァイスナイトの両手を掴む！

「ぐうぅっ！！！」

「《ヴァイスナイト！ お前が機械神に恨みを持っていることは分かった！ だが何故俺だけではなく、ティガやダイナの世界にまで進行したんだ!!》」
「俺は許さない！ 〝光〟に選ばれたお前達を!! そして何よりも、何故お前は守れた!?」
「《何っ!?》」
「俺は守れなかったのに！ 何でお前は守れたんだ!? 俺とお前は！ 〝同じ筈〟なのにっ!!」
「《何を・・・っっ!!??》」
ガイアに変身した傷無の頭に〝ビジョン〟が入り込んだ。
「(これは・・・？ ガイア、アグル・・・君達が見せているのか？ まさかこれが、〝ヴァイスナイトの記憶〟だと言うのか・・・??)」
「うおおおおおっ!!」
「ウワァッ!?」
ヴァイスナイトがガイアを押し飛ばし、ガイアに横凪ぎに斬り付けようとするが。
「ウッ、フッ！」

ガイアは後方宙返りでかわすと。
「シュワァァァァァァァっ!!」
「シャァァァァァァァっ!!」
ガイアの後方にいたティガとダイナが『ゼペリオン光線』と『ソルジェント光線』をヴァイスナイトに向けて放つ！
「グゥアアアアアアアアアッッ！！！」
ティガとダイナの必殺光線を食らってヴァイスナイトは吹き飛んでしまい、仰向けに倒れる。
「「「(コクン)」」」
ティガとダイナとガイアはお互いに頷き合う。
「くぅっ・・・！ ハァ、ハァ、ハァ、ハァ・・・！」
ヴァイスナイトはヨロヨロと立ち上がる。
「「「っ！」」」
ガイア達はヴァイスナイトに向けて構えるが。
「許さない・・・！ 赦さない・・・！ 憎い・・・！ 憎らしい・・・!! このまま

で、済むと・・・思うなよ・・・!! フンッ!!!」

ヴァイスナイトは身体が〝白い光〟に包まれると消えてしまった。

「「・・・・・・・・・・・・ぐうっっ!!」」

ピコン、ピコン、ピコン、ピコン、ピコン、ピコン、ピコン、ピコン、ピコン・・・!

ティガとダイナとガイアのカラータイマーが鳴り響き、片膝を付く。

「うぁっ・・・!」

「ぐぅっ・・・・!」

「あぁっ・・・・!」

三人のウルトラマンはそのまま変身解除し、『神装機竜 バハムート』を纏ったルクス・アーカディアと、『百武装$S$ハンドレット$S$ 飛燕・閃光』を纏った如月ハヤト、『ＨＨＧ$S$ハート・ハイブリット・ギア$S$ エロス』を纏う飛騨傷無が異界の空に現れた。

「「・・・・・・・・・・・・」」

黒い鎧を纏う三人は、お互いに相手を見て沈黙するが、傷無が切り出す。

「助けてくれてありがとう。君達も、〝ウルトラマンに選ばれし者〟なんだな・・・

？」

「うん、僕はルクス・アーカディア」

「俺は、如月ハヤトだ」

「飛騨傷無。俺達はどうやら異世界に飛ばされたようだな・・・」

「待って、あそこに大きな都市があるよ。それに城みたいな建物がある」

「それにスッゲェ大きな塔があるぜ」

「っ!!」

辺りを見渡したルクスとハヤトが指差す方を見ると、傷無の目に見たことがある都市と城、そして巨大な塔が目に入り、愕然となった。

「傷無・・・？」

「どうしたんだ？」

「『創世の御柱ジェネシス』・・・！それにあの都市は、『バトランティス』・・・!? まさか、この世界はっ!?」

すると、城から桃色の光がこっちに向かってきた。

「・・・・・・ぃさまーーーーーーー!!」

「っ！ あれは・・・！」
「兄さまーーーーーーー!!」
「〝グレイス〟っっ!!」
傷無に突っ込んだ少女を受け止めた傷無は少女の勢いで空中回転しながらも、その少女、傷無の恋人〝千鳥ヶ淵愛音の妹〟であり、異世界帝国〝バトランティス〟の皇帝、グレイスであった！
「兄さまっ！ 兄さまっ!! 本当に兄さまなのじゃな!?」
「あぁ！ 俺だ、俺だよグレイス・・・！」
「うわぁぁぁぁぁぁん、兄さま!! もう会えぬと思っていたぞーーーーーーー!!」
傷無の胸元に顔を埋めて泣きじゃくるグレイスの頭を傷無は愛しそうに優しく撫でていた。
「「(ポカーーーーーーーン)」」
しかしルクスとハヤトはポカンとしながら傷無とグレイスを見ていた。突然やって来た露出の激しい美少女が現れて、先程まで共に戦った少年と仲睦まじく抱擁し

ていれば当然と言える。話掛けようとすると、グレイスの横に空中ディスプレイが現れ、〝紫色の髪をした美女〟が現れた。

《グレイス様！突然飛び出さないで下さい！》

「ゼルっ！」

《傷無・・・って、〝ゼル〟などと気安く呼ぶなっ！》

「わ、悪い〝ゼルシオーネ〟・・・」

傷無を見て一瞬頬を緩ませた〝ゼルシオーネ〟と呼ばれた美女は直ぐに睨んで言い直させ、ゼルシオーネは咳払いをする。

《んっんん・・・・・グレイス様、とりあえず傷無と、そこの光の巨人になった二人も連れて王宮に来て下さい》

「おぉ、そうじゃな！ゼルよ、直ぐに兄さまの歓迎の宴の準備をするのじゃ！」

「待ってくれグレイス」

「どうしたのじゃ兄さま？」

「さっきの白い騎士、ヴァイスナイトの事で色々と説明しなければならないし、あの二人にもこの世界の事を話さないとな」

「フム、兄さま以外の男は初めて見るのぉ・・・」
グレイスは灰色の髪の中性的な美少年 ルクスと精悍な顔立ちの黒髪の少年 ハヤトをようやく目に入れた。
「ん？ グレイスはアタラクシアでは男子生徒と接点は無かったのか？」
「ウム、妾は兄さま一筋じゃからの！ あ、勿論姉さまも愛しておるぞ。男では兄さまが一番で、女では姉さまが一番じゃ！」
「アハハハハ、ありがとう・・・それじゃ俺は二人にこの世界の事を話しておくな」
傷無はルクスとハヤトに近づいて説明をする。

ー数分後・バトランティス帝国上空ー
きゃーーーーーーーーっ!! きゃーーーーーーーーっ!!
「傷無さまーーーーーーーっ!!」
「バトランティスの救世主さまーーーーーーーっ!!」
「ガイアさまーーーーーーーっ!!」
「アグルさまーーーーーーーっ!!」

バトランティス上空を飛ぶ桃色と３つの黒い機影に向かってバトランティス帝国国民は大歓声を上げた。主に傷無と傷無と共にいるウルトラマンガイアとウルトラマンアグルに対して。
「凄いなぁ傷無は。まさに英雄扱いだ・・・」
「それにしても、この世界って本当に女性だけなんだな。どうやって子孫を残しているんだ？」
「あぁ、かつては男性も居たようだが、あの『創世の御柱$|$ゲネシス$¿$』が女性だけでも子供を作る事を可能にしてな、だが生まれてくるのは女の子だけ・・・」
「そうか、それで男性は〝衰退〟したんだね・・・」
「同じ男としては、何とも世知辛いなぁ・・・」
「それに、〝身分の高い人は露出の激しい服を着る〟のがこの世界のしきたりって傷無から聴いてはいたけど・・・//////」
「ちょっと困るよな・・・//////」
先程から露出の激しいグレイスの格好にルクスとハヤトは悲しきかな男のサガでついついチラ見してしまう。

「ム、お主ら、兄さまの仲間と思うから見逃してやるが、本当はバトランティス皇帝の妾の柔肌をそう容易く見るものでは無いぞ・・・！」（ギロリッ）
「「し、失礼しました！ グレイス皇帝陛下!!」」（ビシッ）
「まあまあグレイス、そろそろ王宮に付くぞ」
睨まれたルクスとハヤトは思わず敬礼し、傷無がグレイスを宥め、四人は王宮の中庭に着地するとそれぞれの鎧を解除すると、先に来ていた多くの女性達が敬礼した。そこに傷無と敵対し、後に戦友として共に戦った仲間達の姿があった。
「グラベルっ！ アルディアっ！」
「傷無・・・っ！」
「はぁ～い傷無♪」
〝イズガルドの英雄〟・〝褐色の獣〟と呼ばれ、金色の短髪に褐色の肌をしたスポーティーなグラマラス美少女 グラベル、かつて傷無達がバトランティスと敵対していた時『フォトンエロス』となった傷無と激戦を繰り広げた強者だが、その凛々しい目元に涙を溜めて傷無を見つめていた。もう一人は、傷無達が初めて出会ったバトランティス側のＨＨＧ装着者、緑色の長髪に芸術的なプロポーションをし、〝戦

闘狂〟としても名高い戦士アルディアが明るく手を上げた。

「飛騨君・・・！」

「久しぶり・・・」

金髪碧眼の西洋人形のように高貴で美しい妖精のような美少女、バトランティス親衛隊 一番隊隊長で剣を持てば『剣聖』とまで言われる実力者のハーキュラスと、二番隊 隊長でスポーツ選手のように鍛えられ、スリムでしなやか茶色のロングの美少女、メルクリア。ハーキュラスは嬉しそうに頬に笑みを浮かべ、メルクリアは少し素っ気ないが口元は少し笑っていた。

「久しいな傷無！」

「また会えて嬉しいですわ・・・！」

「・・・久しぶり〃」

「よぉ、傷無！」

「クレイダ！ エルマ！ ルノーラ！ ラムザ！」

親衛隊隊長ゼルシオーネの懐刀である〝懲罰四剣〟クアルトウム、金髪に眼帯のクレイダと、おっとり白髪のお嬢様風のエルマ。かつてバトランティスから

脱出し、一時的にガイアの力を失った傷無と戦い(二人と戦った後でアグルになった)、某フルなメタルでパニックの軍曹曰く、【獲物を前に舌舐めずり、三流のやる事だな】で傷無にぼろ負けした二人「「(何か悪意を感じる!!)」」と、傷だらけの長身に長い髪、死神と異名を持つが内気で恥ずかしがり屋の少女 ルノーラと、好戦的でさばさばした性格の炎を自在に操る赤い髪の少女、ラムザが手を振っていたがゼルシオーネに睨まれ手を引っ込める。

「全く、相も変わらずの気の抜けた顔を晒して・・・!」

「手厳しいな、ゼルシオーネ・・・」

「手厳しくもなる! 一体何が起きたのだ!?」

「そうじゃ兄さま。説明してたも・・・」

「あぁ、でもその前にこの二人の事情も聴いておかないとな」

傷無が、ルクスとハヤトを前に出す。二人はそれぞれ、『スパークレンス』と『リーフラッシャー』を取り出して自己紹介を始めた。

「はじめまして、僕はウルトラマンティガ、ルクス・アーカディアです」

「俺は如月ハヤト、ウルトラマンダイナだ」

「先ずは、二人の〝世界〟で起こった事を話してもらおう・・・」

〜バトランティス王宮会議室〜

一時間後、ルクスとハヤトの〝世界の情勢〟と〝ヴァイスナイトの襲撃〟を聞き終えた一同。ちなみにルクスとハヤトはパイロットスーツだったが、グレイスが特注で作らせた、傷無と同じアタラクシアの男子制服を着用している。

「フム・・・〝神装機竜〟と〝超古代の魔獣 幻神獣$|$アビス$;$〟に、〝百武装$|$ハンドレット$;$〟に〝侵略者$|$サベージ$;$〟か・・・」

「何処の世界も、我々の世界と似たようなモノだな」

「異世界と戦争をしていない分は俺達の世界より幾分かマシだけどな・・・」

「そして平行世界に存在する、兄さまと同じ〝光の巨人 ウルトラマン〟じゃな」

「ウルトラマンティガは、僕達の世界の超古代の存在だと思います・・・」

「ダイナは突然宇宙から飛来した存在だと思う・・・」

「傷無と共にいる、地球$|$レムリア$;$の大地と大海から生まれたウルトラマン、ガイアとアグルか・・・」

「そしてウルトラマンに〝選ばれた者〟を狙う、機械神に自分の世界を滅ぼされ、その復讐を私達に奪われたヴァイスナイト・・・」
「はた迷惑な逆怨みよね・・・」
「グレイス皇帝陛下、おそらくヤツは近い内に再び現れると思います」
「では、それに備えねばな・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
皆が話し合いを続けている一方、傷無は浮かない顔色であった。
「傷無？」
「っ、なんだハヤト？」
「ボーとするなよ、とりあえずグレイス皇帝陛下が防備を固める事にしたから、俺達は部屋で休んで構わないってさ」
周りを見るとグレイス達は防備を固める為に忙しなく動いており、暇なのは傷無達だけだった。
「わかった」
傷無はルクスとハヤトと共に、侍女の女性に部屋まで案内してもらった。

ー傷無・ルクス・ハヤトの部屋ー

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

傷無はバルコニーで外を眺めていると、ルクスとハヤトが話しかける。

「傷無・・・」

「ルクス・・・」

「何か悩んでいるの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「俺達は同じウルトラマンに選ばれた者だ。少しは相談に乗るぜ」

「・・・・・・・・・ヤツと戦っているときにヤツの、ヴァイスナイトの記憶が流れてきたんだ」

「ヴァイスナイトの・・・？」

「ヤツか何故あそこまで俺を憎んでいたのか、それはヤツの復讐相手、機械神を倒しただけじゃなかったんだ」

「「・・・・・・・・・・」」

傷無は淡々と語った。ヴァイスナイトの過去を。

ヴァイスナイトは自分たちと同じ〝平行世界の地球〟の人間だったこと。

幼い頃に親に捨てられ、姉と二人で暮らしていた事。

ヴァイスナイトの世界は、〝女性しか扱えない世界最強の兵器〟が有り、〝女尊男卑〟の世界であり、その兵器を扱える〝世界で唯一の男〟となった事。

兵器を操るパイロットとなる為にその兵器専門校に入学させられ、そこで多くの仲間達を得た事。

そして実の姉はその兵器関連で重役に付いていた事。何から何まで傷無と同じ〝人生〟を歩んで来た二人は機械神と遭遇した。

傷無は幸運にも〝仲間達〟や協力する事になった〝母親〟と、〝二人のウルトラマン〟と共に全てを〝取り戻し〟そして〝守れた〟。しかしヴァイスナイトは全てを〝奪われ〟そして〝守れなかった〟。

話を聞いてルクスとハヤトも悲痛な顔を浮かべる。

「ヤツと俺は瓜二つだ。だからかな、もしも俺が守れなかった時、アイツのような

復讐鬼になっていたかもしれない・・・」

「傷無。僕もその気持ち、分かるよ・・・」

「俺も、〝守れなかった悔しさ〟なら少しは分かるな・・・」

ルクスは話した、自分はかつて世界の大半を支配した〝アーカディア旧帝国〟の末席の皇子だったが、実の父親である皇帝から冷遇され、気にも止められなかった皇子であり、国を変えようとしたが失敗し、多くの人間達を死なせた事。

元皇族だったが故に国民達から冷ややかな目で見られ、迫害を受けた事とそのせいで母親を失い、全てに憎しみを抱いたが幼なじみの少女のお陰で立ち直り、〝アティスマータ新王国〟から〝国民への奉仕〟雑用〟をするように義務付けられた。

そして機竜使い〟ドラグナイト〟の仲間達に囲まれ、初めて〝誰かに必要とされる〟、〝誰かに認められる〟嬉しさを知った。

ハヤトも話した、侵略者〟サベージ〟が初めて地球に襲来した日、家族で旅行をしていたハヤト達は侵略者〟サベージ〟の攻撃で両親を失い、それからは幼い妹と共に孤児院で過ごしながら、剣の修行を行っていた事。

「僕やハヤト、それに傷無だって多かれ少なかれ、大切な人を失った・・・」
「ヴァイスナイトの気持ちも解らなくもない。だけど、イヤだからって、憎しみの捌け口として俺達の世界を破壊して良い理由にはならないだろう・・・！」
「それは分かっている・・・でも・・・！」
ルクスやハヤトの言いたい事は頭では分かるが、それでも心、感情が納得できないでいた。
バタンッ!!
「「ッッ！！！？？？」」
「情けないぞ、兄さまッッ!!」
「グ、グレイス!?」
部屋の扉を蹴破りズンズンと近づくグレイスは傷無の手を握り引っ張って部屋を出る。
「お主らも来い!!」
「「は、はい!!」」
「お、おいグレイス！　一体何処へ・・・？」

「いつヴァイスナイトが現れるか分からん状況だから言わなかったが、今の兄さまはヤツと戦う気概が無くなりそうになっておる!!」

「・・・・・・・・・・」

無言になる傷無を無視してグレイスは空中ディスプレイを出してゼルシオーネとグラベルを映す。

《グレイスさま？》

《どうしました？》

「ゼル！　グラベル！　〝あの子達〟を兄さまに会わせるぞ!!」

《えっ！!??》

《何故にですか!?》

「何故も何もない！　これから兄さまを連れていくからな!!」

《ち、ちょっと》

《グレイス様・・・！》

ディスプレイを消したグレイスは傷無の方を振り向き。

「兄さま！」

「な、何だ？」
「兄さまがヤツ~~らら~~ヴァイスナイト~~らら~~に同情する気持ちは分かる！ しかしヤツの蛮行を見過ごして言いわけが無かろう！」
「・・・・・・・・・・」
「全く！ かつては〝レムリアの魔王〟、〝光の魔人〟とまで言われた兄さまがこの体たらくとは!?」
「イヤそれはお前らバトランティス側が勝手に言ってただけで・・・！」
傷無の言葉を無視してグレイスは傷無を引っ張って〝ある部屋〟への扉を開くとそこには。
２つのベビーベッドに眠っている二人の〝赤ん坊〟が侍女らしき女性にオシメを換えて貰っていた。
「この子達は・・・？」
傷無とルクスとハヤトは赤ん坊を見ると、１人は紫色の髪に色白い肌をし、もう１人は褐色の肌に金色の髪をしていた。
「何か、見たことある髪の毛だね」

「あれ？ 傷無、この世界$|$バトランティス$¿$って〝女の子しかいない世界〟なんだよな？」
　赤ん坊の下半身を見たハヤトが傷無に聞く。
「あぁ、そうだけど」
「この子達二人とも、〝男の子〟だぞ！」
「「何ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっっ！！？」」
「(ヒソヒソ)こら！ 兄さまにルクス・アーカディア！ 赤ちゃん達が起きてしまうぞ！」
「嫌だってグレイス。バトランティスでは〝創世の御柱$|$ゲネシス$¿$〟が子供を生み出すけど女の子しか生まれない〟って・・・！ しかもこの子達の母親は一体・・・!?」
「それはのぅ兄さま・・・」
「グレイス様っ！」
「あぁ、傷無まで！」
　部屋にゼルシオーネとグラベルが慌てて入ってきて、ルクスとハヤトと傷無はギ

ギギと首を動かす。
「・・・まさか」
「イヤまさかね・・・」
「ゼル・・・グラベル・・・ま、まさか・・・」
「その・・・傷無・・・あの時の〝究極改装〟の時の」
「クッ・・・不覚だった・・・！」
傷無の脳裏に、機械神達との戦いが終わり、〝衝突面$|$エントランス$;$〟が閉じる事でバトランティスとの繋がりが消えてグレイス達と離れる僅か数日の間に、グラベルとゼルシオーネとの〝究極改装〟を思い出す。
「もしかして、あの時の・・・？」
「が、頑張った・・・！////」
「・・・当たってしまうとはな////」
グラベルは顔を赤くしながらも誇らしくし、ゼルシオーネは憎まれ口を叩きながらも口元が緩みそうになるのを必死に耐えていた。
「マジ・・・かよ・・・」

「傷無・・・・・・」
「お前・・・凄いな・・・」
傷無は愕然となり、ルクスとハヤトは傷無にある種の尊敬の目線で見ていた。
「全く！グラベルは未だしもゼルが妾を差し置いて兄さまと子供を生んでいたとはな！」
グラベルは傷無に惚れているのを知っていたが、片腕であるゼルシオーネまで抜け駆けしていた事にグレイスは憤慨する。
「・・・・・・・・・・」
「二人が妊娠していると知った時なんてもう大変じゃったのじゃぞ。出産なんてもはや文献レベルでしかなくてあらゆる古代の記録をひっくり返しながら調べたのじゃ・・・」
「そうだっのか・・・」
「グレイス様や懲罰四剣が出産に立ち合ってくれてな、懲罰四剣の奴らなど目を回したり泡を噴いたり白目を剥いて気を失っていた・・・」
「私の時はアルディアだったが、アルディアのヤツ目を開けたまま気絶していたな」

グラベルとゼルシオーネはそれぞれの子供達を抱き上げる。
「出産の時は身を引き裂かれるような激痛と苦痛に苛まれたが、こうして生んだ我が子がこんなにも愛おしいものなのだな・・・」
「そうだな、お腹を痛めて生んだ子供とはこんなに、心から大切だと思える・・・」
自分の子供達を抱き抱えるグラベルとゼルシオーネのその顔は我が子を慈しむ〝母親の顔〟だった。
「そうか・・・俺の・・・子供か・・・！」
傷無も感激したように二人が抱える我が子の顔を覗き込む。
「傷無・・・」
「抱いてやれ・・・」
「良いのか？」
「良いも悪いも無いじゃろう兄さま」
「その子供達は傷無の子供なんだからね」
「抱いてやるのは当然だろう」
ゼルシオーネやグラベルから赤ん坊を両腕で抱き抱えた傷無は子供達を見つめ

る。

「ア、アウ・・・ア・・・！」

「キャッキャッ・・・！」

子供達は傷無を見て嬉しそうに微笑んでいた。

「ありがとう・・・ゼル・・・グラベル・・・本当に、ありがとう・・・！」

傷無は涙を流しながら子供達を愛おしそうに抱えた。

---

ゼルシオーネとグラベルは傷無の子供（それも男の子）を生んだ設定にしています。

そして次回はヴァイスナイトとの決戦にしたいです。

# ティガ・ダイナ・ガイア 大激戦 ウルトラの友情！ ｃｈａｐｔｅｒⅣ

いよいよ決戦！

---

ーバトランティス帝国・郊外ー

「「・・・・・・・・・・・・・・・」」

バトランティス世界に跳ばされた翌日、バトランティス帝国の郊外の荒野を歩く三人。

灰色の髪と瞳をした中性的な美少年、ルクス・アーカディア。

黒髪の短髪に精悍な顔つきの青少年、如月ハヤト。

同じく黒髪の短髪に整った顔立ちの青少年、飛騨傷無。

〝光の戦士〟に選ばれた三人は、これから戦う〝敵〟からのテレパシーから決戦の場へと向かった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

三人の向かう先に一陣の風が吹くと、黒い服を着た一人の男がいた。

ハヤトや傷無と同じ黒い髪の短髪に、整った顔立ちをしているが、その瞳は暗く淀み、まるで悪鬼羅刹の様であった。男は自分に向かってくる三人を睨む。

「来たか・・・！」

三人は男の前で立ち止まり、向き合う。

「君が、ヴァイスナイトなのか？」

「そうだ・・・・！」

「どうしても、俺達と戦うのか？」

「当たり前だ！　機械神達を！　俺の復讐を横からかすめ取った飛騨傷無！　お前をイヤ、お前だけじゃない！　飛騨傷無と共に機械神と戦ったアタラクシアの奴等も！　あそこにいる！　バトランティスの奴等を！　そしてお前と同じように、〝ウルトラマンに選ばれた者〟である、ルクス・アーカディア！　如月ハヤト！　お前達とお前達に連なる奴等を！　皆殺しにしてやる!!」

「っ！」

「君が憎しみを抱くのは分かるよ！でも、それで全てを憎んで、怨んで、破壊するなんて、そんな生き方は悲しすぎるよ!!」

「お前が〝守りたかった人達〟は、お前がそんな姿になってまで〝仇〟を討って欲しいと思っているのか!?」

「だまれぇぇぇぇっ!!」

「もうやめるんだっ！ヴァイスナイト！いや、〝織斑一夏〟っ!!」

「っっ！！？？」

傷無の放った一言にヴァイスナイトは驚愕の様相を浮かべた。その名はかつて名乗った己の真の名前。

『女性だけが扱える世界最強の兵器〝IS～～インフィニット・ストラトス～～〟』を扱える『世界唯一の男』の名前。

「お前と俺は似ている。〝親に捨てられた事〟、〝女性しか扱えない世界最強の兵器を操れる男〟、〝姉がその兵器関連での重役〟、〝多くの仲間に囲まれた事〟。俺達は瓜二つだ・・・だから！このままお前に復讐を続けさせる訳にはいかないんだ、〝織斑一夏〟!!」

「で呼ぶな・・・その名で呼ぶなぁあああああああああああああっ!!」

あくまでも説得しようとする傷無達を憤怒の形相で怒鳴るヴァイスナイト。

「その名で俺を呼ぶな！その名は！自分の〝大切な人達〟を！〝守るって誓った仲間達〟を守れなかった、〝口先だけのクズ〟の名前だっ！！！」

ヴァイスナイトが右腕を天高く上げると、腕に巻かれたガントレットが光輝き、純白のパワードスーツをその身に纏った！

純白のカラーに、腕や足に重厚なパーツを装備し、肩の方には翼のようなパーツが浮遊し、上空へ飛ぶと白いエネルギーの刃の剣を取りだし構えて剣を頭上に掲げた！

「俺は破壊する！破壊してやる！全てを破壊してやるっ！！！」

「「っっ!!」」

すると、空に大量の魔方陣が現れ！その魔方陣から機械の人形が出現した！

「なんなんだ、あの人形は?!」

「あの人形からは、〝人間の気配〟を感じないよ！」

「ロボットって事か!?」

驚く傷無達を余所に、上空を覆い尽くさんばかりに魔方陣から次々と出現した機械人形は、バトランティス帝国に向かって進撃した。

「行けっ！『ゴーレム』っ!!」

『ゴーレム』と呼ばれた機械人形の大軍はそのままバトランティス帝国の帝都を攻撃しようとしたが。

ビュンっ！

ドカァァァァァァンっ!!

「なにっ!?」

「グレイスかっ!?」

《そうじゃ兄さま！この機械人形共は妾達に任せて、兄さま達はその復讐鬼を頼む！》

通信で魔導装甲『コロス』を纏ったグレイスは大鎌を振り抜いてゴーレム数体を刈っ切っる！

《任せて下さい飛翔君！》

《行くぞハーキュラス！》

同じく魔導装甲を纏ったハーキュラスが剣でゴーレムを切り捨てる！　その剣技は『剣聖』と呼ばれるにふさわしい程美しく、鋭かった！　メルクリアも魔導装甲を纏い、武器である愛用の弓、魔弓弾導$|$アークドライブ$¿$でハーキュラスのサポートをこなしていた。

《行くよっ・・・・！》

《久しぶりにやってやるぜ！》

《ゼル様の御子様の子守りに比べたら、こんな機械人形なんか大したことありませんわ！》

《あやしや夜泣き、オムツの取り替え、ミルクあげにお散歩、ゼル様の赤ちゃんのお世話の方がよっぽど過酷だ！》

また、別の場所では懲罰四剣$|$クアルトウム$¿$のルノーラとラムザとエルマとクレイダが、ちょいとズレた事を叫びながら、それぞれの武器であるショートソード、巨大トマホーク、巨大ハンマー、三日月剣を振るいゴーレムを蹴散らす！

《あはははははははははははははははもう最高！　グラベルの赤ちゃんの子守りも良いけど！　やっぱり殺し合いの世界も最高よ!!》

アルディアはバトランティスと同盟である『イズガルド』の魔導装甲パイロット部隊を引き連れて、武器の槍を振り回しながら久しぶりの戦場により、グラベルの赤ちゃんの子守りでなりを潜ませていた〝戦闘狂のサガ〟を全開にして暴れていた！

《傷無！ ルクス・アーカディア！ 如月ハヤト！ こちらは任せて、お前達は戦え!!》

《傷無!! 〝この子達〟も見ている！ 私とゼルシオーネは共に戦場に立てんが、お前達の勝利を信じているぞ！》

『究極改装$$エクスタシー・ハイブリッド$$』で子供を生むと、体内に入れてある魔導装甲のコアが排出される為、ゼルシオーネとグラベルは魔導装甲を纏う事が出来なくなってしまい、さらに出産からまだ数週間しか経っておらず体力が落ちている故に、二人は作戦本部である皇宮から各部隊に指揮をとっていた。

「わかりました！」

「任せろ！」

「・・・・・・・・ゼル、グラベル、俺達の子供達を頼む！」

《無論だ・・・・！》

《この子達に見せてやってくれ、お前達の父上は〝立派でカッコいい人なんだ〟と言う事を・・・・！》

「あぁ！勿論だ！『フォトン・エロス』!!」

「『バハムート・マルチ』!!」

「『飛燕・閃光』!!」

傷無達はヴァイスナイト〝白い装甲〟と対となる〝黒い装甲〟を纏い、空を飛ぶ！

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「「・・・・・・・・・・・・・・・」」

〝白い装甲の騎士〟と対峙する〝黒き装甲の三人〟。

「うおあああああああああああっっ！！！」

「うわっ！」

「ぐぅっ！」

「くっ！」

縦横無尽に加速しながらでの戦闘を繰り広げる四人！しかし、ヴァイスナイト

の憎悪に満ちた攻撃に三人は徐々に押される！

「くぅらえええええええええええええええええええええええええっっっ！！！！」

左手のパーツが展開され、荷電粒子砲が発射された！

「「うわあああああああああああああああああああああああっっ!!」」

三人はシールドを展開して防ごうとするが、粒子砲のパワーに押され、地面に叩きつけられる！

「どうだ！これが俺の〝力〟だ！全てを奪われ、〝誇りも信念〟もかなぐり捨てて、〝悪魔〟と契約して得た俺の〝力〟だッッ！」

ヴァイスナイトの脳裏に、自身に〝ゴーレムを生み出す力〟と〝圧倒的な強さ〟をくれた『ある存在』の姿をよぎらせ、地面に片膝を付いたルクスとハヤトと傷無を見下ろし・・・。

「これでぇぇぇぇっ!!終わりだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！！！」

ヴァイスナイトは剣のエネルギーを全開にして、巨大なエネルギーの刃を生み出

し、三人に向けて振り下ろす！

「傷無！　ハヤト！」

「「応っ！」」

三人は再びシールドを展開させて、エネルギーの刃を防いだ！

「何っ⁉」

「「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっっっ！！！！」」」

三人は力を込めて、エネルギーの刃を押し返した！

「「「まだまだぁっ‼」」」

三人は再び天空に飛び出す！

「ハヤト！」

「応よ！　ルクス！」

先ずはルクスとハヤトは高速移動で〝織斑一夏〟に近づき、すれ違い様に一閃する！

「ぐおっ！」

「「傷無！」」

「あぁっ！」
空かさず傷無が拳を〝織斑一夏〟に連続で叩き込み、アッパーカットで上空に殴り飛ばす！
「うあぁっ!!」
「ルクス！ ハヤト！」
吹き飛ばされたヴァイスナイトの先に先回りしていたルクスとハヤトが持っていた剣を交差させながら〝織斑一夏〟を切りつける！
「ぐうううぅぅぅっ！！！」
「最後は！」
「三人で！」
「決めるぜっ!!」
「「行っけぇえええええええええええええええええええええええええええええええっっっ！！！！」」
止めに傷無は両手を組んでエネルギー波を、ルクスとハヤトは剣からエネルギー波を発射させた！

「ぐああああああああああああああああああああああああああああああああああああっ！！？？」

ヴァイスナイトは何とかシールドを展開させるも、三人のエネルギーに耐えきれず空の彼方に吹き飛んだ!!

「「「・・・・・・・」」」

パンっ！

三人は集まるとハイタッチする。

ーグレイスｓｉｄｅー

「うむ！見事じゃ兄さま！」

《グレイスさま、ご油断しないで下さい！ゴーレム共の増援です！》

「何?! まだ来るのかっ!?」

グレイスが見ると、大量の魔方陣は消えておらず、次々とゴーレムが現れ、バトランティスに向かって来た！

「くっ！コヤツらそんなに脅威ではないが、こう数が多くては・・・！」

戦闘力ならばそれほどでは無いが〝数の暴力〟で攻めてくるゴーレムにグレイス達は霹靂する。

ーヴァイスナイトｓｉｄｅー

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、ハァ・・・・!!」

ヴァイスナイトは空の彼方で息切れしながら遥か向こうにいる傷無達を怨念に満ちた瞳で睨む。

「何で・・・・何で俺が押されてるんだよ・・・・! ダメだ・・・ダメだダメなんだ・・・・! 俺は負けちゃダメなんだ・・・・! ここで、ここで負けたら・・・・俺は、俺は何の為に・・・・!!」

ヴァイスナイト、〝織斑一夏〟の脳裏に思い出されるのは、〝機械神〟によって殺された仲間達と滅ぼされた自分の世界の光景。

奴等は突然に、何の前触れも無く自分達の世界に現れた。

神々しく、美しくも何処か恐怖を感じるその出で立ちはまさしく神か悪魔であった。

機械神は、〝織斑一夏〟の世界を破壊する為にその猛威を振るった。『世界最強の兵器IS~~(インフィニット・ストラトス)~~』を纏った世界中のパイロット達が立ち向かったが、まるで『巨像に挑むコバエ』のように、機械神の相手にはまるでならず、自分達の世界に『女尊男卑』を常識として広げ、『男なんかと戦争すれば3日で女の圧勝』とまで云われた『世界最強の兵器』は簡単に、呆気なく、そして脆くも粉砕された。

まだ学生だった〝織斑一夏〟達も駆り出され、機械神に挑んだが、〝織斑一夏〟はあっさりと叩きのめされ、地べたを這いつくばりながら見上げたその先に見えたのは・・・仲間達と『死』だったーーーーーー。

『狂喜の機械神 ホクト』により原形が無くなる程に燃やされた『金色の長髪のお嬢様』、『茶髪のツインテールの幼なじみ』。

『幻惑の機械神 オシリス』の幻術により同士討ちさせられ息絶えた『金色の短髪の少女』と『銀色の長髪に眼帯をした少女』。

『闘争の機械神 オーディン』の持つ槍に貫かれ絶命した『水色の髪をした姉妹』。

そして、『最悪の機械神 タナトス』の剣で両断された『黒い長髪を結わえた幼な

じみ』と『たった一人の姉』。

〝織斑一夏〟はただ地べたを這いつくばるだけで何もできなかった。茫然自失していた自分は仲間と姉が〝殺された事実〟を認識すると怒りに我を忘れ、遮二無二に機械神達に立ち向かうが、まるで相手にならず、塵でも払うかのようにあっさりと撃墜された。

『信じていた力を粉砕された〝屈辱〟』、『自分の力はこの程度のモノであった事への〝絶望〟』、『全てを奪われた〝憤怒〟』、『大切な人達を守れず失った〝悲嘆〟』、『何もできなかった〝無力感〟』、有りとあらゆる負の感情に支配された〝織斑一夏〟はただただ血の涙を流しながら愕然となり、機械神により破壊されようとする『世界』を眺めることしかできず、機械神タナトスに放つ光が全てを破壊したーーーーー。

しかし、〝織斑一夏〟だけは生き残り、『次元の狭間』に一人でいた。だが、彼は蹲り何もしないまま時が流れ、彼の耳に『ある存在』からの誘いを受けて機械神への復讐を誓ったが、その復讐を奪われた。

その復讐を奪った相手は、自分と同じ人生を歩んできた『飛騨傷無』。

彼は〝光の巨人ウルトラマン〟に選ばれた存在。しかも飛騨傷無だけではなく、

無数の平行世界にウルトラマンは存在し、〝邪悪な存在〟と戦っていた。
そして彼の心に宿った、自分の復讐を奪った者達や、〝光〟に選ばれた存在達への憎悪！
「何で・・・何でアイツらは〝守れたんだ〟・・・！俺は守れなかったのにぃぃぃぃぃぃぃぃっ‼うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっっっ！！！！」
〝織斑一夏〟は左腕から〝宝石が付いた小刀〟を取り出すと、天に向けて突き上げる！
「『ヴァイスナイト』ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッッッ！！！！」
〝織斑一夏〟の身体が禍々しい白い光に包まれると、その姿が変わった！

ー傷無sideー
三人は空の彼方に光る、禍々しい白い光を睨むと、ヴァイスナイトが現れた！
しかし、前回現れたよりもその姿は、〝織斑一夏〟が纏っていた装甲と同じ装甲を纏い、より禍々しく、より刺々しく、より凶暴な容貌になっていた。まるで〝織

斑一夏〟の憎悪に呼応したかのように。

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

三人はヴァイスナイトの姿を確認すると、ルクスは〝スパークレンス〟を、ハヤトは〝リーフラッシャー〟を、傷無は〝エスプレンダー〟を構えて、共に戦う〝光の巨人〟の名を叫ぶ！

「ティガーーーーーーーーーーーッ!!」

「ダイナーーーーーーーーーーーッ!!」

「ガイアーーーーーーーーーーーッ!!」

〝スパークレンス〟の先端が開くと、中のクリスタルが光輝き、ルクスの身体を包む！

〝リーフラッシャー〟に折り畳まれた部分が展開されると、展開されたクリスタルが光輝き、ハヤトを包む！

〝エスプレンダー〟の中央部のクリスタルが光輝き、傷無の身体を包む！

「おおおおおおおおッ!!」

「ディヤッ！」

「シャッ！」
「ジュワッ！」
そして、バトランティスの大地に『悪に染まった白き騎士』と、『三人の光の巨人』が降り立った！
白く禍々しい鎧更に凶暴な姿にしたヴァイスナイト。
銀の身体に青紫と赤のラインが入り、胸元にプロテクターを付けた光の巨人、『超古代の勇者 ウルトラマンティガ』。
銀の身体に赤と青のラインが入り、頭部にクリスタルの付いた角を付けた光の巨人、『熱き闘志の巨人 ウルトラマンダイナ』。
銀の身体に赤のラインが大きく入った光の巨人、『赤い大地の光 ウルトラマンガイア』。
目の前に現れた三大ウルトラマンをヴァイスナイトは身体を小刻みに振るわせながら憎々しげに吠える！
「お前達を殺す！ 殺してやるっ!!」
ヴァイスナイトは左腕から〝赤い玉〟と〝青い玉〟と〝緑の玉〟と〝紫の玉〟と

〝黄色の玉〟を取り出す。
「(あれは・・・!?)」
「(レイキュバス達か!?)」
「(何もするつもりだ・・・)」
その玉は、アタラクシアで戦い倒された怪獣達の〝核〟である玉だった。ヴァイスナイトは五つの玉を混ぜ合わせると一つのなった〝核〟が赤黒くなりそして徐々に膨張し、ヴァイスナイト以上の体積になった!
「さぁ新たな姿となった現れろ! お前の名は、『超合体怪獣 ファイブキング』ッッ!!!」
膨張した〝核〟が内側から引きちぎられ、中から倒した5体の怪獣が混ざった怪獣が現れた!
頭部と胸部が『超古代怪獣 ファイヤーゴルザ』、額と背中の翼と尾が『超古代竜メルバ』(メルバの顔がファイヤーゴルザの顔に張り付いている)、左腕が『奇獣ガンQ』、右腕が『宇宙海獣 レイキュバス』(手が頭から直接生えたハサミになっていた)、下半身と合体している『宇宙戦闘獣 超コッヴ』(顔が腹部に張り付き、足は

超コッヴのモノにコッヴシッケ（超コッヴの腕の鎌）が生えていた）。

「「「「ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッッッ！！！！！」」」」

『超合体怪獣 ファイブキング』は５体分の怪獣の雄叫びを上げた！ その雄叫びで大地は震え、空の雲は吹き飛び、暴風が吹き荒れた！

「ディヤァッ！」

「ジュワァッ！」

「ハァァッ！」

「フンッ！」

「「「「グワアアアアアアアッッ!!」」」」

三大ウルトラマンとヴァイスナイトとファイブキングは近づき、土煙や岩盤をひっくり返しながら激戦を繰り広げる！

「ジィヤッ！ タァッ！ シュゥワッ！」

「ジャッ！ ジュッ！ シェヤッ！」

「「「「ギャァァァァッ！！！」」」」

ティガとダイナとファイブキングが戦い、ハサミが生えた左腕をダイナが押さ

え、ティガが右腕を押さえてガンＱの眼から発射される光線を別方向へ反らす！
「ウオアアアッッ!!」
「ティヤッ！シュワッチ！トアッ！」
剣を振り回すヴァイスナイトの攻撃を交わしながら拳をぶつける！

ｌグレイスｓｉｄｅｌ
「なんじゃと!?」
《グレイスさま！》
「何も言うなゼル！あんな化け物まで現れるとは、最早ヴァイスナイトは手段を選ばぬ様じゃな!!」
魔方陣から次々と湧いて出てくるゴーレムを倒しながら、遠目から見えるヴァイスナイトとファイブキングを見据え、各区画で戦う仲間達や国民に向けて空中ディスプレイを開いて指示を飛ばす！
「各区画で戦っている戦士達や、この映像を見る民に伝える！ヴァイスナイトと

化け物は三大ウルトラマンに任せ、我等は魔導装甲部隊はこのままバトランティスを守る為に戦うのじゃ！民達よ、ウルトラマンは負けん！ウルトラマンを信じよ！我等が信じる限り、ウルトラマンは絶対に負けたりしない‼我等の〝希望の象徴〟を信じるのじゃ！！！」

《『ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！！！』》

グレイスの言葉に、司令室にいるゼルシオーネとグラベル、別区画で戦うアルディアやハーキュラス達や懲罰四剣$|$クアルトゥム$¿$、避難しているバトランティス世界の民達が歓声を上げた！

ー三大ウルトラマンVSヴァイスナイト&ファイブキングー

その歓声はウルトラマン達の耳にも、ヴァイスナイトの耳にも届いていた。

「「(コクンッ‼)シュゥワァァァッ！」」

頷き合った三大ウルトラマンは更に攻める！

「何処までも・・・‼何処までも俺を苛立たせやがってッ‼このヒーロー共

がぁああッッ!!」

ヴァイスナイトは人々の〝希望〟となっているウルトラマンと傷無達に怨嗟を燃やす！

「ファイブキング！ティガとダイナを殺せっ！ガイアは！飛騨傷無だけは！俺の手で殺すっ!!」

「(来いっ！ヴァイスナイト!!)シュゥワッ！」

ガイアは赤いラインと黒と青いラインが入り、身体が筋肉質になった、ガイアにアグルの力が加わった姿、『ウルトラマンガイア スプリーム・ヴァージョン(ガイアSV)』となってヴァイスナイトと戦う！

袈裟斬りで迫るヴァイスナイトの剣を『シャイニングブレード』(本来はブーメランだが、今回は武器として使用する)で防ぎ、そのまま剣劇を繰り広げる！

「「「「ギュワアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」」」」

ファイブキングは5体分の雄叫びを上げて、背中の翼を広げて、その巨体からは想像できないスピードでティガとダイナに迫る！

「ディヤッ！」
「ジュッ！」
　ティガは高速飛行戦闘に優れた銀と青紫の姿、『ウルトラマンティガ・スカイタイプ（ティガS）』へとタイプチェンジし、ダイナは変幻自在の超能力を駆使する銀と青の姿、『ウルトラマンダイナ・ミラクルタイプ（ダイナM）』へとタイプチェンジし、ファイブキングと空中戦を繰り広げる！
　ブォンッ！ギギギギギギギギギギギギギギギギギギギギッッッ！！！
　ヴァイスナイトの剣とガイアSVの『シャイニングブレード』が火花を散らす！
「剣で俺に勝てると思っているのか?! 飛騨傷無！」
「（負けない！ 負けられない!! 俺には、〝守るもの〟があるからな!!）」
　傷無の脳裏に浮かぶのは、ゼルシオーネとグラベルが産んでくれた自分の〝子供達〟を守る想いが、傷無を奮い立たせ、『シャイニングブレード』でヴァイスナイトと剣を弾き飛ばした！
「〝守るモノ〟だと・・・ふざけるな・・・！ 俺は、守れなかった・・・守れなかったんだぞ!!」

ヴァイスナイトはもう片方の腕から光線をガイアSVぶつけた！
「ぐあああああああっ!!」
ガイアSVは大きく吹き飛び倒れ、更にその近くをファイブキングに叩き落とされたティガSとダイナMが落ちてきた！
「ドアアアッ!!」
「ヅァッ!!」
倒れる三大ウルトラマンにヴァイスナイトは迫り、殴り付ける！
「守れなかったたんだよ俺は!!」
「グァッ！」
「〝箒〟を！」
「グハッ！」
「〝セシリア〟を！」
「ガッ！」
「〝鈴〟を！」
「グホッ！」

「〝シャル〟を！」
「グッ！」
「〝ラウラ〟を！」
「オォッ！」
「〝刀奈〟を！」
「アァッ！」
「〝簪〟を！」
「グォッ！」
「〝千冬姉〟を!! 誰も守れなかったんだ!! なのに！ 何でお前達は守れるんだよ!? 何でお前達は〝光〟に選ばれたんだよ!! お前らみたいなヒーローがっ!!」

怨嗟に満ちた雄叫びを上げながら三大ウルトラマンを殴り続けていたヴァイスナイトは、ゆっくりと着地してきたファイブキングと並び、共にエネルギーを貯めて、倒れる三大ウルトラマンに向けて光線を放つ！

「グゥゥゥゥッ・・・！」
「ウァァァァッ・・・！」

「オォォォォォッ・・・！」

「死ねエェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェッッッ！！！」

ファイブキングの口と頭部のメルバと下半身の超コッヴと右腕のレイキュバスと左腕のガンQの目からそれぞれ赤と緑と黄色と青と紫の光線が、ヴァイスナイトの放つ白の光線に螺旋状にまとわりつき、極大の光線となった！

「「「グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！！！」」」

極大光線によって大爆発が起こり、三大ウルトラマンは爆炎に呑まれた！

ーグレイスｓｉｄｅー

「兄さまーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッッ!!」

グレイスの悲痛な叫びが、バトランティスの空に響いた。

ー三大ウルトラマンVSヴァイスナイト&ファイブキングー

ピコン、ピコン、ピコン、ピコン、ピコン、ピコン、ピコン、ピコン・・・・・・・。

カラータイマーが鳴り響きながら、ティガとダイナとガイアは倒れていた。

「見たか・・・・！これが俺の力だ!!この力を得るために、俺は捨てたんだ、〝信念〟を・・・！〝矜持〟を・・・！〝己自身〟さえも!!」

ヴァイスナイトは止めを指そうと、剣を持った。

「グ、ウゥゥゥゥ・・・・！」

ガイアは立ち上がろうとするが、ダメージは大きく、身体に力が入らなかった、ガイアはゆっくりと近づくヴァイスナイトを弱々しく見つめる。

「（ダメなのか・・・・俺は・・・俺達はこのまま何もできないのか・・・・）」

「（諦めないで・・・・傷無・・・・！）」

「（ルクス・・・・）」

「（まだまだ・・・・本当の戦いは、これからだろう・・・・・？）」

「（ハヤト・・・・）」

「（僕達は、こんな所でやられる訳にはいかないんだ・・・・・！）」

「（傷無、お前も言ってただろう・・・・？〝守るもの〟が有るって・・・・・！）」

「(ッ!!)」

傷無の脳裏に、〝我が子達〟だけではなく、グレイス達バトランティスの仲間達、アタラクシアにいるユリシア、ハユル、シルヴィア、スカーレット、玲俐、ケイ、そして愛音の事をｌｌｌｌｌｌ。

「(そうだ・・・・！　諦めない・・・!!　俺は諦めたりしない!!　例えこの先どれ程の戦いが起きようとも、俺は、俺達は決して諦める訳には・・・行かないんだｌｌｌｌｌｌッッ!!!　)ジュウワァァッ!!!」

ｌグレイスｓｉｄｅｌ

《グレイスさま！》

「なんじゃ！　ゼル!?」

《『創世の御柱$$ゲネシス$$』に高エネルギー反応が！》

「何!?」

グレイスが見ると、バトランティス世界の中心部と言っても良い『創世の御柱$$ゲネシス$$』から強い光が生まれ、ガイアに向かって放たれた！

ｌガイアｓｉｄｅｌ

立ち上がったガイアの身体に『創世の御柱ゲネシス』から放たれた強い光を浴びて、ガイアの身体が光り輝いた！

「何!? うわあああああああッ!!」

「「「「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！」」」」

ガイアから放たれた光にヴァイスナイトとファイブキングは吹き飛び倒れた！

「(これは・・・・?)」

ガイアの身体は2つの〝赤い光〟と〝青い光〟に別れた。

〝赤い光〟がガイアの姿に〝青い光〟がアグルの姿に変化した。

「(ガイア・・・・アグル・・・・!)」

傷無の前に〝エスプレンダー〟と〝アグレイター〟が現れ、一つになった！

〝エスプレンダー〟の中に〝アグレイター〟の中央部に輝石が入り、〝エスプレンダー〟の後ろに畳んだウイングが付いた形、〝エスプレイター〟になった！

「(ガイア、アグル・・・君たちはずっと俺と共に戦ってくれた・・・そして今・・・

俺達と一緒に戦ってくれる仲間達もいる！俺達は、一つだ!!）」

新たな姿になった〝エスプレイター〟を握ると、力強く叫ぶ！

「ガイアアアアアアアアアアアアアアアッッ！！！！！！」

〝エスプレイター〟のウイングが開き、中の輝石と共に〝エスプレイター〟が光り輝き傷無の胸元にくっつくと、ガイアとアグルが一つとなった！

銀の身体に赤と青が全身に広がり、ガイアの頭部にアグルの頭部のクリスタルを付け、〝エスプレンダー〟を身体に装備し、背中に〝アグレイター〟のウイングを付けた姿となった！

「何だ・・・・！何なんだよその姿はっ！！??」

ヴァイスナイトは戸惑いながら叫ぶ。

「これが新たなガイアの姿！その名は・・・『ウルトラマンガイア ゲネシス・ヴァージョン』だっ！」

「傷無・・・！」

「俺達も、行くぜ・・・！」

新たな姿となったウルトラマンの両隣にティガとダイナが並んだ！

その姿は〝希望の象徴〟と呼ぶにふさわしい程に雄々しく、気高い姿だった。

---

ー『ウルトラマンガイア ゲネシス・ヴァージョン(ガイアGV)』
『創世の御柱$|$ゲネシス$¿$』のエネルギーを受けてガイアとアグルが合体した姿。
『スプリーム・ヴァージョン』の数倍の能力を持ち、『衝突面$|$エントランス$¿$』を開く能力も持っている。

ー『エスプレイター』ー
エスプレンダーの内部にアグレイターの輝石が入り、後ろにウイングを付けたアイテム。『創世の御柱$|$ゲネシス$¿$』のエネルギーを受けて進化した。

# ティガ・ダイナ・ガイア 大激戦 ウルトラの友情！ ｃｈａｐｔｅｒＶ&エピローグ

EDテーマは『ウルトラマンＵＳＡ』から持ってきました。一番お気に入りの曲です。

---

今この時、〝奇跡〟が起こった。『復讐の騎士ヴァイスナイト』と『超合体怪獣ファイブキング』の猛攻で窮地に立たされた三大ウルトラマン、するとそこに『創造の御柱$|$ゲネシス$¿$』の光が放たれ、それを浴びた『ウルトラマンガイア』が『ウルトラマンアグル』が融合し、新たな姿になった。

その名も『ウルトラマンガイア ゲネシス・ヴァージョン$|$ガイアGV$¿$』。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

そしてガイアGVの横に並び立つは『ウルトラマンティガ』と『ウルトラマンダイナ』。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

悠然と並ぶ三大ウルトラマンの雄々しき勇姿が、バトランティス世界の人々の瞳に〝最高の希望〟を与えた！

『ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！』

ウルトラマン達の勇姿にゴーレムと戦っていた魔導装甲を纏うグレイス達が、バトランティス世界の人々が大歓声をあげた！

そして人々の歓声を聞き、三大ウルトラマンの勇姿を見て、ヴァイスナイトは怒りで身体を奮わせた。

「なんなんだよ・・・・！　なんなんだよお前らはっ!?　おかしいだろっ！　俺は捨てたんだぞ！　〝信念〟も！　〝誇り〟も！　〝矜持〟も捨てたんだぞ!!　この力を得るために!!　なのに何でお前達はそんな力を得られるんだよ!?　不公平だろ！　理不尽だろ!!　何でお前達ばかりがぁあっ!!　お前らみたいな、ヒーローがぁあああっ!!」

ヴァイスナイトは鎧の翼は拡げてガイアGVに突撃する！

「ヂェヤッ！」
「シュワッ！」
ウルトラマンティガがパワータイプに、ウルトラマンダイナがストロングタイプにタイプチェンジして、ヴァイスナイトを受け止めた！
「「デヤァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！」」
「うおあああああああああああああっっ!!」
そのままジャイアントスイングでヴァイスナイトを投げ飛ばし、ヴァイスナイトは倒れた際の地盤がへこみ、土煙を上げて倒れた。
「「「ギャワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！」」」
ファイブキングがガイアGVに向かうが、ガイアGVは悠然と静かに構え。ファイブキングの腹部に拳を突き刺す！
「フンッ！」
「「「グワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ

ッッ！！！」」」」

「ハッ！シュワッ！シャッ！デヤッ！ジュワッ！」

手刀、膝蹴り、エルボー、回し蹴り、光りが拳に宿った正拳突きでファイブキングを攻め立てた！

「「「「キシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッ！！！」」」」

ファイブキングは再び、各部位の怪獣の口から破壊光線を放った！

「フンンっ!!」

ガイアGVは片手からバリアを展開させ、ファイブキングの破壊光線を防いだ！

「フゥゥゥゥゥ、シャアァッ!!」

バリアを解除し、『強化シャイニングブレード』を放ってファイブキングの両腕を切断した！

「「「「シャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！」」」」

両腕を切断され悲痛の雄叫びを上げるファイブキング。

「ジュワァッ!!」
すかさず上空にいたダイナＳは身体をドリルのように回転させて相手に突進する『ダイナ・トルネードアタック』でファイブの身体を貫通した！
「ディヤッ！」
そこに更にティガＰ、全身からエネルギーを放出しながら敵に突進する『ティガ バーニングダッシュ』でファイブキングを突っ込み。
「「「「ギュワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！」」」」
ドッゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッッ！！！
ティガＰとダイナＳの必殺技をくらい続け、ファイブキングの身体が爆散した！
ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！
多くの歓声を上げるバトランティィス世界の人々。
「クソッ・・・・!! まだだ・・・まだだまだだまだだまだだまだだまだ

だまだだまだだまだだまだだぁっ!!」

ヴァイスナイトは更に邪悪なオーラを纏って剣を構えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(これで、終わらせよう・・・)」

マルチタイプとフラッシュタイプに戻ったティガとダイナはガイアGVと合流し、憐憫の気持ちでヴァイスナイトを見据えると。

「(ルクス、ハヤト、力を貸してくれ・・・アイツを・・・ヴァイスナイトを・・・〝織斑一夏〟を救う為に・・・!)」

「「(コクン)」」

ティガとダイナが頷くと、ガイアGVの背中のウィングが開くと、ティガとダイナが必殺技の構えをとる。

「ディヤアアアアアアアっっ!!」

「シュワアアアアアアアアっっ!!」

ティガが『ゼペリオン光線』を、ダイナは『ソルジェント光線』をガイアGVの

展開されたウィングに放つ！
「ファァァァァァァァァァァ・・・!!」
ガイアGVはティガとダイナの必殺光線のエネルギーを吸収し、その身体が金色に光り輝く！
「殺す・・・！ 殺してやるぅぅうううううううううううううううッッッ！！！」
怨嗟と怨念に捕らわれたように、天にかざした剣にエネルギーを込めると、剣に巨大なエネルギーの光刃を生み出した！
「消えろヒーロー!! ウルトラマンに選ばれた者共ぉぉぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッッ！！！！」
ヴァイスナイトはエネルギーの光刃を振り下ろし、その膨大なエネルギーが迫り来る！
「(僕達は選ばれたから守れたんじゃない・・・！)」
「(俺達は自分の大切な人達を守る為に、がむしゃらに戦って来たんだっ！)」
「(俺達は諦めない！ これから先に、どんな敵が現れようとも、どんな困難が待ち

受けていようとも！俺達は、戦い続けるんだーーーーーーーーーー!!」

金色に輝くエネルギーを両手に集めるとピンク色に変わり、両手から〝ピンク色の光〟を放つと、エネルギーの光刃を打ち消しながら、ヴァイスナイトの身体を包み込む！

「グ、グアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

「(ヴァイスナイト・・・織斑一夏・・・！もう終わりだ・・・)」

「まだだ!! まだ俺はぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」

「(君はもう十分苦しんだんだ・・・！もうこれ以上自分を責め苛まないでくれ・・・!!)」

「(お前の〝大切な人達〟は、お前の〝守りたかった人達〟は、お前がそんな姿になってまで仇討ちをしてほしいと、本気で思っているのか!?)」

「じゃぁ俺はどうすれば良かった!? どうすれば良かったんだっ!? 全部を失って！矜持も信念も捨てて！生き方まで曲げる以外に俺はどんな道を選べば良かったんだよっ!?」

「(それは俺達にも分からない・・・分からないけど、お前がやっている事が〝間

違っている事〟であるのは分かるんだ・・・！〉」
「ふざける【一夏・・・】っ！この声は・・・!?」
光に包まれたヴァイスナイト、織斑一夏の耳に声が響いた・・・・。

ーヴァイスナイトｓｉｄｅー
そこはヴァイスナイトの内部、織斑一夏は光に包まれた空間で〝その人〟に会った。黒い長髪を後ろに結わえた少女、『篠ノ目 箒』に。
「箒・・・・・！」
【・・・・・・・・・・・・】
その少女、篠ノ目箒は悲しそうに織斑一夏を見つめていた。織斑一夏は、泣きそうになるのを必死に堪えながら、吐き出すように言葉を紡ぐ。
「分かっているよ・・・・！分かっていたさ・・・・！俺が間違っているって、復讐を果たしても、皆が戻ってこないって事も・・・・！でも、それでも俺は・・・・

!!」

【一夏・・・私達は怨んでいない、誰も怨んでいないぞ・・・！機械神達も・・・そして勿論、お前の事も・・・・・！】

「っ！」

【一夏・・・】

【一夏さん・・・】

【一夏・・・】

【一夏・・・】

【一夏・・・】

【一夏くん・・・】

【・・・一夏・・・】

「千冬姉ぇ・・・！セシリア・・・！鈴・・・！シャル・・・！ラウラ・・・！刀奈さん・・・！簪・・・！」

箒の後ろから現れたのは、機械神に殺された仲間達、セシリア・オルコット、凰鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒ、更識楯無さん、刀奈さん、

更識簪。そして、たった一人の肉親である姉、織斑千冬だった。
【ずっと、一人で辛い思いをして来ましたわね・・・】
【でも、アタシ達が死んだのがアンタのせいだなんて思い上がらないでよね・・・！】
【ボク達は怨んでなんかいないよ一夏・・・】
【私の嫁ともあろうものが私と同じ〝失敗〟をするな一夏・・・！】
【一夏くん、一人で責任を背負うのは間違いよ・・・】
【一夏・・・戻ってきてあの頃の一夏に・・・！】
【一夏・・・目を覚ませ・・・そしてもう許してやれ・・・機械神達を・・・そして何よりも、〝お前自身〟を・・・！】
箒と千冬達はそのまま優しく微笑んで消えていった。
「俺は・・・どうすれば良いんだよ・・・？」
《やり直せば良いんだ・・・》
「如月ハヤト・・・！」
《僕も間違いを犯した・・・だからこそ、償って行こうと決めたんだ・・・》

「ルクス・アーカディア・・・！」

《俺達だって今まで多くの間違いを犯した・・・そしてこれからも間違いを犯すと思う。でも、その度にやり直せば良いんだ・・・！》

「飛騨・・・傷無・・・！」

《お前もやり直せ、織斑一夏・・・》

「でも・・・でももう俺は・・・！」

己のやった事への自責で思い悩む織斑一夏の眼前に〝ヴァイスナイトの剣〟が現れ淡く光り、ヴァイスナイトが現れた。

「ヴァイスナイト・・・」

ビキビキビキビキビキ・・・・・ガシャァァァァァァァンン・・・。

ヴァイスナイトの身体に纏っていた鎧が砕け散り露になったその姿は・・・『光の巨人』だった。

「これは・・・！」

《『ヴァイスナイト』、イヤこの姿はまるで・・・！》

《『ウルトラマン』、なのか・・・？》

《そうか・・・ヴァイスナイトは本来、織斑一夏の世界のウルトラマンだったんだ・・・！だけど、織斑一夏の心が〝絶望〟と〝憎悪〟に支配されてしまって・・・》

「俺の〝負の心〟があんな〝鎧〟となって、『ウルトラマン』を復讐の騎士『ヴァイスナイト』にしてしまったのか・・・・・？なんだよ、俺も〝光〟を得ていたのに、俺自身が台無しにしてたのかよ・・・」

自分もまた〝ウルトラマンに選ばれた者〟であったのに、自らの憎しみがウルトラマンを醜い復讐鬼に変貌させていた事実に、織斑一夏は力無く尻餅を付く。

《織斑一夏・・・》

「お前達の言うとおりだ・・・俺はただ、憎しみを晴らしたかっただけだ・・・何も守れなかった自分自身と、守れる力を持ったお前達に・・・ただ八つ当たりをしていただけだったんだ・・・・」

《もう一度やり直せ、織斑一夏。今度こそ、お前の守りたい人達を守れるように・・・ウルトラマンの力を正しく使う為に・・・！》

「・・・・・・・・あぁ、そうだな・・・すまなかった、そしてありがとう、ウルトラの勇者達・・・」

憎しみを失った織斑一夏の顔は、憑き物が取れたような笑顔だった。
そして、織斑一夏と、ヴァイスナイトは、光の中に消えたーーーーーーーーーー。

ー傷無sideー

「「「・・・・・・・・・・・・・・」」」
光が収まると、ヴァイスナイトは〝小さな光〟となり、グレイス達が交戦していたゴーレム達も機能を停止し、消滅していった。
ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ!!!
バトランティィス世界が大歓声に包まれると、三大ウルトラマンは消え、ルクス・アーカディア、如月ハヤト、飛騨傷無が〝小さな光〟を持ってそれぞれのアーマーを纏って空中に佇んでいた。
「この〝光〟は、〝織斑一夏とIS世界のウルトラマン〟なの?」
「あぁ・・・・」
「それでどうする・・・・?」

「「・・・・・・・・・・・・」」

悩む三人に空中ディスプレイが開き、ゼルシオーネからの通信が入った。

《傷無！お前達のいる地点に衝突面§§エントランス§§が開くぞ！》

「「ッッ!!」」

三人が身構えると、空間が割れ、そこから思いがけない人物達が現れた。神々しい光りを放ちながら降り立つ『三人の機械仕掛けの神々』。

「『ホクト』！『オーディン』！『オシリス』!!」

そこに現れたのは、金色の長髪に小柄な体型とそれに不釣り合いな大きな胸をし、生物的で神獣の麒麟を連想させる巨大な装甲を纏った少女、『狂喜の機械神 ホクト』。

白銀の短髪に色白い肌にスポーティーでありながら豊満な身体に美しいローブを身にまとい、左目は美しいレースで隠したを付けた女性、『闘争の機械神 オーディン』。

褐色な肌に黒髪、豪華な金の装飾を身に着けた豊満な身体をした古代エジプトの女王のように美しさと威厳と母性に満ちた女性、『幻惑の機械神 オシリス』。

かつて様々な世界を気紛れで破壊し、自分たちの世界を自分たちの望むままに創ろうとしていたが、傷無達と戦い、〝本当に自分の望む世界〟を手にした機械神達だった。

「ヤッホー傷無！」

「久しぶりね、傷無・・・」

「こうしてまた会えるだなんて・・・！」

機械神達は嬉しそうに傷無との再会を喜ぶ。

「あれが、機械神・・・？」

「傷無達が戦った機械仕掛けの神々か・・・？」

「お前達、どうして?! ホクトとオシリスはもう機械神の力は失った筈なのに!?」

「今回特別に復帰したんだよ！・・・・僕達がやってしまった罪を償うためにね・・・・」

ホクト達は傷無の手にいる〝織斑一夏の光〟を見据えて、悲しそうに目を伏せる。

「彼が、織斑一夏がこうなってしまったのはオレ達の行いのせいなのです・・・・」

「機械神の頂点に立ったナユタから連絡が入ったのです・・・・」

「っ！ 母さんが・・・・？」
『飛騨那由多』。傷無とその姉怜俐の母親にして世界最高の科学者。しかしその性質は〝異常な研究心〟を持ったマッドサイエンティスト。
自らの研究の為なら地球$|$レムリア$;$とバトランティス、２つの世界を手のひらで転がし、機械神へとなった存在。
そしてその本質は、〝人間の感情が欠落した存在〟。自分以外の人間、自身の子供である怜俐と傷無ですら自らの研究に役立つモルモット程度にしか考えていなかった。
だが皮肉な事に彼女は、自らの研究で人間を辞めて、機械神になることでずっと持つ事ができなかった〝人間の感情〟を得て、自らの行いの〝罪〟の重さに苦しみ、罪滅ぼしとして『最悪の機械神 タナトス』に変わり全ての世界の管理者へとなったのだ。再び〝人間の感情〟を無くしてしまって。
そしてタナトスは、人間の肉体を得て『飛騨刹那』としてアタラクシアの訓練生として日々を送っている。その『飛騨刹那』の教官を傷無の頼れる相棒である『ガードルード・ベアード』がしていた。

「そのナユタが、かつて私達が滅ぼしてきた世界を〝再構築〟を行って来ました。でも、ただ一つの世界だけが再構築できずにいました。そしてそれが・・・」

「彼の、織斑一夏の世界だったんですね？」

「はい、オレ達は織斑一夏の世界を破壊しました。ナユタによって世界事態は再構築されようとしましたが、最も『重要なファクター』である、〝織斑一夏〟と〝彼の世界のウルトラマン〟が必要でした・・・」

「僕達は償いの為にナユタにもう一度機械神の力を授かって、彼を探していたんだよ・・・」

「でも、織斑一夏はヴァイスナイトの力をどうやって手に入れたんだ？」

「ナユタの話では、織斑一夏は次元の狭間を漂っていた彼に近づいた〝存在〟がいました。その存在が彼の復讐心を揺さぶり煽り、そこから生じる〝負の感情〟を増幅させたのです」

「その〝存在〟って・・・・？」

「ある『平行世界の宇宙』で人間の負のエネルギーを集める存在・・・・『インキュベーター』」

「「『インキュベーター』・・・」」

「『インキュベーター』は、織斑一夏の『魂の負のエネルギー』に目をつけ利用しようとした。自分達の目的の為なら〝人の心の闇〟を利用し、その行為で〝悲劇〟が生まれようとも構わない私達と全く異なる考えの知性体生命体よ」

「いずれヤツらは君たちの宇宙にもその手を伸ばすかもしれないね・・・」

ホクト達から告げられる『インキュベーター』なる存在に表情を固くする傷無達だが。

「それでも、それでも俺は戦う・・・戦い続ける。それがウルトラマンに選ばれた者の使命だ・・・！」

「うん、そうだね。僕達は戦い続ける！」

「この〝光〟と、仲間達と力を合わせてな！」

三人の返答に機械神達は少し唖然となるも、すぐにフッと笑みを浮かべ、傷無は『織斑一夏の〝光〟』をホクトに渡す。

「ホクト、織斑一夏を・・・」

「うん、ナユタに渡すね。これで彼の世界は再生される・・・」

「・・・・母さんは？」
「・・・会ったら辛くなるから、会わないって」
「全くあの人は・・・ま、今でも俺達を見ている気がするんだけどな。オーディン、オシリス、ルクスとハヤトを・・・」
「えぇ、ルクス・アーカディア、オレが貴方を〝本来の世界〟に導くわ」
「お願いします。オーディンさん」
「如月ハヤト、私に付いてきてください」
「は、はい。オシリスさん」
最後に三人は向かい合った。今回の戦いで出逢った盟友との別れを惜しむように。
「ルクス、傷無、お前達に会えて良かったぜ・・・」
「ハヤト、僕もだよ。傷無、子供達を大切にね・・・」
「あぁ、ハヤト・・・ルクス・・・本当にありがとう。お前達に会えて本当に良かった・・・・！」
傷無が手を差し出すと、その上にルクスとハヤトが手を重ねる。

「「また会おう、友よ!!」」

再会を誓った三人の勇者達。ルクスとハヤトは、ウルトラマンティガとウルトラマンダイナに変身し、オーディンとオシリスに導かれ、それぞれの世界へ帰還し、ホクトも織斑一夏の〝光〟を持って飛び去った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「行ってしまったかの？」

傷無の後ろにいつの間にかグレイスやゼルシオーネ達が来ていた。

「あぁ・・・・」

「しかし兄様。兄様はどうやって帰るのじゃ？」

グレイスの問いに、傷無は『エスプンダー』と『アグレイター』を取り出す。

「ガイアとアグルが融合した『ゲネシス・ヴァージョン』なら、自分の意思で衝突面§§エントランス§§を開いて本来の世界に戻れるさ・・・！」

「・・・・と言う事はじゃ兄様・・・！」

グレイス達の顔に喜びが浮かぶ。

「皆、行こう！愛音達のいる世界へ、地球§§レムリア§§へッ!!」

ワアアアアアアアアアアアアッッッ！！！

傷無の言葉にグレイス達が歓声を上げた。

ールクスｓｉｄｅー

「ありがとうございます。オーディンさん」

「構わないわ・・・ルクス・アーカディア、一つ助言をしておくわね」

「何ですか？」

「少しは自分の〝幸福〟を考えなさい。貴方が〝大切に想う子達〟も、貴方の〝幸福〟を望んでいるのだから」

「・・・・・・・考えて、おきます」

そう言ってウルトラマンティガ、ルクス・アーカディアは〝自分の世界〟に戻った。

ーハヤトｓｉｄｅー

「ありがとう、オシリスさん」

「いいえ、構いません」
母性溢れる笑みを浮かべるオシリスにハヤトは顔を赤らめた。実はハヤトの好みの女性は『胸の大きい包容力の有る年上の女性』、オシリスは好みど真ん中だったが、オシリスは余裕の笑みを浮かべ。
「おあいにくですが、私は既婚者で、貴方と同い年の娘もいるんですよ♪」
「あ、そうですか・・・・」
ウルトラマンダイナ、如月ハヤトは残念そうに〝自分の世界〟に戻ろうとした。
「(ボソッ)それに〝浮気相手〟は〝1人〟傷無だけ〟と決めているので♪」
オシリスが小声の呟きはハヤトの耳に入らなかった。

ｌ傷無ｓｉｄｅｌ
ウルトラマンガイアGVとなった傷無は、グレイス達の乗るバトランティス帝国の旗艦『オルディウム』を連れて、衝突面エントランスの中を飛びながら、自分の地球レムリアへと向かう。
そして、共に戦ったウルトラマンティガルクス・アーカディアとウルトラ

マンダイナ〜〜如月ハヤト〜〜に心の中で呟く。

「(ルクス・・・ハヤト・・・俺の〝答え〟は出た。俺の〝大切な人達〟を、〝大切な人達の生きる世界〟をこれからも守り続ける、それがウルトラマンとしての、俺の〝答え〟だ・・・だが、君たち二人の答えは、これからだ・・・!)」

ウルトラマンガイアGVとオルディウムは遥か向こうにある地球を目指して、飛翔したーーーーーーーーー。

〜ED『時の中を走り抜けて』〜

自分の世界に帰還したルクス・アーカディア〜〜ウルトラマンティガ〜〜は王立士官学校〜〜アカデミー〜〜の校庭に降り立つと、リーシャ達『ガッツ』のメンバーが笑顔で駆け寄り出迎える。

リトルガーデンに帰還した如月ハヤト〜〜ウルトラマンダイナ〜〜はクレア・ハーヴェイと合流し、クレアが思わずハヤトに抱き付き、そのまま熱く抱擁していると、エミリア達が現れて喧騒が起きた。

アタラクシアの上空にガイアGVとオルディウムが現れ、愛音達が空を見上げて

驚く。

再会を果たした愛音とグレイスは涙混じりに抱擁し、ハユルとユリシアもハーキュラスとメルクリアと再会を喜び、スカーレット達『マスターズ』と『懲罰四剣ꕥꕥクアルトウムꕥꕥ』も再会を喜ぶ。

ゼルシオーネとグラベルの子供を見せられ仰天するアタラクシア組と、そこからコッソリ逃げる傷無。

リーシャ達に連れられながら空を仰ぐルクス。

騒がしい喧騒を尻目に空を眺めるハヤト。

遠くで愛音達のファイブキングを上回る怒りの咆哮から離れた場所に移動した傷無。

三人が天に向かって握り拳を向ける、別世界にいる盟友に向けてーーーーーーーーーーーーー

ー???　ー

「俺は・・・戻って来れたのか・・・??」

『一夏(さん/君)ーーーーーーーーーー!!』

「っ!!??　皆・・・!」

「どこに行っていたのだ?!」

「もうすぐ授業ですわよ！」
「早く行かないと千冬さんに怒られるわよ！」
「一夏行こう！」
「嫁と同伴出勤だな」
「生徒会長としてサボりはダメよ♪」
「早く一夏・・・・！」
「(皆・・・覚えていないんだな・・・機械神達に殺され、滅ぼされた事を・・・・)」
その少年、織斑一夏は自分を呼ぶ仲間達の元へ向かおうとすると、腰元に違和感を感じて触れてみると、『クリスタルが付いた小刀』があった、織斑一夏はソレが何か分かった。
「・・・・こんな俺でも、まだ〝資格〟があると言うのか？・・・もう一度やり直して見るよ・・・ウルトラマン・・・・・」
そう言って、織斑一夏は決意を新たに、歩き出した。
もう一度『皆を守れる自分』になるために、再び歩き出す、『無限の成層圏』へとーーーーーーーーーーーーーー。

～ティガ・ダイナ・ガイア 大激戦ウルトラマンの友情！ 完～

---

何とか年内には終わらせることができました！
ちなみに『IS世界のウルトラマン』はオリジナルウルトラマンにしています。

# 艦隊コスモスⅠ

艦隊これくしょん×ウルトラマンコスモスです。
オリジナル主人公は提督、ストーリーはアニメ沿いです、アニメ本編開始の少し前。

---

その少年は〝光〟を見た。とても温かく、優しい光をーーーーーーー
『武志・・・・・・』
光は『青い巨人』となり、その少年『春日野 武志』に呼びかけ、人差し指を伸ばし、武志に『小さな結晶体』を与えた。
「・・・・・・・」
武志は『巨人』に向かって手を伸ばす。

ムニュッ

「ん？　ん～ん・・・？」

ムニュッムニュッムニュッムニュッ・・・・・・・・

鎮守府提督『春日野 武志 〝大佐〟』は掌に感じる柔らかくも弾力のあるゴム毬のような感触に目が覚めると、目の前に艶やか黒髪の長髪にヘッドギアを付け、凛々しい目元に鍛えられたスポーツ系のナイスバディの美女が目を閉じ、こめかみをピクピクさせている姿と、その隣で茶髪のショートヘアーで黒髪の美女と少し形の違うヘッドギアを付け、黒髪の美女に負けず劣らずのナイスバディの美女が苦笑いしているのが映った。武志の手が黒髪の美女の豊満なバストを掴んでいた。

「おお～、〝長門〟に〝陸奥〟、おはよう・・・」
「おはようございます提督、何か言う事は・・・！」ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
「・・・・・・長門、今日も良いボインだな！（グッ）」
「涅槃へ行けーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッッッ！！！！」
ドゴーーーーーーーーーーーーーーンっ！！！
爽やかな笑顔でサムズアップするスケベ提督に長門と呼ばれた美女の鉄拳が落ちた。
別棟を歩いていた赤を帯びた茶髪を肩口まで伸ばした緑のスカートのセーラー服を着た中学生位の女の子とプラチナの長髪に黒いセーラー服を着た中学生位の少女が炸裂音が聞こえ立ち止まる。
「〝夕立〟ちゃん、今の音って・・・」
「提督っぽい、多分長門さんの逆鱗にまた触れたっぽい・・・」
この鎮守府では日常茶飯事な事？なので冷静に二人はまた歩き出した。
「そう言えば〝睦月〟ちゃん、もうすぐ新しい艦娘が来るっぽい？」

「うん、着任するのは一週間後みたいだね」
他愛無い話をしながら、二人の少女は教室に向かった。

その世界は『２つ』の問題を抱えていた。
『１つ』は、海の底から出現する謎の艦艇軍、人類はそれらを『深海棲艦』と呼称した。駆逐艦から超大型戦艦まで多彩を極める『深海棲艦』の猛威によって人類は制海権を喪失した。
『もう１つ』はこの地球に異常進化した巨大生命体、通称『怪獣』。彼等は古代から生息しており、その巨体は人類の生活圏において脅威とされ、人類は彼等を畏れた。
『深海棲艦』の脅威に対抗できるただ１つの存在。それが、在りし日の戦船の魂を持つ娘達ーーーーーーーーーーーー『艦娘』である。
『武装』と言う武器を装着し、生まれながらにして『深海棲艦』と互角に戦う彼女達。
『怪獣』達は巨体以外は穏やかな性質を持った存在が多数におり、彼等は国連軍に

よってシールドに覆われた『怪獣保護区域・鏑矢諸島』にて保護管理され、その島を生活の場としていた。

ｌ武志ｓｉｄｅｌ

そしてこの『深海棲艦』と戦う他に『特殊な任務』を持った鎮守府の『提督』、春日野武志は顔を洗い、歯を磨き、身だしなみを整えると軍服に袖を通し、子供の頃から大事にしている『結晶体』を首に下げ。

長門型一番戦艦 秘書艦〝長門〟。

長門型二番戦艦 秘書艦補佐〝陸奥〟。

二人の艦娘を連れて提督室に向かう。ちなみに帽子は頭にできたタンコブが引っ込むまで被らずに持っていた。

「いててて、もう少し優しく起こして欲しいなぁ」

「ならば起き抜けのセクハラは控えて欲しいのですが?!」

「聞いた陸奥？ 君のお姉さん結構辛口じゃない？」

「そうは言っても提督、さすがに毎度毎度、ラッキースケベは控えた方が良いわよ。

この間なんて私のスカートの中に顔を突っ込んでいたし・・・」
「イヤ～、俺もわざとやっている訳ではないんだ、運命の女神が俺をラッキースケベに導いてしまうんだ・・・！」
「ならばその運命の女神は随分と如何わしい女神なのでしょうね！」
「(ヒソヒソ)ひどいよな、長門ってば、昨日の夜はあんなに可愛かったのに・・・」
「(ヒソヒソ)あれも姉さんの照れ隠しなのよ♪昨日の夜は提督だけでなく私にまであんなにアンアン言ってる姿を晒しちゃったんだから♪」
「(ヒソヒソ)久しぶりだからって結構がっついていたなぁ・・・」
「そこ！ヒソヒソ話をしない!!＝＝＝＝」
ヒソヒソ話をしながら意地の悪い笑みを浮かべる提督と妹に顔を赤らめた長門がツッコむ。そんな漫才を繰り広げている内に『提督室』とプラカードが立てられた提督の執務室に入ると、黒髪の長髪にメガネを掛け、セーラー服を着た才女がいた。
「おはよう〝大淀〟」
「はい、おはようございます。提督」
任務艦にして大淀型一番艦軽巡洋艦〝大淀〟はにこやかに武志に答える、武志

は執務机に座ると長門と陸奥が大量の書類を机に置き、書類の山を作った。
「うへぇ、こんなにあるのかよ・・・」
「ここ数日サボっていたツケです。さっさと終わらせてください！」
ゲンナリとする武志に長門が一喝を聞くと、武志は首と肩を鳴らす。
「しゃあないか・・・(コキコキ)」
そして書類に手を伸ばすとーーーーーーー

～三時間経過～

「おし、終わった～♪」
「(ヒソヒソ)普通、三日は掛かる仕事を三時間で終わらせちゃったわね・・・」
「(ヒソヒソ)提督は普段からやる気を出せば長門さんもガミガミ言わないんですけどね・・・」
「お疲れ様でした提督。では次の・・・」
「さ～て！他の艦娘の皆の所に行ってこよ～っと♪」

「どこに行くこの不良軍人ーーーーーーーーーーーーッッッ！！！！」

スタコラさっさと提督室を出る武志に怒鳴りながらドタドタと追いかける長門をやれやれと苦笑いを浮かべる陸奥と大淀。

ｌｓｉｄｅ ｏｕｔｌ

ブーン！ブーン！ブーン！ブーン！ブーン！

けたたましく警報が鳴り、鎮守府に所属する艦娘達に緊張が・・・・・・全く走らなかった。警報の音から『敵襲』ではなく『いつものドタバタ』と判断したからだ。

「この警報って・・・」

「ハイなのです、提督が脱走したのです・・・」

《全艦娘に告げる！ アホ~~ﾃｲﾄｸ~~提督~~ﾃｲﾄｸ~~が逃げた！ 直ちに捕獲して提督室に連行せよ!! 抵抗する場合は砲撃しても構わん!! 殺さず生け捕りにせよっ！！！》

「長門さんも過激な事言うわね・・・」

「まぁ、いつもの事だね・・・」

「よう、雷、電、暁、響♪」

「「「あ、提督」」」

第六駆逐隊（通称 暁四姉妹）

一人前のレディを目指す黒髪ロングのロリっ娘、暁型駆逐艦　〝暁〟。

銀髪ロングのＣＯＯＬな性格の僕っ娘ロリ、暁型駆逐艦二番艦　〝響〟。

明るい茶髪を肩口まで伸ばした頼りにされたいロリっ娘、暁型三番艦　〝雷〟。

同じく茶髪のロングを後ろにアップした内気な性格の正当ロリっ娘、暁型四番艦　〝電〟。

我が鎮守府の癒し担当とも言えるチミッ娘艦娘である。

「提督！　お仕事をサボるなんていけないわよ！　暁がレディとして捕まえちゃうんだから！」

「提督！　お仕事が大変なら私を頼っても良いのよ！」

「ハハハハハハ、捕まえてごらん♪」

「アワワ！　暁ちゃんも雷ちゃんも行っちゃったのです。どうするのです響ちゃん？」

「まぁ、追いかけよう、提督を捕獲せよと言われてるしね・・・」

ー鎮守府・弓道場ー

ここに弓矢を構える下はミニスカートの改造巫女服のようなのを着た二人の少女がいた。

一人は白銀の長髪を靡かせた赤いヘアバンドをしたおしとやかな雰囲気の美少女、五航戦の翔鶴型航空母艦 一番艦〝翔鶴〟。

もう一人は黒髪をツインテールにした勝ち気そうな雰囲気の五航戦の翔鶴型航空母艦 二番艦〝瑞鶴〟。

二人は構え、弓を引くと放たれた矢は的のど真ん中に突き刺さる。

「よう♪翔鶴・瑞鶴♪相変わらず良い腕ねん♪」

「あ、提督。ありがとうございます」

「アンタ、また仕事サボってウロチョロしてんわね・・・」

「アハハハハ♪何を今さら♪」

「胸を張るんじゃないわよ・・・！」
「瑞鶴！　提督に対してそんな言い方は・・・！」
「翔鶴姉ェは甘いのよ、このアホにはもっと厳しく・・・・」
すると、弓道場に突風が吹き、翔鶴と瑞鶴のスカートが捲れる。
「「キャア！(ひゃあ！)」」
「(ギュピーン)むっ！」
スカートを抑える翔鶴と瑞鶴だが、武志はバッチリ二人のスカートの中身を目に焼き付けた。
「〓〓〓〓〓」
「提督・・・見た？〓〓〓〓」
「・・・・翔鶴、麗しい白だな。瑞鶴、青と白の縞パンだなんて、良く分かっているな！(グッ)」
サムズアップする武志に瑞鶴は弓矢を構えて。
「言いたい事はそれだけか!?　このエロ提督!!」
「(ボソボソ)わ、私は、提督がお望みでしたら・・・〓〓」

顔を赤くして小声で大胆発言する翔鶴を無視して、瑞鶴と武志の追いかけっこが始まった。

ー鎮守府・廊下ー

鎮守府の廊下を二人の女性が歩いていた、翔鶴と瑞鶴と同じ改造巫女服（一人はスカートが赤、一人は青）を着ており。

黒髪ロングをストレートに伸ばした、一航戦の空母機動部隊の旗艦を務める正規航空母艦〝赤城〟。

黒髪をサイドテールに結んだ、同じく一航戦の正規航空母艦〝加賀〟。

鎮守府で最も頼りにされる二人の目の前に突如爆発が起きる。

ドカーーーーーーンっ！！！

「「っ!?」」

何事と身構える二人に武志提督が吹っ飛んでくる。

「「提督!?」」

「赤城に加賀!?」

吹っ飛んできた提督は赤城の方にぶつかり。
「どへっ！」
「キャッ！」
「赤城さん！」
「いてて(ムニュッ)、ん、なんだ？この揉み覚えのある感触は・・・・？(ムニュッムニュッムニュッムニュッ)」
「て、提督、そんな、ん❤！こんな昼間からあ、あん❤////」
目を開けると、赤城を押し倒した態勢で赤城の大きな胸を揉んでいた。
「あ、赤城・・・って事は・・・・」
「何をしてるのですか、提督・・・・？」ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
底冷えする冷徹な声に反応して武志が顔を向けると。
「嫌、加賀！今回は決してワザとではなく(パフッ)ふが？」
顔を向けた武志の眼前に紫色のパンツが目の前にあった。
「提督！何をふぁっ！んん！」
「ふがふがふがふがふがふが！(待て加賀これもワザとではないぞ！)」

「ちょっと提督！　喋っちゃんあっ♥！　はぁっ♥！　あぅん♥！　あぁぁんんっっ♥♥!!」

色っぽい声を上げる加賀の股から顔を離した武志。

「はっ♥・・・あぁ・・♥！」

加賀は顔を蕩かせ、口元に一筋の涎を垂らしてへなへなと尻餅を付く。

「あの～、加賀さん・・・？」

「あの提督、私の胸からも手を放してんあっ♥」

「うわっとすまない！」

赤城から退いた武志に、正気に戻った加賀は涙混じりに頬を僅かに紅らめた怒り顔を浮かべ、いつの間にかフル装備になり。

「提督！　許しません！////////」

「いたわ！　エロ提督！　覚悟なさい！」

「げっ！　瑞鶴!?」

今度はフル装備の瑞鶴が現れたので撤退する。

「待ちなさい！　今日と言う今日こそ息の根を止めてやる！」

「五航戦は邪魔よ、提督は私が始末するわ・・・！」
「何よ！一航戦！」
「見つけたぞ提督！お覚悟ッッ！！！」
「ゲェッ!? 長門！」
今度は暁達を引き連れてフル装備の長門をやって来て、長門の砲撃と加賀と瑞鶴のが放った矢が戦闘機になり提督に弾幕の雨が降り注ぐ。
ドカン！ドゴン！バカン！ドタン！バタン！ドゴーーーーーーーーンっ!!
「ギョエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエっ！！！」
提督の悲鳴が鎮守府に響いたーーーーーーー

ー提督室ー
ズズズ・・・・×2
『ギョエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエっ！！！』

「今日も平和ね～」
「そうですね～」
提督室では陸奥と大淀が提督の悲鳴を聞きながらまったりとお茶を飲んでいた。
「昨日の夜は長門さんと陸奥さんが？」
「えぇ、一昨日は〝愛宕〟と〝高雄〟、その前は赤城と加賀、更にその前は〝足柄〟と〝羽黒〟で、その更に前は〝金剛四姉妹〟ね。大淀も間宮さんを誘ってみたら？」
「・・・・そうしたいのは山々ですが、中々・・・・」
「全く、提督って普段はアホなのに罪作りよね・・・」
「えぇ、ですが、〝惚れた弱み〟と言うヤツでしょうかね？」
「フフフ、そうかもね」
普段はアホの提督、でも鎮守府の艦娘全員が知っている、春日野武志提督が『特殊な鎮守府』で本当に頼りになる司令官である事を・・・。

そしてその夜、人々は美しい『不思議な光』を見た。まるで満天の星光が降りて

きたような『光』に人々は魅了された。
しかし、それが『人類の更なる厄災』であることを誰一人知るよしもなかった。

---

《オリジナル主人公》
『春日野 武志』 CV細谷佳正（テニスの王子様 白石蔵ノ介、ハイキュー!! 東根旭）
階級：大佐
容姿：青色の長髪を後ろに結わえた端麗な顔立ち（全艦娘曰く、黙っていればイケメン）。中肉中背だが、引き締まった体格（全艦娘曰く、提督は脱いだらエロ凄い）。
性格：エッチなラッキースケベ体質にして自身もスケベな女の子大好き（15歳～40歳まで）。仕事や指揮能力は超優秀なのだが、デスクワークは良くサボる。艦娘との信頼関係の為と言ってサボっては艦娘達と遊んでいる。一見チャランポランなアホに見えるが、艦娘達全員心から大切に思っており、艦娘達も信頼と愛情と恋慕を抱いている（実は武志は知らないが艦娘達の間に協定が結ばれ、抜け駆け厳禁と

され、アダルト組は夜戦は二人以上とされている)。

いつか『深海棲艦』や『怪獣』と共存する世界を目指している。

能力、指揮能力は天才的で『深海棲艦』との戦いや『怪獣』の保護の指揮と八面六臂の活躍をする。だが、銃火気の扱いはド下手(真っ直ぐ打った弾が明後日の方角に飛んでいく程)。しかし素手の戦闘は艦娘達も敵わないほど、柔術、合気道、太極拳の達人。特技は空気投げと一瞬で艦娘のブラを抜き取るスケベ技。

# 艦隊コスモスⅡ

コスモスへの変身は次回です、

---

その日の夜遅く、世界に〝謎の光〟が落ちてきた。まるで雪のように舞い落ちる〝光〟に人々は目を奪われた。
だが、人々は知らない、この〝光〟が人類に〝災い〟をもたらす事にーーーーーー

ー武志ｓｉｄｅー

同時刻、鎮守府提督 春日野武志大佐は謎のエネルギー反応が出た事を聞いて、帽子を被り、ガウンを着て指令室に入ってきた。既にそこにいた秘書艦の長門と秘書艦補佐の陸奥、そしてサポート艦娘の大淀がいた。
「大淀、状況は・・・？」
「はい、未知のエネルギー反応が現れ、更に〝謎の光の粒子〟が都心部に現れ、強

い光を放って都市を破壊しそのまま消えてしまったそうです・・・・」

大淀の報告を聞いた武志提督は思案の表情を浮かべると、武志提督の後を追ってきて同じようにガウンを着た、少々ほでったような雰囲気の翔鶴と瑞鶴が指令室に入室した。

「「(あ、今日は翔鶴と瑞鶴か・・・・)」」

昼間あんなにドタバタをした二人(主に瑞鶴)との事があったので、長門と陸奥と大淀のジト目になるが、武志提督は構うことなくこの場にいる艦娘達に指示を飛ばす。

「大淀、追跡は出来るか？」

「あ、はい、只今・・・」

「長門、陸奥」

「「ハッ／ハイ」」

「大淀の報告が上がったら赤城や加賀、金剛達や妙高達に、明朝、全艦娘に戦闘配備で待機を伝えてくれ」

「全艦娘に、ですか・・・？」

「杞憂だったらそれで良いが、いざって時の為にな・・・」
「「了解」」
「翔鶴、瑞鶴」
「「はい！」」
「工房にいる明石と〝妖精〟達に通常武装と、〝Ｌ武装〟の整備と準備を通達してくれ」
鎮守府に存在する不可思議な存在『妖精』、彼女達は武装の整備と準備、果ては武装の開発から艦娘の建造までこなす鎮守府の心強い存在なのだ。
「〝Ｌ武装〟を、ですか・・・」
「〝陸〟に上がる準備をしろって事・・・？」
「もしもの事態に備えて、だよ・・・・」
言い淀む提督だが、こう言う〝シリアス顔〟の提督の〝もしも〟は大抵当たるのを知っているので、翔鶴と瑞鶴は頷く。
「提督、追跡結果が出ました。〝鏑矢諸島〟です・・・」
『っ!!』

大淀からの報告に武志提督は渋面になり、長門達は驚愕に染まる。
「この鎮守府から約１００キロ離れた、〝怪獣保護区域 鏑矢諸島〟か・・・」
「狙いは保護されている怪獣達かしら？」
長門と陸奥が難しい顔を浮かべ、武志提督は翔鶴と瑞鶴に指示を出す。
「翔鶴、瑞鶴、妖精達にジェット機の準備もしておくように通達してくれ」
「「了解っ！」」
武志提督の指示を受けて、翔鶴と瑞鶴は指令室を出て工房に向かった。
「提督が赴くのですか？」
「俺なら保護管理センターの人達に顔が利くからな」
「唯でさえ国防軍と保護管理センターは犬猿の仲だものね、提督くらいしかあの人達も安心できないでしょう」
陸奥の言葉に全員が苦笑いを浮かべる。国連軍は〝怪獣の殲滅〟を考え、鏑矢諸島に保護されている怪獣達を快く思っていない、あわよくば軍事的に利用しようとする事も考えるてる程だ、だが、そんな軍部の中でも怪獣との共存を考える派閥もあり、国連軍は殲滅派と保護派に別れ睨みあっていた。武志提督は23歳と言う若

輩でありながら艦娘達と積み重ねてきた〝実績〟がありこの『特殊任務』も兼ねた鎮守府の提督を任されているのだ。

「提督、私と陸奥も・・・」

「いや、君たちまで居なくなったなら指揮系統が動かなくなる。長門は俺が不在の間の指揮を、陸奥は補佐を任せた」

「「了解っ！」」

「では提督、誰と誰を護衛に付かせますか？」

大淀からの質問に武志提督は頷き。

「うん、まだ鏑矢諸島に行ったことの無い〝睦月〟と〝夕立〟を連れて行こうと思う」

「あの二人を、ですか・・・」

「ん？　あの二人じゃ不満かい？」

「不満と言う訳ではないですが・・・」

「この鎮守府の〝任務〟の中には〝怪獣達の保護〟も入っているんだ、丁度良い所だろう」

実際、鏑矢諸島に赴いた事がある長門と陸奥と大淀も苦笑いを浮かべて頷いた。

ー後日・鏑矢諸島上空ー

「どうだ？　睦月に夕立、お空から見る海の景色は？」

「凄く綺麗です提督！」

「でも二人乗りのジェット機に無理やり夕立と睦月ちゃんが乗ってるから少し窮屈っぽい・・・」

「ハハハハ、夕立も睦月もチャーミングだから少し窮屈で済んでるんだよ、長門や陸奥じゃこうはならないからな♪」

武志提督は通信機を操作し管理センターに連絡を取る。

「イケヤマ管理官、応答願います。イケヤマ管理官、応答願います！」

《武志大佐か？　何だまた可愛い艦娘ちゃんを連れてデート気分で来たな～、あぁ、羨ましい！》

「ハハハハ、まぁそう言わないでくださいよ、これも任務の内ってヤツです♪」

以前からの友人である『イケヤマ管理官』と他愛ない話をする武志提督。

「て、提督！　後ろから何か飛んで来たっぽい！」
「お、『リドリアス』！」
『ピヤアアアアアアアアッ!!』
武志提督が乗るジェット機の上を青い身体にトサカが赤く背中から翼を伸ばした巨大な鳥が現れた。
「随分粗っぽい出迎えだな、『リドリアス』・・・」
武志提督はいつも首に下げている『青い水晶』を振り回し、その『水晶』から音が流れた。
『ヒュヤアアアアアアアッ！』
『リドリアス』と呼ばれた巨大な鳥は〝水晶〟からの音に引かれて平行飛行する。
「リドリアス、付いてこいよ！　睦月、夕立、少し揺れるぞ！」
「えっ・・・？」
「ウソっ・・・？」
武志提督はジェット機を宙返り、シャンデル、インメルマンターン等でリドリアスと楽しく遊覧飛行を楽しんでいた。因みに睦月と夕立は目を回していた。

『ピヤアアアアアアアアッ!!』
「やるなリドリアス！　ハハハハっ！」

ー地上ｓｉｄｅー

「やってるな、武志提督め・・・」
『怪獣保護管理センター』と書かれた建物からアロハシャツに作業服を羽織った無精髭に恰幅の良い体型の男性、彼が提督と連絡を取っていた『イケヤマ管理官』がリドリアスと戯れる武志提督の乗るジェット機をにこやかに見ていた。

ー鏑矢諸島・岸壁ー

『フワアアアアアン・・・!!』
「うわ〜〜、見て見て睦月ちゃん！　大きな鳥さんがのんびりしてるっぽい！」
「あれは『友好巨鳥リドリアス』って言うんだよ、夕立ちゃん！」
鏑矢諸島の崖の上から、先程出会ったリドリアスが巣で寛いでいるのを睦月と夕立は武志提督の運転での疲れが一気に吹き飛び、リドリアスに夢中になっていた。

そんな二人にイケヤマ管理官と武志提督が近づく。
「こうして大人しいのを見てるとね、シールドで閉じ込めておくのが可愛そうになってくるよ・・・」
「何とかできないっぽい？」
「もっと自由に空を飛んだらリドリアスちゃんも・・・」
「睦月、夕立、気持ちは解るけど、〝今〟はまだ無理な話だ。リドリアスが自由に空を飛びまくったら色々な国が警戒してしまうからな・・・」
武志提督は〝理想を貫く難しさ〟と〝現実の厳しさ〟を知る故に、苦言を漏らす。
「あんなに大人しくて可愛いのに・・・」
「他の艦娘の皆もリドリアスは可愛いって言ってたっぽい」
「フフフ、武志提督のご指導は、ちゃんと行き届いていますな」
「恐縮ですよ」
「提督は軍人じゃなくて鏑矢諸島で働きたいって思わないっぽい？」
「ん～～、難しいな、鏑矢諸島~~ここ~~で働きたいとは思うが、可愛いく綺麗な艦娘の皆とサヨナラするのも嫌だしな・・・！」

「提督が軍人辞めたら他の皆も軍を辞めちゃうかもっぽい・・・」
「〝金剛〟さんや〝榛名〟さんなんて得にね・・・」
「羨ましいね、美少女&美女に囲まれた軍人生活なんて・・・！」
「ハハハハ・・・さてと、睦月、夕立、そろそろお仕事モードだぞ」
武志提督が言うと、睦月と夕立は直ぐに立ち上がり、持ってきた索敵レーダーで周辺を調査を開始する。睦月達が目を離して直ぐに寝そべっていたリドリアスの身体に〝光の粒子〟が集まる。
「昨日の夜、都心を襲った〝謎の光の粒子〟の調査か？」
「ええ、映像から細かく調べた所、〝謎の光の粒子〟は一つ一つに生物反応があったんです」
「どゆこと？」
「分かり安く言うと、あの光の粒子は生物なのではないかと言う訳です、それも生物で言えば〝ウイルス〟のような・・・」
ギュアアアアアアアアアアアッ!!
『っ!?』

突然崖下からリドリアスが雄叫びを上げて飛び出してきた。
「リドリアスっ!?」
「どうしたのっ!?」
「っ！」
武志提督は首に下げた〝水晶〟を手に振り回す。
「あの水晶って、提督がいつもぶら下げている水晶だけど・・・」
「リドリアスはあの水晶からでる音が好きなんだ」
しかし、リドリアスは音に反応せず飛び回り、リドリアスの首に〝光の粒子〟が輝いた。
「っ！　あの光を・・・！」
急降下するリドリアスの目を鋭くし、口から光線を放つ。
「ヤバい！　避けろーーーーーー!!!」
提督が叫び、イケヤマと睦月と夕立が光線から逃げ、光線が地面を抉る。
『ピギュアアアアアアアアアッ!!!』
リドリアスは天高く飛び、シールドを突き破り外界へと飛び出した。

「睦月！　夕立！　リドリアスを追うぞ！」
「了解っ！」
「武志大佐！　リドリアスを頼むよっ！」
「最善を尽くします！」
武志提督と睦月と夕立はジェット機に乗り込みリドリアスを追う。リドリアスを追いながら武志提督は長門達に連絡を取る。
「こちら武志提督だ。長門、応答せよ！」
《こちら長門。提督、何が起きましたか？》
「光の粒子がリドリアスに取りついた、そのせいでリドリアスが凶暴化してシールドを突き破った！」
《リドリアスがですか!?》
「長門！　大淀にリドリアスの向かう先を調べさせろ！　後、全艦娘に〝Ｌ型武装〟を装備するよう指示！　睦月と夕立の装備も忘れるな！」
《了解っ！》
《提督！》

「大淀か？　リドリアスの向かう先は？」
《はい！　リドリアスは現在〝J1 エリア〟に向かっています！》
「J1 エリアか・・・大淀、直ぐにそのエリアの住民に避難勧告を出すんだ！」
《了解っ！》
武志提督からの指示で大淀が J1 エリアの住民に避難勧告を出した。
「提督・・・」
「何だ？」
「リドリアスを戦わないといけないっぽい・・・？」
「俺達はリドリアスを殺すんじゃない、リドリアスを止めて連れ戻すんだ・・・！」
「「連れ戻す・・・？」」
武志提督は〝決意〟を込めたまなざしで断言する。
「あぁ、リドリアスを連れ戻すんだ。必ずな！」
すると提督の水晶が青く光り輝く。
「っ!?」
武志提督の脳裏に、子供の頃の記憶が甦る。『青く光る光の巨人』との出会い、

『巨人』から貰った水晶の事。

「・・・・・・・・・」

「提督・・・？」

「どうしたんですか・・・？」

「いや、もうすぐ鎮守府だ。二人共、気を引き締めろ・・・！」

「「はい！」」

ー鎮守府ー

ジェット機を着陸させた提督は長門達が持ってきたＬ型武装を睦月と夕立に装備させ、他の艦娘達の列に整列させる。お立ち台に立った提督は艦娘達を見渡す。全員が武志提督の言葉を聞くために真っ直ぐに自分を見つめる。

「皆知っての通り、現在リドリアスが都市へ向かっている」

提督の言葉で艦娘達の表情が曇る。睦月と夕立以外の艦娘達も何度か鏑矢諸島に行き、リドリアスと交流を持っていた艦娘も少なからずいたからだ。

「俺達の任務は〝深海〟と戦うだけではない、怪獣達の保護、ならびにこんな事態になった時の為に陸戦用武装のＬ型武装を配備されていた。だが、俺はリドリアスを殺す気は一切ない！　俺はリドリアスを救いたい！　でも、俺一人では出来そうに無い！　だから、皆！　俺に力を貸してくれ！」

飾りっ気の無い真っ直ぐな言葉に艦娘達は姿勢を正し応える。

『了解ッ!!』

「（ウルトラマン・・・俺は必ず、皆とリドリアスを救って見せる！　君に約束した・・・真の勇者になって見せる！　俺の愛する艦娘達と一緒にッ!!）」

武志の想いに呼応するかのように、胸元の水晶が淡く光っていた。

---

『陸戦用武装ʃʃＬ型武装ʃʃ』

艦娘達が陸で戦闘ができる為の武装、足にローラースケートのような武装を付け、足親指でスイッチを押すことで加速ʃʃ右足ʃʃと減速ʃʃ左足ʃʃができる。

# 艦隊コスモスⅢ

今回で艦隊コスモス編は終わります。

---

ーＪー１エリアー

避難勧告が発令され、Ｊー１エリアの住人達は警察と共に睦月、夕立、暁達、如月達等と言った艦娘がＬ型武装で陸地を滑走しながら住人達の避難誘導をしていた。。

「早く逃げて下さーーーーい！」

「こっちです！」

「慌てないで！」

「くれぐれも安全第一に・・・！」

「皆、安全に避難して！」

「慌てず、押さないでなのです！」

「急いで下さいっ！」

避難誘導する睦月達のインカムに上空からジェット機でリドリアスを追っていた武志提督から連絡が入る。

《皆、リドリアスがＪ－１エリアに入るぞ。長門達がリドリアスと交戦に入る、君達も向かってくれ》

『了解！』

住人の避難を警察に任せ、睦月達が到着すると丁度リドリアスが土煙を上げて降り立った。

『ビュヤアアアアアアッ!!』

リドリアスの首には例の〝謎の光〟が首輪のように巻き付き、リドリアスは悲鳴をあげていた。

「リドリアス・・・！」

「見て睦月ちゃん！　光が消えていくっぽい！」

『ビュヤアアアアアア・・・・!!!!』

リドリアスの首に巻き付いていた光が溶けるように消えていく。勿論その事態

は、ジェット機に乗りリドリアスを見ていた武志提督も見ていたが光を分析していた大淀から連絡が入る。

《提督、リドリアスに巻き付いている〝光〟は消えているんじゃありません！》

「どういう事だ・・・？」

《リドリアスの体の中に溶け込んでいるんです！》

「なんだとっ!?」

武志提督はリドリアスの首を見ていると〝光〟はリドリアスの体に完全に溶け込み、一瞬リドリアスの首に粉瘤のようなモノができ、光りだすと直ぐに消えた。

《あー！　リドリアスの熱量、急激に増大！　細胞が変化していきます！》

「リドリアス！」

武志提督が目を向けるとリドリアスに異変が起きた。

『ビュヤアアアアアア・・・』

青い表皮が紫色になり、眼は赤く光り、頭部に鋭い刺が生え、爪も鋭く異常に伸び、頭頂の鶏冠は刺々しい三ツ又の矛のようになり、可愛らしかったリドリアスの姿が攻撃的な姿に変わった。

『カオスリドリアス』と呼ぶべき姿に。
「ううわっ！」
「これが光の、ウイルス!?」
その姿に夕立はドン引き、ジェット機に乗る武志提督も戦慄すると大淀から連絡が入る。
『提督、住人の避難は完了しています』
「良し。長門、オペレーションスタート、抑制弾だ！」
《了解！全艦、抑制弾発射！》
地上にいる長門達は『対怪獣用武装』からミサイルを発射し、カオスリドリアスに周りに撃ち込み爆発すると、白い煙がカオスリドリアスを包み込む。
だがーーーーーーーーー。
『ギュアアアアアアアっ!!』
煙が晴れると、カオスリドリアスの頭頂部が赤く発光する。
「っ！全艦、リドリアスから退避っ!!」
武志提督の指示で長門達はカオスリドリアスから退避するとーーーー。

ドカアアアアアアアアアアアアンンッ!!

カオスリドリアスの口から光線が発射され、横凪ぎに街を破壊した。

「リドリアス・・・・・!」

《提督、こちら赤城・・・・!》

「赤城！　皆は無事か!?」

《何とか・・・・提督、あの子はもうリドリアスではありません。捕獲はあきらめましょう・・・・!》

「・・・・・・・・・」

《提督！　攻撃許可をっ!!》

「一つ、試してみる・・・・・!」

武志提督はジェット機を操縦してカオスリドリアスに向かい、カオスリドリアスの正面に来るとハッチを開け、クリスタルを回し音を響かせる。

「提督っ！」

「リドリアスが好きだった提督のクリスタルの〝音〟で大人しくさせる気か・・・・?」

「そんな無茶な！」

武志提督の行動を加賀、長門、陸奥が驚愕して見ていた。

「リドリアス・・・酷い姿になっちゃったな・・・」

『ギュワッ・・・』

カオスリドリアスが音に反応して、武志提督の方へ顔を向ける。

「聞こえるだろ？リドリアス・・・・！」

『ギュワッ・・・ギュワッ・・・』

「リドリアスをなだめるつもりなのですか・・・？」

「ムチャよ・・・！」

地上から見ていた翔鶴と瑞鶴も見ていた。

「帰ろう、ここはお前のいる場所じゃない・・・」

『ヒュウゥ・・・ヒュウゥ・・・』

カオスリドリアスが〝音〟に反応して大人しくなり。その光景を艦娘達もジッと見ていた。

『ヒュウゥワ・・・ヒュウゥワ・・・・！』

カオスリドリアスが首を振るって正気を取り戻そうとする。
「よーし、いいぞリドリアス！　がんばれ！」
『ヒュウゥワ・・・ヒュウゥワ・・・・！』
「リドリアス！　頑張って！」
「元に戻って！　リドリアス！」
「リドリアス！　本当の自分を取り戻すんだ！」
「リドリアス！　頑張るのです！」
『リドリアス！』
暁、雷、響、電、〝島風〟達もカオスリドリアスに呼び掛け、カオスリドリアスの姿が元に戻ろうとする。
「そうだ！　がんばれ！」
カオスリドリアスは本来のリドリアスの姿に戻った。
『ピュヤアッ！・・・フワアアアッ！』
「よーし、いいぞ！」
「やったーーーー!!」

「リドリアスが元に戻ったっぽい！」
「提督凄ーーーーい！」
『ピュヤッ！ピュヤッ！』
睦月と夕立と如月や年少組の艦娘達は歓喜を上げ、〝青葉〟と〝龍驤〟がカメラを回し撮影していた。
「リドリアスが、元の姿に・・・！」
「こんな事が・・・！」
「フウゥ、敵わないな、提督には・・・」
「流石、私達の提督ね・・・」
「ですね・・・」
赤城と加賀は呆然とし、長門と陸奥と大淀は笑みを浮かべた。
「よーしリドリアス、ついてこい！」
提督はジェット機を操作してリドリアスを誘導する。
『ピュヤアッ!!』
リドリアスは背中の翼を広げて提督のジェット機を追う。

「帰ろう、島へ、リドリアス・・・」
『ピュヤッ！』
しかし、リドリアスの背中に火花が散った。
『ピュヤアアアアアアアアッ！！！』
「リドリアスッ!?」
『ッ！！！』
武志提督と艦娘達が驚愕すると、リドリアスの近くを戦闘機が三機飛んできた。
《提督、防衛軍です！》
「何っ!?」
大淀の連絡を受けた武志提督に防衛軍からの連絡が入る。
《春日野武志大佐、あとはこちらにお任せを。ただちに退去されたし》
「やめろ！　攻撃はやめてくれ！　リドリアスは大人しくなったんだ！」
しかし、リドリアスの方が防衛軍に攻撃を始めた。
「やめろリドリアス！　お前が攻撃しちゃダメだ！」
ジェット機を旋回させた武志提督はリドリアスを追う。リドリアスは口からの光

線で戦闘機を攻撃しようとする。戦闘機は捻りで交わしリドリアスの機銃をぶつける。

『ギュワアアアアアアッ！！！』

再びリドリアスがカオスリドリアスに変化した。

「リドリアスがまた！」

「防衛軍、余計な事を・・・!!」

陸奥と長門が驚愕するなか、カオスリドリアスの頭頂部が発光する。

「やめろ、リドリアス！」

武志提督のジェット機がカオスリドリアスの正面に飛ぶと口から発射された光線が提督のジェット機を掠め火花が散った。

「わぁーーーーーーーーっ!!」

『提督ーーーーーーーーーー！！！』

「提督！脱出してください!!」

しかし、脱出装置が作動せず、武志提督は機体を安定させようとする。

「うぐぐぐぐ！諦めるか！諦めるものか！俺は、絶対に諦めない！！！」

武志提督の想いに呼応するかのように、ペンダントの水晶が光りだす。
「！　長門さん！　生命反応です！」
「何!?」
大淀の武装が何かの〝生命反応〟を関知した。
「巨大な生命エネルギーが近づいてます！」
宇宙空間から巨大な青い光が、地球に向かっていた。
「姉さん、あれ！」
陸奥の指差す方へ目を向けると、青い光の落下進行先には提督のジェット機がいた。
「不味い、このままでは提督が！」
光はジェット機にぶつかり、ジェット機は爆散した。
『提督ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー!!!!!!!』
全艦娘達が悲壮の叫びをあげる・・・・・・。
ー？？？　ー

武志提督は青い光の中で眠っていた。
「(会いたかった、会いたかったんだ・・・)」
「諦めるな、武志」
「(えっ?)」

ー長門ｓｉｄｅー
長門達が愕然としていると、武志提督が持っていたペンダントの音色が響いた。
「この音・・・この音はどこから?」
全艦娘達が耳をすませていた。

ー??? ー
「(俺は諦めちゃいない、俺は本当にーーーー)本当に勇者になりたいんだ、ウルトラマンコスモス!」
目を覚ました武志は自分の真上に浮遊していたクリスタルに手を伸ばすとクリスタルが光輝く! 溢れた光が武志を包み込む!

ｌ長門ｓｉｄｅｌ

長門達の目の前に再びカオスリドリアスが降り立った。そしてカオスリドリアスに戦闘機が機銃を当てる。

『ギュワアア！ギュワアア！』

再度戦闘機がカオスリドリアスを攻撃しようとすると、カオスリドリアスの前に〝青い光〟が降り立つ！

『っ!!』

長門達が驚くなか、青と銀の〝光の巨人〟が現れた！

「あれは・・・！」

「まさか・・・！」

「ウソでしょう？」

「かつて現れた光の巨人・・・ウルトラマンコスモス！」

《攻撃中止！攻撃中止！》

長門、陸奥、加賀、赤城が呟くと、インカムから防衛軍の通信が耳に入った。

ｌコスモスｓｉｄｅｌ

カオスリドリアスが鋭い爪でコスモスを攻撃しようとするがヒラリとかわしたコスモスはカオスリドリアスの攻撃を受け流す。

『フワッ！』

次々とカオスリドリアスが攻撃を繰り出すが、コスモスは受け流し、防ぎ、いなし、かわす。

『フワッ！　ハアッ！』

カオスリドリアスの両手を押さえると、カオスリドリアスは嘴で攻撃するがコスモスは受け止める。

『ハアアアアアアッ!!』

嘴を押さえたままコスモスはカオスリドリアスを押し出す。

『ハアッ！』

『ギュアアアアアアアアっ!!』

再びカオスリドリアスが攻撃するがコスモスは攻撃をかわすと、カウンターで太極拳の双推手をカオスリドリアスの腹部に叩きつけ、カオスリドリアスを後ろに下がらせる。

『ギュアアアアアアアアっ!!』

カオスリドリアスが攻撃をするが、コスモスは自分から攻勢に出ず、カウンター攻撃を繰り出す。カオスリドリアスが光線を放つがコスモスを防ぎ、拡散させた。

『イヤアアアっ!!』

『ギュアアアアアッ!!!』

『フワッ！ ウウウゥゥ・・・ハアッ！』

カオスリドリアスが光線を再び光線を放つが、コスモスはシールドで防ぐとカオスリドリアスにシールドをぶつけた。するとカオスリドリアスの身体は自らの技でダメージをくらわせる技、『リバースパイク』

『ギュっ！ ギュワアア！』

コスモスは鳥が羽ばたくような構えを解くと、目から光を出してカオスリドリアスを身体の中にある〝光のウイルス〟をサーチした。

すると、コスモスの胸の前に光が生まれ、両手で掬い上げるようにコスモスが構えると左手で光を持ち、右手で押し出すように光をカオスリドリアスに向けて放つ！

一筋の光はカオスリドリアスの身体を包み込むと、カオスリドリアスの身体が光り輝き、身体から〝光のウイルス〟が天へと登っていった。

「あ！　〝光のウイルス〟を切り離したようです！」

大淀が驚きながらもにこやかにコスモスの技を理解した。邪悪を打ち払うコスモスの技『ルナエキストラクト』だ！

〝光のウイルス〟から切り離されたカオスリドリアスは元のリドリアスへと戻った。

『キュワアアアアアア』

『(コクン)』

コスモスが頷くとリドリアスは翼を広げて鏑矢諸島へと帰っていった。

『ショウアっ!!』

それを見届けたコスモスは大空へ飛んで青い光となった。

「あれが伝説の、巨人・・・」
「帰ってきた、ウルトラマンコスモスが・・・」
陸奥と長門、そしてこの場にいた艦娘達が見届けた、ウルトラマンコスモスの再来を。

ｌ武志ｓｉｄｅｌ
青い光が地面に降り立つと、そこに武志提督がいた。
「ハア、ハア、ハア・・・」
息切れする武志は手の中のクリスタルに目を向けた。
「俺が・・・俺がウルトラマンにーーーーなった・・・」
武志提督は大空に目を向けると、大淀に通信を送り、無事を知らせた、数分後に鎮守府の全艦娘達が迎えに来てもみくちゃにされるは、無茶な行動をして怒られるはの悶着があったが、彼等は帰っていった、自分達の〝帰る家〟、〝鎮守府〟へとーーーーーーーーーーー。

それから数日後、防衛軍からリドリアスの暴走や、防衛軍が邪魔したからリドリアスが再び暴走したと武志提督が防衛軍の上層部と一悶着を起こしたが、〝光のウイルス〟が原因である事で話が終わり、その事件の処理が終わった後の鎮守府に〝新たな艦娘〟がやって来た。

「はじめまして、司令官！　吹雪です！　よろしくお願いします！」

茶色を帯びた肩口まで伸ばした黒髪を後ろで結わえた15～16歳位の少女、特型駆逐艦の一番艦『吹雪』。

「うん、よく来てくれたね。ウチは知っての通り『深海』と戦うだけでなく、『怪獣保護』もやるからかなり忙しいけど、よろしく頼む」

「はい！」

「うん、じゃ君は第三水雷船隊に配属ね。もうすぐ同じ第三水雷船隊の娘が来るから、その娘に案内してもらって」

「(コンコン)提督、睦月です」
「話をすれば影だね。睦月入っていいよ」
「(ガチャ)失礼します！」
「睦月、新しい娘が来たから、鎮守府を案内して」
「はい！」
「じゃ吹雪、睦月に案内して貰って」
「はい！失礼します！」
吹雪と睦月は提督室から退室した。
「よろしいのですか？只でさえ先日のリドリアスの一件で防衛軍から睨まれているのに、新しい艦娘を着任させて・・・」
「以前から配属は決まっていたんだから、防衛軍も文句を言えないでしょ♪」
「提督、あの艦娘はそれほどに重要なのですか？」
不安がる大淀を陸奥が宥め、長門は武志提督に質問する。
「ん～まぁ大丈夫だよ。ひょっとすると、これからの戦況に彼女は必要になるかもしれない」

「〝勘〟ですか・・・？」
「〝勘〟だね」
「提督の〝勘〟は良くも悪くも当たりますからね・・・」
「しかし睦月だけでは心配だな、良し俺も・・・」
「ダメです・・・！」
ちゃっかりサボろうとする不良提督の首根っこを捕まえる長門。
「提督、まさか着任してすぐの娘に早速手をだすつもり？」
「う～ん、正直吹雪はあれ以上胸は成長しないな、だが、あのフレッシュさとスカートから出る生足がなんとも・・・！」
「「提督・・・」」
一瞬長門達の目が据わると武志は弁解する。
「ナメるな皆、あの程度のスカートで手を出すなら、俺はとっくに〝島風〟に手を出している！」
島風型駆逐艦『島風』。歳のくらいは中学の高学年で、「早き事〝島風〟如く、です！」と豪語し、非常に気まぐれでマイペースな艦娘で手足もすっきり長いスレ

ンダーボディだが、〝黒い兎のカチューシャ〟、〝露出過多の服〟、〝超ミニスカート〟〝縞々のニーソ〟とかなりきわどい格好をした艦娘、しかも提督になついているので武志提督も煩悩を振り払う為結構辛い想いをしている。

「言ってて格好良いつもりですが、内容が非常に情けないですね・・・」

「まあまあ・・・ま、彼女には期待を寄せている。ひょっとすると、ひょっとしたらな事が起きるかもしれない」

窓から広がる大海原を見ながら、提督は懐に隠したクリスタルから作ったコスモスへの変身道具『コスモプラック』を眺める。

「(コスモス、俺は怪獣達だけじゃない、深海達とも共存していきたい、その為にも、君の力を貸してくれ・・・・!)」

『コスモプラック』は武志提督に呼応するかのように光る。

そして武志と吹雪はこれから困難な道が待ち受けようとしている。果たして、武志は『青き慈愛の巨人』と共に、〝真の勇者〟へとなれるのかーーーーーーーーーー

ー『艦隊コスモス』ー

時には拳を、時には花を、戦いの場所は心の中。自分にだけは決して負けない、本当は敵なんかいない。『ウルトラの誓いと願い』を胸に彼は叫ぶ！

「コスモオオオオオオオスっ!!」

---

ーコスモスに変身してからの春日野武志ー

ルナモードの影響か、艦娘達の傷を癒す能力を得る。しかし、癒された艦娘は一種の（性的）興奮状態（個人差アリ）になろ事がある、これは武志提督の性格が少なからず影響している。

コロナモードになる前に終わらせてしまったのが心残りだ。でも後一回、吹雪と提督の日常編をやったらネクサス編へと行きます。

# 艦隊コスモス番外編 吹雪の１日秘書艦

注:ちょいエロが入ります。後吹雪を結構イジメます。

---

その日の夜、春日野武志提督は自室の布団の上で生まれたままの姿で仰向けに寝そべり、同じように生まれたままの姿になっている長門と陸奥に話しかける。
「長門、陸奥、吹雪がこの鎮守府に来てもう１ヶ月になるな・・・・」
「えぇ、そうですが・・・ん♥」
普段の凛々しさが無くなり、艶っぽい雰囲気で豊満な胸を揺らす長門は武志提督の胸板を舌で舐める。
「吹雪に〝アレ〟をやらせて見ようかなって思うんだけど」
すると提督の下腹部の固くなったモノを豊満な胸で挟んで舌を這わせていた陸奥が声をあげる。
「提督ったら、ン♥〝アレ〟を吹雪ちゃんに、あっ♥やらせるの？」

「まあね、ここにいる艦娘達は皆経験してるんだし、そろそろ頃合いかなってさ♪」
「私は構いませんが・・・・」
「そうね、吹雪ちゃんがどんな風にできるか興味あるし♪」
二人の了承を得た武志提督は起き上がり、横たわる長門の上に陸奥を抱き合わせるように乗せる。
「「あっ、提督・・・❤」」
「んじゃ二人共、明日はヨロシクな♪」
「「あぁああんッ！❤❤❤」」
合わされた二人の秘所に武志提督の熱く硬いモノが入り長門と陸奥は嬌声を上げる。

ー翌日ー

「え、えええええええええぇぇぇッ！！！　わ、私が1日秘書艦っ！！！？？？」
朝早く提督室に呼び出された吹雪は長門と陸奥（二人共お肌がツヤツヤ状態）からの突然の辞令に仰天した。

「ウム、実は私と陸奥はこれから少々所用で手が離せなくなってな、サボり癖がある提督を働かせる為に臨時秘書艦を必要としている。そこでお前に任せてみようと思ったのだ」

「で、でも私に秘書艦だなんて・・・・」

「まあそんなに緊張しなくて良いわよ、ここの艦娘は全員経験していることだし♪」

「え、と言う事は睦月ちゃんや夕立ちゃんも？」

「無論だ、暁達とてやっている」

「でもどうして？」

「それはだな、知っての通りウチの提督は良く仕事をサボる」

「はい、それは知ってます」

着任してすぐ、仕事をサボって吹雪を連れて鏑矢諸島に飛んでいき（吹雪はリドリアスの巨体に目を回すがすぐにリドリアスに夢中になる）、間宮の甘味処で和風スイーツを食べていたり、飛龍と蒼龍の部屋から何か服を着崩して出てきたり、暁達と遊んでいたり、那珂ちゃんのライブに付き合ったりとかなりのサボりの常習犯である事を睦月達から聞いていた。

「この鎮守府にいる艦娘達は、私や陸奥が仕事で手が回らなくなったり、遠征で留守の際に提督を捕獲して仕事をやらせるための訓練として、秘書艦の仕事を経験させているのだ・・・！」

「ハア・・・・」

「そこでだ・・・！」

長門は封がされている書類が入る大きめの分厚い茶封筒を吹雪に差し出す。

「この封筒に入っている〝重要書類〟を提督にやらせるのがお前の任務だ」

「これをですか・・・？」

「そうだ、〝今日中〟にやらせるのだ」

「え、〝今日中〟ですか!?」

「そうだ、任せたぞ」

そう言って長門と陸奥は去っていった。

ー鎮守府・食堂ー

「あぁ、吹雪ちゃんにも遂にその任務が来ちゃったんだ・・・」

「夕立達もやらされて、大変な思いをしたっぽい・・・」
「やっぱり睦月ちゃん達もしたんだ、それでどうしたの？」
「提督にのらりくらりと逃げられて、その日は１日中提督と追いかけっこしたよ・・・」
「夕立も丸め込まれて提督や暁ちゃん達とビーチバレーで遊んだっぽい♪」
「追いかけっこにビーチバレー・・・」
睦月は苦笑いを浮かべ、夕立はビーチバレーが楽しかったのか嬉しそうに話した。
「吹雪ちゃんも気を付けてね、提督のペースに巻き込まれたらこっちの負けだから・・・」
「加賀さんと瑞鶴さんも提督のペースに乗せられてその任務に失敗したっぽいよ・・・」
「加賀さんと瑞鶴さんが・・・・！」
「赤城さんと翔鶴さんは成功したけど、かなり苦戦したって言ってたし・・・」
「吹雪ちゃんも頑張ってね」
友人二人はそのまま川内達と哨戒任務に赴き、吹雪は朝食を片付け、提督室へと向かった。

ー武志ｓｉｄｅー

「♪～♪～♪、いや～間宮の甘味はなぜあんなに美味しいのかなぁ・・・♪」

ガチャ・・・。

提督室の扉を開けた提督の目の前に吹雪がおり、目を細める。

「提督、お待ちしておりました！さあ！この封筒の書類を・・・」

バタン・・・ピュ～～！

無言で扉を閉めてトンズラした。

「提督ーーーーーーーーー!!」

ー鎮守府・工房ー

「あ、提督。今度の新武装の開発計画なんですけど・・・」

「明石、今は流石に新武装を作るには少し無茶があるぞ、資材だってタダじゃないんだからな・・・」

明石と工房で駄弁り始める提督。

「提督！」
その後ろから吹雪が現れた。
「おお～吹雪、どうした？」
「〝どうした？〟、じゃないですよ！直ぐにこの書類に・・・！」
「分かった分かった。それじゃあさ吹雪、〝小さく前へならえ〟してくれる？」
「何でですか？」
「それを見ればやる気が出るんだよね～」
「本当ですか？」
「本当本当♪」
渋々と〝小さく前へならえ〟をする吹雪。
「じゃ今度は少し頭を下げて」
「はい・・・」
会釈するように頭を下げる吹雪の隣に提督が立ち。
「『募金、お願いしまーーーーーーーーす!!』」
吹雪の今のポーズはまさに、〝募金を求める人〟のポーズであった。

「・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・プププ・・・！」
「ウフフ・・・♪」
愕然となる吹雪と笑いを堪える明石をおいてけぼりにして提督は姿を消した。

ー愛宕&高雄の部屋前ー
「さてと、次はドコへ・・・・・」
「提督ーーーーーーーーーー!!」
遠くで吹雪の叫び声が聞こえた。
「おっと、吹雪のヤツもう来たか・・・！」
逃げようと行動を起こそうとする提督の後ろにあった扉が開き、そこから伸びた2つの手に服を捕まれ提督は部屋の中に連れ込まれる。
「うわっ・・・・・！」
提督が部屋の中に消えると、入れ替わるように、黒髪のボブカットヘアに青緑の軍服にタイトスカートから伸びるムチッとした肉付きの良い足をガーターベルトで

包んだ豊満で抜群のプロポーションをした美女、高雄型重巡洋艦一番艦 高雄。
「あ、高雄さん。提督を見かけませんでしたか？」
「提督？ ごめんなさい、見てませんわ・・・」
「すみません、提督ってば一体何処に・・・・！」
高雄に会釈すると直ぐに別の場所に探しに行く吹雪を見送ると、高雄は部屋に戻る。
「提督、吹雪ちゃんは行って・・・って愛宕！ 抜け駆けはダメって言ったでしょ!!」
高雄の目の前に提督の服が殆ど脱がされ露になった胸元に舌を這わせている、金色の長髪に高雄に負けず劣らずの豊満で抜群なプロポーションに前が大きく開いた長スカートからでるムチッとした肉付きの良い足を黒タイツで包んで、ほんわかとした雰囲気の美女、高雄型重巡洋艦二番艦 愛宕を引き剥がす。
「あん♪ だって高雄。最近怪獣任務や深海との出撃が多くて中々提督との夜の時間が取れなかったじゃない・・・！」
プウッと頬を膨らませる愛宕に提督は頭を掻く。

「ああぁ、確かにそうだったな、悪いな愛宕、寂しい思いさせちゃってさ・・・」
提督は起き上がり片腕で愛宕の腰回りに腕を回して抱き締める。
「提督・・・❤」
「て、提督！私だって寂しかったんですよ！」
「分かってるって、高雄もほら・・・」
もう片方の腕を広げて、高雄を呼ぶ。
「提督・・・❤」
両手に愛宕と高雄を抱き締めて、二人をベッドに転がせると、二人の軍服を丁寧に脱がせ、愛宕はピンクのフリルの着いた下着姿、高雄は黒いレースの下着姿となった。

ー提督室前ー
昼御飯近くになり。提督を探し回っていた吹雪は提督室に戻ってきた。
「提督～！どこですか～！」
提督室に入ると、提督（お肌がテカテカ状態）が執務机に座っていた。

「提督！(パアッ)」
「おお～吹雪、良いところにソコの用紙を持ってきてくれ・・・」
「はいっ！提督もやっとやる気に・・・」
「当たり前だろ・・・」
軍服の下に愛宕と高雄に付けられた大量のキスマークを隠すように服を整えた提督は、吹雪から用紙を貰うとハサミを持ってチョキチョキと切る。
「あれ？・・・・・」
「実は(愛宕と高雄の部屋から出て直ぐ)、暁達に凧上げを教えて欲しいって言われてな♪」
黒の色紙で『武』と作られた凧を持ち上げる。
「うわあああああああああああっ!!」
吹雪の悲鳴が鎮守府に響いたーーーーーーーーーー
ー鎮守府・グラウンドー

「オイ吹雪、返してくれよ俺の凧！」
「書類を書いてくれるまで返しません！」
追いかけっこを始める吹雪と提督。
「絶対！絶対に渡しませーーん!!」
吹雪は鎮守府の外にまで逃げ出した。
「死んでも渡しませーーーーーーーーーーーん!!・・・・・・・・・・・・」
しかし、吹雪のうしろに提督の姿はなく、吹雪はそのまま駆けていった。

ー提督ｓｉｄｅー
「提督！提督！あがったのです！」
「おお、上手いぞ電・・・！」
「暁の方がもっと高くあげられるわ！」
「暁には負けないわよ！」
「まだまだあがりそうだね・・・」

黄色の色紙で『電』、青い色紙で『暁』、赤の色紙で『雷』、緑色の色紙で『響』と張られた凧が鎮守府の空を舞っていた。それはもう通り過ぎる艦娘達は皆ほのぼのとした顔になるほどに微笑ましい光景だった。

「提督ーーーーーーーーーー!!」

すると、吹雪が提督の凧を持ってようやく戻ってきた。

「おお～吹雪、やっと戻ってきたか、昼飯はまだあるから食べておいで、ね♪」

「～～～～～～～～！」

暢気に笑う提督に吹雪はさめざめと涙を流した。

ー鎮守府・提督室ー

「さ～て、暁達ともたっぷり遊んだし、今度は金剛達とお茶でもしようかな～～？」

「そう言う事は！書類を終わらせてから「ウー！ウー！ウー！ウー！」この音って・・・」

顔を青くする吹雪を余所に、提督はシリアスな顔になり、端末で大淀に連絡を取る。

「大淀、何が起きた？」

《哨戒に出ていた川内達から通信です、不法投棄されていたゴミの山に〝光のウイルス〟が入り込み、未確認の怪獣が現れ、暴れているそうです！》

「分かった、川内達には怪獣の牽制をするように伝えてくれ・・・！」

《了解・・・！》

「吹雪、出撃だ！」

「了解しました！あ、でも書類が・・・」

「言ってる場合か！睦月達が戦ってるんだぞ！」

「は、はい！吹雪、出撃します！」

封筒を提督室の机に置き、急いで出撃する吹雪を見送った提督は封筒を一瞥するとーーーーーーーーー。

ー鎮守府・外ー

指揮を長門に任せ、鎮守府の外に出た武志提督は『コスモプラック』を天に突き出し叫ぶ！

「コスモオオオオオオオオオオスっ!!」
『コスモプラック』の上部が花の花弁が花開くように展開され、中のクリスタルが光輝くと武志提督の身体を包み、その姿を変えた！

ー川内のいる地点ー
そして、川内、神通、那珂、睦月、夕立。吹雪を除いた第三水雷船体の五人は、後頭部にドクロの模様がある昆虫のような怪獣『カオスバグ』と遭遇し、応戦するが『カオスバグ』の左腕から放たれる光を浴びて、空腹で倒れた。『カオスバグ』の蛍のような尻尾が緑色に光る。

「シュオワッ！」
『コスモスっ!!』
睦月達の体力を奪っているカオスバグの光を防ぎ、睦月達は遅れてやった来た吹雪達に救出される。
カオスバグは触覚から怪光線を放つも、コスモスはバク転やらを駆使し怪光線を

かわし、興奮抑制光線『フルムーンレクト』を放つ。しかし、命の無いゴミから生まれたカオスバグには効かず、カオスバグはエネルギーを救出し、目から光線をコスモスに向けて放つ！

「デヤッ！」

コスモスは手から障壁を張り防ぐが、押し出され倒れてしまう。

「キシャアアアアアアっ!!」

倒れたコスモスにカオスバグは奇声を発して迫る。

「フワッ・・・・！」

コスモスはカオスバグを〝倒す〟決意を持つ、立ち上がり、右手を天高く伸ばすとコスモスの回りに炎が舞いコスモスの身体を包むと赤く光輝き、頭部も伸びてその姿を変えた！

数々の攻撃技を駆使して戦う姿、『コスモス・コロナモード（コスモスＣ）』。

迫り来るカオスバグの攻撃を払い、正拳を叩きつける！

「トアッ！ ダァッ！」

「キシャアアアアアアっ!!」

奇声を上げて迫るカオスバグの攻撃をかわし、コスモスＣは回し蹴りを胸元に叩きつける！
「フワッ！タアッ！」
ピコン、ピコン、ピコン・・・
カラータイマーが点滅を初めた。コスモスＣはカオスバグを投げ飛ばす！
「キシャアアアアアアっ!!」
「フウゥ～～～!!」
カオスバグは目を青くし、怪光線を放とうとするが、コスモスＣは両腕を広げて円を描くように回し力を込めて放つ『ネイバスター光線』を放つ！
「デヤアアアアアアアアアアっ!!」
カオスバグが放った怪光線とぶつかるが突き破り、カオスバグの頭部を貫き、カオスバグを粉砕した！
「(グッ！)」
「やったーーーーーーーーーー!!」
「コスモスーーーーーーーーーー!!」

吹雪は良しと言わんばかりに拳を握り、睦月と夕立はコスモスCの勝利を喜び、川内達もお互いを見て頷きながら、コスモスCに向かってサムズアップする。
「シュウワッ!!」
そして、コスモスCは天高く飛んで行った。

ー鎮守府ー
「皆お疲れ様♪」
「提督！書類仕事を！」
「今間宮が特性餡蜜を作ってくれたから食べてきな」
『は～～い！』
「え、ちょっと、提督～～～～！」
皆の波に飲まれた吹雪は餡蜜を御相伴になった。

ー鎮守府・廊下ー
夕方になり提督は肩を鳴らしながら廊下を歩いていた。

「さ～て、今日も１日ご苦労様っと・・・」
「そう言う台詞は、書類を終わらせてからにしてください！」
「それはそうと餡蜜って美味しいよな吹雪？」
「提督！今日私は秘書艦として長門さんに託された書類を終わらせないと・・・」
「毎日でも食べたいけど、でも爪がな・・・」爪・・・・？」
両手と爪を見る提督に吹雪は首を傾げる。
「餡蜜ってあんまり食べ過ぎると、爪が臭くなるって言うからなぁ・・・」
「えっ・・・？」
「『うふっ♥』」
両手の爪の匂いを嗅ごうとする吹雪に『うふっ♥』と書かれたプラカードを取りだした提督。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「吹雪、お前って良い娘だな♪」
愕然とする吹雪を置いていって、提督はささっと去っていった。

ー鎮守府・食堂ー

「(ず～～～～ん)」

提督にすっかり手玉に取られた吹雪は落ち込んでいた。

「吹雪ちゃん、元気だして・・・・」

「瑞鶴さんなんて『募金お願いします！』でプッツンしちゃってフル装備で提督追い回したっぽいし、加賀さんも『うふっ❤』のポーズ取らされちゃって、それを青葉さんに撮影されちゃってプッツンしちゃったっぽいから・・・」

「でも加賀さんの『うふっ❤』のポーズはかなりレアだったから青葉さん、凄いはしゃいでたね・・・」

落ち込む吹雪を元気付けようと睦月と夕立がフォローするが、吹雪は顔を上げなかった。すると、食堂に長門と陸奥がやって来て、吹雪に近づく、吹雪は二人の姿を見ると慌てて立ち上がる。

「吹雪・・・」

「長門さん、陸奥さん!? ごめんなさい！私・・・」

「良くやったな・・・」

「えっ・・・？」

長門の言葉に首を傾げると陸奥が書類の入った封筒を差し出し、吹雪が中身を見ると。

「『今日はお疲れ様、実は吹雪が出撃して直ぐに終わらせちゃいました♪』」

と書かれた紙があった。

「出来ているなら、ヒック・・・出来ているって、何で・・・ヒック・・・！」

既に終わらせていた提督に吹雪は涙ぐむ。

「あぁ～～何だ吹雪・・・ご苦労・・・」

「頑張ったわね、吹雪ちゃん・・・」

「ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンッ!!」

大滝の涙を流す吹雪を睦月と夕立が慰め、長門と陸奥を不憫そうに見つめていた。

ー鎮守府・屋上ー

ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアンッ!!

「フッ吹雪、まだまだ甘いな・・・」

吹雪の泣き声を聴きながらニヒルに笑いながら満天の星空を眺めてましたとさ。

ちゃんちゃん♪

---

次回でネクサスです。一話完結で行きたいですね、クロスするのは。ヒント『宇宙人』。

# To LOVEる NEXUS

かなり短く作りました。

---

この世界の地球には、人知れず異星人達が住んでいた。

『彩南町』

その町に住むオレンジ色の髪を逆立たせた平凡な少年、『結城リト』の周りには、『デビルーク星』の第1王女『ララ・サタリン・デビルーク』とその妹の第2王女『ナナ・アスタ・デビルーク』、第3王女『モモ・ベリア・デビルーク』、宇宙1の殺し屋『金色の闇[illegible]通称ヤミ[illegible]』、ヤミの妹『黒咲芽亜[illegible]メア[illegible]』、ヤミの生みの親『ティアーユ＝ルナティーク』、宇宙の闇医者『ドクターリョウコ[illegible]御門涼子[illegible]』、他にもララ達の親衛隊隊長の『ザスティン』他二名。と相当数の宇宙人達がリトの周りにおり、彼女達（主にララ）が引き起こす騒動にリトのクラスメート『西連寺春菜』と『古手川唯』やリトの妹『結城美柑』まで巻き込まれ、ドタバタ

な日々を過ごしていた。

しかし、そんな彼等の『日常』は、宇宙の危険生物によって、崩壊されたーーーーーーーーーー。

「美柑！　逃げるぞ!!　急いで!!」

「リトっ！」

美柑を手を引きながらリトは『異形の巨大生物』から逃げていた。

「リト！　こっち、こっち！」

「ララ！　皆!!」

仲間達と合流するリト。

「モモ、何なんだよあの化け物・・・」

「あれは『スペースビースト』、S級危険生物と指定される宇宙最大の凶悪なモンスターです！」

当たり前に続くと思っていた『日常』を踏み潰す魔物の名を『スペースビースト』。

「彼等には、理性など存在しません。『食欲』と『殺戮』、『破壊衝動』の権化とさえ言われ、〝スペースビーストが現れた星は必ず滅びる〟とさえ謂わしめる程の危険生物です・・・！私も彼等と戦った事がありますが、命からがら逃げるのが精一杯でした。まさに知性の無いケダモノです・・・！」

「私もあの化け物とは戦いたくないなぁ、精神が完全に私の操作できるレベルじゃないから精神攻撃があまり通用しないからね・・・」

宇宙最強の殺し屋達も表情を強ばらせる！ムカデのような異形の怪物スペースビースト〝ペドレオン〟は猛威を奮う！そして、形をエイのような形にして空を飛び！リト達の近くに怪光線を放つ！

「うわあああああああああああああああああああああああああっ！！！」

『きゃあああああああああああああああああああああああああっ！！！』

仲間達と離ればなれになったリトの前にペドレオンが立ち塞がる！

「・・・・・何なんだよ、お前達に何の権利があってこんな事をするんだよ？オレ達の町を・・・オレ達の日々を・・・お前達がメチャクチャにするなら・・・オレは、オレは戦う!!」

すると、リトの前に〝光〟が現れ、それを掴むと。〝赤いＹが刻まれた青い輝石が嵌められた白い短剣〟、『エボルトラスター』が握られていた！

「っ!!」

『エボルトラスター』を見た瞬間、リトの脳裏に何人かの人の意思が入った。それは、リトと同じように〝光〟を受け継いできた勇者達の想い！

「オレに、オレに〝光〟を受け継ぐ資格があるなら、力を貸してくれ！『ウルトラマン』!!!」

リトは『エボルトラスター』をまるで刀か剣を抜くように構え、『エボルトラスター』から剣を引き抜くとそこから光が溢れ、リトの身体を包み込む！

そして地球人、宇宙人問わず、人々は見た！

銀色に輝き、深紅のＶ字に青い輝石を付けた『光の巨人』を!!

『シュッ！』

「何だ、ありゃぁ!?」

「〝光の巨人〟・・・!?」

「プリンセスララ、あれは・・・!?」

「もしかして、『ウルトラマン』・・・？」
「『ウルトラマン』って・・・？」
「宇宙の正義と秩序、平和を守る守護神と言われる存在です。ですが、その存在は、〝神話の存在〟と言われていたのですが・・・」
『シュワッ!!』
今、『宇宙の守護神』の力を受け継ぐ『適能者~~§§~~デュナミスト~~§§~~』となった結城リトの戦いが幕を開けた！
そして、〝光〟と相反する〝闇〟の存在との戦いもーーーーーーーーーー。

ー『To LOVEる NEXUS』ー
男なら、誰かの為に強くなれ！　転んでも良い、また立ち上がれば良い！　歯を喰いしばって、思いっきり笑えば良い！　ただそれだけできれば『英雄』さ!!
「人と人との〝絆〟に、地球人も宇宙人も関係無い！　繋がり紡ぐ〝絆〟はーーーー光そのものだから・・・!!」
「どんなに〝闇〟が私達も蝕もうとも、私達は決して負けません！　私達は独りじゃ

ないから・・・!!」

「光は〝絆〟!! 受け継がれる絆・・・・・それが『ネクサス』だ!!」

---

ネクサスとマックスとメビウスは、一話で終わらせていきます。

次回ウルトラマンマックス編とクロスするのは？

ヒント、『温泉』。

# ゆらぎ荘のマックス

ウルトラマンマックスとゆらぎ荘の幽奈さんのコラボです。

---

『湯けむり町』ーーー温泉街として賑わうこの町にやって来て住む事になった。黒髪を後ろに結わえ、鋭い目付きにどこぞの某奇妙な冒険の三代目と四代目主人公のように常時学ランを着た霊媒体質の高校生『冬空コガラシ』。

彼は『幽霊にとり憑かれやすい体質』故に、多くの霊に憑かれマトモな青春を送れず、更に借金まで背負うことになり、バイトをしながら生活する苦学生なのである。しかし、あらゆる霊に取り憑かれた事で〝料理〟から〝スポーツ〟や〝漫画製作〟とあらゆる事が出来る〝万能超人〟になったのだ！

「フゥ〜。今日はバイトが少し長引いちまった、〝幽奈〟のヤツ心配してないだろうな・・・？」

現在コガラシが下宿している『曰く付きの元温泉宿 ゆらぎ荘』。其処には浮遊霊でコガラシと同室の女子高生地縛霊の『湯ノ花幽奈』、妖怪を成敗する忍者『誅魔忍』の『雨野狭霧』と、この間ゆらぎ荘に越してきた狭霧の従妹『雨野雲雀』、猫神に愛された猫系女子『伏黒夜々』、酒呑童子の末裔の飲んだくれ爆乳美女『荒覇吐呑子』、化け狸のおっぱいマニア幼女『信楽こゆず』、龍神の家『龍雅家』に仕える神刀『神刀朧』、ゆらぎ荘最古参の座敷童子『中居ちとせ』、そしてゆらぎ荘の住人では無いがコガラシのクラスメートの『宮崎千紗希』、普通じゃない住人達とドタバタな日々を過ごしていた。

バイトが長引き、夜の街道を歩いていたコガラシが夜空を見上げると、〃一筋の流れ星〃が山に降りて行くのが見えた。

「あの〃流星〃、まさか・・・・・・！」

コガラシは勢い(本気になるとアスファルトを砕くので手加減をして)を付けて走り、山へ向かう。山に付いたコガラシの目の前に〃光〃が佇んでいた。

コガラシはフッと笑うとその〃光〃に触れたーーーーーーーーー。

すると、コガラシは〃光の空間〃に立っており、見上げると深紅の身体にプロテ

クターを付けた逞しい身体の〝巨人〟がいた。
「ウルトラマン・・・！」
『久しぶりだな冬空コガラシ、君が〝月の裏側〟に現れた〝悪霊〟を退治した時以来か・・・』
〝光の巨人『ウルトラマン』〟。彼等は宇宙の秩序と正義と平和を守るために宇宙を駆け巡りながら〝悪辣な宇宙人〟や〝凶暴な怪獣〟と銀河を舞台に戦っているのだ。
そしてコガラシとの関係は、かつてこの地球に〝最悪の悪霊〟が現れ、コガラシとその〝師匠〟、そして多くの霊媒師達が力を合わせてその〝悪霊〟を倒した。
そして、実はその〝悪霊〟の力を狙って多くの凶悪な宇宙人達が地球に迫っていたが、『ウルトラマン』達は宇宙人の襲来から地球を守るために戦い、その経緯でコガラシと知り合ったのだ。
「一体どうしたんだよ？　お前さんは確か地球では長時間活動が出来ない筈だろう・・・？」
『コガラシ、実はこの地球を〝宇宙人〟達が狙っている・・・！』

「何・・・!?」

『かつて地球に現れた〝悪霊〟の存在により、多くの凶悪宇宙人がこの地球に興味を持ってしまい、この地球で暗躍をしているようだ・・・!』

「成る程な・・・それで俺にどうして欲しいんだ?」

『知っての通り、私はこの地球では長時間活動する事が出来ない。コガラシ、私に力を貸して欲しい・・・!』

「俺の知り合いにその手の事に長けた奴等がいるから、ソイツらに協力を求める気は?」

『残念ながら、我々『ウルトラマン』の存在を知っているのは、君と君の〝師〟と一部の霊媒師だけだ、異星人の存在を知るには地球人全てが、その段階に来ていない。我々の存在は無用な混乱を招く恐れがある。私は、私が本当に心から〝信頼〟できる君に、力を貸して欲しいのだ・・・!』

「・・・・・分かったよ、一緒にやろうぜ、『マックス』!」

コガラシが答えると『マックス』と呼ばれた『ウルトラマン』は手を翳すとコガラシに向かって〝光〟を放つ。コガラシはその〝光〟を受けとると周りの景色が光

に溢れ・・・・・。

「ん？　夢・・・って事はないよな・・・」

目を覚ましたコガラシの手には鳥のようなエンブレムが刻まれたスティック、『マックススパーク』が握られていた。

「コガラシさ～～ん！」

「ん？　幽奈・・・？」

コガラシが山を降りて町道に戻ると声が聞こえたので見上げると『湯ノ花幽奈』が飛んできた。

「良かったぁ、帰りが遅いので心配したですぅ・・・」

「悪い、悪い、さぁ帰るとするか、『ゆらぎ荘』にな！」

「はいっ！」

それからしばらく経ちーーーーーーーーーー。

ーとあるスタジアムー

そこに、昆虫のような頭部に鋏のような形状の短剣が付いた両腕をした『高速宇宙人 スラン星人』がいた。

「ククク、地球は美しい星だ。この星ならば我々スラン星人の第二の故郷にするか・・・！」

ドゴンっ！！！

「っ!?」

「勝手に他人様の星にやって来て侵略なんて、させる訳ねぇだろ・・・！」

スタジアムの壁をぶち破り、コガラシがやってきた。

「この星の人間は、大地を、空を汚し続ける。星の悲鳴が聞こえないのか？ウルトラマンに選ばれし者よ・・・！我々ならばその悲鳴を止める事が出来る！」

「確かに人間は星を汚している。だがな、だからって侵略して良い理由にはならねぇよ、人間だってその過ちに気付く事が出来る筈だ！」

「だが、そのまま危機を乗り越えない限り、その文明は存続する事が出来ない。それは宇宙の歴史が証明している。人間にそんな力があるのか？」

「人間にはな、過ちを正そうとする力がある。間違いを犯したら、その間違いから少しずつ成長していく！」

「この星の未来の為に、我々スラン星人がこの星を支配した方が良い！　我々スラン星人の力を想い知るが良い！」

スラン星人はスタジアムに擬態させた宇宙船を起動させて上昇させるが。

「させねぇよ!!」

コガラシが宇宙船を拳で破壊した！　落下し、爆発する宇宙船からスラン星人が巨大化して現れる。脱出したコガラシはスラン星人を睨むと『マックススパーク』を取りだすと先端が煌めき、左腕に装着されるとコガラシの身体を光が包み込むと、コガラシの胸元に青いクリスタルが現れそこからプロテクターが展開され、コガラシの身体が『ウルトラマンマックス』へと変身した！

「シュワッ！」

「グウゥッ!!」

マックスとスラン星人がにらみ合う。そしてその光景はテレビに報道され、ゆらぎ荘のテレビにも報道される。

「マックスだーーーーーーーーーー!!」
「うぅ、頑張れーー・・・!」
こゆずと夜々は目を輝かせながらここ最近現れた『超人 ウルトラマンマックス』を応援し、幽奈達もそれを見ていた。
「出たな、ウルトラマン・・・」
「一体何者なのかな?」
誅魔忍の情報網にかからない謎の存在に狭霧と雲雀は目を細め、呑子とちとせと朧は静かにマックスを眺め、千紗希と幽奈は。
「幽奈さんはどう思う?」
「え〜と、多分好い人?だと思いますよ・・・」
幽奈達は知らない、この『ウルトラマンマックス』の正体が冬空コガラシである事をーーーーーーーーー。
「シュワッッッ!」
『最強・最速のウルトラマン』、ウルトラマンマックスに選ばれた冬空コガラシは、これから多くの『残虐宇宙人』や『狂暴な怪獣』と戦い続ける事になる。

ー『ゆらぎ荘のマックス』ー

諦めないで伝えよう！ 涙さえも強さに変えて！ 限界を越えて生きる証を刻もう！精一杯未来をいま目指そう！

「冬空コガラシ、肉体派霊能力者にして、ウルトラマンマックスだッッッ！！！！」

---

コガラシにウルトラマンは必要無くね？と思いましたが、『最強・最速』と言われているのに、敵側が強すぎるヤツ等ばかりでイマイチ名前負けしているマックスと、作中最強クラスなのに色仕掛けや幻術や特殊能力にからっきし弱いコガラシは合うと思いました(笑)。

次回はメビウスです！ 自分にウルトラマンへの情熱を取り戻させてくれた作品なので、メビウスは『原作メビウス』と『あるアニメ』をクロスさせようと思いま

す！

そのアニメとは、ヒント『喫茶店』。

# ご注文はメビウスですか?

メビウス(原作)×ごちうさです!
時系列はメビウスは四話以降、ごちうさはシャロ登場の直後です。

---

この地球では、異常進化した巨大生物〝怪獣〟が、時には古代から、時には宇宙から、時には〝侵略者〟達が引き連れ、更には〝侵略宇宙人〟や〝異次元人〟と言った侵略者達が地球を支配しようと現れた。その度に地球側は衛隊チームが結成し、これに対応して来た。
『科学特捜隊(通称 科特隊)』、『ウルトラ警備隊』、『ＭＡＴ』、『ＴＡＣ』、『ＺＡＴ』、『ＭＡＣ』、『ＵＧＭ』。
人類の科学力を駆使するこれらの防衛チームが、地球を侵略者達から守ってきた。だが、地球を守ってきたのは彼らだけではない。
遠い宇宙の彼方『Ｍ７８星雲 通称光の国』からやって来る『光の巨人 ウルトラ

マン』である。

『初代ウルトラマン』、『ウルトラマンセブン(通称 ウルトラセブン)』、『帰って来たウルトラマン(通称ジャック)』、『ウルトラマン A(エース)』、『ウルトラマンタロウ』、『ウルトラマンレオ』と『レオの弟アストラ』、『ウルトラマン80(エイティ)』、そして『ウルトラマンゾフィー』と『ウルトラの父』と『ウルトラの母』、『ウルトラマンキング』。宇宙の平和を守る『宇宙警備隊』である。

多くの『ウルトラ戦士』達がこの地球を、地球に住む人間達を愛し、命を賭けて守り抜いて来てくれた。

その時代を後に『怪獣頻出期』と呼ばれ、怪獣と宇宙人に恐怖心を抱く人々も多く、ウルトラマンの事も快く思わない人間も少なからずいた。しかし、ウルトラマン80(エイティ)が地球から去ってから数十年経ち、ウルトラマンは伝説の存在に、『UGM』が解散した後、防衛チームはほぼ無用の長物と化していった。

そしてこれは、偉大なウルトラマン達の後を継ぐように地球に降り立った『若きウルトラ戦士』の物語である。

ー地球・石畳みの街(町)ー

ヨーロッパのような雰囲気漂う石畳みの街と木組みの家々で出来た街に『ラビットハウス』と呼ばれる喫茶店がある。

そしてその店の一人娘、礼儀正しくクールな性格の中学生『香風智乃(チノ)』。

その店に下宿するアホの娘高校生『保登心愛(ココア)』。

男口調でスタイル抜群のミリタリー娘『天々座理世(リゼ)』。

『和風喫茶店 甘兎庵』の看板娘で天然娘の『宇治松千夜』千夜』。

リゼに憧れるお嬢様を装う苦労人娘『桐間紗路』シャロ』。

そして、チノの頭の上に乗っかっているモジャモジャの毛玉のような姿をしたアンゴラウサギの『ティッピー』がいた。

チノとココアとリゼがラビットハウスで働き、今日は千夜とシャロはお客様としてお店に来て寛ぎ、そしてラビットハウスに新たなお客様が来店した。

「こんにちは!」

「オッス!」

「ヒ、ヒビノさん・・・!?////」

「ア、アイハラさん?!////」

茶髪の爽やかな雰囲気ある青年『ヒビノ・ミライ』を見てチノが、見る限り熱血漢な男性『アイハラ・リュウ』を見てリゼが顔を赤らめる。

ココアはコッソリ千夜とシャロに聞く。

「どうしたのかな？ チノちゃんとリゼちゃん？」

「もしかしたら、チノちゃんはあのヒビノさんって人に、リゼちゃんはアイハラさんって人に、コレ何じゃないかしら♪」

千夜は微笑みながら両手で❤マークを作り、胸に当てると。

「「えええぇぇぇぇぇぇぇっっっっ！！！！」」

「な、なんだ？」

「さぁ・・・？」

ココアは妹にしたいと思っているチノに、シャロは憧れの先輩にまさか片思い中の相手がいた事に驚いていた。

「そう言えばこの前読んだ週刊誌で知ったんだけど、どうやらあのお二人、『ＣＲＥＷ ＧＵＹＳ』のメンバーみたいなの」

「えぇぇぇぇっっ!! って『クレーンゲーム』って何だっけ?」
『ズコッ!』
ココアの大ボケに千夜以外がおもいっきりズッコケた。因みに千夜はアラアラと朗らかに笑っていたが。
「『クレーンゲーム』じゃねぇ!! 『ＣＲＥＷ ＧＵＹＳ』だ!!」
「落ち着いてくださいリュウさん!」
「すみませんアイハラさん! ココアにはちゃんと説明しますから!」
「ココアさん、この街の郊外にある施設を知ってますね」
「うん、知ってるよ! なんかSF映画に出てくるようなカッコいい基地だよね!」
「その基地は、防衛チーム『ＣＲＥＷ ＧＵＹＳ』の基地である、『フェニックスネスト』です。それでここにいる二人はソコの隊員である。ヒビノ・ミライさんとアイハラ・リュウさんです・・・」
「ん〜と、つまり・・・・・はっ! つまりこのお二人は、地球防衛軍の隊員みたいな人達って事!?」
「まぁ、簡単に言うとそうですね・・・」

ココアの理解に脱力しながら、チノはミライ達の紹介をし、簡単な談笑が始まりシャロが質問する。

「確か、ライセンスさえあれば16歳で『ＧＵＹＳ』の隊員になれたりするんですよね？」

「まぁな。俺とミライが所属する『ＧＵＹＳ』の実動部隊も、〝バイクレーサー〟や〝サッカー選手〟、〝現役医大生〟や〝保育士志望の学生〟と言った民間人だからな」

「えぇっ！ってことは、ライセンスがあれば私も〝現役女子高生隊員〟に成っちゃうことが?!」

「えぇ、確かになれますよ、僕も〝ライセンス〟が有ったから『ＧＵＹＳ』に入隊出来たんです」

「他のメンバーは当初渋ってがな・・・」

「リゼちゃんは『ＧＵＹＳ』に入隊しなかったの？」

「確かに『ＧＵＹＳ』の戦闘機とかには興味あったが、ウチの親父が、〝怪獣退治だなんてお前には危険過ぎる！〟と言って許してくれなかったんだ、未成年は保護者の許可が必要だからな。（ボソボソ）アイハラさんのような人がいると知って

いれば、絶対ライセンス試験を受けていたのに・・・!!」
　小声で悔しみを込めた声を出すリゼに、聴こえなかったリュウ以外は苦笑いを浮かべた。
「それで、先輩とアイハラさんは何時出逢ったのですか・・・?」
「(シャロちゃん、片思いのリゼちゃんの意中の相手が気になるみたいね・・・)」
「あぁ、あれは2ヶ月程前だ。私が休日ランニングに勤しんでいると、同じようにランニングしていたアイハラさんと出会ってな!」
「お互いに目を合わせた瞬間にスターターピストルの音が聴こえてな、そのまま二人で〝百キロマラソン〟をしちまったんだ!」
『百キロマラソン!!』
「いや〜。あの時は正に一進一退! 追い付け追い越せの真剣勝負でしたね!」
「あぁ、現役女子高生なのに中々根性あったぞ!」
「イエ、アイハラさんも流石は防衛チームです!」
　和気あいあいと話す二人にミライとココア達は引き気味に見ていた。
「もしかしてリュウさんとリゼさんって・・・」

「似た者同士なのかもしれませんね・・・」
「なんか、私じゃ付いていけない世界かも・・・」
「普通の人は付いていけないと思うわよ、シャロちゃん・・・」
話を変えようとココアは今度はチノに聞いた。
「それじゃさ、チノちゃんとミライさんは何時出逢ったの？」
「はい、あれはココアさんがウチにくる少し前でしたか、私が公園を散歩していると、〝野うさぎ達に埋もれたミライさん〟と出逢ったのです」
『野うさぎに埋もれた？』
「はい、僕この街に初めて来たとき、野うさぎさん達に囲まれちゃって、何時のまにか埋もれちゃったんです」
「そう言えば、この店に来るまで野うさぎがミライにくっついて来てたな。俺が見たら直ぐ逃げたけど・・・」
「現に今も店の窓に野うさぎ達がミライさんを見ています・・・」
一同が窓を見ると、何羽かの野うさぎ達が窓から店内、と言うよりミライを眺めていた。ウサギが苦手のシャロは卒倒した。

「ミライ、お前ウサギに好かれるタイプなのか?」
「ちゃっかりティッピーもミライさんの頭の上に乗っかってますしね」
そして、ミライとリュウは『カフェ・ド・マンシーズコーヒー占いズ』をティッピーにしてもらっていた。
「フムフム、なるほどの～」
「ティッピーって喋れるんですね・・・」
「バカ、あれはチノちゃんが腹話術で喋ってンだよ。まぁあんなダンディーな声が出せるのには驚いたけどな・・・」
「えっ?(でも、〝チノちゃんは声を出していないのに〟・・・)」
常人ではないミライの耳には、チノからではなくティッピーから声が聴こえていた。
「アイハラ・リュウよ・・・」
「なんだ?」
「お主はこれから先、〝思わぬ人物〟と再会するじゃろう」
「〝思わぬ人物〟?」

「ウム、そしてヒビノ・ミライ・・・」
「は、はい・・・」
「お主にはコレから数多くの〝試練〟が待ち受けている・・・！」
「〝試練〟、ですか？」
「ウム、その〝試練〟でお主は辛い想いをするじゃろう、時に挫けそうになる事もあろう、心折れる時もある。まさに〝艱難辛苦な道〟じゃ・・・！」
「〝三三七拍子〟って何？」
「それでは応援の道だぞ・・・」
「〝艱難辛苦〟ですよ、非常な困難にあって悩み苦しむと言う意味です・・・」
「じゃが、その〝試練〟を乗り越えた時、お主はお主が目指す場所に立つ事ができるじゃろう・・・」
「僕の、〝目指す場所〟・・・（それは・・・）「ビー！ビー！ビー！」っ！リュウさん！」
連絡用の端末が突然鳴り響き、ミライとリュウの顔から緊張が入る。
「本部からだな。こちらアイハラ、何が起きた?!」

《リュウさん、ミライくん、ポイントB－65エリアで〝グドン〟が出現したの！》
「何?!　前に倒しただろう?!」
《テッペイ君の推察だと、別の個体のグドンだって、サコミズ隊長から直ぐに戻って『ガンフェニックスストライカー』で出動せよだって！》
「「G・I・G・!!」」
『アマガイ コノミ』からの連絡を切り、ラビットハウスを出ようとするミライとリュウ。
「チノちゃん、また後で！」
「はい、頑張って下さい・・・！」
ミライ達が出た直ぐ、リゼは携帯を持ってきてTVを映す。

－数時間後－
「グギャアアアアアアっ!!」
黒い大きな角を持ち、両腕に長いムチを振り回す『地底怪獣 グドン』が暴れていた。

「良し見つけた！ガンフェニックススプリット！」
『ガンフェニックスストライカー』が分離し、『ガンウイング』、『ガンローダー』、『ガンブースター』の3機になってグドンをそれぞれ別方向から攻撃するが、グドンの攻撃がミライとリュウが乗るガンウイングの翼をかすり火花が散り、不時着した。
「ミライ、地上からグドンを攻撃するぞ！」
「G・I・G・！」
リュウと別れたミライは、左手を上げると、左腕に赤く発光する『メビウスブレス』を出現させ真ん中の赤く輝くトラックボール型のクリスタルに手をかざし回転させ、腕を天に向けて伸ばし叫ぶ！
「メビウゥゥゥゥゥゥゥゥゥスッ!!」
すると、『メビウスブレス』から光輝く『∞~~ﾒﾋﾞｳｽ~~メビウス~~ﾒﾋﾞｳｽ~~』のマークが現れ、光がミライを包むと、ミライはその姿を変えた！
「ヘアっ！」
銀色の瞳に、胸元に菱形のカラータイマー、流線形の身体に赤と銀のツーカラー

の光の巨人『ウルトラマンメビウス』！

ーラビットハウスー

「来ました、ウルトラマンメビウスです・・・！」

「うわー！ウルトラマンだぁっ！」

TV中継でウルトラマンメビウスの姿を見て、顔を少し紅潮させ目をキラキラさせたチノと、始めて見るウルトラマンにココアはおおはしゃぎ。

「チノちゃん、ウルトラマンのファンなの？」

「はい、どちらかと言うとウルトラマンタロウが好きですが、メビウスも好きです・・・！」

「私は、レオが好きだな。シャロはどうだ？」

「えっ？私は、新ウルトラマン$|$ジャック$¿$ですね、千夜はどうなの？」

「私は、エースかしら。怪獣を真っ二つにするのがカッコいいわ・・・」

「私はセブンが好き！」

「おじいちゃんは初代ウルトラマンのファンでした・・・！」
チノの言葉に何故かティッピーがウンウンと頷づいていた。

ーメビウスｓｉｄｅー
「セァッ！ イヤッ！ タァッ！」
グドンの攻撃を交わしながら拳や蹴りで攻撃していたメビウスだが、グドンの両腕のムチが首に回り締め上げる。
「グアァッ!!」
「メビウス！ 今助けるぞ！」
ガンローダーとガンブースターや地上にいたリュウがメビウスの首に巻き付いたムチを攻撃し、ムチが千切れた。
「ギュワアアアッ!!」
「っ！ タァッ！ ハァッ！ シェアッ！」
「グワアアアッ!!」
メビウスの反撃でムチが無くなり反撃が出来ないグドンは後方に下がる。

ーラビットハウスー

『行っけーーーーーーーーーッ!!』

TVを見ていたチノ達は思わず叫ぶ。

ーメビウスｓｉｄｅー

「フッ！　ハァァァ・・・シャァアアアッ!!」

チノ達の応援が聴こえたのか、メビウスをメビウスブレスのクリスタルを擦りながら両腕を横に伸ばし、頭上に持っていくと∞のマークが幾つも腕に集まり、両手の手首を合わせ十字にすると、必殺光線『メビュームシュート』を放った！

「グワアアアアアッ!!!!」

チュドオオオオオオオオオンンンッ!!

『メビュームシュート』を受けたグドンは爆散した。

ーラビットハウスー

「「ヤッタァッ!!」」
「良し！」
「(コクン！)」
ココアと千夜とシャロは喜び、リゼはガッツポーズし、チノは満足そうに頷いた。

ーメビウスｓｉｄｅー
「シュワッ!!」
グドンが倒れたのを確認したメビウスは、天高く飛び去った。

ー数日後ー
その日ラビットハウスに、ミライとリュウや他の『ＧＵＹＳ』メンバーの『カザマ マリア』、『イカルガ ジョージ』、『アマガイ コノミ』、『クゼ テッペイ』が来ていた。
「まさか、こんな洒落たカフェがあったなんてな・・・」

「ホント、しかも店員さんもかわいいしね」
「かわいいウサギさんもいる～♪」
「アンゴラウサギですね・・・」
「『CREW GUYS』の皆さん、ご来店ありがとうございます。サービスの特性カプチーノです・・・」
チノが出したカプチーノには『ガンフェニックス』や『ガンローダー』や『ガンウイング』や『ガンブースター』が描かれていた。
「あ、これカプチーノアートですね！」
「正しくはラテアートです・・・」
「しかもガンフェニックスとかが描かれてるぞ！」
「凄い、こんなに精巧に作れるモノ？」
「殆んど達人のレベルですよ・・・！」
「凄～い！」
「リゼさんが作りました、こういうの得意みたいなんです・・・」
精巧なカプチーノアートに仰天するミライ達はチノの言葉でリゼを凝視した。

「(テレテレ)そ、そんなに凄い物ではありませんよ・・・///」
「嫌、本当にすげぇよ。天々座ってこんな事が出来たんだな・・・！」
「い、いえ！そんな！アイハラさんまで！本当に大した事ではないんですから!!///」
顔を真っ赤にしたリゼが更にカプチーノを作っていた。
「ミライさん！」
「あ、ココアさん」
「はい！これ！」
奥から来たココアが持ってきたのは、〝メビウスの顔のパン〟だった。
「これ、メビウスですね・・・！」
「はい！チノちゃんと一緒に作ったんですよ！最初にミライさんに食べてもらおうってチノちゃんが・・・」
「ココアさん!!///」
顔を紅くしたチノがココアの背中をポカポカ殴るが、ココアは至福そうに顔を緩ませていた。

「ありがとう、チノちゃん。では、早速」
ミライは自分の顔を食べるみたいで複雑そうな顔になったが、意を決して食べた。
「(モグモグモグ)うん、美味しいよ！ チノちゃん、本当に美味しい！」
「そ、そうですか、良かったです・・・///」
顔を紅くしたチノはうつむき、トレイで顔を少し隠した。チノとリゼの反応からジョージ達は全てを察し、ココアとこっそり話す。
「(コソコソ)まさか、そう言うことか・・・？」
「(コソコソ)現役JKに現役JCを落とすなんてね・・・！」
「(コソコソ)ミライ君もリュウさんも隅に置けないなぁ・・・」
「(コソコソ)でもリュウさんはギリギリだけど、ミライ君は下手をすると犯罪者になっちゃいますよ・・・！」
「(コソコソ)大丈夫です！ 愛があれば何とかなります！」
そんな風にコソコソと会話が繰り広げられているのを知らずに、ミライは皆を見渡した。
「(この人達を、この星に生きる皆を守る。それが、僕達『ウルトラマンの使命』な

んだ・・・！）」

遠いＭ７８星雲からやって来た『若きウルトラ戦士 ウルトラマンメビウス』は、決意を新たにした。

「ミライさん、私が書いたカプチーノアートも見てください・・・」

「あ、これ・・・」

チノが出したカプチーノには∞メビウス∞のマークが描かれていた。

「はい、名付けて『メビウスカプチーノ』です・・・！」

「凄いね！今度から僕、このカプチーノを頼むよ！」

それから、ミライはラビットハウスに来店すると、必ずこのカプチーノを注目した。

「チノちゃん、〝いつもの〟をお願い・・・！」

「はい、ご注文はメビウスですね？」

ー『ご注文はメビウスですか？』ー

はじめは誰もヒーローじゃない、違う形のただちっぽけな星なんだ、ぶつかり合

い、励まし合い、立ちはだかる〝闇〟を越えよう！僕らが変えてく未来、絆はとぎえやしない、無限に続く、〝光の中〟へ！　〝光の国〟へ!!
「メビウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥスッ!!」

---

はい、どうでしょうか？因みにメビウスの『マスゴミ野郎』は、ごちうさキャラ達からか・な・り！嫌われている設定です！
次はウルトラマンゼロと、ティガ×ダイナ×ガイアの劇場版と2つ書いてみたいと思います。
ウルトラマンゼロとクロスするのは、ヒント『魔法』。
ティガ§§ルクス§§とダイナ§§ハヤト§§はガイア&アグル§§傷無§§を見習う所があると思います。主に女性関係で(笑)。因みに、敵役はとある作品の主人公のみ！その作品とは、ヒント『無限』。

# ウルトラマンゼロ☆マギカ

暫く先になると言いましたが、我慢出来ませんでした(笑)。
ウルトラマンゼロ×魔法少女まどか☆マギカです。
まどマギはうろ覚えでかなりいい加減に創りました。

---

『ご注文はメビウスですか？』の世界、通称『M78星雲 光の国』の世界。その世界に、〝ウルトラマンセブンの息子〟、〝ウルトラマンゼロ〟がいた。
元々素質に満ちていたゼロは、己を過信し、〝過ち〟を犯したが、〝セブンの弟子ウルトラマンレオとレオの弟アストラ〟、そして〝伝説の超人 ウルトラマンキング〟の元で修行し、〝邪悪に堕ちたウルトラマン〟と戦い勝利し、〝真のウルトラマン〟として認められた。
それからゼロは『平行世界の宇宙』で〝炎の戦士 グレンファイヤー〟、〝鏡の騎士 ミラーナイト〟、〝鋼鉄の武人 ジャンボット〟や多くの仲間と共に、生きていた

〝邪悪なウルトラマン〟を倒し、新たな宇宙警備隊『ウルティメイトフォースゼロ』を結成した。

それから、有機生命体を滅ぼそうとする『人工天球ビートスター』での激戦で、ジャンボットの弟として造られた〝最強のメカロボット ジャンナイン〟を新たな仲間にした。

更に、〝別世界の地球〟で〝一人の少年〟の身体を借り、同じように〝平行世界の地球〟から来た〝ウルトラマンダイナ㊗㊗如月 ハヤト㊗㊗〟と〝ウルトラマンコスモス㊗㊗春日野 武志㊗㊗〟と出会い、〝バット星人〟と戦い、その世界を救った。

そしてダイナとコスモスから『新たな力』を貰い受け、その〝力〟に思い悩んでいた時に、〝バット星人 グラシエ〟と戦い、〝小さな命〟、〝友好珍獣 ピグモン(通称モロボシ君)〟を救い、グラシエを倒した。

だが、ウルトラマンゼロの戦いに終わりは無かった。

とある宇宙をパトロールしていたゼロに声が響いた。

《ゼ・・・さ・・・ん・・・ゼロ・・・さん・・・ゼロさん・・・!》

「誰だ？」
立ち止まるゼロの左手首にある『イージス』が光輝き、ゲートを開く。
「『イージス』が導いているのか？行ってみるか！」
そしてゼロは向かった、〝絶望〟と〝希望〟が混ざる魔法の世界へ・・・・・・。

平行世界の地球に付いたゼロは、持ち前の直感で『異常が起こった場所』を感知し、そこに向かい出逢った。
「貴方は・・・一体・・・?!」
「ゼロ、ウルトラマンゼロだっ!!」
別世界の地球で出会った『鹿目まどか』との新たな出会い。
「えっと、ゼロさんで良いんですよね？」
「この姿の時は〝諸星ラン〟って呼んでくれ」
謎の存在、『キュウべえ』。
「はじめまして、ウルトラマンゼロ」
「あぁ・・・・・(何だ、コイツ？嫌な気配を感じる・・・！)」

ゼロは異形の魔物『魔女』と戦う『魔法少女』の戦いにウルトラマンゼロが挑む！

『正義の魔法少女』として戦う少女『巴マミ』。

「マミ！　お前は一人じゃない！　お前を支えてくれる後輩達がいる！　そして俺が、お前を守る!!」

「ゼロさん・・・！」

「マミは死なせねぇ！　ゼロツインソード！」

『大切な家族の為』に戦い、そして失った少女『佐倉杏子』。

「何がウルトラマンだ！　何が正義だ！」

「杏子、お前の悲しみと怒り、俺に全部ぶつけろ！　ストロングコロナゼロ！」

『愛する人』の為に力を得たが、その人を失い、魔法少女の『真実』に絶望した少女『美樹さやか』。

「恭介にも振り向いて貰えない・・・人間ですらない・・・私、もうダメだよ・・・！」

「諦めるなさやか、お前の心は人間だ！　必ず助けて見せる！　ルナミラクルゼ

ロ・・・！」

　無限の環をさ迷う魔法少女『暁美ほむら』。

「今更、ウルトラマンだなんて・・・！私は一人でもやって見せる！必ずまどかを・・・!!」

「まるで昔の俺を見ているみたいだぜ・・・良いぜほむら、お前の覚悟と俺の覚悟、どっちが皆を救えるか勝負だ！」

　そして暴かれるキュウベえの、地球外知性体『インキュベーター』の〝目的〟。

「つまりお前の、イヤお前達の目的は、『魂のエネルギー』、『エントロピー』を得るために、マミ達のような女の子を魔法少女にしてきたのか!?」

「その通りだよ、このままでは宇宙が消滅してしまう。それを防ぐ為の『尊い犠牲』だ」

「ふざけるな！人の弱味に突け込んで、利用しているだけだろう！」

「僕は、聞かれなかったから答えなかった、ただそれだけだよ」

「お前のやっている事は、生命を弄ぶ事だ!!」

「君達は感情なんて一過性の病気で行動しているだけだよ」

「お前が、お前達が利用している〝生命〟は、この宇宙で最も尊いモノだ！それが分からないのか!?」
「本当に、訳が解らないよ」
「・・・・・キュウベえ、イヤ、インキュベーター。俺は、俺達ウルトラマンとお前達は、決して解り合えない・・・！」
「ソコだけは同意するよ」
『ウルトラマン』と『インキュベーター』、『命を尊ぶ者』と『命を利用する者』、決して解り合えない２つの種族。
そして現れる『舞台装置の魔女 ワルプスギルの夜』。
「お前を倒して、絶望の環を終わらせてやる!!」
果敢に挑むゼロだが、『ワルプスギルの夜』の力に圧倒される。
「くっ・・・！ ここまでなのかよ・・・！」
『諦めないでッ！！！！』
心折れそうになるゼロに、まどか達の声が響く。
「諦めないでゼロッ！ 貴方なら出来る！」

「マミ・・・」
「奇跡を起こせよゼロッ！」
「杏子・・・」
「あんたはアタシ達を救ってくれた、ヒーローだよッ！」
「さやか・・・」
「貴方のビッグバンはこれで消えるモノではないでしょう・・・！」
「ほむら・・・」
「ゼロさんは私達を助けてくれた！今度は私達が、ゼロさんを助けますっ!!」
「まどか・・・!!」
ルナミラクルゼロの力で魔法少女の力を失っても、戦おうとする少女達の声援が、ゼロを立ち上がらせる！
「そうだ、忘れちゃいけなかった・・・どんなに苦しい時でも、決して忘れてはいけない事・・・〝煌めく未来〟と言う〝希望〟は、俺達の瞳の中に在るんだ!!」
ゼロの意志に答えた『ウルティメイトイージス』が光輝き、仲間達を呼ぶ！
「どうしたよゼロちゃん？苦戦しているようだな？」

「グレンッ！」
「一人で突っ走るからですよ、ゼロ」
「ミラーナイトッ！」
「我々も共に戦うぞ、ゼロッ！」
「ジャンボットッ！」
「敵対勢力を確認、まだヤれる、ゼロ？」
「ジャンナインッ！」
集結した『ウルティメイトフォースゼロ』と、イージスの力で一時的に魔法少女の力を取り戻したほむら達と、魔法少女の力を得たまどかが、『ウルティメイトフォースゼロ』と一体となる。
「派手に行くぜ、杏子ちゃん!!」
「ちゃん付けすんじゃねぇよグレンファイヤーッ！」
「華麗に行きますよ、さやかさん」
「あいよ、ミラーナイトッ！」
「ジャンナインさん、行きますよ！」

「それじゃ行くよマミ、『グランド・ティロ・フィナーレ』ッ！」
「ジャンボット、火器の扱いは？」
「問題無い、行くぞほむら！」
そして、まどかの魔力を受けた『ウルティメイトイージス』が進化した！
「ゼロさん・・・！」
「これは俺の力だけじゃない、まどか・・・お前達の〝想い〟が、力をくれたんだ！」
『ウルティメイトイージス』に〝桃色の光の翼〟が生え、銀の剣が〝光の剣〟になった！
「これが私達の！」
「ウルトラマンと魔法少女の〝絆〟！」
「『『ウルティメイトイージス・アルティメット』ッッ！！！　俺達（私達）のビッグバンは、もうとめられないぜ（とめられないよ）ッッ！！！」

最悪の魔女、『ワルプスギルの夜』に挑む！

「お前もまた、この世界に生きる〝命〟だったんだな・・・！」
「今、解放するね・・・！」
『ウルティメイトイージス・アルティメット』が弓へとなる！
「このままでは宇宙が破滅してしまうよ？それでも良いの？」
「安心しな、インキュベーター。このイージスはまどかの魔力〝だけ〟を使う、まどかの強大な魔力があればこの宇宙を救う事ができる・・・！」
「そうかい、なら僕に文句は無いけど、一つだけ言わせてもらうよ。僕はやり方を変えるつもりはない、再び宇宙が危機に瀕すれば・・・」
「だったら俺は何度でもお前の邪魔をしてやるよ！インキュベーター！」
「・・・・・・・ウルトラマンゼロ、不思議だね、僕は君が、君達ウルトラマンに対して不愉快な感覚を感じるよ・・・！以前にも、僕が目を掛けた〝一人の少年〟も、三人のウルトラマンによって敗北したしね・・・！」
「俺もお前達を認めない。お前達が犠牲している生命こそ、この宇宙を照らす〝光〟だからだっ！！！」
「・・・・・本当に、訳が解らないよ・・・!!」

「それが分からないヤツが、宇宙の守護者を気取るなんて、２万年早いぜッ!!」

『ワルプスギルの夜』の消滅と共に、インキュベーターも地球から去っていった。

そして、『ウルティメイトイージス・アルティメット』の力で、各時間軸にいる『魔女』になってしまった〝魔法少女〟達を救い、ゼロは再び旅に出る。

「ありがとうございます、ゼロさん。本当に・・・ありがとうございました・・・！」

「まどか・・・(今なら分かる・・・俺をこの世界に呼んだのは、円環の女神になったまどかだったんだな)」

「ゼロさん・・・私、宇宙飛行士になります！」

『エエエエエエエエェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェッッッッ！！！！？？？？』

まどかの進路にほむら達もゼロ達も仰天する！

「宇宙飛行士になって、必ずゼロさんのいる宇宙に行ってみせます！」

「フッ、待ってるぜ、まどかッ！」

この物語は、宇宙の守護者ウルトラマンと希望に向かう魔法少女の物語である。

ー『ウルトラマンゼロ☆マギカ』ー

運命や宿命に、向かい合う時が来た。ここからは光$|$希望$;$を背負って、暗闇$|$絶望$;$へ突き進んでゆく！

きっと誰かが待っている声がする！ 遥か彼方に続いてる銀河！ 輝く腕の光に正義を誓う!!

「ブラックホールが吹き荒れるぜッッ！！！」

---

『ウルティメイトイージス・アルティメット』

『ウルティメイトイージス』の肩に光の翼が生え、剣が光の剣になり、装甲もピンクゴールドになった姿。まどかの魔力〝だけ〟を使う故に、絶大な力を秘めている。

この世界のゼロは『ご注文はメビウスですか？』の世界出身で、『ウルトラマンサーガ』では『ダイナ・ハンドレッド』の如月ハヤトと、『艦隊コスモス』の春日野武志から力を受けた設定です。

次はウルトラマンギンガとビクトリーですが、コラボするのは、ヒント『魔法』です。

# ストライクギンガＩ

ストライクウィッチーズ×ウルトラマンギンガです！　ビクトリーがどこのクロスするのか丸分かりですね。
ギンガからのウルトラマンは、オリジナル主人公で行くつもりです、だって男性キャラが出てこない作品なんだもん！

---

かつて〝とある平行世界〟にある遥か彼方の〝銀河〟で〝光と闇の戦い〟があった。〝光〟の側は、宇宙の秩序と平和を守る〝光の巨人〟。
シュワッ！
デヤッ！
ジュワッ！
トワーッ！
タァーッ！

イヤーッ！

〝闇〟の側は、漆黒の〝巨大な闇〟に覆われた〝闇の支配者〟とそれに追従する怪獣・悪の宇宙人。

フォッフォッフォッフォッ・・・!!

ギャアアアアアアアッ!!

ガァァァァァァァァッ!!

グワァァァァァァァァッ!!

〝光の巨人〟達は〝闇〟の陣営に付いた怪獣・悪の宇宙人と激しい戦いを繰り広げた。

しかし、〝闇の支配者〟が〝命有るもの〟の時間を止めてしまう伝説のアイテム、〝ダークスパーク〟を振るうと光の巨人$¦$ウルトラマン$¿$達と怪獣・宇宙人達が〝小さな人形〟に変えられてしまった！

それから〝小さな人形$¦$スパークドールズ$¿$〟にされてしまったウルトラマンや怪獣は永い永い間宇宙をさ迷い〝地球〟へと辿り着き地球の至るところに降り注いだーーーーーー。

そして再び永い時が流れ、とある平行世界の地球の１９３９年ーーーーーー。

その地球に〝驚異〟は何の前触れも無く現れた。

渦を巻くように空に広がる〝黒い雲〟から現れたソレの名をーーーーーー〝ネウロイ〟。

〝ネウロイ〟が何処から、何の為に来たのか誰にも分からない、〝ネウロイ〟の攻撃により〝ガリア共和国〟、〝ブリタニア連邦〟、〝カールスラント〟、〝リベリオン合衆国〟と言った多くの国家とソコに住む人々が生まれ育った故郷と祖国を追われて行ったーーーーーーー。

そして人類は対ネウロイ用に新兵器を開発し徹底交戦に打って出た！

『ストライカーユニット』、ネウロイに唯一対抗できる〝魔法力〟を増大させ、その力による飛行を可能にした新たな〝魔法の箒〟である。それを装着して戦えるのは、魔法力を持つ少女、〝ウィッチ〟が世界各国から集められた。

対ネウロイ用に編成された精鋭部隊、〝連合軍第５０１統合戦闘航空団 ストライ

クウィチーズ〃と呼ばれる部隊に、〃遥か未来の光の巨人〃とその力を振るう〃世界唯一の魔法力を持つ少年 魔道師§§ウィザード§§〃が現れる。

ー1944年 扶桑皇国・相模ー

相模の山の麓にある神社の霊園に〃一人の少年〃が両親が眠るお墓に線香を立てて手を合わせていた。

「父さん、母さん・・・俺、行くよ・・・!」

整った顔立ちに黒髪に青いメッシュが入った少年、〃希堂 輝§§キドウ ヒカル§§〃は、顔を上げて立ち上がり実家の神社の霊園の墓で眠る両親に挨拶を済ませ立ち去ると、〃親友〃と〃仲間〃が待っていた。

「輝君、もう良いんですか?」

「もう少しご両親と語り合ってても良いんだぞ?」

「あぁありがとうな、でももう大丈夫だ。行こうぜ、〃智也〃、〃タロウ〃・・・!」

茶髪を短髪にした整っており、何処か気品が有る顔立ちをしており、輝の〃幼なじみ〃である扶桑皇国で大手重工の跡取り息子である〃十文字 智也§§ジュウモン

ジトモヤ§§〟と、〝スパークドールズ〟の姿になってしまった頭の横から上に伸びる大きな角をしたウルトラマン、〝ウルトラマンタロウ〟が気遣うが、大丈夫と笑顔で答える。

「さて、早く行こうぜ！　〝闇の支配者〟が〝ブリタニアに居る〟って事は分かってるんだからさ！　じいちゃん達には智也と旅行に行くって言いくるめてるしさ」

「ウム、以前倒した〝イカロス星人〟が言っていたことが本当ならば、〝闇の支配者〟はブリタニアから〝バルキー星人〟や〝イカロス星人〟と言った〝闇のエージェント達〟を扶桑に送っていたようだからな・・・」

「それでは〝ジャンスター〟を呼びますね」

智也は板のような操作パネル§§タブレット§§〝ガンパッド〟を操作して〝赤い飛行機〟、〝空陸両用戦闘メカ ジャンスター〟を呼び出す。

「良し！　それじゃ行こうぜ!!」

「あぁ・・・！」

「ジャンスターのスピードなら二時間足らずで付きますよ。時差の差も有りますから、僕達が着く頃はブリタニアは昼時辺りですね・・・」

三人はジャンスターに乗り、〝ブリタニア連邦〟に向けて、ジャンスターは飛び去った。

ーブリタニア連邦・某所ー

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

真っ暗な部屋の戸棚にビッシリに〝怪獣や宇宙人のスパークドールズ〟並べられていた。その内の1体を〝不気味な腕〟が掴み、〝ダークスパーク〟の先端にスパークドールズの足裏に付けると。

[ダークライブ ナックル星人!]

スパークドールズが光輝き、人と同じの大きさになった。身体に毛皮を着け縦長の顔に赤く発行する目を着けた異形、『暗殺星人 ナックル星人』。

「オ〜ホホホホホホホ、やっと動けるわぁ♪ありがとうございます。〝闇の支配者様〟♪」

野太い声を女口調で話しながら、持っていた扇子を扇ぐ。

「ーーーーーーーーーーーーーーーーーー」

「えぇ、分かっていますわ。この地にあの忌々しい〝光の戦士〟がやって来るのでしょう？」

「ーーーーーーーーーーーーーーーー」

「承知しましたわ。幸いここには素晴らしい〝素材〟が豊富に有りますからね♪」

『ナックル星人グレイ』は赤い瞳を妖しく輝かせながら、部屋に置かれた資料とそこに張られた顔写真に写る〝年若い少女達〟を値踏みするように見詰めていた。

ｌ輝ｓｉｄｅｌ

ジャンスターのコックピットのモニターで外の風景、大海原と小さな孤島を眺めている輝に肩に乗せたタロウが話し掛ける。

「どうしたのだ輝・・・？」

「あぁ・・・ちょっと思い出してさ、父さんと母さんがまだ生きていた頃、家族三人で世界を旅していた時をさ・・・」

輝の両親は旅をするのが大好きなエトランゼな両親だった。輝もそんな両親に似たのか同じように旅が好きな性格に育っていたが、五年前、突如現れた〝ネウロイ〟

によって両親との旅が終わってしまった。命からがら扶桑に戻った輝達家族だが、両親はネウロイに襲撃された時に負傷してしまい、その傷が元で亡くなった。

「輝君・・・ネウロイを憎んでいますか？」

ジャンスターを操縦していた智也が問う。

「当時は確かに憎んでいたさ・・・でも、憎んでいたって父さんと母さんが戻ってくる訳じゃないしさ、生き残った俺は、俺の出来る事をやろうと思う。父さんも母さんも〝旅をしていれば危険な目や場合によっては死ぬことだって有る〟って言ってたし、いつまでもくよくよなんてしてたらそれこそ父さん達に怒られるしさ！」

明るく笑う輝を見てタロウと智也は安堵したような笑みを浮かべる（タロウは分からないが）。輝は智也からもらったブリタニアにいる〝５０１部隊のウィッチーズ〟の顔写真が載った資料に目を通した。

「フムフム、隊長の〝ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ〟、年齢18歳、階級は中佐、固有魔法は〝三次元把握〟。

〝坂本美緒〟、階級は少佐、年齢19歳、固有魔法は〝魔眼〟。

〝ゲルトルート・バルクホルン〟、階級は大尉、年齢18歳、固有魔法は〝怪力〟。

〝シャーロット・Ｅ・イェーガー〟、年齢18歳、階級は大尉、固有魔法は〝加速〟。
〝エーリカ・ハルトマン〟、階級は中尉、年齢16歳、固有魔法は〝疾風〟。
〝サーニャ・Ｖ・リトヴャク〟、年齢13歳、階級は中尉、固有魔法は〝全方位広域探査〟。
〝エイラ・イルマタル・ユーティライネン〟、年齢15歳、階級は中尉、固有魔法は〝未来予知〟。
〝ペリーヌ・クロステルマン〟、年齢15歳、階級は中尉、固有魔法は〝雷撃〟。
〝フランチェスカ・ルッキーニ〟、年齢12歳、階級は少尉、固有魔法は〝光熱〟。
〝リネット・ビショップ〟、年齢15歳、階級は曹長、固有魔法は〝弾道安定〟か・・・」
「その資料に載っている少女達が、今我々が向かっているブリタニア連邦にいる〝第５０１小隊〟、通称〝ストライクウィッチーズ〟だな・・・？」
「その資料に載ってませんが、今回新しく配属されるウィッチーズがいるそうです。名を〝宮藤芳佳〟、年齢14歳、固有魔法は〝治癒〟。ストライカーユニットの開発者である〝宮藤博士〟の御息女です」
「知ってるのか智也・・・？」

「僕の実家は扶桑有数の重工で、扶桑でのストライカーユニットの量産をしてしまうからね、ストライカーユニットの開発者との面識くらいは有りますよ」

ビー！ビー！ビー！ビー！ビー！ビー！ビー！

「「っっ!!」」

3人はジャンスターからの警報を聴くとモニターに目を向けると。

黒い機体に赤い発光体を付けた戦闘機、人類の驚異〝ネウロイ〟が現れた！

「ネウロイか・・・！」

「智也、〝アレ〟を使うぜ・・・！」

「了解です、ネウロイが現れたとなればストライクウィッチーズも間もなく来るでしょう。先ずは彼女達と接触するのが優先ですね・・・」

「了解♪んじゃ行ってくる！」

「輝、私も行く。連れてってくれ」

スパークドールズのタロウは自力で動けないので輝の肩に乗せて貰った。

「タロウも不便だなぁ、そんな姿じゃ・・・」

「あぁ～、早く大きくなりたーーーーーい！！！」

切実なタロウの叫びと共に輝はブリッジを出た。

ージャンスター・出口ー

輝は〝ボードのような乗り物〟の上に乗り、耳に通信機を、背中に棒を付け両手に白と黒の〝ブローニング・ハイパワー〟を持って、長い尻尾を出して〝ボード〟の中の〝魔導エンジン〟を起動させる。

「行けるか輝？」

「勿論、ウィッチが使うストライカーユニットが〝魔法の箒〟なら、俺が乗るは〝魔法の絨毯〟、〝ギンガサーフィン〟だ！」

キュウウウウウウウンンンっっ!!

〝ボード ギンガサーフィン〟でブリタニアの大空に飛び出した！

十数分後、輝がネウロイと交戦する空域から少し離れた場所。

赤い髪の少女ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケを先頭に9人の少女達が現場

に到着すると、ソコにはネウロイの影も形も無く戸惑っていると。
　ミーナの固有魔法が近くの孤島で〝ギンガサーフィン〟に乗って遊覧飛行している輝がいた。
　ミーナは黒いリボンに深緑の軍服を着た少女 ゲルトルート・バルクホルンと白いリボンでツインテールをした黒髪に焼けた肌をし、幼さが残る顔立ちの少女 フランチェスカ・ルッキーニが近づく。
「そこの君、その乗り物は一体何？」
　ギンガサーフィンがネウロイなのではと考えているミーナとバルクホルンは警戒するが、ルッキーニは目をキラキラさせてギンガサーフィンを見ていた。
「あ、これですか？ えっとこれは・・・空飛ぶボードです」
「ここにネウロイが現れたのだが？」
「ネウロイ？ 見てませんなぁ・・・」
「ねえねえ！そのボード私にも乗せて!!」
「イヤ、これ俺の私物って訳では無いので」
「・・・・・・・・・・・・・」

こめかみを押さえるミーナは輝に告げる。
「事情を説明してもらいたいので、私達と一緒に来て下さい」
「はいはい、分かりましたよ」
ミーナとバルクホルンとルッキーニが先行し、輝はその後に続き、輝は後ろから見える3人の〝お尻〟を眺めていた。
「(ん～～何と素晴らしい眺め♪・・・・・・上手くいったなタロウ)」
「(ウム、智也にはジャンスターで成層圏で待機させてある。我々は彼女達に付いて行き、あわよくば協力を仰ごう)」
「(了解、さて何が起こるかな♪)」
胸の内ポケットに隠れたタロウとコッソリ会話する輝は、第５０１小隊 ストライクウィッチーズの基地に向かった。そしてーーーーーーーーーーーーーー。

何故か監禁された。

「イヤ何でだよッッ!!」

ー『スパークドールズ劇場』ー

「ストライクギンガ、はじまりましたで！ ワイは用心棒怪獣ブラックキングや！ 今回はワイだけやけどかんばるで！ それにしてもストライクウィッチーズの魔女はん達は皆べっぴんさんやなぁ～。これから輝はんが魔女の皆さんとどんな絆を作るか楽しみやで～」

「今回はこれまでだ」

「ちょっ！ タロウはんワイはまだ・・・」

「次回もレッツ、ウルトライブ！」

「無理矢理終わった!!」

ー『希堂 輝ꕥキドウ ヒカルꕥ』ー
CV 石川界（翠星のガルガンティア・レド、ハイキュー!!・影山飛雄）
年齢15歳
身長はリーネと同じ。
容姿は原作ギンガの礼堂ヒカルに少し似た容姿に、黒髪に青いメッシュが入ったような男子。
固有魔法『魔力増強ꕥブーストꕥ』。自分に触れたウィッチの魔力と固有魔法の力を底上げする事ができる。使い魔は〝イタチ〟。
身体能力 軽業師のように身軽、素の身体能力はルッキーニクラスでバク転・宙返り・アクロバットアクションをこなせる。ウィッチーズ曰く「ルッキーニが猫なら輝はお猿」と言われるほど。
性格 明朗快活な人柄で人間の善意を信じるが悪党には容赦しない性格。結構スケベなおっぱいマニア（巨乳・貧乳オールOK）で女の子のパーツは何でも大好き。
過去 両親をネウロイの襲撃の怪我で失ってからは神社をしている父方の祖父母と叔父の元で生活していたが、ある日タロウと出会い、親友の智也と共に〝闇の支

配者〟と戦う。

ー『十文字 智也(じゅうもんじ ともや)』ー

CV 鈴村健一（ガンダムSEED Destiny・シン・アスカ、銀魂・沖田総悟）

年齢15歳

身長は輝と同じ。

容姿 原作ギンガの一条寺 友也とほぼ同じ。

性格 Sの友也。

過去、幼い頃から跡取り息子として窮屈な生活をしてきており、輝と共に過ごす時間を大切にしている。普段はジャンスターに乗っているが、有事の際は戦う根性がある。

# ストライクギンガⅡ

ギンガからのウルトラマンはなるべく原作主人公と原作キャラに似た、〝平行世界の別人〟にするつもりです。

---

希堂 輝は現在、ストライクウィッチーズの基地の独房に放り込まれ退屈そうに横たわっていた。

「やれやれ、いきなりこんな独房に放り込まれるなんてな・・・」

「オイ・・・」

独房の鉄格子から声が聞こえて目を向けると、白いパンストに包まれた女の子の下半身が見えた。

「おお～、なんと素晴らしい眺め♪」

「何処を見てんだヨ・・・！」

起き上がる輝の目の前に灰色の長髪に灰色の瞳をし、青い軍服を着た年若い少女

がジト目で睨んでいた。
「あれ君は、〝エイラ・イルマタル・ユーティライネン〟さん・・・？」
「何で私の名前を知ってンだ？」
「エースチームのストライクウィッチーズのウィッチだからな、それなりにアンタらって有名人だよ。それで、オレに何か用？」
「お前の乗っていたあの板ギンガサーフィン、一体何なンだ？」
「あぁ、あれは貰い物だからな、簡単に話せないんだよね」
「貰い物？　誰から貰ったンだヨ？」
「それを教えてあげるほどアンタとは親しくないだろう？　アンタは親しくもない相手に色々教えてあげる不用心な女の子なのかなぁ？」
「チッ、また来るゾ・・・！」
舌打ちをしたエイラは独房から離れた。
「やれやれ、タロウも向こうに連れてかれたし、ギンガサーフィンと〝ギンガスパーク〟と〝スパークドールズ〟も取られたままって訳にはいかないよなぁ・・・」
輝は靴底から細長い針金を取り出すと、独房の鍵穴をいじり始めた。

ーウィッチーズ基地・格納庫ー

「どうだったのエイラ、彼は？」

「〝教えてあげるほど君とは親しくないだろう〟って言ってたゾ」

「そう簡単に口は割るわけないか・・・」

エイラの報告にストライクウィッチーズ隊長〝ミーナ・ディートルート・ヴィルケ〟は顎に手を当て、思案顔を浮かべる。

「一体何なのだ？このボードと〝人形〟は？」

ミーナと同じ帝政カールスラントの軍人〝ゲルトルート・バルクホルン〟はギンガサーフィンを訝しげに睨むと、スパークドールになったタロウを持つと、銀色のスティックと、他の〝人型〟と〝怪獣型のスパークドール〟を眺める。

「(変な所を触らないでくれ！輝！早く来てくれーーーー!!////)」

年若い女の子に体を触られ、気恥ずかしい気分のタロウは心の中で悲鳴を上げていた。

―輝ｓｉｄｅ―

「さ～てと、格納庫は何処かなぁ？」

コソコソと人目を忍んで基地の中を移動しながら格納庫に向かっていた。

ガチャ・・・

「っ！」

すると通路のドアが開き思わず身体を伏せ目を上げると、ドアから肩口まで伸ばした銀髪と緑色の瞳、寝起きなのか目を擦る儚げな雰囲気の少女の黒いパンストが見えた。

「う～む、白も悪く無いけど黒も中々・・・！」

「何してるの・・・？」

「おっと、君は確か〝サーニャ・Ｖ・リトヴャク〟さんかな？」

「うん・・・」

「その感じからすると寝起きみたいだけど、君はこの時間まで寝てるの？」

「私、夜間の哨戒任務に付いてるから・・・」

「（あぁ、成る程。固有魔法の『全方位広域探査』で夜間任務を行っているって智

也から貰った資料に書いてあったな）そっか、起こしてしまったかな？それならゴメンね・・・」

「良い、お腹空いて起きてきたから、それよりも貴方は誰？」

「これまたゴメンね、俺は「あああああああっ!!」っ!?ゲッ！エイラ・イルマタル・ユーティライネンさん！」

サーニャと話しているとエイラが現れ、輝は立ち上がる。

「お前！何脱走してンだヨ!!」

「こりゃマズイ！リトヴャクさんゴメンね！」

一目散に逃げる輝の足は異常に早く、もう廊下の向こうに消えた。

ーエイラｓｉｄｅー

「エイラ、あの人誰？」

「変な物に乗っていて捕まえたヤツ・・・！」

エイラはタロットカードを使って固有魔法『未来予知』により、輝の逃げる先を占う。

「ン？」
「どうしたの？」
「い、イヤ何でもなイ・・・（今占いで、アイツが私達の運命に大きく関わるって・・・？）」

ーストライカー基地・外ー

廊下を走りながら格納庫を目指す輝はいつの間にか外に出てしまうも、再び走り出すと扉が開き目の前に人影が現れ。
「うわあっ!!」
「ん？　わあっ！」
ドガンっ！
「いててて・・・（ムニュン♪）ん？　何だこの柔らかくて素晴らしい感触は？」
「オイオイ、いきなり襲いかかって来て胸を揉むとは随分と大胆だなぁ？」
頭を振る輝が声がする方に目を向けると、茶髪の長髪に色白い肌をした赤いビキニパンツ一枚のナイスバディの少女がいた。

「おや、貴女は〝シャーロット・E・イェーガー〟さん？（グラマラスシャーリーと異名を持っていると聞いていたが。成る程、この素晴らしいおっぱいとナイスバディ、まさしくグラマラスだ・・・！）」（モニュモニュモミモミ）

自分の手がシャーリーの大きく豊満な胸部を掴んでいた。

「あのさ、ちゃっかりアタシの胸を揉みながら話を進めないでくんない？」

「うわっとスミマセン！余りにも素晴らしい感触についこの手が・・・！」

「シャーリー、何してんの？」

するとシャーロット（通称シャーリー）が現れた所から褐色肌に黒髪を白いリボンでツインテールに結わえ、白い水着を着た少女、〝フランチェスカ・ルッキーニ〟が現れた。

「おお！これはこれでまた、ありがたや・・・ありがたや・・・んで、君はさっきの・・・」

ルッキーニの水着姿に両手を擦り合わせながら拝む輝。

「あああああっ！」

「ルッキーニ、コイツ知ってんの？」

「コイツだよシャーリー！ シャーリーが興味津々のボードに乗ってたヤツ！」
「何！ コイツがか?!」
ルッキーニの言葉にシャーリーはガバッと起きて目をキラキラさせて輝をマジマジ見つめる。
「何ですか？」
「なぁなぁ！ お前、あのボードの持ち主なんだよな!?」
「えぇ、そうですけど・・・」
「あのボードの事、詳しく教えてくれよ!!」
「(ん～、イェーガーさんは確かメカニックとしてストライカーユニットを整備しているって書いてあったな)悪いんですけど、あれは貰い物だから詳しく話せないんですよね」
「頼むよ～～。教えてくれたら、このおっぱいで色々サービスしてやるよ～？」
「ムムム、それは何とも恐ろしく魅力的な・・・！」
色っぽい流し目に両手で豊満なバストを強調するかのようにムギュと寄せる。輝は罠であると分かってはいるが、先程の素晴らしい感触と悲しい男の性で首を縦に

振りそうになる。
「オイ、いたぞ！」
「大尉達の声が聞こえるぞ！」
「げっ、しまった！名残惜しいが、仕方ない！」
憲兵らしき人間の声が聞こえて立ち上がり走り出そうとするが、シャーリーとルッキーニに目を向け。
「所で格納庫ってどっち？」
「「あっち」」
「あんがと♪」
輝は二人が指差す方へ走っていった。
「どうするシャーリー？」
「面白そうだから行ってみよっか♪」
「んじゃ出～発！」
「イヤでも上は着させて・・・」
追いかけようとするシャーリーは赤い水着のブラを着ようとする。

ーストライカー基地・廊下ー

廊下を走る輝の前にある階段から、金色の短髪に眠たそうな目をした可愛らしい少女が降りてきた。

「あれ？君、誰？」

「おっと、〝エーリカ・ハルトマン〟さん、ですか？」

「うんそうだよ～君は？」

「あっ俺は・・・」

「ハルトマン！ソイツ脱走者ダ！捕まえロ!!」

「げげっ！」

「あれ？エイラにサーニャ？」

輝を追ってきたエイラとサーニャ。

「ハルトマンさん、またね～」

「うんじゃあね～」

暢気に手を振りながら別れる二人。

「何してンダヨ！」
「えっ？　追わなきゃダメなのサーニャ？」
「多分駄目・・・」
「ほらいくゾ！」
エーリカはエイラに手を引かれ、サーニャも後を追う。

ーストライカー基地・廊下ー
「まったく、格納庫はまだかよ！」
「もう、さっきから騒々しいですわよ・・・！」
廊下を走っていった輝の目の前にまたドアが開き、少女が現れ。
ドガっ！
「キャッ！」
「またかよ！」
またもやぶつかり少女と輝は、輝が押し倒したかのように倒れる。
「いててててて、またなのかよ・・・(フニン)ん？この僅かな膨らみは・・・」

「ち、ちょっと！ 貴方何をしてるんですの!!」

「ん？」(フニンフニン)

輝が目を開けると、金髪の長髪に碧眼を持ち、育ちの良さそうな顔立ちをした眼鏡の少女が顔を赤くした表情が見え、その手は眼鏡の少女のスレンダーな胸を掴んでいた。

「う～む(確か彼女はペリーヌ・クロステルマンさんか、〝グラマラスシャーリー〟と呼ばれたイェーガーさんに比べると圧倒的に寂しいが・・・)いや、これはこれで赴きの有る素晴らしいおっぱいだな・・・！」(フニンフニンフニンフニン)

「ちょ、ふぁっ！ 何んあ！ む、胸をアン！ そんなんんっ！ だ、ダメですわぁあん♪・・・〓〓〓〓」

掴んだ手で優しくペリーヌのスレンダーな胸を揉みしだき、その何とも云えない快感に身悶えるペリーヌ。

「おっと、こうしちゃいられない。ゴメンね！」

輝はペリーヌから離れて格納庫を目指す。

「あぁ・・・も、もっと〓〓・・・って違いますわ！ おのれ！ あの変態っ！」

「あれ？ペリーヌどしたの？」
　水着のシャーリーとルッキーニ、エーリカを引っ張って来たエイラとサーニャと合流する。
「皆さん！」
「ペリーヌ、ここに男が来なかったカ？」
「来ましたわよ！あの変態！私の胸に触って！いいえ、触ったなんてものじゃありませんわ！掴んだのですわよ!!」
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・』
　ペリーヌの言葉に全員が沈黙しジト目になる。
「何ですの皆さん・・・？」
「ペリーヌの胸って掴む程有ったけ？」
「ないない、私も触った事有るけど、全っ然無いから」
「確かにね～、ペリーヌってペタンコだしな～」（ゆわんゆわん）
「「うんうん・・・」」
　ルッキーニとエーリカが否定し、シャーリーが胸を揺らし、エイラとサーニャも

頷く。

「貴女達～～～～～～～～～～～～！！！！！（さっきの変態は私の胸を〝赴きの有る素晴らしいおっぱい〟だって言ってたんですのよ!!）」

先程自分の揉みしだいた変態よりも、背中を預ける仲間達に怒りを燃やしそうになるペリーヌだった。

ｌ輝ｓｉｄｅｌ

「お、ようやく付いたぜ・・・」

ようやっと格納庫にたどり着いた輝は隠れながら格納庫の中の様子を伺っていた。

「（タロウや〝ギンガスパーク〟はあそこか・・・）」

そこにはミーナとバルクホルンがいた。

「ミーナ、あのボードはどうする？」

「今〝リーネ〟さんが見ているわ・・・」

「(ギンガサーフィンは、少し離れているな。さ～てと、どうしたものか・・・)」
「見つけましたわ!!」
「げげっ！」
輝が振り向くと、ペリーヌ達が追ってきた。ミーナとバルクホルンも何事かと振り向くと輝を見つけた。
「あの子・・・！」
「脱走したのか?!」
「隊長！ そこの変態を捕まえてくださいまし！」
「えっ！」
「変態だと!?」
「失礼な！ 俺の何処が変態だ！」
「シャーリーのおっぱい揉んでたじゃん」
「私のおっぱいだって揉みしだいていましたわ!!」
「それは、あれだ・・・不可抗力だ！」
「じゃ嬉しくなかったの？」

「そりゃまぁ、綺麗なお姉さんや魅力的女の子のおっぱいを揉めて超ラッキーだとは思ったけど・・・」
「おのれ！変態だったか！」
「しまったついうっかり！」
「シャーリーさんは兎も角、ペリーヌさんのおっぱいって魅力的・・・？」
「どういう意味ですのサーニャさん!?」
「それならルッキーニやサーニャの胸もカ？」
「当たり前です！可愛らしい女の子の胸は全て至高にして至宝です!!」
「シシシ、可愛らしいだってさサーニャー〜」
「ちょっと嬉しい・・・」
「言っている場合か！やはり変態ではないか!!」
暢気に会話に花を咲かせている一同に、バルクホルンが憤怒の形相で輝に拳を上げて襲い来る！
「そこに直れ!!」
「(ゲルトルートさんの固有魔法は『怪力』って事は・・・)ヤバい！」

迫り来るバルクホルンの拳を輝は跳び上がり、バルクホルンの頭に両手を乗せて、まるで跳び箱のように跳んで避ける。
「ピョ～～ン」
「ンガ！」
ゴシャァァァァン！
思いがけない避け形にバルクホルンは顔面から倒れ、お尻をつき出すポーズで倒れる。
「（おぉ、さっきも見たけどゲルトルートさんって良いヒップラインしてるなぁ・・・）」
「はいそこまで」
ムギュ
「ふぐっ!?」
バルクホルンのお尻に気を取られた輝を今度はシャーリーのホールドし、輝の頭がシャーリーの雄大な谷間に挟まった。
「フゴゴゴ！　フゴゴゴ、フゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・！（しまった！　しかし、なんと幸せな感触・・・！）」

「あぁそこ私の!!」
シャーリーのバストの感触に骨抜きになりそうになる輝と自分のポジション取られてルッキーニが騒ぐ。
「シャーリー！そのままその子を押さえてて！」
「《輝！ 何を遊んでいるんだ!!》」
「フゴッ！(はっ！)」
このままこの谷間の中で眠りたい衝動に駆られそうになる輝は、タロウからのウルトラテレパシーで正気に戻り。
スポン！
「何と!?」
「シャーリーのおっぱいホールドから脱出した！」
下からシャーリーのホールドを脱出した輝はそのままギンガサーフィンの元へ向かおうとするが。
「撃てぇ！」
「ゲッ！ うわっ、とっ、ドェ・・・」

憲兵達が遂に銃を乱射し始めた！
ダダダダダダダダダダダダっ!!
「ほっ、ほっ、ほっ、ほっ、ほっ、あらよっと！」
『おおおおおぉぉぉぉぉ〜〜〜〜!!』パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ
パチ
バク転、宙返りなどのアクロバティックな動きで弾丸を避ける輝に拍手を送るミーナとバルクホルンを除くウィッチ達。
「あらこらさっと!!」
ムーンサルトでギンガサーフィンの近くに着地してギンガサーファーの近くの物陰に隠れると・・・。
「ん？」
「あっ・・・！」
そこに、茶髪の長髪を三つ編みにして頭のてっぺんにちょこんと伸びたアホ毛をした可愛い女の子がいた。
「君は、〝リネット・ビショップ〟さん・・・？」

「は、はい・・・そのあの・・・!!」
「あっ、自己紹介しないとね。俺は輝。希堂 輝ꕥキドウ ヒカルꕥ、扶桑出身だ。はじめまして」
資料でリネット・ビショップは男性が苦手と知っていたのでなるべく怖がらせないように頭を下げて自己紹介する。
「あっ、これはご丁寧にありがとうございます」
元々育ちの良いリネット(通称リーネ)もつい会釈する。
「それで悪いんだけど、コレꕥギンガサーフィンꕥは俺の物だからさ、返して欲しいんだけど」
「す、スミマセン、で、でもこのボードは渡せないんです・・・」
「まぁ、上官からの命令じゃ仕方ないよな・・・」
さてどうしたものかと輝は、ゆっくりと迫り来る憲兵とミーナ達をどうするか悩んでいると。
ウゥウー!ウゥウー!ウゥウー!ウゥウー!
「この警報は・・・!」

「ネウロイ！」
　基地に鳴り響く警報に格納庫にいた一同は騒然となり、やって来た憲兵がミーナに報告する。
「なんですって!? この基地に向かっている扶桑海軍の〝赤城〟がネウロイに襲撃を受けている!?」
　それは輝とリーネにも聴こえていた。
「そんな・・・坂本少佐が！」
「《輝！》」
「・・・・・・・・・」
　タロウからのテレパシーと、不安に顔を染めるリーネを見て、輝の顔つきが〝戦士〟に変わった。
「リネット・ビショップさん、その船に君の仲間がいるんだね？」
「えっ？ はい・・・坂本少佐が新しい仲間を連れて来るらしいんですけど・・・は、早く助けに行かないと・・・」
「・・・・リネット・ビショップさん。このボード~~55~~ギンガサーフィン~~55~~、やっ

ぱり返してくれ・・・」

「えっ？で、でも・・・！」

「俺が、〝俺に出来ること〟を・・・〝俺にしか出来るないこと〟をするために、俺は行かなくては行けないんだ・・・！」

「・・・・・・・・・・・・・」

その真っ直ぐな瞳に不意にドキっとなるリーネ。

「行かせてもらうよ・・・」

輝はギンガサーフィンを起動させる。

『っ!!』

ネウロイ出現でバタバタし始めたミーナ達はボードを起動させる輝を見る。

「貴方何を!?」

「悪いけど、行かせてもらいますよ！」

その時、リーネやミーナ達は見た！輝は、頭に獣の耳が、臀部から伸びる尻尾が！

「それじゃ行きますか！」

ビュン！

輝はギンガサーフィンを操作して、別の机に置かれていたタロウや他のスパークドールズと〝白いスティック〟と武器を回収して基地の外に飛び出した！

「輝！　遅いぞ！」

「悪い、悪い。道に迷っちゃってさ」

「先程の姿で、ウィッチの少女達に勘ぐられたかも知れないぞ？」

「ま、元々そのつもりだったしな。それに、〝闇の支配者〟が何処かにいるなら遅かれ早かれだ」

「彼女達に協力を要請する事は？」

「いきなり怪獣が現れて、その支配者がこの何処かにいるなんて、信じられる訳ないだろう？」

「確かにな・・・・」

「人間って言うのは所詮、〝言葉で知る〟よりも〝身を持って体験〟しないと学ばない生き物だからね・・・」

「・・・・・・・・・」

輝とタロウは蒼穹の空を飛んだ

ーナックル星人 グレイｓｉｄｅｌ

その頃、闇のエージェント ナックル星人グレイは空母赤城とその赤城を襲うネウロイと、ネウロイを迎撃するウィッチ、坂本美緒を眺めていた。

「オホホホホホホホ。これがこの星の人間達の技術なの？ まるで子供のオモチャレベルねぇ～」

圧倒的に科学技術が発展している異星人達から見れば、地球の科学技術は確かに低レベルと見られるだろう。

「さて、忌々しいウルトラマンが来る前に、こっちも行動開始よ～♪」

ナックル星人グレイは輝の持つ〝白いスティック〟と形は同じ〝黒いスティック〟を取り出すと、〝黒いカミキリムシのような怪獣〟のスパークドールも取り出す。

「オホホホホホホ・・・早く来なさい新たなウルトラマン。かつて初代ウルトラマンを倒した最強の怪獣の力、とくと味合わせてあげるわ～♪」

ナックル星人グレイは、〝黒いスティック ダークスパーク〟とスパークドールを

持って、野太い高笑いを上げていた。

ー『スパークドールズ劇場』ー

ブラックキング「はい！ブラックキングでっせ！今回の話、何や輝はんがウィッチのお嬢さん方にセクハラ三昧しまくった話やったなぁ」

タロウ「輝自身は不可抗力と言っているが・・・」

ブラックキング「イヤイヤ、不可抗力でこんな風になるなんて最早才能やで？ラッキースケベの才能有るで輝はん」

タロウ「聞いた話では、作者はオリジナル主人公をなるべくラッキースケベ体質にするみたいだ」

ブラックキング「それって作者の趣味かいな？」

タロウ「かもしれんが仕方ない、何しろ原作ストライクウィッチーズは男性キャラが極端に少ない半百合アニメだったからな・・・」

ブラックキング「これからウルトラマンと共に戦う少女達、半百合アニメ出身み

たいやし・・・」

タロウ「しかし、その少女達と輝が絆を結べば〝奇跡〟を起こすことも出来るだろう・・・！」

ブラックキング「ほんなら、メタ発言はここまでにして、次回で輝はんが〝変身〟するんでっか？」

タロウ「多分変身するだろうな」

ブラックキング「ウィッチーズのお嬢さん達がウルトラマンを見てどう思うか、何を想うか楽しみやなぁ～」

タロウ「それでは次回も一緒に、レッツ、ウルトライブ!!」

ブラックキング「ところでタロウはん、バルクホルン姐さんに触られた感想は有るんか？(ニヤニヤ)」

タロウ「・・・・・・・・ノーコメントだっ！！！」

ブラックキング「あっ！逃げんなや！ウルトラマンNo・6!!」

タロウ「早く大きくなりた～～～～～いっ！！！」

ーギンガサーフィンー

モデルは『電磁戦隊メガレンジャー』のサイバースライダー。カラーはスカイブルー。ジャンスターの隠された機能、生産能力(ジャンナインの武器弾薬を生産する機能)を使って智也が地球の技術力を駆使して輝専用に作り上げたサーフィン。武器を収容するスペースが有り、最大２５０キロを乗せても余裕で飛べる。最大飛行速度は５５０㎞は出せる。

# ストライクギンガⅢ

これで『ストライクギンガ』は終わります。

---

希堂輝がギンガサーフィンに乗って、現在ネウロイに襲撃されている。ストライクウィッチーズの〝坂本美緒少佐〟と、坂本がスカウトしたストライカーユニットの開発者〝宮藤博士〟の娘〝宮藤芳佳〟が乗る空母赤城のいる地点に向かっていた。

「輝、そろそろ到着だ・・・！」

「了解・・・」

智也に改造された〝ブローニング・ハイパワー〟を両手に持ち構えて、何隻もの軍艦が煙をあげ破壊された海域と、巨大なガラスの塊ような姿をしたネウロイと、そのネウロイと戦うウィッチーズ、〝坂本美緒〟と〝宮藤芳佳〟がいた。

「そこのお二人さん、坂本美緒少佐に宮藤芳佳さん、だよね？」

「な、何だおまえは!?」

「っ!!」

顔に眼帯を付け刀を背に持ち、黒い長髪を後ろに結わえた侍のような雰囲気に犬の耳を生やした(ウイッチーズが魔力を使う際に現れる使い魔動物の一部ぎ現れる)女性 坂本美緒と、栗色の髪に犬の耳をした少女 宮藤芳佳が、ボードギンガサーフィンに乗った輝に面食らう。

「話は後で、ネウロイの殲滅に協力する！」

「な、おい待て!!」

輝はギンガサーフィンを操りながらネウロイの軍勢に突っ込む！

「さーて、一丁派手に行くかぁっ！！！」

空中で波乗りするかのようにギンガサーフィンを巧みに操作し、改造ブローニング・ハイパワーの弾丸を放ち、ネウロイの内部のコアごと貫通させ破壊する！

「まだまだぁっ!!」

ギンガサーフィンで縦横無尽に空を駆ける輝の周りをネウロイが取り囲むが。

「何のぉっ!!」

自分の身体ごとギンガサーフィンを回転させ、改造ブローニング・ハイパワーで

ネウロイを破壊する！

ー芳佳ｓｉｄｅー

「す、凄い・・・・」

「何と言う動きだ・・・まるで風と戯れているような・・・・!!」

芳佳と坂本も、ギンガサーフィンに乗って滑らかに、それでいて激しく天空を飛翔する輝の戦いぶりに目を奪われ、見惚れていた。

ーナックル星人 グレイｓｉｄｅー

「ア～ラ、あのボウヤがそうなの？ そろそろガラクタ~~ども~~ネウロイ~~ども~~共も全滅しそうだし、ここからが〝真打ち〟の登場よ!!」

闇のエージェント ナックル星人グレイが〝黒いカミキリムシの怪獣のスパークドール〟の左足の裏に〝ダークスパーク〟の先端をくっ付ける！

「さぁ、現れなさい！『宇宙恐竜ゼットン』!!!」

【ダークライブ！ゼットン！】

〝ダークスパーク〟から発せられた黒い光と声と共に、グレイの身体が包まれた！

ｌ輝ｓｉｄｅｌ

「輝！　来たぞ!!」

「っ!!」

ネウロイを殲滅させた、輝は胸ポケットにいるタロウからの警告に警戒すると、扶桑帝国艦隊の近くに〝巨大な黒い怪獣〟が現れた！

『ピポポポポポポっ、ゼットーーーーン！』

「アイツは!?」

「気を付けろ輝！　ヤツは〝初代ウルトラマン〟兄さんを倒した、『宇宙恐竜ゼットン』だっ!!」

「〝恐竜〟？　見た感じ恐竜と言うより、虫っぽいけど・・・・？」

『ゼッ、トーーーーーン！』

ボシュンッ！　ボシュンッ！　ボシュンッ！

「うわっ！アヂィッ！どぅわっとっ!!」
ジュワァァァ～～～！
ゼットンがメテオ火球を放つと輝はギンガサーフィンを駆使して回避するが、一兆度の火球が海面に当たると、海面が蒸発し蒸気が立ち上がり、ゼットンのいる海域周辺は熱湯地獄と化していた。

ｌ芳佳ｓｉｄｅｌ
「坂本さん、あれって一体?!」
「分からん！一体何なのだあの生物はっ!?」
《何ボカンとしてんだアンタら!!》
芳佳も坂本も突然現れた巨大生物に仰天し、ゼットンからの攻撃を回避しながらも攻撃する輝が目に映り、坂本のインカムに輝の声が響く。
「な、なんだ?!」
《ボカンとしてる暇が有るなら、退避しようとしている人達を誘導してくれ！》
「お前、先程の男か？」

《あぁそうだ！ あの怪獣は俺が引き付けるから！》

「何を言っている！ お前一人で何とか出きると言うのか!?」

《今んな事言ってる場合じゃないだろ！ 正規軍人の坂本少佐と治癒魔法が使える宮藤さんは避難している軍人さん達を頼みます!! 今は〝自分に出来る事〟を〝自分にしか出来ない事〟をやってください!!》

輝は銃を撃ちまくりながらゼットンの気を引いていた。

「っ！」

「待て宮藤！」

「退いてください坂本さん！ あの人を助けなきゃ！」

「・・・宮藤、私達はこれから赤城から退避しようとしている人達の救援に向かう」

「坂本さん！」

「あそこには！ 負傷してしまった人達がいるのかもしれんだろう！ お前の治癒魔法で助けられる人達を見過ごすのか!?」

「っ!!」

坂本の言葉に芳佳は言い淀み、ケガをおして赤城から退避しようとする軍人達と、ゼットンと戦う輝の姿を交互に見て逡巡する。

「宮藤、今この状況で治癒魔法が使えるお前にしか出来ない事をするんだ・・・・！」

「・・・・・・・・・・・・・・はい」

頭では理解しているが、心は納得出来ないが、負傷した兵士達を見過ごす訳にいかず坂本と共に赤城の方へ向かう。

ｌ輝ｓｉｄｅｌ

《輝君》

「智也か、そっちでも状況は分かっているな？」

《はい、間もなくストライクウイッチーズもそちらに付きます。変身するなら今です》

「了解」

「輝!!」

「ん？　どわああああああああああああああああああああああああああああっっ！！！」
タロウの叫びで顔を上げた輝の目の前にゼットンが佇んでいた。
《輝君、ゼットンはバリアやテレポートが使えるようなので気を付けてください》
「今更言ってどうすんの⁉」
『ゼットーーーーーン・・・・‼』
ボシュンッ！ボシュンッ！ボシュンッ！ボシュンッ！
「クッ！」
メテオ火球が射出されて輝は空かさず魔力障壁を展開して防ごうとするが・・・。
「あちちちちちちち‼」
ボンッ‼
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！！！」
防いでいたメテオ火球が爆裂して、そのまま空の彼方までぶっ飛んでしまった。
雲の中で急停止した輝は爆裂した火球が飛び火し、少し火傷した。

「大丈夫か、輝！」
「あっぢぃ！　あぢっ！　あぢぢぢっ！　何とか！　でもこれならっ！」
輝は懐から〝白いスティック〟、〝ギンガスパーク〟を取り出して構えると、〝ギンガスパーク〟から〝水晶が付いたスパークドール〟が現れ、それを掴んで左足を〝ギンガスパーク〟の先端に付けると、〝ギンガスパーク〟の中央部が開き、顔のようなモノが現れる。
【ウルトライブ！　ウルトラマンギンガ!!】
「ギンガーーーーーーーーーーーーー!!」
天に掲げたスパークドールが光輝き、輝の身体を包み込む!!

ー芳佳ｓｉｄｅー
「坂本さん！あの子は!?」
「雲の向こうに吹き飛んだようだが・・・っ!?　な、なんだあれはっ!?」
輝が吹き飛んだ地点と反対方向の空から〝光〟が舞い降りた！

―リーネｓｉｄｅ―

リーネ達ストライクウイッチーズも赤城の方へ急行すると、ゼットンの姿を見て驚く。

「なんだ、あの巨大生物は!?」

「おお～でっか～い・・・」

「虫っぽいな。ルッキーニ、あれって何の虫だと思う？」

「ン～～、カミキリムシっぽいね」

「スッゴい大きい・・・・」

「こんなに遠くなのにデカさがわかるナ・・・」

「そんな事よりも！ 少佐は!? 坂本少佐は無事なんですの!?」

「美緒！ 美緒！ 応答して!!」

「(あの男の子は・・・？)あれ、皆さん！ あれを見てください!!」

リーネが指差す方を見ると、空から〝光〟が人の形となって降り立つ！

そして、ウイッチーズ達と扶桑艦隊の軍人達は見た！

赤と銀の身体に、脛、腕、肩、胸元、そして頭部には三叉の形をした光輝く空色のクリスタルを付けた光の巨人を‼

『シャオラッ！』

その巨人の名を、ウルトラマンギンガ‼

『ゼットトーーーン！』

ゼットンはテレポートでギンガに近づき、腕を振り上げ攻撃する！

『シュアッ！』

ギンガは交わすとゼットンの頭を掴んで背負い投げをした！

バシャーーーーーーーンっ‼

倒れたゼットンはテレポートしてギンガの背後に現れると、後ろから首を締めて投げ飛ばす！

『ウワァッ‼』

投げ飛ばされたギンガは水しぶきを上げて倒れる。

ー芳佳ｓｉｄｅー

「やめてーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！」

「宮藤っ!!」

芳佳は飛び出すと、倒れたギンガに迫るゼットンの前に飛んで手を広げて止めようとする。

「やめて!! こんな事しちゃダメだよ！ 戦わなくちゃいけない理由なんて無いよ!! 話合えば・・・」

『ピポポポポポポ、ゼットーーーーーーン!!』

芳佳の訴えを無視して、ゼットンはメテオ火球を放とうとした！

「宮藤ーーーーーー!!」

坂本が芳佳を庇おうと飛び出すが、それより早くメテオ火球か芳佳に向けて発射された！

ドカァーーーーーーーーーーーーーンっっ！！！

『ぐわあああああっっ！！！！』

「巨人さんっ!!」

坂本よりも早く芳佳を守ろうと、ギンガが庇い背中にメテオ火球が当たり、ギン

ガが悲鳴を上げる！
「宮藤を、守ってくれたのか・・・？」
「美緒っ！」
「ミーナ！皆来てくれたのか?!」
「少佐！あの巨人は一体!?」
「・・・扶桑軍のウワサで聴いた事がある。最近扶桑の相模に〝巨大な生物 怪獣〟とそれと戦う〝光の巨人〟がいると聞いた事が有るが・・・」
「まさか、あれがその怪獣と光の巨人なんですか？」
「坂本さん・・・」
「宮藤！無事か?!」
「はい、巨人さんが守ってくれたんです！」
ウイッチーズが見ると、ゼットンに首を締められるギンガがいた。
『グウウウゥゥゥゥッッ!!（負けて、たまるかーーー!!）』
ギンガがゼットンの手を外すと、腹部に蹴り飛ばし距離を取る。空かさずギンガは身体のクリスタルを白く発光させると右腕から光の刃を出現させる！

『〝ギンガセイバー！〟』

ウルトラマンギンガはクリスタルを色々な色に発光させて必殺技を放つ！

『シャァッ！』

『ゼットーーーーーン・・・・』

ギンガがギンガセイバーで切り付けようと挑むが、バリアに阻まれ逆にカウンターでメテオ火球を受ける！

『ウワァアアアアッ!!』

ー芳佳ｓｉｄｅー

「あぁっ」

「待て！」

助けに行こうとする芳佳を坂本が押さえた。

「坂本さん！ なんでですか!?」

「あの巨人が我々の味方か分からないのに、不用意に近づくな!!」

「そんな！ 巨人さんは私を助けてくれたんですよ!!」

『・・・・・・・・・・・・・・・』

芳佳の訴えに全員が無言になる。味方かどうか分からない相手を容易に信用しない坂本達の考えは正しいが、善意優先の芳佳は納得しなかった。

ズガァァァァァァァンっっ！！！

『っっ！！！』

芳佳達が轟音に目を向けると、ゼットンが倒れていた！

ｌ輝ｓｉｄｅｌ

十数秒前。

《輝君、ゼットンのバリアの弱所を発見しました！》

『（サンキュー智也!!）』

ギンガの内部にいる輝に智也からの通信を受けて、今度は〝ギンガセイバー〟を地面に突き刺すとエネルギーが地面を伝ってゼットンの足元からマグマが噴出し、ゼットンが倒れる！

《ゼットンが唯一バリアを張れていないのは足元！》

『(ならば！　足元から攻撃すれば良い!!)』

倒れたゼットンに向けて、ギンガの身体のクリスタルが赤く発光すると、燃え盛る隕石を次々とギンガの周りに出現される！

『〝ギンガファイヤーボール〟!!』

燃え盛る隕石が次々と起き上がったゼットンに当たり、ゼットンはボロボロとなる。

『ゼッ・・・トン・・・・』

『フッ！』

ギンガが構えるとクリスタルがまた発光し始める。

ー芳佳ｓｉｄｅｌ

「止めを指す気・・・？」

「そんな・・・！」

芳佳は納得できなかった。確かに自分も殺されそうになった。けど、ゼットンを殺して良い理由なんかない筈なのにと考えたからだ。

しかし、ギンガの身体のクリスタルから発光される色は、色鮮やかな緑色だった。

ｌ輝ｓｉｄｅｌ

『〝ギンガコンフォート〟・・・』

ゼットンの頭上に光の粒子を降らせると、ゼットンの身体が光の粒子に包まれ、安らいだように静かに消えて行く。

すると、空中にゼットンのスパークドールが現れ、ギンガの手の中に吸い込まれていった。

『・・・・・・・・・・・・』

ギンガが芳佳の方へ顔を向けると、芳佳を除いて坂本達は警戒するが、ギンガは芳佳達の他に赤城にいる人達の方へ向き、無事を確認すると頷き。

『シャオラッ！』

天高く飛び去ったーーーーーー。

ｌ芳佳ｓｉｄｅｌ

「行っちゃった・・・」
「ミーナ、追跡出来るか？」
「いいえ、追跡しようとしたけど消えたわ・・・・」
「何だったのだ、あの巨人は・・・？」
「今それを言っても仕方ないわ。皆、赤城の方へ向かうわよ・・・」
『了解・・・！』
「宮藤、行くぞ・・・」
「・・・・はい」
芳佳達は赤城の方へ向かって降りていく。

ー輝ｓｉｄｅー

ギンガへの変身を解除した輝は成層圏で待機している十文字智也のいる〝ジャンスター〟のコックピットでゼットンのスパークドールを置いた。
「ご苦労様です輝君・・・・」
「おぉ、結構疲れたわ・・・・」

「智也、闇のエージェントの方の捕捉はどうだ？」
「はいタロウさん、ゼットンがスパークドールに変化するのと同時に、あの場に離脱しようとしていた者を捕捉しました」
　智也が操作すると、モニターにナックル星人の姿が映し出された。
「コイツが新しい闇のエージェントか・・・・」
「名をナックル星人と言うそうです・・・」
「おそらく当面はコイツが敵と言う事だな」
　輝達が新しい闇のエージェントナックル星人グレイを睨むと、輝はコックピットを出ようとした。
「輝君、ウイッチーズへの協力要請はどうします？」
「もう少しウイッチーズを見てみるよ。たった一回怪獣を見ただけじゃ信用しないと思うしさ」
「分かりました。ならば早く戻った方が良いですよ」
「あん？」
「負傷者の数が多くて、宮藤芳佳さんが苦労しているようですから・・・」

ｌ芳佳ｓｉｄｅｌ

「負傷者が多いな、宮藤無理をするな」

「だ、大丈夫です。まだ・・・・」

気丈に振る舞っているが芳佳の魔力量が優れていても大勢の負傷者を治癒するには限界がある、息切れもおこしはじめた芳佳の肩に手を置く人物が現れた。

「お前は・・・・！」

「さっきの脱獄者!?」

「希堂・・・・輝さん・・・・？」

「あっ、貴方さっきの！無事だったんだ・・・！」

「そんな事よりも宮藤さん、治癒に専念して、かすり傷を治す程度の魔力で良いよ・・・」

「えっ？でも・・・」

現在負傷者している軍人達は明らかにかすり傷で済む怪我をしていない。中には骨折までしている人もいるからだ。

「安心して、俺が君の魔力を・・・底上げする！」
輝が身構えると、輝の頭に獣の耳が、臀部に長い尻尾が現れた。すると、芳佳の魔力がゴオゥッ！と上がった。
「これって、魔力が溢れ出てくる！」
「これは・・・・!?」
「まさか、この子が魔力を!?」
ミーナ達ウィッチーズは驚愕した。この世界において魔法力を持っているのは〝女性のみ〟である事が常識の筈が、目の前の少年はその常識を打ち破った！
「俺の固有魔法は『魔力増強ﾌﾞｰｽﾄ』、俺が触れるか俺に触れた魔女の魔力を底上げする事が出来る。が、増強された魔力の制御は本人がやらなければならないけどね。さ宮藤さん、ちゃちゃっと治癒しちゃって♪」
「はい！」
それから輝の魔力ブーストによるサポートもあり、芳佳は負傷者全員の治癒を完了させた。
「悪いけど、そこまでよ・・・！」

ミーナ達ストライクウィッチーズは輝に向けて銃口を向ける。
「坂本さん・・・？」
「宮藤の手助けやネウロイ殲滅に手を貸してくれた事は礼を言う。だが、ミーナ達に聞けばお前は脱走者らしいな。しかも魔法力まで持っているともなれば、捨て置けん・・・！」
「坂本さん、待ってください！」
「まぁ良いよ宮藤さん。坂本少佐達の態度は至極尤もだ」
輝を庇おうとする芳佳を優しく退かして、輝はミーナに近く。
「まず俺の事だけど、俺は扶桑の希堂輝。魔法を使える男、魔法使いウィザードって呼んでくれ」
「魔法使いウィザード・・・貴方の目的は？」
「・・・・・・・そうだなとりあえず、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐、〝取り引き〟を申し込みたいんだけど・・・」
「取り引き・・・？」
「俺を、雇ってくれない？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ハァっ!?』
　突然の輝の言葉に芳佳達は全員マの抜けた声を上げる。
ー？？？　ー
「アイタタタタ、もう酷い目に合ったわ。まさかゼットンを倒すだなんて・・・！」
　〝闇の支配者〟のアジトに逃げ込んだナックル星人グレイは傷だらけの身体に包帯を巻きながら愚痴っていた。そんなナックル星人グレイに真っ暗闇のアジトに現れた人物の腕が迫る。
「ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー」
「っ！こ、これは〝闇の支配者〟様！ご機嫌麗しゅう・・・・・！」
「ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー」
「イエ！今回はあくまで小手調べ！次は別の趣向でヤツを、ウルトラマンを倒して見せますわ！」
「ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー」

「はい、ウルトラマンを倒すためにある怪獣達のスパークドールズを使わせてください・・・！」

「ーーーーーーーーーーーーーーーー」

「その怪獣は、〝超獣のスパークドールズ〟ですわ・・・！」

妖しく煌めくナックル星人グレイの目線にある棚には、怪獣を凌ぐ強さが宿った〝超獣のスパークドールズ〟を見据えた。

「調べて見ると、第５０１統合戦闘航空団ストライクウィッチーズの中には、中々強い〝闇〟を持った小娘共がいます。その小娘共を利用しない手は有りませんわ・・・！」

「ーーーーーーーーーーーーーーーー！！！」

ホホホホと不気味に笑うナックル星人グレイに、〝闇の支配者〟も声にならない笑い声を上げ、真っ暗闇のアジトに木霊したーーーーーー。

ー輝ｓｉｄｅー

そして翌日、輝はミーナに連れられブリーフィングルームでウイッチーズ達に紹

介された。
「改めまして、希堂輝です。暫くご厄介になるんで１つ宜しくお願いしまーす！」
『えぇえええええええええええっ！！！？？？』
驚くウイッチーズ達を余所にミーナと坂本がコッソリと会話する。
「良く〝マロニー大将〟が了承したな・・・」（ヒソヒソ）
ストライクウイッチーズを敵視している〝トレヴァー・マロニー大将〟が、輝を〝傭兵〟としてウイッチーズ基地に居座る事を了承した事に坂本は疑問を感じていた。
「大将の目的は、彼の魔法力と、彼が持っているボードとネウロイをコアごと貫通する拳銃が目的よ・・・」（ヒソヒソ）
「なるほど、私達に〝色仕掛けで情報を聞き出せ〟っと言う事だな・・・」（ヒソヒソ）
「無論、そんな事させないわ。それに・・・」（ヒソヒソ）
「それに？」（ヒソヒソ）
「あの巨人~~ss~~ウルトラマンギンガ~~ss~~と怪獣の事、彼は何か知っていると思うわ」

（ヒソヒソ）

「確かにな・・・」（ヒソヒソ）

「ねぇねぇ、ペリーヌの胸を掴んだって本当？」

「あん？」

「エーリカさん！　そんな事喋らないで下さいですわ！　あんな辱しめを受けたのは・・・！」

「でもさぁ。ペリーヌの胸って掴む程ないじゃん！」

「ルッキーニさんっ!!」

「イヤ、結構赴きの有る素晴らしいおっぱいだったぜ♪」

「ちょっと！　素晴らしいおっぱいってそんな・・・／／／」

今まで胸の薄い事がコンプレックスだったペリーヌは始めて自分の薄い胸を褒められて複雑な表情を浮かべる。

「なぁなぁ輝！　今度あのボードに乗せてくれよ！　サーフィンみたいでイカすじゃん！」

「おぉ、良いですよ！」

「あ、じゃ私も！」
「私もお願い！」
「私も乗ってみたい・・・！」
「サーニャ!?」
「お前達！はしゃいでるんじゃない！・・・・・・希堂、出来れば私も・・・」
「皆さんズルいですわ！私も・・・！」
「希堂さん、私も乗せてくれませんか・・・？」
「輝君！私も乗ってみたい!!」
シャーリーがギンガサーフィンに興味を抱き、他のウイッチーズも乗りたいと輝に集まった。
「分かった分かった！順番！皆、順番に乗せてやるから!!」
「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」
「あっさりと・・・」
「馴染んでるわね・・・」
あっという間馴染んでしまった輝に、ミーナと坂本は呆れ気味に見ていた。

「(輝、分かっているな・・・?)」

「(分かっているさタロウ。〝闇の支配者〟とエージェントがきっと行動を起こしてくる。必ずヤツを倒して見せるさ!)」

内ポケットに潜んだタロウとテレパシーで交信しながら、輝はポケットに隠した〝ギンガスパーク〟を握る。

「(必ずこの地球を守って見せるぜ、ギンガ!)」

希堂輝はまだ知らない。闇の支配者達の魔の手がウイッチーズ達に迫っている事を・・・。

ウイッチーズは知らない。これから希堂輝とウルトラマンギンガと共に地球存亡の危機に立ち向かっていく事を。

未来は、変える事ができる。良いようにも、悪いようにも・・・それを成すのは君たちだ・・・!

ー『ストライクギンガ』ー

たった一人でも、君を守りたい。いつも側にいるから。どんなに辛くて、どんなに苦しくても、きっとゴールは近いから。その胸に宿した夢の翼を広げ、高く空へ飛び立て。固く繋ぎあった君のその手を、ずっと離さない。未来へと続く道を進め共に！

「ギンガァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァっ！！！」

ー『スパークドールズ劇場』ー

ブラックキング「イヤ～なんやかんや合ったけど、何とかウイッチーズの皆さんと行動できるようやな、ゼットンはん！」

ゼットン「ピポポポポポポポ・・・」

ブラックキング「そやな、ゼットンはんも身体張った甲斐があったもんやで！さて、これで『ストライクギンガ』は終わるんやけど・・・」

？？？『ちょっと待ったーーーーーー！！！』

ブラックキング「うわっ！な、何やお前ら!?」

？？？「はじめまして、私リーネちゃんとライブする『ミサイル超獣ベロクロン』です！」

？？？「オイラはサーニャちゃんとライブする『満月超獣ルナチクス』だい！」

？？？「僕はエイラちゃんとライブする『一角超獣バキシム』だよ！」

？？？「俺はバルクホルンとライブする『蛾超獣ドラゴリー』だ！」

？？？「俺様はミーナとライブする『大蟻超獣アリブンタ』様よ！」

？？？「そして我がペリーヌとライブする『異次元超人エースキラー』!!」

ブラックキング「な、なんやとーーーーーっ!!??　おんどれ等！　誰に断ってリーネちゃん達とライブしとんねん!!」

ゼットン「ピポポポポポポ・・・!!」

ブラックキング「ゼットンはんも、うらやましいって言っとるで!!」

ドラゴリー「イヤさっきので分かるのかよ!?」

ベロクロン「それよりも！　私達とリーネちゃん達がウルトラマンギンガと戦う勇姿が始まる前に終わるなんて酷いです！　リーネちゃんの〝自分に自信が無い心の闇〟を輝君がどう救うのとか！」

ルナチクス「サーニャちゃんの〝父親が生きているか分からない不安の心の闇〟と！」

バキシム「エイラちゃんの〝サーニャちゃんを助けたい焦りから生まれた心の闇〟を救うストーリーとか！」

ドラゴリー「バルクホルンの〝妹の復讐心から生まれた心の闇〟を輝が救い、輝がバルクホルンを〝トゥルーデお姉ちゃん〟と呼ぶようになるストーリーとか！」

アリブンタ「ミーナの〝恋人を失った心の闇〟を同じように〝両親を失った輝〟がどう救うストーリーとか！」

エースキラー「坂本が撃墜され、〝芳佳への嫉妬と憎悪から生まれた心の闇〟をナックル星人に利用されたペリーヌを助け、その為にウルトラマンギンガが輝で有ることがバレたストーリーとか！」

超獣一同『それが書かれる前に終わってしまうなんてっ！！！』

ブラックキング「そうは言うても、作者の文才とこの作品の都合上ここで終わるのがお決まりやで・・・」

超獣一同『納得イカーーーーーーンっっ！！！』

ゼットン「ピポポポポポポポ・・・」

タロウ「あぁ、ブラックキングが超獣達に締め上げられているな。巻き込まれないようにあっちはブラックキングに任せよう・・・」

ゼットン「ピポポポポポポポ・・・」

タロウ「そうだな、これから輝と芳佳達も数々の〝試練〟に挑む事になるだろう。しかし、彼等なら絶望に屈せず希望の未来を勝ち取る事ができると私は信じている・・・！」

ゼットン「ピポポポ・・・」

タロウ「ゼットンも信じているのだな・・・！では次のウルトラマンの紹介をしよう！話は輝達が〝闇の支配者〟を倒し、私や他の兄弟達や多世界のウルトラマン達やその仲間達、怪獣に宇宙人のスパークドールズがそれぞれの宇宙に帰還し、〝ガリア〟が解放され、輝と芳佳と智也と美緒は扶桑に戻り、他のウィッチーズもそれぞれの任務に赴いて、一時期ストライクウィッチーズが解散され、一ヶ月後に再結成される間の一ヶ月間に起こった出来事。

〝闇のエージェントの生き残り~~§§~~今作オリジナル~~§§~~〟と、『〝勝利〟の名を持つ

ウルトラマン』と『〝勇気〟の名を冠する魔女達』の戦いの記録だ！」

ゼットン「ピポポポポポポポ・・・！」

タロウ「うむある意味、私の知っている歴史と違った歴史の地球から生まれたウルトラマンだな。彼とウイッチー達の〝絆〟がどんな物語を紡いで行くのか。それは君達が見届けてくれ・・・」

ブラックキング「何をしみじみしとんのや!!」

タロウ「おおう！ブラックキング、超獣達はどうしたんだ？」

ブラックキング「暴れるだけ暴れたら、飲みに行くって言うてどっかに行ったわ！」

タロウ「そうか、では最後にこの一言で締めと行こう！」

『これからも、レッツ！ウルトライブ!!』

---

もう分かると思いますが、次は〝勝利〟のウルトラマンと〝勇気〟の魔女達です！

『ウルトラマンギンガＳ』はストライクウイッチーズ第二期になると思います。

# ブレイブビクトリーⅠ

明けましておめでとうございまする！
これからも『光に選ばれし勇者達』を宜しくお願いいたします！
今回は『ウルトラマンビクトリー』と『ブレイブウィッチーズ』が織り成す、勝利と勇気の物語です！

---

この世界で起こった光と闇の戦い。『遥か未来の光の戦士ウルトラマンギンガ』、『闇の支配者ダークルギエル』、地球と宇宙の存亡を賭けた決戦が終結して直ぐの頃、『地底の勇者』と『勇気の魔女達』の戦いが起こっていた。

ーストライクウィッチーズ世界・地底世界ー

地上ではネウロイが猛威を振るっている世界の地下深くに、光り輝く巨大なクリスタルによって明るく照らされた地底世界があった。

そしてここに、地底世界を治める女王の玉座の間で、玉座に座る女王の前でひざまずく一人の少年がいた。

「お呼びですか、キサラ女王陛下」

精悍な顔つきに鋭い目付きの少年が白くゆったりとしたドレスを着た、青い水晶のティアラを付けた妙齢の女性にかしずく。

「〝ジーク〟よ、これから貴方が我らが地底の民・ビクトリアンの勇者の証である、〝ビクトリーランサーの継承者〟にふさわしいか〝最終試練〟を行います」

「ハッ！」

「ジーク、貴方はこれから地上に赴き、地上の人間達に触れてくるのです」

「地上へ、ですか・・・？」

「そう、貴方も知っての通り、地上は『ネウロイ』と呼ばれる異界の侵略者によって蹂躙されています。しかし、少し前に地上で巨大で邪悪な力と聖なる力がぶつかった気配が有ります。しかし、邪悪な存在の気配がまだ地上に蔓延っています・・・」

「ならば、俺の最終試練は、その〝邪悪〟を討つ事でしょうか？」

「その通りです。貴方にこれから地上の情報を与えます」

キサラ女王はジークの頭に手を乗せると、乗せた手が淡く光り、ジークの脳に地上の様々な情報が流れた。

「『ネウロイ』・・・『ウィッチーズ』・・・『ストライカーユニット』・・・」

「それが今現在の地上の様子です。ジーク、任せましたよ」

「ハッ！」

ジークと呼ばれた少年は玉座の間を出ていくと、キサラ女王の側近である壮年の男性〝カムシン〟が苦言を漏らす。

「よろしいのでしょうか？ジークはまだ少年で、まだまだ未熟ですが？」

「だからこそです。あの子はまだ未熟だからこそ、学ばなければならないのです。地上と、地上に生きる人々を・・・」

キサラ女王は、去っていったジークの成長を望み、優しい瞳で未来を見据えていた。

ｌジークｓｉｄｅｌ

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ファアアアアアアアアアン・・・」
「『シェパードン』・・・・？」
地上へ向かおうとするジークの前に、厳つい顔付きに白く大きな体躯の背中に巨大な水晶を付けた巨大生物が現れた。
『地底聖獣 シェパードン』
「ファアアアアアアアン・・・」
「大丈夫だシェパードン。俺は必ず〝試練〟に合格して見せる！」
ジークは懐から、〝赤いスティック〟を取り出して、拳銃のように変形させて地面を撃つ。
【スカイビクトリー！】
スティックから音声が響くと、撃たれた地面が光り、そこから細長く大きな箒のようなマシンが現れた。
ジークは『スカイビクトリー』と呼ばれるマシンに乗ると箒の穂先の部分から火を噴きマシンが空中を飛んだ。
「ファアアアアアアアアアン」

「シェパードン、行ってくる！」
そう言って、ジークは地上へと向かった。

l???　sidel
東欧オラーシャ帝国の雪山の洞窟で焚き火をしながら、一人の人物がいた。
「ちくしょう！〝ウルトラマンギンガ〟め！〝希堂 輝〟め！〝ストライクウィッチーズ〟め！よくも『闇の支配者様』を、『ダークルギエル様』を滅ぼしやがって！おかげで俺様は失業だよ！このマグマ星人がこんな惨めな目に合うのも！全部全部アイツらのせいだぁっ!!」
身体のラインが出る黒いインナースーツに青白い肌に尖った耳をした金髪に顔にマスクを付けた宇宙人、『サーベル暴君 マグマ星人』。
ナックル星人グレイのような、『闇のエージェント』の小間使い同然の扱いを受けながらも、いつの日か正式に闇のエージェントとなりスパークドールズの怪獣を使い、地球を暴れてやるつもりであった。

だが、『闇の支配者 ダークルギエル』が憑依していた統合軍ブリタニア空軍大将〝トレヴァー・マロニー〟が、〝ウルトラマンギンガである希堂輝〟と〝第501統合戦闘航空団 ストライクウィッチーズ〟により、その正体と『ネウロイのコア』を使用する新兵器『ウォーロック』を使ったマロニーの陰謀を暴かれ失脚し、『ダークルギエル』もウルトラマンギンガとの戦いで敗北してしまい唯一生き残ったマグマ星人はブリタニアから逃げ、流れ流れてこの東欧オラーシャ帝国へと逃げ延びてきたのだ。

「ちくしょう!! 俺の栄光のエリート街道を台無しにしやがってっっ!!」

悪態をつきまくるマグマ星人はひとしきりに暴れるて平静に戻ると、ブリタニアから逃げる際に回収しておいた〝モノ〟を見る。

「『ダークルギエル様』が隠していた〝宇宙最凶の怪獣達〟と〝予備のダークスパーク〟。これだけあればこんな程度の低い技術しか持たない人間共を滅ぼす事ができるぞ!! ウハハハハハハハ、アアァハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッッッ!!!」

マグマ星人は〝スペースビーストのスパークドールズ〟と〝ダークスパーク〟を

眺めて高笑いを上げた。

ｌ???　ｓｉｄｅｌ

時は１９４４年９月、扶桑皇国・佐世保。

茶色の髪をセミショートまで伸ばした少女、『雁淵ひかり』が薄紅色の長髪をした姉『雁淵孝美』と共に欧州へ向かう為に佐世保港から船にのり欧州へ向おうとしていた。

「ひかり、いよいよウィッチとして実戦に出るけど、覚悟はできてる？」

「うん！　大丈夫だよお姉ちゃん！　私もガリアを解放した第５０１航空団ストライクウィッチーズの人達みたいにネウロイから皆を守るんだ！」

「ガリアを解放した、ね・・・・」

「どうしたのお姉ちゃん？」

「えぇ、これはあくまでもウワサなんだけどね、ブリタニアでは１ヶ月前から『謎の巨大生物』とその『巨大生物と戦う巨人』が現れるって、囁かれているのよ」

「『巨大生物に巨人』？」

「勿論、そんなのただのウワサなんだけどね。ゴメンね、変なこと言っちゃって」
「ううん。でもお姉ちゃんと別の部隊に配属なんて残念だなぁ・・・・」
「フフフ、私はオラーシャ帝国のペテルブルグ、ひかりはスオムスのカウハバだったわね？」
「うん！　私頑張るよ、お姉ちゃん!!」
　この時、雁淵姉妹は知らなかった。
『そのウワサが真実であった事』
『その巨大生物$|$怪獣$¿$と巨人$|$ウルトラマン$¿$と自分達が出会う事』
『そして、自分達の運命に大きく影響を与える、少年と出会う事』
『地底世界の勇者』が、『勇気の魔女達』が出会うのは、すぐそこに迫っていた。

---

ー『ビクトリアン・ジーク』ー
CV：福山潤（コードギアスシリーズ：ルルーシュ・ランペルージ、ぬらりひょんの孫：奴良リクオ）

年齢：15才
容姿：原作『ウルトラマンギンガＳ』のショウとほぼ同じ。
身長：孝美と同じ。
性格：少し短気な所は有るが、毎日鍛練を欠かさない質実剛健な性格。女の扱いが少し苦手。
使い魔：無し
魔法力：武器創造（魔力で刀や槍といった武器を生成する、銃とか複雑な武器は構造を理解しないと造れない）。
身体能力：希堂輝が軽業師なら、ジークは拳や蹴りを使った真っ向勝負を得意とする格闘家タイプ。魔力を使ったウィッチにも引けを取らない戦闘力を持つ。
備考：ジークとはドイツ語で勝利と言う意味。

ー『スカイビクトリー』ー
デザインは『魔法戦隊マジレンジャー』の『スカイホーキー』。マジレンジャーのマークの代わりにＶのエンブレムが付いている。

# デート・X・アライブⅠ

デート・ア・ライブとウルトラマンXです。
注意：『大空大地』と『山瀬アスナ』は出ません。二人以外の『Xio』メンバーは出ます。

---

～15年前～
無限に広がる宇宙にある太陽系に、『赤い光』と『黒い光』がぶつかり合いながら地球を迂回して、太陽の方へと向かった。
『ーーーーー!!』
『黒い光』は不気味な笑いのような声を出し、『赤い光』とぶつかり合いを繰り広げ、太陽の表面にたどり着いた。
『赤い光』が『黒い光』に浸かって突っ込むと、『黒い光』は燃え盛る太陽に呑まれ、大きな爆弾を巻き起こし、『赤い光』も呑み込まれてしまった。

ｌ地球ｓｉｄｅｌ

そして太陽に起こった異変は、地球にも影響を及ぼした。地球に太陽から放たれたスーパーフレアにより黒いオーロラが現れ、そこから〝脅威〟が現れた。

『ギュワアアアアアアアアアッ！！！』

『グワアアアアアアアアアアッ！！！』

『キシャアアアアアアアアアッ！！！』

『ガアアアアアアアアアアッ！！！』

『ファアアアッ！！！　ファアアアッ！！！』

その太陽のスーパーフレアの光によって、世界各地に眠っていた謎のオーパーツ『スパークドールズ』の怪獣が実体化し、暴れだしたのだ。

次々に出現する怪獣や異星人に対抗する為、世界各国に組織された特殊防衛部隊として、『Ｘｅｎｏｉｎｖａｓｉｏｎ ｏｕｔｃｕｔｔｅｒｓ（未知なる外敵からの防衛戦闘部隊）』、通称『Ｘｉｏ§§ジオ§¿§』が設立された。

～現在 天宮市～

俺には子供の頃から夢があった。巨大な生物、怪獣と人間が共存できる世界を作りたいと。何でそんな夢を持つようになったから解らない。でも、俺は何故か時々放送される怪獣のニュースを見ていると、怪獣達が人間の都合で住み家を追い出されているように見えた。

「(アイツらだって、静かに暮らしてきたいだけなんだよな・・・・)」

15年前、突如起こった太陽光線、別名『ウルトラフレア』がこの地球に『怪獣』と呼ばれる巨大生物を出現させた。しかし、この地球には、もう一つの人類を悩ます災害がある。

30年前から起こる広域震動現象『空間震』。発生原因不明、発生時期不定期、被害規模不確定の爆発、震動、消失、その他諸々の現象の総称である。怪獣達と同じように街や人類に牙を剥く現象。多くの国の一帯がくりぬかれたかのように消失した。

『怪獣災害』と『空間震災害』、この二つが現在世界各国の人々を悩ます災害なのだ。

「（空間震に怪獣、本当に世の中どうなっているだか・・・・）」

春休みの昼時、TVの怪獣に対する特別番組を眺めながら、中性的な顔立ちをした優しそうな少年『五河士道』はそんな気持ちになっていた。

Ｐｒｒｒｒｒ、Ｐｒｒｒｒｒ、Ｐｒｒｒｒｒ、Ｐｒｒｒｒｒ・・・・・。

「おっと、もうすぐバイトの時間だな・・・・・」

四月には高校二年生となる士道は、去年から始めている〝バイト〟の時間を報せる携帯のアラームを切ると、着替えてウェストポーチを持って家を出て行った。

天宮市郊外にある五河家から徒歩30分の距離にある同じように郊外にあるＸの形をした大きな施設、『Ｘｉｏ』の基地に着いた士道は早速着替えて、仕事に励んだ。

「五河君、お疲れ様」

「こんにちは料理長」

『Ｘｉｏ』の食堂でバイトをしていた士道は、その料理スキルを見込まれて、時々『Ｘｉｏ』にいる〝ある人物〟のいる場所に料理を作る為に働いていた。そして料理を作り終えたのでトレーワゴン、料理が入った鍋やご飯が入ったおひつを乗せて、

〝ある人物〟がいる『Xｉｏのラボ』に向かった。
「こんにちは、グルマン博士」
「おぉ、士道か！　待っていたぞ、良く来たな‼」
　士道が挨拶をすると機嫌良く返事したのは、オレンジ色の体色にカタツムリのように突き出た目をして、大きな口をし、2mの身体に両肩にはカタツムリの殻のようなの付けた宇宙人『健啖宇宙人ファンドン星人のグルマン』である。『Xｉｏラボのラボチーム特別顧問』をしている異星人だ。『ファンドン星人』は物凄い大食いの宇宙人で、ファンドン星人の平均的食事は1日5回の上に大の大人数人前は軽く平らげる程。以前士道の手料理を食べたおり。
【ウマーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーイィッッ！！！】
　と口や目から光を放つ程に感動し、以来士道の事をいたく気に入り、そのまま士道は、『Xｉｏ』で『グルマン博士専属料理人』として雇われる事となった。学生である士道を『Xｉｏ』に入隊させる訳にはいかないと考えた『Xｉｏ隊長』だが、グルマン博士はオーバーテクノロジーを提供してくれたり、怪獣災害に対する防衛

対策にも協力してくれている。

そのお陰で『Ｘｉｏ』は色々と不穏なウワサが絶えない『ＤＥＭインダストリー』や、その配下組織とも言える『ＡＳＴ』に遅れを取る事なく、活動ができている。

そのグルマン博士からのたっての頼み故に、士道にはこちらから要請があったらグルマン博士の元に来てほしいとＸｉｏの隊長に頼まれ、士道本人もグルマン博士に聞きたい事があったので了承した。

「博士、今日はなんの話を聞かせてくれるんだ？」

「モグモグ・・・ウム、実はな。士道に〝あるもの〟を見せてやろうと思ったのだ。おかわり」

「はいはい。んで〝あるもの〟ってなんだよ？」

ラボの一角に三畳もある畳に丸ちゃぶ台が置かれた昭和の雰囲気あるグルマン博士の個人スペースである。『士道特性のカツ丼（大盛りラーメン丼の超特）』を食べながら５杯目のおかわりをするグルマン博士に士道はイヤな顔一つせずカツ丼を盛り付けた。自分の作った料理を異星人のグルマン博士が美味しく食べてくれる事が純粋に嬉しいからだ。

他のラボのスタッフは仕事をしながらそんな二人をにこやかに見ていた。グルマン博士は士道が飯を盛っている間に、長方体のマルチデバイスをちゃぶ台に置いた。
「博士、これ何なんだよ？」
「これは『Ｘｉｏ』の隊員共通通信機、『ジオデバイザー』だ」
「ネーミングが安直じゃないか・・・・？」
「まぁそこはあまり気にするな。これを君にやろう」
「えっ!?　そんな悪いだろう！　これって思いっきり極秘なモノじゃねぇか!?」
「何、いつもウマイ食事を作ってもらっているお礼だ。それにこれには怪獣が現れた事を検知してくれるし、『空間震』の発動も教えてくれる」
「えっ!?　怪獣が現れた事や『空間震』が起こる事も分かるのかよッ!?」
『空間震』の発動は不定期、それが分かる技術に士道は驚いた。
「ウム、以前話したが怪獣は『スパークドールズ』から出現する。その時『スパークドールズ』から発生する特殊なエネルギー波が放出される、このジオデバイザーはそのエネルギー波を検知してそれを教えてくれる。
『空間震』も同じだ。過去の『空間震』の発生データから解析してみると、『空間震』

の発動の際に微弱な『空間湾曲』が発生するのだ。これはそれも検知してくれる」
「こんなに小さなデバイザーで、流石はグルマン博士、天才だわ・・・・」
「まぁそう誉めるな。そして士道、何故『Ｘｉｏ』がこの天宮市に基地を構えているかも、以前話したな？」
「・・・・〝誰かが天宮市に大量の『スパークドールズ』を持ち込んだから〟、だったんだよな？」
「ウム、怪獣達が封印された謎のオーパーツ『スパークドールズ』。これらは使い方によっては自然現象のように不確定に起きる『空間震』と違って、『人間の手で行える災害』だからな。『Ｘｉｏ』や国連としても対策を練っているのだよ」
「人間の手で行える・・・・でも、『スパークドールズ』から怪獣達を呼び出して操る事が可能なのかよ？」
　士道は怪獣達を使って操り悪事を働く人間がいることが信じられないように聞く。
「・・・・・士道よ、自分の星の人間達を信じたい士道の気持ちは分からなくもないが、残念ながらこの星には私を含めて多くの異星人達が地球にひっそりと暮らし

ている。中には宇宙の警察機構から逃げ出して来た凶悪な犯罪者なんかがな。そんなヤツらが欲の皮が突っ張った邪な人間と手を組んで、『スパークドールズ』から怪獣を呼び出して操り悪事を起こす可能性があるだろう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

グルマン博士の言葉に士道はまだ納得できない顔を浮かべていた。

「士道、とりあえずこのジオデバイザーは持っておけ。なるべく危険には関わらないようにするんだぞ」

「博士・・・・」

「こんなにウマイ食事を作ってくれる〝友人〟を、私は失いたくないからな」

士道を見つめるグルマン博士の突き出た瞳には、〝友人の身を案じる優しさ〟があった。

「ありがとう博士。貰っておくよ」

士道も〝異星の友人〟の言葉を聞き入れて、ジオデバイザーを持ってきていたウェストポーチに入れた。

「さてと、ふあぁ〜〜。士道済まないが少しの間寝かせてくれ・・・・」

ファンドン星人は一度食事を終えると食後の昼寝をする習性を持っており、グルマン博士は布団を敷いてそのまま爆睡した。

「ＺＺＺｚｚＺＺＺｚｚＺＺＺｚｚＺＺＺｚｚＺＺＺｚｚｚ・・・・」

「食後に爆睡って、ファンドン星人の身体って良く肥満体にならないな・・・・」

「まあまあ士道君。これも博士の生活ライフの一つなんだからさ」

「そうそう♪」

「マモルさん、ルイさん」

呑気に鼻ちょうちんを出して爆睡するグルマン博士に呆れる士道に、話しかけたのは、白衣を着た小太りの男性『三日月 マモル』、黄色いカチューシャを付けた眼鏡の女性『高田 ルイ』。二人はグルマン博士の助手兼『Ｘｉｏ』のメカニックである。グルマン博士の食事係のような士道とは歳も近いのもあり仲良くしている。

「そう言えば、この間〝ゴモラ〟の『サイバー怪獣実験』があったって、〝ワタルさん〟から聞いたんですけど、どうでした？」

「うん、〝ハヤトさん〟にオペレーターをやってもらったけど・・・・」

「ダメだったんだよね・・・・」

「そうか・・・・」
『サイバー怪獣』。それは『スパークドールズ』を『Ｘｉｏ』のラボチームが解析し、エレクトロ粒子で怪獣の姿に再現した、新たな戦力である。解析した怪獣のデータを『サイバーカード』とし、ジオデバイザーに装填して出現させるのだが。
「粒子定着率60㌫までは行ったんだけどね・・・・」
「その前は定着率50㌫も行かなかったって聞きましたよ。少しずつだけど進歩しているって事でしょう？」
「うん、そうなんだけどね」
「じゃ今度はさ、もっと可愛い子で試して見ようと思うんだ！例えば、この子！」
ルイがタブレットに表示したのは、『宇宙怪獣エレキング』のサイバー怪獣だった。
「『宇宙怪獣エレキング』って、可愛いんですか・・・・？」
「まぁ女の子の〝可愛い〟は十人十色って言うからね・・・・」
あまり可愛いとは言えないエレキングのフォルムを可愛いと言うルイに、士道とマモルは半眼になる。

「今は〝ゴモラ〟で起動実験しておこうって話だけどね」
マモルは『古代怪獣ゴモラ』の『スパークドールズ』を持ってきて、士道に渡した。
「ゴモラ、俺もサイバー怪獣になったお前に会ってみたいよ」
士道はゴモラの『スパークドールズ』を優しく撫でた。
「そうだ士道君、〝あれ〟を聞かせてあげるね♪」
「〝あれ〟??」
首を傾げる士道にルイがパソコンとヘッドフォンを持って来て士道にヘッドフォンを被せた。
「良く聴いてみて」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」
♪〜♪〜♪〜♪〜♪〜♪〜♪・・・・。
ヘッドフォンから不思議と心地良いメロディーが流れる。
「ルイさん、これって・・・」
「グルマン博士が言うには〝星の声〟って言うんだって！」

「〝星の声〟？」
「そ！　地球には宇宙から大量の電子が降り注いでいるんだ」
「それを音に変換して解析すれば、宇宙誕生の謎を解き明かす事もできるって、博士は言ってるんだけどね」
「へぇ〜〜・・・・」
カタカタカタカタ・・・・。
「ん？　ゴモラ??」
士道はちゃぶ台に乗せたゴモラの『スパークドールズ』が振るえているのを見て訝しそうに見てヘッドフォンを首にかけた。
「士道君、ジオデバイザーにゴモラを付けてみて」
「ジオデバイザーの〝ガオディクション〟は、怪獣達が抱いている心理状態を教えてくれるんだ」
「あ、はい」
士道はゴモラの左足の裏をジオデバイザーに付けた。
《ガオディクション、起動します。ゴモラ、解析中》

《キシャアアアアアアアアッ！》
《解析完了しました。〝脅威〟、〝不安〟、〝警戒〟》
「ゴモラが、不安を抱いている？」
・・・・ユナイト・・・・。
「ん？　マモルさん、ルイさん、何か言いました？」
「え？」
「何も言ってないよ？」
「(おかしいな？　気のせいかな??)」

ー某所山中ー
その頃、天宮市郊外の山の川原で高校生位の三人の少女達が川原で遊んでいた。
1人はギャル風でポニーテールにした活発そうな長身の少女『山吹亜衣』。
もう1人はボブカットの髪が特徴的な無個性が個性と言わんばかりの中くらいの背の少女『葉桜麻衣』。
そして三人目は眼鏡をかけた黒髪の長髪の小柄な少女『藤袴美衣』。

横一列に並ぶと階段のように見える三人の少女。後に士道のクラスメートとなる、名物トリオである、通称『一人称トリオ』、別名『亜衣麻衣美衣トリオ』である。
春休みなので自転車でサイクリングしていた亜衣麻衣美衣は川原で休憩がてら川遊びをしていたのだが。
「ん？　ねえちょっと、何か熱くない？」
「えっ⁇」
「？？？」
するると、突然川から沸騰したような気泡が溢れてきて川の温度がお湯のように熱くなっていった。
「うわっ熱っ！熱つつ‼」
「アチチチチチチチ‼」
「マジ引くわーーーー⁈」
川から気泡は幾つも吹き出し、沸騰したように湯気が立ち込め、たまらず川から出る亜衣麻衣美衣。
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・・。

川の沸騰に戸惑う亜衣麻衣美衣のいる向かいの山で、赤い光が発光し、そしてーーーーーーーーー。

『グワアアアアアアアアアンンンッッ！！！』

「でえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっっっ！！！！」

「ウソぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっっっ！！！！」

「マジ引くわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！」

悲鳴を上げる亜衣麻衣美衣の視線の先には、山を砕いて現れたのは、黒い身体に炎を纏ったような怪獣、『熔鉄怪獣デマーガ』が、火炎を吐いて暴れていた。

そしてデマーガを見るや否や、亜衣麻衣美衣は自転車に乗り込み、競輪選手も真っ青になるほどのスピードでデマーガから逃げ出した。

『グルルルルルルルル・・・・!!』

デマーガは亜衣麻衣美衣が逃げる先、天宮市の方へと目を向け、地鳴りを上げながら天宮市へと進行していった。

ー士道ｓｉｄｅー

士道が『Ｘｉｏ』の基地を出て少し買い物をしようと天宮市の商店街に向かうと。
ウゥーーーー!! ウゥーーーー!! ウゥーーーー!!
「っ!? これって、怪獣警報!?」
・・・・ユナイト・・・・ユナイト・・・・ユナイト・・・・ユナイト・・・・。
「またこの声？ ジオデバイザーからか？」
士道がジオデバイザーを取ると、謎の声が聞こえていた。
ユナイト・・・・ユナイト・・・・ユナイト・・・・。
「あぁたくっ、何なんだよ！・・・・・・・ん？」
ジオデバイザーから聞こえる声に辟易している士道の周りが突然暗くなった。
「何だ？ 曇り空か・・・・・？」
振り向いた士道の目の前にいたのは、『熔鉄怪獣デマーガ』が現れた。
「ウッソ～～・・・・」
『グワアアアアアアアアアンッッ!!!』
「マジかよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっっ!!」
突然現れたデマーガに、士道は悲鳴を上げた。

ウルトラマンXのEDを聴いていたら、デート・ア・ライブと合うんじゃないかなぁ？と思って書きました。

# デート・X・アライブⅡ

随分と久しぶりに書きました・・・・。

---

ー士道ｓｉｄｅー

「おいホントにマジかよーーーー!!」

『熔鉄怪獣デマーガ』と出会ってしまった士道は、自分でもこんなスピードが出るのかと思ってしまうほどの速度で逃げていた。

やっぱり人間、死ぬ気でやればどんな事でもできるんだなぁ、と的外れな事を考えながら、天宮市の街を駆け抜ける。

『グバァアアアア!!』

デマーガは士道を追っているのか、それとも適当に歩いているのか、街を破壊しながら闊歩していた。

そこに、『風間ワタル』と『貴島ハヤト』が操縦するＸｉｏの戦闘機『スカイマ

スケッティ』が現れ、機銃でデマーガを攻撃した。
が、デマーガが口から熔鉄熱線を放ち、スカイマスケッティは回避するが僅かにかすり、ダメージを受け、デマーガの後方に墜落した。
「ワタルさん！　ハヤトさん！」
何度か顔を合わせている二人が落とされたのを見て、士道が声を張り上げた。
興奮したデマーガが、熔鉄熱線を辺りに放ちながら暴れる。
「なんだよっ！　ＡＳＴとか自衛隊は動かないのかよっ！」
グルマン博士から、ＡＳＴの存在を教えられている士道は、現れない彼らに悪態をつくが、ＡＳＴはあくまで『空間震を起こす存在』を討伐する組織であり、怪獣災害に対してはＸｉｏの領分と言う事で動けないのだ。
まあそれは両陣営の上層部の、安い縄張り争いのようなモノだが。
『グルルルル・・・・』
「ぁ・・・・・！」
と、そこでデマーガと士道の目が、バッチリと合わさったーーーー。
「やっべ・・・・・・・・・！」

『グバァアアアア！！！』
デマーガが睨み叫んだ。完全に士道を獲物として狙っている。
「うわぁぁっ！」
士道は腰を抜かし、最早これまでかと、諦めようとした。
その時ーーーージオデバイザーが振動して、謎の音声が発せられた。
『ユナイト・・・ユナイト・・・・！』
「えっ!?　何だよ、こんな時に！」
士道が音声に戸惑っていると、デマーガが熔鉄光線を吐き出した。
とても逃げられない。士道は思わず顔を背け、思わずジオデバイザーを盾にするように突き出した。
ーーーーその時、ジオデバイザーの画面に人の姿が浮かび、X字の光輝きが発せられ、金色の縁が描かれる。
「えっ？」
士道がジオデバイザーの変化に声をもらすと、光りは辺り一面に広がり、士道は直視できずに目を閉ざした。

ｌ???　ｓｉｄｅｌ

「(まったく。ＡＳＴも自衛隊も頼りにならないわね)」

真紅の軍服をシャツの上から肩掛けた赤い髪の少女は、怪獣が現れ、街や人に被害が出ているのに関わらず、Ｘｉｏの対処すべき事で自分達には関係ないと言わんばかりの連中に悪態をついていた。

「司令。怪獣の足元に高エネルギー反応が出ました」

ＳＦ映画のような場所で、デマーガを観測していたオペレーターから報告を聞いた長身の金髪の男性が、その場所の中心にある椅子に腰掛けた、責任者と思われる少女に、デマーガの足元(士道がいた地点)から現れた光の事を報告すると、少女はメインモニタに映るその光を見据えた。

銀色と赤のメカニカルな巨人が直立し、胸にはＸ状の青く発光する結晶体が燦然と輝いている。

ーカミキsideー

Xio日本支部基地・オペレーション本部では、誰にも止められずに大暴れするデマーガの姿を目の当たりにして、『神木正太郎(カミキ)』と『橘さゆり』に、オペレーターの『松戸チアキ』が報告する。

「新たな怪獣！・・・・・いえ、巨人が出現！」

「ーーーー巨人・・・・・!?」

モニターに視線を戻すと、二人も巨人の姿を目の当たりにし唖然となった。

ー士道sideー

目を開けた士道の視界に広がるのは、まるで電子回路の中にいるような空間に、自分は立っていた。

「・・・・・・・・ぇっ？　何だこれ？　どうなってんだ?!」

戸惑う士道の耳に、凛々しい声が響いた。

『説明は後だ！　行くぞ、士道!!』

「えっ誰ッ!?　つか、何で俺の名前をーーーーえぇっ！!?」

士道は自分の身体を見下ろすと、驚愕した声を出した。
何故なら、自分の身体が、明らかに人間の身体でなく、サイズが明らかに人間の大きさでない巨人となっていたからだ。
「なんじゃこりゃあああああああああああああああああっ！！！　つか高っ！　どうなってんだよこれっ!!」
巨人は腰が引ける。
「高い高い高い!!」
『高くない！　巨大化したんだ！　だから落ちない！』
「巨大化って何・・・・」
「グバアアア！　ギャギャギャギャギャギャ！」
戸惑う士道の前に、デマーガが、突如出現した自分と同等の背丈の巨人を敵と認識したのか、肉薄して来る。
『「うわっ！　うわっ！　来るな来るなーーーー!!」』
両手を出して振って、デマーガに来るなと言う士道だが、デマーガは構わず、巨人ʂʂ士道ʂʂの腕に噛みついた。

『ぐっ！　ウワァ！　アァっ!!』

巨人$|$士道$?$はデマーガを腕から外し、抑え込もうと抵抗するが、士道自身が戦闘向きでないのもあって、簡単にデマーガに突き飛ばさ、アスファルトに倒れる。

『グワァオオオ!!』

更にデマーガは巨人$|$士道$?$に、顔を突きだそうとするが、巨人$|$士道$?$が頭を抑える。

『テァッ！』

巨人$|$士道$?$は足でデマーガを押し出して、下がらせると、何とか起き上がろうとするが、

『ギャギャ！』

『うわぁっ!!』

デマーガが頭を振って、巨人$|$士道$?$を押し飛ばした。

『コラッ！　しっかりしろ！　そんなんじゃ戦えないぞ！』

『「はぁっ!?　〝戦う〟?!　俺が?!　何でだよっ！！？」』

『他にする事があったなら言ってみろ!!』

巨人らしき声が士道を叱咤するが、ほぼ逃げ腰になっている士道にはほとんど意味がなかった。

起き上がった巨人§§士道§§に、デマーガが熔鉄光線を放つ。

『ウワアアアアアア!!』

巨人§§士道§§が大きく吹っ飛ばされ、背後のビルを巻き添えにしてばったり倒れる。

『「ウワアチチチチチ!! あちぃよ!」』

『落ち着け! あの熱線をくらっても平気だろう?』

確かにそうだった。

熱量は感じたが、身体は火傷したような外傷は無かった。

『「本当だ・・・・」』

『君と私は『ユナイト』した。心を一つにすれば、あの怪獣と戦えるんだ!』

『「そ、そんな事突然言われたって!」』

『できる! 先ずは深呼吸だ!』

「うわあああああああああ!!」

『『「っ!!」』』

近くで悲鳴が聞こえ、巨人$|$士道$¿$が目を向けると、文系の士道と同い年の少年が、瓦礫に囲まれて動けない状態だった。

『「っ！ アイツって、同じクラスの〝岸和田〟!?」』

士道と同じ、来禅高校の一年生でクラスメートの岸和田だった。

『ギャギャギャギャギャ!!』

「っ！」

デマーガが、岸和田に向けて、熔鉄熱線を放とうとした。

『「岸和田!!」』

『グゥアアア!!』

横から巨人$|$士道$¿$が飛び込んできて、その身を盾に岸和田を光線から守ったのだった。

「えっ・・・・・!? 僕を・・・・守って、くれたの・・・・・？」

熱風で倒れる岸和田は起き上がると、。巨人$|$士道$¿$と目が合い、身を挺して自分を守ってくれたのかと、戸惑いがちに見つめた。

『「マジかよ・・・・？　俺が、やったのか？」』
『ああ。ファインプレーだったな！』
巨人$|$士道$¿:$だが、熱線が直撃したのに、対したダメージを受けている様子だった。
『グバアアアアア!!』
デマーガが巨人$|$士道$¿:$に向かってくる。
『来るぞ！』
『「何だかよく分からないけど、やれるだけやってみるか！」』
どうやら士道の中で吹っ切れたのかヤケクソになったのか、腰を据えて、ジオデバイザーを構えると、デバイザーが輝る。
『良し！　行くぞ、士道!!』
ジオデバイザーがX字の光を放つと、巨人$|$士道$¿:$が立ち上がると、胸元のX字の結晶体が光輝く。
『シュッ！　イィィィサァァァァ!!』
『グバアアアアア!!』

巨人§§士道§§が駆け出すと、デマーガに向けてミドルキックを繰り出して、デマーガを下がらせると、頭を掴んで殴り付けた。

『シュァッ！』

『ギャギャ！』

頭を上げたデマーガに、すかさず腹部に拳を叩きつけると、頭を掴んで膝蹴りを放つ。

『シュッ！』

さらにデマーガと戦う巨人§§士道§§。

その様子を、カミキ隊長達Ｘｉｏも、司令と呼ばれた少女とオペレーター達も、天宮市の市民達も、駐屯地でドローンからの映像を見ているＡＳＴ隊員達も、その目に見つめた。

天宮市の市民達は、その巨人の戦いを応援していた。

『グバアアアア!!』

デマーガが熔鉄熱線を放つが、巨人§§士道§§はそれを転がりながら回避すると、デマーガにタックルをぶつけた。

『グバアアアアアア!!』
『ウヮァアッ!!』
デマーガは押し出されながらも、尻尾で巨人$|$士道$¿$を攻撃し、巨人$|$士道$¿$は倒れる。
ーーーーピカンッ！　ピカンッ！　ピカンッ！　ピカンッ！
巨人$|$士道$¿$の胸元のX字の結晶体が赤く点滅し始め、士道のいる空間も、赤く光った。
『タイムアップか！』
『「何だよタイムアップって!?」』
『「我々の『ユナイト』は限界のようだ！」』
巨人と士道が『ユナイト』している制限時間が、迫っていた。

---

次回、X編終了。いつになるやら・・・・？

# デート・X・アライブⅢ

ウルトラマンエックス編。漸く終了。

---

ーカミキｓｉｄｅー

Ｘｉｏ司令室にて、巨人ﾀﾀﾀ士道ﾀﾀﾀとデマーガの戦いを見ていたカミキ隊長に、先程デマーガに撃墜され、復帰したワタルからの通信が入った。

《冷却ファン、復旧！》

「ファントム光子砲は使えるか？」

《・・・・・可能です！》

「・・・・・・・・あの巨人を援護しろ！」

「え・・・・？」

隊長の指示に、副隊長のさゆりが、顔を戸惑いがちな声を発した。

・・・・・・・・・・・・・・・

それはワタルとハヤトも同様だった。
「援護だっ!!」
了解！
隊長から一喝され、二人は同時に返答した。

ｌ士道ｓｉｄｅｌ
『「うわぁぁぁぁっ!!」』
『ギュワァァァッ！』
空へ舞い戻ったスカイマスケッティが、巨人士道に馬乗りになってタコ殴りにしているデマーガに向けてレーザーを連射で攻撃する。
『グバアアア！ ギャギャギャギャッ！』
不意打ちを受けてデマーガがよろめき、巨人士道から離れる。
『「ハヤトさん！ ワタルさん！ 巨人、今だっ！」』
『よしっ！』

これで巨人$|$士道$¿:$は体勢を立て直した。

『シュアッ！』

巨人$|$士道$¿:$は全身に力を入れ直すと、胸のX字のクリスタルの赤い点滅が、黄色い輝きに変化した。

そして巨人$|$士道$¿:$は右腕を斜め上に突き上げてから左脚を、弧を描くように後ろへ持っていき腰をひねる。

ねじった上半身を戻す勢いに乗せて両腕を交差させると・・・・。

『シェアァッ！』

両腕からX状の光線が放たれた。

『グバアアアア！　ギャギャギャギャギャギャギャ！』

光線はデマーガに直撃し、巨人$|$士道$¿:$の左足が光線の反動に押されるように道路の舗装をめくれる。

光線の照射がピークに達したところで、

ーーーチュドォォォォォォォンンッ!!

デマーガの身体は光となって大爆散した。

が、すぐに飛び散った光が爆心地に集まり、凝縮されていく。

ーーーそうしてデマーガは、肉体を圧縮されてスパークドールズの姿に変化した。

『「これって・・・『スパークドールズ』か？」』

『ああ。怪獣を殺したのではない。『スパークドールズ』に変化させたのだ』

デマーガを倒した巨人$|$士、$¿$は、大地を蹴って急速に大空へ舞い上がっていく。

『シュワッ！』

飛び去っていく巨人$|$士道$¿$を、Xｉｏだけでなく、この戦闘を見ていた〃複数の組織〃が行方を補足しようとしたが、〃オーバーテクノロジー〃を以てしても、できなかった。

◇

巨人の姿から元に戻っていた士道は、スパークドールズになったデマーガを拾い

上げていた。

「これが、前に博士が教えてくれた『スパークドールズ』。あの光線でデマーガを『スパークドールズ』にしたのか？　お前って凄い力を持ってるな・・・・」

ダイチはジオデバイザーにそう呼びかけた。道具に話しかけるのは何とも奇異な行動だが。よく見れば、デバイザーの外装が先ほどまでと変わっていて、縁が金色になっていたのだ。

『正確には、君と私の力だ』

しかもデバイザーは士道の呼びかけに返答した。それも、まるで人間のように感情の乗った声だ。

わずか数分程度の時間で、士道のジオデバイザーに何が起こったのか。

「んで、お前俺のジオデバイザーにいつまでいるつもりだよ？」

『私はこのデバイスが気に入った！　ここにいれば、また君とユナイトできる。よろしくな、士道！』

「・・・・えっ？　ずっとここにいるのかよ!?　おい！　おい！　おいっ！」

士道が繰り返し呼んでも、変わり果てたデバイザーはそれ以上返事をしなかった。

◇

それからすぐ、Ｘｉｏの隊員（士道と顔見知り）に保護され、士道はデマーガの『スパークドールズ』と一緒に、Ｘｉｏ基地に送られ、『スパークドールズ』を持ってグルマン博士の研究室に来た。

「災難だったな士道」

「ホントだよ。怪獣の足元にいたときは、人生終わったかと思ったぜ。でも、これって・・・」

ちょうど起きたグルマン博士が淹れたお茶を啜りながら、士道はデマーガの『スパークドールズ』を見せると、グルマン博士も難しげにムゥッ、と唸る。

怪獣を『スパークドールズ』に戻す技術は、現在、どこの『組織』にもない筈なのだ。

そうーーーー〈ＡＳＴ〉に〈ＳＳＳＳ〉、そして〈ＤＥＭ〉にも。

「士道。お前はそれをどうしたのだ？」

「あの、巨人の力だと思う」
話していると、カミキ隊長が研究室にやって来て、士道とグルマン博士が座るちゃぶ台に座った。
「五河くん。大変な目にあったな。ケガとかはないかい？」
「あ、いえ。検査してもらいましたけど、何処にも異常はないって言われました」
「そうか。君はあの巨人の近くにもいたんだな。それで、あの巨人は何者だと思う？　近くにいた君なら、何か分かるんじゃないかな？」
カミキ隊長がそう訪ねると、士道は訝しそうに眉根寄せた。
「あの巨人って、Ｘｉｏでも知らないんですか？」
「カテゴライズ不能。Ｘｉｏのデータベースにも前例のない、未知の超人だ」
「未知の、超人・・・・」
「別に未知ではないぞ。あれは〈ウルトラマン〉だ」
「「う、ウルトラマン？」」
グルマン博士の言葉に、カミキ隊長と士道は同時に声を発した。
「は、博士！　あの巨人の事、知ってんのかよっ!?」

「〈ウルトラマン〉、と言ってましたが・・・・？」

二人の言葉に、グルマンかは淡々と説明した。

「うむ。我ら宇宙の者達は皆知っている。宇宙の平和と秩序を守る『光の戦士』。それが〈ウルトラマン〉だ」

「『光の戦士』、ですか・・・・」

「（コイツが、ね・・・・）」

士道のジオデバイザーに、その超人の姿が一瞬だけ映り、その胸元にあるＸ字を見て、士道は〈ウルトラマン〉の名を発した。

「つまり、彼の名は・・・・エックス。ウルトラマン、エックス・・・・！」

士道がそう言うと、カミキ隊長とグルマン博士が目を向けた。

「〈ウルトラマンエックス〉、か」

「〈ウルトラマン〉と言うのは、あくまで彼ら『光の戦士』達を総称であり、個別の名前ではないからな。これからあの〈ウルトラマン〉を〈ウルトラマンエックス〉と名付けるのも良いだろう」

「・・・・・・・・・」

「（・・・・一説では、〈ウルトラマン〉は地球のような星では人間と共に戦うと聞いたが、まさか・・・・）」

士道が自分たちジオデバイザーを見ていると、グルマン博士が何かを察し、話しかけた。

「どうだ士道？〈Ｘｉｏ〉に入隊する気はあるか？」

「えっ？勿論あるけど・・・・俺高校生だぜ？」

「博士」

「カミキ隊長。士道は以前から怪獣達が安心して暮らせる世界ってないのかと相談を受けていてな。ＳＳＳＡＳＴＳＳとて高校生を入隊させていると言うし、〈Ｘｉｏ〉も人手不足だしな。士道の人間性は私が保証する。どうだろう？」

「・・・・・・・・五河くん。君はどうしたい？〈Ｘｉｏ〉に入隊すれば、色々な経験が積めるが、危険もかなり伴う。ヘタをすれば死ぬ事も十分あり得るのだが。君はそれでも、入隊するかい？」

「っ・・・・・・・・・・・・・・」

カミキ隊長の目に宿る『本気』の視線に、士道は息を詰まらせ身体を硬直させる、

が。

「ーーーーお、俺は・・・・・！」

◇

《「えぇえええええええええっ!?〈Ｘｉｏ〉に入隊したぁぁぁぁっ!?」》

「いやあくまで仮入隊だからな。本格的な入隊は訓練を受けたり、博士の研究の手伝い等をしながらだってさ」

帰宅後、〈Ｘｉｏ〉に入隊する事を妹の琴里やテレビ電話で両親に相談する士道。案の定、母・遥子と妹が目をひん剥いて家全体がビリビリと揺れる程の大声をあげた。

怪獣と戦う事はしないし、ほとんど研究室のお手伝いや訓練をするだけだからと必死に士道は家族に頼み込んだ。父・竜雄は前から士道が怪獣問題に取り組みたい

ような事を言っていたのを知っており、「それが士道のやりたい事なら、無理をしないのを約束するなら私は構わないよ」と言った。遥子は「しーくんが将来設計が地球防衛チームなんて、お母さん心配だけど、ちょっと誇らしいわ！」と、両親は快諾してくれた。

が、琴里は難しげな顔をしていた。

「・・・・琴里は、反対か？」

「ーーーーえっ？　いや、いやいやいやいや！　私も全然オッケーだぞおにーちゃん！」

琴里はそう言うと、士道は笑みを浮かべ、両親との通話を切ると晩御飯の仕度にかかる。

琴里は自分の部屋に少し戻ると言うと、リビングを出ていった。

ー琴里ｓｉｄｅー

琴里は自室に戻ると、ツインテールの髪を結わえていた白いリボンを黒いリボンに変えると、キリッとした目と顔つきになり、ベッドに腰かけるとチュッパチャプ

スを咥えて苛立たしげに身体を揺すった。

「不味いわね・・・・！士道が〈Ｘｉｏ〉に入隊したそうだったのは知っていたけど、まさかこんな早く入隊する事になるだなんて・・・・！」

琴里には『目的』があった。それを達成する為にはどうしても士道の『力』が必要なのだ。

しかし、〈Ｘｉｏ〉に仮とは言え入隊したのだ。これではおいそれと『こちら側』に引き入れられない。

「・・・・・・・仕方ないわね。不本意極まりないけど、『馬鹿共』に手回しして貰うしかない、か・・・・不本意極まりないけど!!」

自分が所属する『組織』の上層部、その代表である人物以外の『馬鹿共』に頼むのは心から嫌だが、背に腹はかえられず、スマホに手を伸ばす琴里。

ｌ士道ｓｉｄｅｌ

琴里が連絡を取っている間、夕飯を作っている士道は、傍らに置いたエクスデバ

イザーから、〈ウルトラマンエックス〉が表示され、話しかけてきた。
『やったな。これで〈Ｘｉｏ〉に参加できるぞ！』
「それは良いんですけど。ウルトラマン、さん」
《畏まった言葉遣いは良い。私と君は『相棒』なんだ。私の事も、君が名付けてくれた名前で呼んでくれ》
「ーーーーああ。これからよろしく、エックス」
「ああ。こちらこそだ！士道！」
一人の少年と、一人の光の戦士、この出会いが新たな可能性を生み出していく。

光の戦士と出会った少年は、世界に拒絶された精霊達を救う為に、自分と『相棒』である巨人との夢を叶える為に、その身に光を纏い巨人となるーーーーーーーーー。

ーデート・Ｘ・アライブー

もし今世界が滅びて無くなろうとしても、誰かを守れる勇気を持っていられるか

い？だから君と明日を信じて共に飛ぶんだ戦うんだ。夢の彼方に解き放ち、心と力をクロスさせて手と手繋げて進もう、君と僕の絆ーーーー。

「エックスゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥッ!!」

---

後にグルマン博士によって、精霊達の天使のデータを解析してカードにし、ウルトラマンエックスの武器になります。ウルトラマンゼロのイージスをカードにした博士ならできると思いました。

# 天華百剣―オーブ―Ⅰ

ウルトラマンオーブと天華百剣です。
オリ主です。

---

夜の闇と降り積もった雪に覆われた深い森で、光り輝く巨人と、禍々しい光を放つクリスタルを顔面の中央に埋め込んだ黒い怪物が激しく戦っていた。
『ゼットォーン・・・・！』
『テヤッ！　オリャアッ！』
人智を超えた巨大の生物同士による、超常的な争いを、刀を持った一人の若武者が、じっと見上げている。
『グッ・・・ウゥ・・・・！』
若武者は固い面持ちで、黒い怪物の前に劣勢に立たされる光る巨人に対して何かを叫ぶ。

『ゼットォーン・・・・』

黒い怪物は顔面のクリスタルから膨大な熱量を持ったの光弾を生み出し、それを光る巨人に向かって放った！

『オワァァァァッ！』

光弾の直撃を食らった光の巨人が吹っ飛ばされる。だが被害はそれで留まらなかった。

『うわああ――――――っ!!』

戦いを見つめていた若武者が、光弾の爆発の余波を浴びたのだ。若武者の姿が、爆炎の中に呑まれて見えなくなる。

『アッ!?』

それに気がついた光の巨人は、黒い怪物に対して激しい怒りを向けた。

『ドゥウウアッ！』

そして激情のままに光る剣を手にして、頭上に円を描き、剣の軌道が光の線となって残り、そして剣自体に集中していく。

『デヤァァァァァッ！　ドゥアアアアアアアッ!!』

黒い怪物に向けられた剣から、光線が荒れ狂う暴風のように放たれた。
光線が黒い怪物に直撃し、光の巨人はそのまま剣から光線を発し続けたが、剣自体がその手の内より抜け出てしまい、黒い怪物に突き刺さった。
ドガァアアアアアアンンッ!!
黒い怪物は剣ごと爆発し、その規模は尋常ではなく、周囲の広大な森を丸ごと呑み込んでいった。
そして、一瞬にして焼け野原に変わった森の中で、光るリングを片手にした男性がよろよろと起き上がり。
男性が降ってきた一つの光の塊にリングをかざすと、光はそのリングの間を通って、赤と銀の超人が描かれたカードへと変化した。
男は超人のカードを腰に提げているホルダーの中に収め、必死に辺りに目を走らせる。
しかし、視界をさえぎるようなものがほとんどなくなったにも関わらず、先ほど戦いを見つめていた若武者の姿は、どこにも無く、若武者が持っていた『刀』だけが、地面に刺さっていた。

「うわあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ!!」
その事実を理解した男性は、焼け焦げた森と暗い夜の空に慟哭を轟かせる。
その男性の姿を、若武者の『刀』の刀身に映っていた。

それから幾星霜の時が流れーーーーーーーー。

その世界の時代は、戦乱と刀の時代が終息を迎えて、『銘治』と言う新たな時代の夜明けを迎えていた。時代はまさに文明開化と言わんばかりに日本は変わっていく。
しかし、関ヶ原の大戦が終わって三百年。現世をかき乱さんとする『災いの影』と『空の向こうの世界』からやって来る『侵略の影』、そして『古の大厄災』が平和な『銘治』の世界を覆い尽くす『闇』となった。

◇

そして、黒い軍服に軍帽を被り、腰には日本刀を携え、黒い外套を付けた1人

の青年が街を見て歩いていた。
「東京も、随分と町並みが変わったな。血みどろの戦国、安寧の江戸、動乱の幕末、時代が流れれば人並みも変わるって訳か・・・・・」
その青年は町行く人々の出で立ちと、町並みに僅かに西洋の要素が入った様子に、時代の変化を感じていた。
「(この街に来てから数ヶ月、士官学校を卒業してすぐに配属となり、それなりに過ごしては見たが、奴らはまだ現れないか・・・・)」
「あっ、いた！『あるじ』!!」
赤い長髪に両サイドにツインテールにした、和装給士服をきた気の強そうな雰囲気をした可愛らしい少女が、青年を〝あるじ〟と呼んで近づく。
「ん？『城和泉正宗』か、どうした？」
「どうした？じゃないわよ！仕事ほっぽりだして何してるのよ！」
「まあそんなにカッカするな。せっかくの可愛らしい顔が台無しになるぞ」
「もう！そう言って誤魔化されないわよ！早く行くわよ！」
青年は『城和泉正宗』と呼ばれた少女に手を引かれて、大きな洋風館へと向かっ

た。

「いらっしゃいませー。珈琲とお食事はいかがですかー？」

「洋風茶房めいじ館。すぐにお席をご用意できまーす」

洋風館の前に、城和泉と同じ和装給士服を着た、ピンクの短髪に一本のアホ毛がピョコンッと伸びた少女と、黒いおかっぱヘアの少女が呼び込みをしていた。

「『不動行光』、『加州清光』、呼び込みお疲れさん」

「「〝主〟！」」

『不動行光』と『加州清光』と呼ばれた二人は、青年に近づく。

「二人ともごめんね。あるじは仕事があるからまた後でね」

青年は城和泉に引かれ、『めいじ館』の中に入ると、黒い長髪を後ろに巻いて垂らした、淑やかさで優しい大和撫子のような雰囲気をした給士服の上からでも分かる豊満な胸元をした少女と、小柄で亜麻色の長い髪の両サイドに動物の耳のように横に伸びた髪に、牛の角のような髪飾りを付けた少女がいた。

「あっ、〝主様〟！　おかえりなさいませ！　城和泉さん、お疲れ様です」

「やあ〝隊長くん〟。散歩は終わったのかい？」

「ああ、『桑名江』、『牛王吉光』、少しだけ街を見て回っていただけなんだけどな」
「そんな事を言っても、仕事はしなくちゃいけない」
♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪・・・・
城和泉が何か言おうとすると、青年はハーモニカのような楽器を取り出すと、美しく、それでいてどこか悲しみが混じった旋律を奏でた。
「もう！　すぐハーモニカで誤魔化すんだから」
「ですが主様の奏でる音楽はとても素敵ですよ」
「ま、ウチの名物みたいなものだね」
『城和泉』と『桑名江』と『牛王』、古の刀剣が乙女の姿となった少女達、『巫剣』達は、音楽を奏でる青年、『ツルギ・ガイト』を見つめていた。

◇

そして、ある海岸で、黒い燕尾服を着た青年が、海の向こうからやって来る竜巻を見つめて、ニヤリと笑みを浮かべた。

ー『ツルギ・ガイト』ー
CV・鳥海浩輔（刀剣乱舞・三日月宗近 うたの☆プリンスさまっ♪・愛島セシル）
性格はニヒル。
容姿はツキウタの睦月始の髪を銀色にした感じ。

# 閃乱ジードⅠ

Xとオーブの案が思い付かないので、先にジードを送ります！

---

かつてその平行世界の銀河でとてつもない戦いが起こったーーーーーー。

全宇宙の正義と平和と秩序を守る『光の巨人 ウルトラマン』。だが、光があれば闇があるように、ウルトラマンの中にただ1人、闇の力を持つ『悪のウルトラマン』がいた。

その名を『ウルトラマンベリアル』。

何度も正義のウルトラマン達に倒され、その度に復活を果たし、何度もウルトラマンや全宇宙に恐怖を与えてきた最悪のウルトラマン。

そしてまた、ウルトラマンベリアルは復活を果たし、その宇宙は争乱の渦中に有った。ベリアルを討伐するためにウルトラマン達は戦ったが、度重なる怒りと怨みと憎しみの力でより強大な力を得たベリアルに劣勢を強いられる。

戦いに終止符を打つため、科学者でもあるウルトラマン『ウルトラマンヒカリ』は、『ウルトラカプセル』を開発した。カプセルには、ウルトラマン達の強大な力が宿っていた。掌に収まる位の大きさしかなかったが、たった一つで、戦局を覆す力を秘めていた。

しかしーーーーーー。

『〝超時空消滅弾〟、起動！』

『何っ!?』

その平行世界の地球に降り立ち地球を壊滅寸前まで追い込んだベリアルは〝超時空消滅弾〟を用いて、その地球を破壊した。

だが、地球を中心に生じた次元の断層は、宇宙全体に拡がり、星々を消滅したーーーーーー。

しかし、後に『クライシス・インパクト』と呼ばれるこの事件により、1人の〝新たな光の巨人〟が生まれたーーーーーー

＊＊＊

僕には、何も無かった・・・・。

家族も仲間も、誇れるモノも、何にも持っていなかった・・・・。

そうあの日、忍の人達と出会うその時までは・・・・。

そして時は流れーーーーーーーーー。

ー光陰ｓｉｄｅー

「待ってぇ！　雲雀ちゃんに柳生さん！　まだ僕は貞操を散らせる積もりは無いから！」

「えへへ、光陰くん良い匂い♥」

「うぅ、雲雀がこんなになつくなんて、光陰！　雲雀に手を出すなら俺に手を出せ!!」

「柳生さん！　それ違うからね！　僕が手を出すんじゃなくて雲雀ちゃんが僕に手を出しそうになってるんだよ！」

その日、『暁 リク』こと『忍び名〝光陰〟』は、自分が住むアパート『星雲荘』の自分の部屋で大きめの布団が敷かれ、その上に腰を落とし、目の前の艶っぽい瞳をした二人の少女に迫られていた。

桃色の髪をし、瞳に花の形をした水晶体がある小柄だが出るところは出て引っ込む所は引っ込んでいる80センチのCカップバストを持った、トランジスターグラマーで幼い感じの女の子、雲雀。

怜俐な美貌に長い銀髪をツインテールにし、右目に眼帯を付けた85センチのDカップバストに、これまた抜群のスタイルをした女の子、柳生。

二人の少女は薄いネグリジェを着て（雲雀は薄桃色で柳生は薄緑色）、四つん這いになって光陰に迫る、元々大きな二人の胸部は四つん這いになる事で重力により垂れ普段よりも大きく見える。男ならば目の保養にも毒にもなる光景に、光陰はなるべく二人から距離を空けようと後退りすると。

ムニュン、ボニュン・・・・。

「ん？　なんだ??」

背中にとてつもなく優しく柔らかい感触に当たった。

「オ～オ～、いきなりアタイ達の胸に飛び込んで来るとは、中々大胆だねぇ光陰♪」

「甘えたいなら存分に甘えても良いのですよ、光陰くん♪」

「か、カツ姐さんに、斑鳩姉さん！二人も来たの??」

いつの間にか光陰の後ろにいたのは金髪碧眼にメリハリの効いたナイスバディをし、女性陣で一番豊満な95センチのHカップバストに水色のネグリジェを着た性格はエロ親父の少女、葛城。

もう一人は黒髪をストレートに伸ばし、清楚で凛々しい美貌を今は艶っぽくし、豊満な93センチのGカップバストに抜群のプロポーションを黒のネグリジェで包

んだ少女、斑鳩。二人とも光陰の一つ年上の先輩達。
「ニヒヒヒ、女の子が好きだったアタイをこんな風にしたんだから責任取れよ♪・・・・ン、チュッ♥、レロ、ズズズ♥・・・！」
「あ、葛城さんズルいです！光陰くん、たっぷりと癒してあげますね♥・・・アン、ンン、ハム♥」
「ワヒャッ！葛姐さん、耳を舐めないで！耳の穴に舌を入れないで！斑鳩姉さんも耳を甘噛みしないでぇ・・・!!」
「ムゥ！葛ねぇに斑鳩さんズルい！雲雀も・・・アムッ♥チュゥッ・・・・チュゥ♥」
「ひ、雲雀・・・・！クッ、ならば俺も！んんっ！アンッ♥」
葛城と斑鳩に対抗心を抱いた雲雀は、光陰の着ていたシャツを捲し上げると光陰の胸元を吸い、柳生も光陰の胸元を甘噛みした。
「ワワワワワワっ!!二人ともなにしてンの?!何しちゃってンのっ！!??」
雲雀と柳生の行動に光陰が慌てていると。
ガシャンッ!!

『っっ！！？？』

星雲荘の光陰の部屋のドアが乱暴に開かれると、ソコには光陰や柳生達も通う〝国立半蔵学院〟の制服を着て、制服越しでもわかる抜群のプロポーションと黒髪のポニーテールをした鼻筋も整い、明るい雰囲気溢れる美少女がいた。

「あ、〝飛鳥〟ちゃん・・・・！」

〝飛鳥〟と呼ばれた光陰の（一応）恋人関係の少女は前髪で表情は隠れていたが、明らかに不機嫌なオーラを纏っていた。

「光陰くん？　な～～にしてるのかなぁ～～～～？」

普段と変わらない明るい太陽のように輝かしい笑顔だが、その瞳は全く笑っていなく、光陰の心境は〝浮気現場を女房に踏み込まれた亭主〟だった。

「いや、これは、その・・・・みんなが家に来て、なんかどういう流れかこうなって・・・・」

しどろもどろになる光陰に飛鳥は。

「もうみんなズルイよ！　私も負けていられない!!」

「えええええええぇぇぇぇぇぇぇっ!!　飛鳥ちゃんまでなに言っちゃってんの!?」

「光陰くん！」
「は、はい！」
「私は光陰くんのなに!?」
「えっ・・・それはその・・・・恋人です///」
「そうだよね！　なのに私だけ除け者なんて酷いよ！」
「ソコぉっ!?」
「だったら飛鳥も混ざりゃ良いじゃんか♪」
「そうですね、飛鳥さんだけ除け者はズルいですね」
「飛鳥ちゃん！　来て来て♪」
「(飛鳥が混ざれば雲雀への被害が少なくなるかも知れないな)飛鳥、お前も来い」
「えぇぇっ！　みんなまで?!」
光陰が仰天すると飛鳥はおもむろに制服を脱ぐと、瑞々しく弾力に溢れ、白い下着に包まれた大きく形も整っている90センチのGカップバストがブルンっと揺れた。
「うっ！」

それを見て光陰は男の悲しい性でつい見惚れてしまう。飛鳥はまるで某怪盗三世のように光陰にダイブする。

「光陰くーーーーーーーーーーん！！！」

ボニュンっ❤

「ブフゥッ!!」

「あん☒」

光陰の顔が飛鳥の豊満なバストに挟まり、そのまま倒れ、雲雀達も光陰の身体に舌を這わせようとし、いよいよ光陰の身体から操が散らされると思われた次の瞬間ーーーーーーーーーーーーー。

ドッゴーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーンンンっっ！！！

『っ!!』

突然の地響きに全員が身体を強ばらせ、光陰は女性陣からすり抜けて、窓を開けて外の様子を見つめると、夜であるにも関わらず外は街を燃やす炎で明るくなって

いた。

「あれは・・・怪獣か!?」

光陰の目線の先、星雲荘から約2㎞離れた場所に〝巨大な影〟が夜の街を蹂躙していた。

ギュグワアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッ!!!

『大変だよ～!リク～～っ!』

光陰達がいる部屋の床からエレベーターが出現し、そこから異星人が現れた。異星人であるがリクの心からの親友である『ペガッサ星人のペガ』だ。

『あっ・・・・///』

『あっ・・・・』

ペガは敷かれた布団とソコにいる淫らな格好した飛鳥達と、衣服が乱れまくった光陰を見るとその顔を赤くした。

『ご、ゴメンね。お取り込み中に・・・・///』

「待って待ってペガ! 誤解、とは言わないけど! 怪獣が出たんでしょ!!」

『う、うん！　そうなんだ！　○○地区に怪獣が出現したんだ！』
「分かった、みんな行こう！」
『(コクン！)』
飛鳥達も先ほどの色情に染まった顔から真面目な顔になり。
『忍転身!!』
飛鳥達が叫ぶと、下着姿からそれぞれの〝忍〟の姿に変化した。
かつて戦国の世から生まれた影なる存在〝忍び〟。現代社会においても忍びは陰となりて世に有り、飛鳥達は国に所属し民の為に戦う〝善忍〟を育成する『国立半蔵学院』の生徒であり、〝善忍〟として日夜戦っている。そして飛鳥達は、〝リトルスターの宿主〟として光陰[illegible]リク[illegible]に助けられ、そしてそのまま行動を共にするようになった。
「良し、行くぞ！」
そして国立半蔵学院の制服に着替えた光陰[illegible]リク[illegible]は腰に〝赤いナックル〟と〝複数のカプセルが入ったカプセルケース〟と〝2つの穴が空いた黒いスキャナー〟を付けたベルトを巻いて飛鳥達とエレベーターに入る。

『リク、狭いよ・・・・！』

「仕方ないでしょ・・・！　それよりも、〝レム〟！　転送してくれ！」

寿司詰め状態になった光陰$|$リク$;$は〝黒いカプセル入れ〟から秘密基地にいるマスターコンピューターに連絡した。ちなみに葛城はさりげなく片手で光陰のお尻を撫で、もう片方の手で飛鳥達にセクハラしようとしたが、斑鳩に止められた。

《了解しました。転送を開始します》

光陰$|$リク$;$達が乗ったエレベーターは光の粒子となって部屋の床から消えて、怪獣が現れた現場に現れ、光陰$|$リク$;$達はエレベーターから降りると、巨大な怪獣が町を蹂躙していた。

ギュグワアアアアアアアアアアアアアっ‼

青白い身体に背中、無数のトゲを生やし、胸元に赤いエンブレムを付け、瞳は赤く充血し、不揃いな歯は赤く染まり、頭頂部に赤い大きな角を持った怪獣『バーニング・ベムストラ』。

「ペガ、君は基地に戻っていて！」
『うん！　リクや皆も気を付けてね!!』
ペガに向かって光陰[illegible]リク[illegible]と飛鳥達は頷き、ペガは秘密基地に戻った。
「さ～て、今回の怪獣は中々強敵そうだな！」
「油断は禁物ですよ、葛城さん」
「雲雀、お前もあまり無茶するなよ。これは訓練じゃないんだからな」
「うん、分かっているよ柳生ちゃん！　ね、飛鳥ちゃん！」
「そうだね・・・あっ！　光陰くん、あれ見て！」
「ん？・・・・焔！　雪泉さん！」
飛鳥が指さす方へ身を向けると、バーニング・ベムストラを攻撃する二人の忍がいた。
飛鳥と容姿が少し似ている黒髪のポニーテールをし、褐色の肌と緑色の瞳、メリハリの効いたプロポーションに87センチのEカップを黒いセーラー服に包んだ善忍と対立する〝悪忍〟を育成する『秘立蛇女子学園』の忍びであり男勝りの性格の忍び少女、〝焔〟。

『死塾月閃女学館』の生徒で、〝善忍〟を育成するエリート校の忍びであり、灰色のセミロングヘアに水色の瞳、灰色の制服に包まれた92センチのGカップに凶悪なプロポーションをした、光陰と飛鳥の1つ上の3年生であり生真面目な性格の忍び少女、〝雪泉〟。

焔は両手の指の間に挟んだ3本の刀でバーニング・ベムストラの足を斬り、雪泉は両手に持った扇子と氷技を駆使してバーニング・ベムストラの足を凍らせ、進行を一時的に止めた。

「光陰！」

「光陰くん！」

「二人とも、来てくれたんだ!?」

「「ん?!」」

焔と雪泉も、〝リトルスターの宿主〟として光陰達に助けられた事がある。二人はリクの姿を確認すると、戦闘を中断してリクに近づく。

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

「ふ、二人とも・・・・??」

スンスンスンスンスンスンスンスン・・・・。
二人は光陰に近づくと、光陰のシャツや首筋に鼻を近づけてスンスンと臭いを嗅いだ。
「光陰・・・お前、さっきまで飛鳥達と何かしてたか？」
「なにやら光陰くんの身体から飛鳥さん達の臭いがするのですが・・・・？」
「(ギクッ！)イヤ、さっきまで一緒にエレベーターに乗っていたから多分それじゃないかな～・・・・？」
まさかついさっきまで飛鳥達に操を散らされそうになった事など言えず、目をそらして、しどろもどろに話す光陰、その光陰を半眼で訝しそうに睨む焔と雪泉、飛鳥達も明後日の方向に顔を背けた。
ギュグワアアアアアアアアアアアアアアアッ!!
『っ！』
全員がバーニング・ベムストラの雄叫びで目を向けると、バーニング・ベムストラが足の氷を砕いて迫っていた。
「光陰くん！」

「任せて！　飛鳥ちゃん達は逃げ遅れた人達をお願い！」

　飛鳥達から少し前に出ると、光陰$|$リク$¿$は〝赤いナックル〟を取り出して構える。

「ジーとしてても、ドーにもならない!!」

光陰$|$リク$¿$はカプセルケースから２つのカプセルを取り出しと、カプセルのレバーを上げる。

「ユーゴーッ！」【シャッ！】

「アイゴーッ！」【ハッ！】

　２つのカプセルから２体のウルトラマンが現れ、カプセルを黒いカプセル入れに装填する。

「ヒアウィーゴーッ!!」

　黒いカプセルを取り出して〝赤いナックル『ジードライザー』〟で読み込むと、ジードライザーの中心で、青いエネルギーと紫のエネルギーがまるで混じり合うように輝く。

【フュージョンライズ‼】

「決めるぜ！　覚悟‼　ハァァアアアアアっ！」

光陰$|$リク$¿$はジードライザーを天に掲げて。

「ハアァっ‼」

自分の胸元に持った来てライザのトリガーを引く。

「ジィィィィィィィィィィド‼」

【ウルトラマン！　ウルトラマンベリアル！　ウルトラマンジード　プリミティブ‼】

ウルトラマンとウルトラマンベリアルの姿が溶けて混じり合うと、光陰$|$リク$¿$の身体は光に包まれ、その姿を変えた‼

バーニング・ベムストラの目の前に降り立ったのは、銀の身体に赤と黒のラインが入り、水色の瞳は鋭く、胸元にはカプセルの形をした水晶を付けた光の巨人。

光と闇、善と悪、明と暗、相反する2つの力を持った宿命に抗う戦士ーーーーー。

『シュワァッ‼』

その名は、『ウルトラマンジードプリミティブ』！

ー???　sideー

光陰$|$リク$¿$が戦っている戦場から少し離れた位置。

「良いのか　〝ゼロ〟　？　行かなくて？」

『今はまだ様子見だ　〝霧夜〟・・・アイツが、〝ベリアルの息子〟であるジードが、
本当に味方なのかな・・・』

---

ー『暁 リク(忍び名 光陰)』ー

CV・小野賢章(アイドリッシュセブンの七瀬陸)

年齢:17歳

容姿:七瀬陸に似ている

概要:天涯孤独の身の上で、身体能力と反射神経、瞬発力、どれも忍びである飛鳥達を上回る。自分とベリアルの関係に悩む。ちなみに飛鳥とは幼なじみで恋人関係なのだが、他のヒロイン達とフラグを建てまくる一級フラグ建築士。浮気相手は飛鳥が認めないと浮気を許されない。

ー『霧夜』ー
CV・藤原啓治
概要:飛鳥達の通う『半蔵学園』の教師にしてウルトラマンゼロの協力者。

今回はここまで、何故ゼロの協力者に霧夜を選んだかは、声優的に合ってると思い、さらに別作品(血の世界の戦線)で二人は似た立場のキャラを演じたから。

# 閃乱ジードⅡ

これで『閃乱ジード』は終わります。

---

『ショォワッ！』

『ウルトラマンジード プリミティブ』。『初代ウルトラマンカプセル』と『ウルトラマンベリアルカプセル』に宿る力をフュージョンライズさせた姿。ウルトラマンジードの基本形態。

『ギュグワアアアアッ!!』

『ハッ！』

『バーニング・ベムストラ』が雄叫びを上げて迫ると、ジードP~~S.S~~プリミティブ~~S.S~~は飛び膝蹴りを頭部に当て、バーニング・ベムストラが怯むと回し蹴りを腹部に浴びせた。

『ギュグゥウッ!!』

『ショワッ！』
『グワッ!!』
『(レッキングリッパー!!)』
『ギャアアアッ!!』
腕を水平に広げて放つ波状光線『レッキングリッパー』を浴びて怯み、さらに攻撃を加えようとするジードPにバーニング・ベムストラは青い火炎弾を放つ！
『ウワァッ!!』
ジードPはマトモに食らってしまい、後方に吹き飛ぶ。
『ギュグワアアアアッ!!』
バーニング・ベムストラはさらに火炎弾を乱射してジードPを攻撃したが。
『シュゥワッ！』
すると、ジードPの体が発光し、その姿を変えた！
『(燃やすぜ！勇気!!)』
【ウルトラマンジード！ソリッドバーニング!!】
火炎弾を諸ともしないその姿は、赤く染まったアーマー状の形態、全身に噴射口

から蒸気を噴射させたメカニカルな姿。〝雲雀に宿っていた『ウルトラマンレオカプセル』〟と〝柳生に宿っていた『ウルトラセブンカプセル』〟をフュージョンライズさせた形態、『ウルトラマンジードソリッドバーニング』。

『フンッ！』

ジードSがソリッドバーニングがは身体から蒸気を噴射させて頭部にある『ジードスラッガー』手に取り、バーニング・ベムストラに斬り込む！

『ギュグワアアアアッ!!』

斬りつけられたバーニング・ベムストラは悲鳴を上げるが、直ぐに火炎弾を放つ！

『デュワッ!!』

ジードSはジードスラッガーを腕に装備した技『ブーストスラッガーパンチ』で火炎弾を切り裂いた！

『ギュゥゥゥ・・・・！ギュグワアアアアアアアアアアッ!!』

バーニング・ベムストラは力を込めるように蹲り、一度吠えすると渦を巻くように回転する青い光線を口から放った！バーニング・ベムストラの必殺技『ペイル

サイクロン』！

『（ストライクブーストッッ!!）』

ジードSは右腕部アーマーを展開して右腕の拳から赤く輝く必殺光線を放ち、ペイルサイクロンとぶつかる！

ドォォォォォンッ!!

2つの光線はぶつかり合い、小さな爆発が二体の間で起こった。

『（見せるぜ！ 衝撃!!）』

【ウルトラマンジード！ アクロスマッシャー!!】

爆発を飛び越えて、ジードは別の姿へと変わった。〝斑鳩に宿っていた『ウルトラマンヒカリカプセル』〟と〝葛城に宿っていた『ウルトラマンコスモスカプセル』〟をフュージョンライズさせた形態。頭頂部が青くなり、全体的にスマートな形態へと変わった『ウルトラマンジードアクロスマッシャー』。

『（ジードクロウ!!）』

ジードAはアクロスマッシャーはその手に、二又のかぎ爪状で二又の中心にドリル回転する刃を付けた武器『ジードクロウ』を持って、超スピードでバーニ

ング・ベムストラを斬りまくった！

『グゥウワアアアアッ!!』

バーニング・ベムストラは再び『ペイルサイクロン』を放つが・・・・。

『(アトモスインパクト!!)』

水平に立てた右手を左手にクロスさせるように構えると、光輪状の波動光線『アトモスインパクト』でバーニング・ベムストラの攻撃~~ペイルサイクロン~~を相殺した。

『(決めるぜ！覚悟!!)』

【ウルトラマンジード プリミティブ!!】

再びジードPへと変わったジードはジードクロウを持って、持ち手に備えてあるトリガーを二回押すと、全身に闇の力のエネルギーを纏い、ジードクロウを切っ先にして回転しながらバーニング・ベムストラに突っ込んだ！

『(コークスクリュージャミング!!)』

『ギュグワアアアアッ!!』

受け止めようと構えたバーニング・ベムストラだが、勢いを殺しきれず後方へと

倒れた。

『フゥゥゥゥゥゥ・・・・！』

空かさず、ジードＰは両腕にエネルギーをチャージするように構え。

『グゥウウウウウウウウッ！！！』

バーニング・ベムストラがヨロヨロと立ち上がると、両腕を十字に組んで、赤黒い稲妻をスパークさせて放つ必殺光線。

『(レッキングバーストッ!!)』

放たれた光線を浴びたバーニング・ベムストラはそのまま動かなくなりーーーーーーーー。

ドゴオオオオオオオオオオオンンッッ!!

爆散した。

『・・・・シュウワッ！』

ジードＰはそのまま空高く飛んで行った。

ー飛鳥ｓｉｄｅー

「どうやら終わったようだな・・・・」

避難誘導をしていた飛鳥達はジードPの戦いが終わったのを確認し、光陰（リク）の元へ向かおうとしたが、後方から黒服を着た渋い顔の男性が現れた。
「ゼナさん？」
「どうしてここに？」
ゼナと呼ばれた男性は口を動かさず、インカム型の装置を使ってコミュニケーションをとり、飛鳥達に話した。
「この近くに、この間逮捕した〝幻覚宇宙人 メトロン星人〟が秘密裏に栽培していた〝宇宙ケシの実〟の栽培場所が有ったのだ」
「流石〝『ＡＩＢ』の上級エージェント〟、仕事熱心だな？」
焔が言った『ＡＩＢ』とは、『ＡｌｉｅｎＩｎｖｅｓｔｉｇａｔｉｏｎＢｕｒｅａｕ異星人調査局』の略、地球に犯罪活動を起こしている宇宙人を取り締まる『クライシス・インパクト』後の宇宙の治安を守る為に発足された秘密組織。表向きは生命保険会社と偽装している。善忍育成機関である国立半蔵学院や月閃女学館とは協力体制であり、三年生の斑鳩と葛城と雪泉も研修として参加し、その際にゼナと知り合った。悪忍である焔もその存在を知っている。

「柳生ちゃん、〝宇宙ケシの実〟って何かな？」
「〝ケシの実〟って付いてるから恐らく麻薬の原料みたいなものだろう」
「そんな所だ。さて、メトロン星人は逮捕しているし、後は栽培場所を抑えるだけだ。学生は直ぐに帰るんだ」
そう言ってゼナは現場へと向かった。ボソリと雪泉が呟く。
「秘密組織ＡＩＢの上級エージェント『瀬名 日出樹』、その正体は『シャドー星人ゼナ』。私達の住む地球には、あの人のような異星人が秘密裏にいるんですね」
「最初に聞いた時は、マジかよって思ったけどな」
「以前ゼナさんの正体を見せてもらった時は驚きました」
雪泉と葛城と斑鳩は、ゼナの本来の姿、デスマスクのような能面を思い出して苦笑いを浮かべる。
Ｐｒｒｒｒ・・・Ｐｒｒｒｒ・・・
すると、飛鳥の携帯が鳴り、飛鳥が出ると。
「もしもし、光陰（リク）くん？今何処にいるの？えっ？うん・・・うん・・・分かった、直ぐに帰ってきてね」

ピッと携帯を切ると、雲雀達が飛鳥に近づく。
「飛鳥ちゃん、光陰（リク）くんどうしたの？」
「うん、なんか避難し遅れた人がいたからその人を避難させたら戻るって」
「んじゃアタイらは先に星雲荘に戻って光陰（リク）が帰ってきたら飯にするか（ついでにさっきの続きを・・・・）」
「（ピクッ）オイ、私も行くぞ」
「私もお邪魔します（何か不穏な気配がします）」
葛城達の不穏な気配に焔と雪泉も感づき、飛鳥達と焔と雪泉は星雲荘に向かった。

ー光陰（リク）ｓｉｄｅｌー
そしてここは、光陰（リク）がバーニング・ベムストラと交戦していた場所から少し離れた場所。
「（ピッ）さて、飛鳥ちゃん達にはこれで良いか・・・・出てきなよ、〝伏井出ケイ〟!!」
変身解除した光陰（リク）は、崩壊した建物に向けて手裏剣を投げ手裏剣が建物

に刺さり、その影から現れた、〝バーニング・ベムストラにフュージョンライズしていた人物〟を睨む。

「良く私が居ると見抜きましたね？」

上品なスーツを着て杖をついた知性的な男が、その顔を悪意に染めて光陰（リク）を見据えていた。男の名は『伏井出ケイ』、表の顔は人気のSF小説作家・エッセイスト、しかしその正体は『悪のウルトラマン ウルトラマンベリアル』に使える異星人『ストルム星人』。

「怪獣をフュージョンライズした怪獣、『ベリアル融合獣』となれるのは貴方だけだ、だからあの怪獣を倒した近くにいると思ったんですよ」

「フッフッフッ、なるほど確かに。しかしわざわざ私を見つけてどうするのですか？」

慇懃無礼な態度を崩さない伏井出ケイと光陰$|$暁リク$;$の間には並々ならぬ因縁がある。

「貴方をＡＩＢに引き渡す、これ以上怪獣騒動で誰かが危険に晒されるのを見過ごせない！」

光陰（リク）は両手にクナイを持ち、伏井出ケイは杖をフェンシングのように構える。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言で睨み合う二人。崩れた建物の破片の一部が地面に落ちる我がーーーーーーーーーー。

カランッ・・・・！

「「っ！」」

シュンッ!!　ガガガガガガガガガガっ!!

一瞬で二人は空高く跳躍すると、空中で激しくぶつかり合った。

ｌ飛鳥ｓｉｄｅｌ

飛鳥達が星雲荘に向かう途中、銭湯の前に付くと。

「そう言えば少し汚れちゃったね？」

「ちょっとお風呂に入らない？」

雲雀が避難誘導の際に汚れた身体に渋い表情を浮かべ、飛鳥が皆に提案した。

これから勝手知ったるとは言え光陰（リク）の家にお邪魔して夕食を取り、あわよくばその先へと行こうとしているので身綺麗にしたいと考えるのは飛鳥達の〝乙女心〟である。

飛鳥の提案に頷いた一同は、中に入ると高齢の老婆に料金を払って、銭湯の中に入っていった。

ー光陰（リク）ｓｉｄｅ

その頃、光陰（リク）は伏井出ケイと建物の上を跳びながら交戦していた。伏井出ケイは瞬間移動を駆使し建物（５階建てのビル）の屋上に移動した、光陰（リク）は身体能力を駆使して伏井出ケイを追って戦った。

「ハアアアアッ!!」

光陰（リク）は両手に構えた手裏剣を連続で伏井出ケイに向けて投げる！

「フゥゥゥゥゥゥンッ!!」

伏井出ケイは手をかざしてバリアを張り手裏剣を防ぐ！

「トオリャッ！」

伏井出ケイに肉薄した光陰（リク）は体術で伏井出ケイに攻めるが、伏井出ケイも杖を巧みに振るって光陰（リク）の拳や蹴りを防ぎながら光陰（リク）の攻撃の隙間から杖を突いて光陰（リク）の胸元を突く！

「ぐあっ！」

しかし、光陰（リク）の蹴りも伏井出ケイの鳩尾に蹴りをお見舞いした！

「ガハッ！」

お互いの攻撃の衝撃で吹き飛び、伏井出ケイは建物の屋上に転がるように倒れ、光陰（リク）は建物の屋上から落ちてしまった。

「うわあああああああああああッ!!」

ガシャーーーーーン!!

ー伏井出ケイｓｉｄｅー

直ぐ下の屋根を突き破って落ちた光陰（リク）をヨロヨロと起き上がった伏井出ケイは忌々しそうに睨んだ。こんな事で光陰（リク）が死んだとは思ってはいない。

「フンッ、所詮貴様など、『ベリアル様の遺伝子』を持っているだけの『器』・・・・

！『ベリアル様の後継者』に相応しくない・・・・・！」

伏井出ケイは再び瞬間移動で逃げようとする。

「そうだ、『ベリアル様の後継者』に相応しいのは・・・・この私だ・・・・・！」

伏井出ケイは姿を消した。

ー光陰（リク）ｓｉｄｅー

「ガボッ！ガボボボッ!!」

落ちた光陰（リク）は屋根を突き破って衝撃が緩和され、下がお湯のプールだったのが幸いしたのか軽傷だった、空気を求めて起き上がった。

「プハッ！何だ?! お湯かっ!?」

「こ、光陰くん・・・・!?」

「えっ!?」

聞きなれた声に振り向くと湯気の向こうはーーーーーーーーーーーー桃源郷だった。

抜群のプロポーションと大きなバストを惜しげなく晒し、普段結わえた髪を下ろ

した飛鳥と雲雀と柳生。
年上の魅力と豊満なバストを晒した葛城と斑鳩。
小麦色に焼けた肌と日焼け後がセクシーな魅力を放つメリハリの効いたプロポーションをした焔。
雪のように白い肌に豊満なバストと凶悪なプロポーションをした雪泉。
光陰（リク）が落ちた場所は、飛鳥達が入浴していた銭湯だった。しかも客は飛鳥達だけ。
「きゃあああああああっ!! 光陰（リク）くんのエッチ!!」
「待って飛鳥ちゃん違うんだ！」
「光陰（リク）くんのおバカ!!」
「雲雀ちゃん！ だからこれは！」
「光陰（リク）！ 雲雀の裸を見るなっ！」
「ご、ゴメン柳生さん!!」
「光陰（リク）くん・・・男の子なのだから女の子の裸に興味を持つのは仕方ないですが、場所を弁えなさい！」

「斑鳩姉さん！ いやだから！」

「イヤ～こんなダイナミックな覗きをするとは、流石のアタイも脱帽だよ光陰（リク）・・・・」

「葛姐さん！ だから違うってば!!」

「光陰（リク）お前なぁ！ 私だって気持ちと言うか、準備と言うか、そう言うのが整えば・・・・！」

「焔は何を言ってるの!?」

「光陰（リク）くん！ こ、こんなハレンチな事をやって！ 恥を知りなさい!! 私だって望んでくれればいつでもゴニョゴニョ・・・・」

「雪泉さん!?」

パニックになった飛鳥達を押さえるために、光陰（リク）の孤独な戦いが始まったが、光陰（リク）はペガからの通信に気がつかなかった。

《リク～！ 星雲荘の前で『紅蓮隊の皆』と、『月閃の皆』が睨み合ってるよ～!!》

星雲荘に帰った光陰（リク）は、光陰（リク）に会いに来ていた$|$夜這いに来た$¿$。

焔の仲間で蛇女子学園からの抜忍仲間である独立チーム、『焔紅蓮隊』。

〝詠（95センチのHカップ）〟。
〝日影（85センチEカップ）〟。
〝未来（62センチのAAAカップ）〟。
〝春花（99センチのIカップ）〟。
雪泉の仲間『月閃女学館』。
〝叢（96センチのHカップ）〟。
〝夜桜（90センチのHカップ）〟。
〝四季（95センチのIカップ）〟。
〝美野里（86センチGカップ）〟。
この二組の睨み合いの仲裁にまた一苦労するのであった。

l霧夜ｓｉｄｅｌ

光陰（リク）や飛鳥達の担任教師である霧夜と彼と融合している『銀河最強の勇者ウルトラマンゼロ』が銭湯の前からドタバタを聞いていた。
「ゼロ、心配無用じゃないか？　光陰（リク）の事・・・・」

『俺もそんな気がしてきた・・・(全く、〝平行世界のウルトラマン〟は女難に合う呪いでもかけられてるのか？)』

今まで会ってきた〝平行世界のウルトラマン達〟の女難に、ゼロは呆れていた。

正義の心に悪の遺伝子を持った新たな戦士は、最胸の忍びの少女達と共に、己の運命と戦うーーーーーーー。

ー『閃乱ジード』ー

僕らしくいる為に誰の笑顔も曇らせない、決められた自分のストーリーに抗うヒストリー、支え合う仲間の笑顔が力になる、ジーとしていたってドーにもならない！皆の為に覚悟決めるぜ!!

「ジィィィィィィィィド!!」

ー『ウルトラカプセルとリトルスターリスト』ー

『ウルトラマン』と『ウルトラマンベリアル』のカプセルはレムから貰った。

・半蔵学院
飛鳥：『ウルトラマンゼロ』
雲雀：『ウルトラマンレオ』
柳生：『ウルトラセブン』
斑鳩：『ウルトラマンヒカリ』
葛城：『ウルトラマンコスモス』
大道寺先輩：『ウルトラマンオーブ スペシウムゼペリオン』

・焔紅蓮隊（旧蛇女子学園）
焔：『ウルトラマンオーブ エメリウムスラッガー』
詠：『ウルトラマンティガ』
日影：『ウルトラマンダイナ』
未来：『ウルトラマンアグル』
春花：『アストラ』
鈴音先生：『ウルトラマン80』

・『月閃女学館』
雪泉：『ゾフィー』
叢：『ルナミラクルゼロ』
夜桜：『ストロングコロナゼロ』
四季：『ウルトラマンガイア（V2）』
美野里：『ウルトラマンメビウス』

・『新蛇女子学園』
雅緋：『ウルティメイトゼロ』
忌夢：『ウルトラマンネクサス ジュネッス』
紫：『ウルトラマンタロウ』
両奈：『ウルトラマンジャック』
両備：『ウルトラマンエース』

・『護神の民』
かぐら：『シャイニングウルトラマンゼロ』
奈楽：『ウルトラマンマックス』

・『その他』
飛鳥の祖父半蔵：『ウルトラの父』

---

リトルスターはこれから増えます。後書いている内にこの閃乱ジードがお気に入りになりそうです（笑）。いつか連載したいですね～。

# R/B・エグゼロスⅠ

明けましておめでとうございます。お久しぶりです。
ようやくウルトラマンR/B$|$ルーブ$;$とクロスできる作品を見つけました。
オリ主は、原作主人公の弟です。原作主人公も変身します！

---

今日も良い天気だ。ここは俺達の住む街、『サイタマ』。皆休日を思い思いに過ごしている。極々平和な日常だ。
ドガァアンンッ!! ドガァアンンッ!!
『ウワッ！』
『ウォッ！』
なのに。そんな平和な日常をぶち壊すかのように、赤い二本の角を後ろに伸ばし、赤い手甲とすね当てを着けた銀の巨人と、青い鮫の背鰭のような角に青い手甲とすね当てを着けた巨人が倒れた！

〝俺達兄弟が変身してしまったこの姿〟！

『ギュォオオオオオオオンッ!!』

そして巨人になった俺達の目の前に立ちはだかる、赤黒い禍々しい体色に骨格のような姿をした、特撮かアニメに出てくるような怪獣と戦っていて、平和を満喫するどころじゃない！

『ギュォオオオオオオオンッ!!』

『『ウワァアアアッ!!』』

怪獣が放った火炎攻撃により爆裂が発生し、それに呑まれる俺達。

『(どうする、裂人(レット)？)』

『(どうするって、まったく歯が立たないぜ、來人(ライト)・・・・・！)』

『(これはヤバイな・・・・！)』

赤い巨人に変身した俺の名は『炎城烈人』。

青い巨人に変身しているのは、〝双子の弟・『炎城來人』〟。

何故俺達が巨人に変身して怪獣と戦うなんて、こんなフィクションのような事になっているかと言うと、話は24時間前の事・・・・。

＊＊＊

その日、俺は学校でクラスメートの『伊達』と『鳥越』がエロ本に付録したアプリで、クラスメートの女子にイタズラ半分でエロアイコラを作ろうとしようとしているのを見ていた。本人達は遊び気分なんだろうけど、アイコラを作られた女子からすればたまったものじゃない。止めようとすると、伊達が俺の隣の席で紙カップのカフェオレを飲みながらノートパソコンで計測作業をしている、俺の〝双子の弟〟に話しかけた。

「なあ來人。お前もそんな変な機械で弄ってねぇでさ。ちょっとはエロ話とかに交ざらねぇ？」

「悪いこの『バイブス波』の計測が終わったら付き合うわ」

俺の『双子の弟・炎城來人$S$ライト$S$』。髪の毛の色は俺や妹と違って青く、タイト目の七三ヘアに縁無しの眼鏡を付けている。パソコンを使っている時や勉強、細かい字を読むときに使用している。

「『バイブス波』ってなんだよ？」

鳥越が聞いてきたので、一応教えておく。

「あぁ、科学者のおじさんから聞いたんだけど。『宇宙考古学』に関係しているみたいなんだ」

「『宇宙考古学』ってなんだ？」

伊達と鳥越がハモって聞くと、今度は来人が説明した。

「『宇宙考古学』ってのは、通信衛星ってあるだろ？それで地上を観測して、地球環境や古代の遺跡とかを調査する、新しい考古学だ」

来人は隣の俺の席の机に置いてある、ツリーのような機械に目を向ける。

「今は『バイブス波』って言う特殊なエネルギー波の発射率を解析して、だいたい１３００年前の地層を調べているんだよ」

「フゥ～ン。〝学年首席〟は、高校の勉強だけでなく、そんな考古学も勉強しているのかよ？」

そう。弟の来人は、学年首席の成績を１年の頃からずっとキープしており、このパソコンでの解析作業以外はある程度は優等生だから、教師達も文句を言わない。

が・・・・・。

「・・・・・・・・ヤベ、ジュース無くなった」

研究に没頭すると、私生活が疎かにしてしまうのが來人の欠点なんだよな。〝学校で〟それをフォローするのが兄貴の俺の役目。

「購買で買ってくる。來人、他に欲しいのは？」

「ん、じゃアンパンも買ってきて。お代は後で払うからさ、頼むよ烈人」

「ああ」

俺は席を立つと、來人と握り拳を上下に打ち合わせて手を広げてハイタッチした。俺達兄弟のルーティンみたいなものだ。

◇

俺が買い物を終えて教室を戻ると、伊達と鳥越が失意のドン底に落ちたように顔をうつむかせ、來人は相変わらず解析作業をしていた。

「來人。どうしたんだ？」

「烈人が出て少ししてね、二人が委員長でエロアイコラを作ってはしゃいでいたのを、『雲母$|$きらら$¿$ちゃん』に怒られてしょげているんだよ」

俺の目の先には、黄色のショートヘアーをした女子が、名前で呼ばれたのを不快に思ったのか、來人を険しい目で睨んでいるが、來人は気にせず作業を執り行った。

『星乃雲母$|$ホシノ キララ$¿$』。

男子どころか男子の触った物すら素手で触らない超潔癖主義。そのくせ見た目がアイドルのように美麗だから告白した男子の屍が無数に横たわる。付いた渾名が『鋼鉄の処女$|$アイアン・メイデン$¿$』。

そして俺達兄弟の幼なじみでもある。

「おい來人、お前も星乃の事を名前で呼ぶなよ。星乃が凄い目で睨んでいるぞ」

「幼なじみを名前で呼んじゃいけない法律があるわけでもないだろう？ 烈人も名前で呼んだら？」

「いや、それは・・・・！」

「・・・・・・・・・・・・」

不味い、星乃が呼んだら許さないと言わんばかりの目で睨んでいる。

俺が冷や汗を流していると、來人が立ち上がって、耳打ちした。
「なんだったら、さっさと『初恋の人』に告白して、玉砕されて潔く諦めたら？」
「っ！　お、お前な！」
俺が声を荒げると、來人は買ってきた袋を取って席に座り、また作業に取りかかった。
たくっ、來人も〝星乃が男嫌いになった理由〟を知っているくせに・・・・。

ー三人称ｓｉｄｅー
そしてその夜、夜景を楽しんでいるカップルがスマホで写真を撮ろうとしているとーーーー。
「・・・・・・・・・・・・」
別の場所に立っている１人の人物が、握力計測器のような装置の中央に、異形の生物に『魔』と書かれた丸いクリスタルを嵌め込んだ。
【グルジオボーン！】
装置から音声が流れると、クリスタルの嵌められた箇所のジャイロのような部分

の上半分が紫色に、下半分が赤く発光した。

「♪～♪～♪」

その人物は、まるで楽しい遊びの始まりと言わんばかりに鼻歌を歌いながら、両側のレバーを引くと、ジャイロ部分が回転した。

そうとは知らず、カップルは自撮りをしようと肩を寄せ合うと、自撮りした映像から何かが動いたような動きに気付き、そして不意に、ズシン、ズシンと大きな連続する揺れと音に見舞われたので、何事かと後ろを振り向くと。

夜のサイタマの街の前に立つ、巨大な怪物の爛々と光る赤黒い眼と合った。

「キャアアアアアアアアッ!!」

「ウワァアアアアアアアっ!!」

カップルはそのまま逃げ出し、怪物を大きな雄叫びを上げていた。

『ギュォオオオオオオオンッ！！！』

ｌ???　ｓｉｄｅｌ

『おおっ！　これはなんとも、面白い事が起きたな・・・・！』

物陰に隠れて、さっきのカップルを狙っていた。虫のような姿をした異形の生物が、自分の数十倍は大きな怪物を見上げて、ほくそ笑んだような声をあげる。

ｌ来人來ｓｉｄｅｌ

來人が烈人と一緒に風呂に入っている間に、烈人と來人が〝下宿している部屋〟の來人の机に置かれた装置が横回転を始め、パソコンの観測装置が、〝バイブス波〟の異常を検知していた。

---

はい。『エグゼロス』とコラボしました。これで『ニュージェネレーション』は出揃いました。

後は『タイガ』ですが、これはもう決まっています。

ヒントは、この作品の『ウルトラマンコスモス』と似た世界。

ｌ『炎城來人』ｌ

CV・内山昴輝（『インフィニット・ストラトス 織斑一夏』、『バディ・コンプレッ

クス隼鷹・ディオ・ウェインバーグ』、『ニセコイ 一条楽』）

見た目:二卵性双生児で、顔立ちは炎城烈人と同じだが、髪の色は青く、タイト目の七三ヘアに縁無し眼鏡を着用。

性格:直情型の烈人と違ってクレバーな性格。雲母に対しては幼なじみ以上の感情を抱いていない。実は舞姫と付き合っている。

# R/B・エグゼロスⅡ

ウルトラマンR/B~~(セレクト)~~ルーブ~~(セレクト)~~はこれにて終了です。

---

「なぁ、來人。なんで俺達は自然公園に来ているんだ？」
「ん？　〝バイブス波〟の異常反応が昨日の夜にここら辺であったからな。調査の為に来たんだろ？」
「まぁそうだけど・・・・」
そう。今俺達兄弟は休日の日曜日。サイタマの街から少し離れた自然公園、『アイゼンワンダーランド』に来ていた。
周りを見ると、ハイキングに来ていた家族の父親と息子が楽しそうにキャッチボールをし、母親が幼い赤ん坊を抱っこしてキャッチボールする父子を微笑ましく見つめており。
恋人同士の男女がベンチで愛を語らい。

愛犬を連れた青年がボールを投げて食わえて持ってきた愛犬の頭を撫で回していた。

「(うん。極めて平和な光景だな)」

何故俺達兄弟はここに来たかと言うと、今朝起きた俺は來人のベッドに入って寝ていた〝同じ寮に下宿している子〟を來人のベッドから連れ出して自分の部屋に寝かせた。

俺と來人のベッドは二段ベッドになっており、俺が上の段で來人が下の段。來人は直ぐに机からベッドに行けるから下の段にしたらしい。

まだ熟睡している來人を置いた俺は、居間に降りて、同じ寮に住んでいる〝來人の彼女〟に朝食を作ってもらい食べていると、テレビのニュースで俺達の街・サイタマの発展に尽力している『株式会社アイゼンテック』の社長、『愛染 マコト』が新たな新商品の紹介をしていた。

愛染誠は街の発展に尽力しているが正直俺は、あのハイテンションって言うか、エキセントリックな感じがどうも苦手だ、來人も、

「キャラが胡散臭い」

と言って、〝他の同居人達〟も。
「凄い人やと思うけど、なんやキモいわ」
「うるさくて、イヤ」
「ちょっと、苦手ですね・・・・」
とあまり良い感情は持っていない。
愛染社長が【石橋に当たって砕けろ】ってオリジナル格言を紹介していた。〝チャレンジ精神を持て〟って意味だと言っていたが、砕けたら元も子もないだろうと俺は苦笑いを浮かべた。
そして朝食を終えてコーヒーを飲んでいる俺の元に、起きて寝巻きから私服に着替えた來人が大慌てで、【サイタマ郊外の山で巨大生物を見た】って動画を見せてきた。
普段ならこんなのフェイクだと思うが、來人は『バイブス波』の反応がその山にあったと知らせ、俺と〝來人の彼女〟は少し難しい顔になった。
何しろこのサイタマには、人知れず〝危険な生物達〟が潜んでいるから、もしかしたら〝奴ら〟関連かと思った俺は、とりあえず來人と二人で調査に向かおうと思

い、〝來人の彼女〟に、〝他の皆〟には待機しといてくれと伝言を頼んだ。
ちなみに家を出る際、來人は〝彼女〟に髪を整えてもらい、〝彼女〟の頬に、チュッとキスをして、〝彼女〟は顔を赤らめ恥ずかしそうに慌てていたが、満更じゃない笑みを浮かべていた。我が弟ながら朝っぱらから凄い事やると驚嘆する。
そして現在。
「んで、反応があった『アイゼンワンダーランド』に来てみたけど、どうだ？」
「ん～。これは結構凄いかも・・・・！　そういえば、昔からこの山には、『グルジオ様』が居るって伝説って言うか、おとぎ話があったよな？」
「あぁ、そう言えば・・・・」
このサイタマに昔から伝わる絵本のおとぎ話で聞いた事があったな。
むかしむかし、空から星が降ってきました。星から『グルジオ様』と呼ばれるモノノケが生まれ、戦で争っていた人々は皆、『グルジオ様』に飲まれてしまいました。
「って感じのおとぎ話だったな？」
「『グルジオ様』が落ちてきた星は、今で言うところの隕石だな。そして、もしか

して『グルジオ様』は・・・・」
　来人の仮説に、俺ももしかしてと思った。
「まさか、『グルジオ様』は、〝奴ら〟か？」
「もしくは、まったく〝別の勢力〟って事もあり得るぜ」
　来人は『バイブス波感知器』を持って色々と計測を始めていた。端から見ると不審人物だな。
「おーおー！　なんか『バイブス波』の反応がヤバい！」
「今ヤバいのはお前だよ。・・・・来人、覚えているか？　昔俺達兄弟と、星乃の三人で、良くこの自然公園で遊んでいたよな？」
「ん、そうだな。雲母ちゃんは俺の事を『ガリ勉』って言って、烈人の事は『ヘタレ』って呼んでたな」
「えっ？　そうだったの？」
「あぁ。それよりもさ烈人。このデータ見ろよ」
　来人が感知器と繋がっているｉＰａｄの画面を見せてくると、画面には衛星から表示された地図や、俺にはサッパリ分からないデータが表示されていた。

「プラズマイオンとバイブス波の値を見ろ！凄い事になってるぞ！」
「イヤお前の言ってる事サッパリ分からん！」
感知器がピー！ピー！と音が流れると、來人は音が出た方角に向かった。
「こっちの方が線量が高い。行ってみよう」
「お、おい來人！」
來人は〝叔父さん〟と同じ、ヘンテコな所と研究熱心な所があるから、このままではヤバい事態に首を突っ込みそうな気がする。
まぁ、〝奴ら〟と戦う〝俺達〟のバックアップとして、〝バイブス波〟を応用して〝奴ら〟の索的、〝俺達の衣服運搬〟、〝人目に触れないように退却経路の案内〟等をしてくれる、頼れる奴なのは違いないけど、それでも兄ちゃんは心配だ。

l???　sidel

ここはアイゼンテックの研究室の一室。研究員である１人の女性がいた。美しい黒髪に穏やかそうな顔立ちで、研究員の証である白衣は、女性の豊満な胸元に押し上げられていた。

「あっ、これは社長！」
「やぁ！　お仕事お疲れちゃん！」
女性の目の前にアイゼンテックの社長、『愛染 マコト』が笑みを浮かべて近づく。
「どうかな？　この研究所には慣れたかな？」
「はい。皆さんとても親切にしてくれています」
女性は淑やかな笑みを浮かべ、愛染社長も笑みを浮かべ、女性の後ろに回り込み、肩に手を置く。
「所で、君に折り入って頼みがあるんだ」
「頼み、ですか？」
首を傾げる女性に、愛染社長はにこやかな笑みを浮かべる。
「うん。新規プロジェクトを立ち上げるのだが、君に是非参加してほしくてね」
「えっ？　あ、ありがとうございます！」
社長からの直々の参加要請に、女性は光栄そうに喜ぶ。愛染社長は女性の前に移動し、握手を求めるように手を伸ばす。
「それじゃこれからよろしくね！」

「はい！　社長の期待に応えられるよう、頑張ります！」
女性は愛染社長の手を握り、頭を下げる。
「(うんうん。調べた結果、彼女の性格は温厚で穏やか、美しい黒髪、そしてこのはち切れんばかりの胸、まさにあの人の〝刀〟の１人にそっくりだね♪)」
愛染社長は頭を下げた女性を見下ろして、口元に歪んだ笑みを浮かべていた。

ｌ烈人ｓｉｄｅｌ

感知器を頼りに山中を歩いていた俺達は、『この先 私有地につき 立ち入り禁止』と書かれているバリケードが立てられた道についた。
来人がそのバリケードを越えて行こうとする。
「待てよ来人！　立ち入り禁止って書いてあるだろ！　ほらあれ！　ここから先はアイゼンテックの研究所だ」
俺が慌てて止めるが、来人は真面目な顔で画面を見せた。
「でもほら、この数値見ろよ！」

画面上の地図では、研究所のある地点が赤く染まっていた。
「この数値は普通じゃない・・・・！あそこには何かあーーーー」
何かあると、來人が言いかけたその瞬間ーーー。
ピシャアァァンッ！
「「っっ！」」
いきなり響いた音に俺達が驚くと、さらに驚く事態が起こった！
グワアァァァァァァンッ!!
なんと、研究所が突如崩壊し、その下から真っ赤な巨大生物が現れた！
『ギュオォォォォォォォォンンッ!!』
〝昆虫のような姿をした〝奴ら〟〟とは違う容貌の怪物は、身体が赤く染め上げられ、恐竜の骨格のようであった。そして俺は、その姿に見覚えがあり、ポツリと呟く。
「『グルジオ様』なのか・・・・？」
そう、怪物は、絵本に描かれていた『グルジオ様に』よく似た姿だったんだ。
「來人、ここは逃げようと思うけど、どうする？」

「誇り高い科学者の卵としては、巨大生物に遭遇だなんて滅多に無いから追いかけたいと思うけど・・・・」

『ギュオォォォォォンッ!!』

身体と同じく血のように真っ赤な瞳をしたグルジオ様、嫌グルジオと、あまりの事態に半ば現実逃避気味になっている俺達の目が合ってしまった。

「うん、逃げよう」

「だな」

『ギュオォォォォォンッ!!』

グルジオの雄叫びを聞いて、俺達兄弟は二人三脚のようにお互いの首に腕を回し走って逃げた。学校の体育祭やご町内の運動会の二人三脚で毎年優勝しているこの息のあった動きで山中を駆け巡る！

「來人！もっと早く走れ！」

「無理言うな！俺は元々インドア派なんだよ！」

來人は頭脳は明晰だが、運動能力は俺の方が高い。それでも危険から逃げようといつもよりスピードが出ていた。

自然公園近くの陸橋にまで逃げると、俺達を追っていたグルジオが１度口を閉じると、歯の隙間から炎が溢れ、その口を開けて炎を吹き出した！

チュドォオオオオオオンっっ！

「「うわぁあああああああああっ！！！！」」

吹き出された炎は俺達の近くの地面に着弾し、爆発が起きて、俺達は地面に転がる。

「イッテェ・・・・！」

「來人！大丈夫か!?」

『ギュオォォォォォンッ!!』

俺は倒れた來人を助け起こすが、グルジオが雄叫びを上げて俺達に向かってきた！

「ほら立て！早く！」

「あ、ああ・・・・」

俺達が必死に逃げると、グルジオはついに自然公園近くにまで進撃し、炎を吹き出して暴れていた。

自然公園で遊んでいた人達が泡食って逃げ出していた。
「チクショウ！　こんな時に何もできないなんて！　こうなったら！」
「バッカ！　身体の大きさを考えろよ！　戦ったとしてもあの巨体だ！　烈人が〝全力で殴っても〟、小石を踏んだ位のダメージしか与えられないって！」
「じゃどうするんだよ?!」
「今考えてる！」
「うぇえええん！」
「「っ！」」
なんて俺達が喚き合いながら走っていると、グルジオの進行先に、逃げ遅れたのか親とはぐれたのか、男の子が泣いている姿が入り、止まった。
逃げ惑う人達の中に母親らしき人が子供を探しているような素振りをしていた。
「なんであんな所に！」
「っ！」
「あ、烈人!!　たくっ！」
俺が子供を抱き抱えて、母親に渡すと、來人がグルジオに向かって石を投げてい

た。
「グルジオー――！　そんな不ッ細工な面でデカイ顔するなー――!!」
來人！　アイツ、グルジオを引き付けているのかよ?!　グルジオが來人に向かって歩を進め始めた。
「あっ！」
すると、來人の足がもつれ、倒れた。マズイ！
俺が來人に向かって走り出すが、來人に向かってグルジオが、襲いかかろうとする。
「來人ー――――――!!」
「烈人ー――――――!!」
俺達が互いに手を伸ばすのと同時に、グルジオが火炎を放った！
グルジオの業火が迫る中、俺達は互いの手を強く握った！
「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっっ！！！」」
そして業火が、俺達を包み込んだ！

気がつくと、炎城兄弟は真っ白い光の空間の中に立っていた。
グルジオ、イヤ、『火炎骨獣 グルジオボーン』の放った火炎に呑み込まれてしまい、死んだかと思っていたが、気がついた時には彼らは謎の白い光の空間を漂っていた。

「どこだここは・・・・？」
「何だ？　どうなっているんだ・・・・？」
助かったことよりも、この摩訶不思議な空間が自分たちの周りに広がっていることに、炎城兄弟は驚いていた。
「「うわっ!?」」
そんな二人の視界を、突然の閃光が塗り潰し、一瞬顔を背けるが、光が収まると、兄弟の目の前に〝謎のアイテム〟が出現していた。
『左右に取っ手がついてある円形の機械が２つ』。
『手帳のような型のケース』。
そして、円形の機械の中央のくぼみに、ちょうど収まる大きさの、『メダルのような丸い２つのクリスタル』。
２つのクリスタルはそれぞれ、特撮のヒーローのような姿の超人の絵が刻まれ、『火』と『水』と書かれている。
「何だこれ・・・・？」
「分からない・・・・」

見たこともない道具の数々に唖然とする烈人と來人。すると、五つのアイテムがまばゆい光を放った。

「「うッ!?」」

すると、二人の脳裏に、あるイメージが強く浮かび上がった。

何か隕石のようなものが地球上に落下し、大地に巨大なクレーターを作り上げた。

そのクレーターの中でグルジオボーンが咆哮を上げ、面と向かう二人の巨人が崩れ落ち、無数のクリスタルとなって弾け飛んだ・・・・。

弾け飛んだクリスタルには、超人やグルジオボーンのような怪物の絵と文字が刻まれたクリスタル。

そして、目の前の機械の使い方も、頭にイメージされた。

そこまでで炎城兄弟の意識が、元の空間に帰ってきた。

「見たか？　烈人・・・・？」

「ああ來人・・・。もしかして、俺たちにこれを使えということか？」

二人は強烈なイメージによって、目の前の機械、『ジャイロ』の使い方が脳裏に

刷り込まれていた。
「じゃぁ、1、2の3で行こう・・・・！」
「ああ！」
そう決めると、炎城兄弟は合図を唱える。
「「1・・・・・」」
「「2・・・・・」」
「「3！　俺色に染め上げろ！　ルーブ‼」」
思わず口から出た決め台詞とともに、炎城兄弟は同時にジャイロに手を伸ばした！
まずは炎城烈人が、『クリスタルホルダー』を開き、その中から横に二本の角が生えた超人の『火』のクリスタルを取り出した。
「セレクト、クリスタル！」
クリスタルを胸の前に持っていくと、烈人は指で弾いて赤い二本角を伸ばし、ジャイロの中心にセットした！
《ウルトラマンタロウ！》

烈人の背後に、クリスタルの絵柄の超人のビジョンが現れ、炎が弾け、『火』の文字が現れる！

「纏うは火！紅蓮の炎!!」

烈人が叫ぶと、ジャイロの左右のレバーを引っ張っていく。

くぼみの周りは水色と黄色の光が、１回引くごとにエネルギーがジャイロに充填されて、赤く染まっていき、三回目でジャイロから渦巻き状にエネルギーが溢れ出た！

《ウルトラマンロッソ！　フレイム!!》

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉッ！」

烈人の身体を猛々しい火柱が包み、赤い巨人へと変身して右手を振り上げ、炎の渦を飛び出していく！

『シュワァァァァァッ!!』

ｌ來人ｓｉｄｅｌ

來人はクリスタルホルダーから『水』のクリスタルを取り出した。

「セレクト、クリスタル！」

来人の方はクリスタルから青い一本角が出てきて、それをジャイロに嵌め込む！

《ウルトラマンギンガ！》

来人の背後に、身体の各所に水晶を持つ超人のビジョンが現れて水の波動に変わると、水が溢れ『水』の文字が現れた！

「纏うは水！　紺碧の海!!」

烈人と同じようにジャイロのレバーを引く来人。1回、2回とジャイロにエネルギーが集められ、くぼみの周りを蒼色に変わり、3回目で水の波動が放たれる！

《ウルトラマンブル！　アクア!!》

「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！」

来人の身体は激しい水柱に包まれ、青い巨人となって左手を振り上げて激流の渦を飛び出していった！

『ハアァァァァァァァッ!!』

太陽をバックに大地に降り立った炎城兄弟は、神秘の光の巨人。『ウルトラマンロッソ フレイム』と『ウルトラマンブル アクア』へと変身したのである！

『『ハァァァ・・・・・！』』

ｌ??? ｓｉｄｅｌ

その頃。烈人と來人が下宿している寮の居間に集まった寮生達が、テレビで緊急放送された映像、グルジオボーンと二人のウルトラマンが対峙する映像を見て仰天していた。

「な、なんやこれぇ!?」

「ここって、確か烈人くんと來人くんが調査に行ってるって・・・・」

「っ！」

「あっ！ 〝舞姫〟！」

ｌ雲母ｓｉｄｅｌ

「ここ・・・よく〝れっくん〟と〝らいくん〟と行った・・・・」

星乃雲母もまた、自宅のテレビで映し出されたグルジオボーンと二人のウルトラマンの映像を見ていた。

ｌ烈人＆來人ｓｉｄｅｌ

『(マジかよこれ？俺達が変身したのか？)』

『(い、一体どうなってんだ?!)』

俺の周りは炎の中にいるような空間になっていた。ちょっと下を見ると、軽トラックがまるでミニカーみたいに見える・・・・。

來人も自分の顔や身体をペタペタと触っていた。

『ギュオォォォォォンッ!!』

「「(ゲッ！)」」

グルジオはまるで悔しそうに地団駄を踏みながら雄叫びを上げると、真っ直ぐに俺達に向かってきた！

『(うわっ来た！どうする來人!?)』

『(どうするって、もうやるしかないだろう！)』

來人が飛び出して飛び蹴りをグルジオを繰り出した。が、グルジオは身体の向きを変えて回避した。

『ギュォ！』

『(予測済みだ！)タァッ！』

かわされると予測していた来人、イヤ、ブルは着地してすぐに回し蹴りをグルジオの首に当てた！

伊達に俺の訓練に付き合っていないよな・・・・。後、子供の頃は結構特撮ヒーローの真似を良く二人でしていたっけ？

『ギュォォォ?!』

『ハァッ！』

なんて俺が思い出に浸っている間、ブルはグルジオと押し合いを始めようとするが、力負けして俺の方に投げ飛ばされた。

『ウワァッ!!』

『ワワァッ!!』

俺達が倒れると、『アイゼンワンダーランド』の看板が倒れた。

『ギュォォォォォンッ!!』

なんだ？グルジオの目がまるで怒ったように赤く光ると、もの凄い勢いで迫っ

てきた！
『(来るぞ、退け！)』
『(イテッ！)』
倒れた姿勢のまま、俺はブルの首を退かし、思わずグルジオに向けて手を伸ばすと、手から小さな火炎弾が放たれ、グルジオに当たった。
『ギュオォォォォンッ!?』
グルジオが火炎弾に怯んだ。
『(烈人。今のどうやったんだ？)』
『(分からない、何かビュッと出た)』
『(それじゃ俺も)』
ブルが俺、ロッソを退かして立ち上がると、手をグルジオに向けて伸ばすと、掌から高圧水流、ウォータージェットが放たれ、グルジオの身体に当たった。
『(フム。烈人は火で、俺は水。纏っている属性の攻撃が出来るのか・・・・)』
『(イヤ何冷静に分析してんだよ？)』
『ギュオォォォォォンッ!!』

『『(っ！)』』

俺達は向かってくるグルジオに左右から押さえ込んで、そのまま持ち上げる！

『『ウオォリャアアアアアアアアアアアアアっ!!』』

そのままダブルブレーンバスターの要領でグルジオを地面に叩きつけた！

『ギュオォォォォンッ!!』

グルジオが痛みで悲鳴を上げた。

『(やったな！)』

『(この間テレビで見たプロレスの真似だがな・・・・)』

俺達がお互いに喜んでいると、グルジオはすぐに起き上がると、俺達をしっぽで叩きのめした。

『『ウワァッ!!』』

そして倒れた俺達にグルジオが火炎を放った！

『『ウアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』』

『ギュオォォォォンッ!!』

火炎により地面が焼け、煙が上がり、グルジオが雄叫びを上げている姿を見る。

『(来人！何か良い方法を思い付かないか?!)』
『(あのなぁ！そんなホイホイ良い方法が簡単に思い付くかよ！)』
『(頭を使うのは来人の役目！行動するのが俺の役目だろ！頼りにしてるんだぜ！)』
『(・・・・たくっ、このアニキは！・・・・・っ)』
悪態付きながらも、ブルは思考するように唸る。が、すぐに俺と自分を見る。
『(もしかして・・・・。烈人！俺とクリスタルを交換してくれ！)』
『(えっ？そんな事できるの？)』
『(烈人と俺では光線の形が違う。ちょっと試してみたい事があるんだ！)』
『(分かった！行くぜ来人！)』
『(ああ！烈人！)』
俺達は今使用しているクリスタルを互いに送り合うと、交換した。
『『(セレクト、クリスタル！)』』
《ウルトラマンタロウ！》《ウルトラマンギンガ！》
お互いのクリスタルに、来人は一本角を、俺は二本角を出し、ジャイロにセット

し直した。

『(纏うは火！　紅蓮の炎!!)』

《ウルトラマンブル！　フレイム!!》

エネルギーをチャージし終えると、ブルの体色が赤くなり、炎の中から腕を振り上げた姿勢で立ち上がってきた！

『(纏うは水！　紺碧の海!!)』

《ウルトラマンロッソ！　アクア!!》

俺もエネルギーをチャージして変身すると、ロッソの体色が青に変わり、水の激流の中を腕を振り上げた状態で立ち上がる！

そして俺の回りの空間が、まるで水の中にいるような空間に変わった。クリスタルをチェンジすると内部の空間も変わるのか。

『ハァッ！』

『シャァ！』

『ギュオォォォォォンッ!!』

『(烈人)』
『(イテッ！)』
『(ゴニョゴニョゴニョゴニョ・・・・)』
『(うんうん。了解！)』
迫るグルジオを見ながら、ブルが俺の角を掴んで引き寄せると、耳元で作戦を伝える。
先ず俺が前に出て、グルジオが放つ火炎を、水の障壁を張って防ぐ！ すると水が蒸発して煙を上げた。
こんな事もできるんだ。
『(よし！ 水の障壁で火炎を防ぎ、水蒸気で目眩ましをして・・・・烈人！)』
『(おう！)』
ブルが力を込めるように踞り、姿勢を正すと、俺が横にバク転すると同時に、ブルの掌から火炎光線をグルジオに浴びせた！
『ギュオォォォォォンッ!?』
『(アチ、アチチ！)』

飛び火した火が身体に少し当たるが、すぐに俺はブルに近づく。

『(やはりクリスタルを交換すると違う形の火が出るのか・・・・。俺達が変身したこの超人、ロッソとブルはそれぞれのクリスタルを交換して、属性が付与されたあらゆる光線技を駆使して戦うタイプって事なのか？)』

『(だから、この状況で何冷静に分析してんだよ！)』

『グゥゥゥゥゥゥゥ・・・・・！』

『『(えっ？あっ・・・・・)』』

唸り声が聞こえてそっちに目を向けると、いつの間にかグルジオが俺達の目と鼻の先にいた。

『・・・・ギュオォォォォォォンッ!!』

『『ウワッ！』』

叫び声を上げたグルジオに俺達は慌ててバク転して後方に逃げ、両手を広げて迫るグルジオの脇をでんぐり返しで回避した！

『ギュオォォォォォォンッ!!』

『ハァッ！』

『オリャッ！』
大口を開けて迫るグルジオの顔面に、俺は裏拳を叩き込み、ブルはスタンプキックをグルジオの腹部に叩きつけた！
『フッ！』
『セイッ！』
俺が正拳突きを繰り出すと、ブルは空かさず上段蹴りをおみまいした！
『『ハァアッ!!』』
俺達がタブルキックでグルジオを後方に押し出した！
ピコン！ピコン！ピコン！ピコン！ピコン！・・・・・・。
ビコン！ビコン！ビコン！ビコン！ビコン！・・・・・・。
俺達の胸元の結晶が赤く点滅し、警報のような音が鳴り響く。
『(ヤバい烈人、何か、急に胸がドキドキしてきた・・・・・！)』
『(ああ俺もだ・・・・！そろそろ決めないとヤバそうだ・・・・！)』
俺達はグルジオの身体に迫り、ブルがグルジオの足を取って倒れさせると、俺達兄弟はグルジオのしっぽを持って、ジャンピングスイングでグルジオを投げ飛ばす

！

『『（ウオォリャアアアアアアアアアアアアアアッ!!）』』

ドシィィィィィィィィンッ!!

投げ飛ばされたグルジオは土煙を上げて倒れる。俺達はグルジオから距離を取る。

『（烈人。怪獣を水のバリアで覆ってくれ！）』

『（分かった！）』

俺は掌から水の玉をグルジオに放ち、すぐにブルは両手から炎の熱線を放った！

チュドォオオオオオオオンっっ！

グルジオの身体を水の玉がバリアとなって覆うと、熱線によって瞬間沸騰すると、爆発が起こった！

水蒸気爆発かよ！

爆発でグルジオが上空に吹き飛んだ！

『『（セレクト、クリスタル！）』』

俺達は空かさずクリスタルチェンジした！

グルジオが落下してくるまでに、俺達は最後の攻撃の構えを取る。俺、ロッソが両手を広げてゆっくり胸元に寄せ合わせながら巨大な火球を作り出し、両腕を回して十字に組む。

『(『フレイムスフィアシュート!!』)』

そして同時に、ブルが両腕に水を溜めて、両腕を回してL字に組んだ。

『(『アクアストリューム!!』)』

俺が放った火炎弾と、ブルが放った激流が、落ちてくるグルジオに、俺達の渾身の一撃が直撃した！

『ギュオォォォォォンッ!!』

そして頭から地面に落下したと同時に、大爆発した！

チュドォオオオオオンっっ！

『(やった・・・・！)』

『(ああ、やったぞ！)』

怪獣に勝利した俺達は、拳を上下に打ち合わせて手の平を叩き合う。

『(決まったな、俺達・・・あっ！)』

喜びブルだが、直後にその身体が薄れて消えていく。
『(お、おい!? しっかりしろ來人!)』
『(あぁ～・・・・)』
『(お、俺も？ あぁ～・・・・)』
動揺した俺の身体も透き通っていき、脱力しながら消えた。

l??? ｓｉｄｅｌ

グルジオボーンの消滅したのと同時に、何者かの手に、降ってきたクリスタルを掴んだ。そのクリスタルには、『魔』の一文字と、グルジオボーンの姿が刻み込まれていた・・・・。
『なかなか面白い余興だな？』
「・・・・・・・・」
その人物の後ろに、人ならざる異形の生物が現れた。その人物は、動揺１つせず、異形を見据える。
『貴様には感謝している。我々がこの街で活動しやすいように、裏で手を回してく

れているからな。ほれ、約束の物だ』

異形はその人物に、〝日本刀〟を手渡した。先ほど騒ぎに乗じて、美術館から盗んできた刀剣だ。

「ーーーーーー!!」

その人物は、刀剣を見るとはしゃいだように異形に近づき、刀を鞘から取り出すと、刀身を見て笑みを浮かべる。

『確かに渡したぞ、〝牛王吉光〟をな』

異形はそう言って離れていった。

ー烈人ｓｉｄｅー

「コラァ！　起きんかい！　起きんかい！　烈人來人起きんかい!!　烈人ーーーー!!　來人ーーーー!!」

バシンッ!!×2

眠っていた俺の耳に、怒鳴り声が響くと同時に、頬に鋭い痛みが走り、真っ暗

だった俺の瞳に、見覚えのある女の子の顔が入った。
関西弁を喋る黒髪ポニーテールの女の子、『桃園 百花』。
透明感のある水色の髪をツーサイドにした〝妹〟と同い年の女の子、『天空寺 宙』。
桃色の髪を幾つか三つ編み状にした來人の彼女、『白雪舞姫』。
〝ある事情で俺達と同じ寮に住んでいる女の子達〟。
「っ・・・・〝桃園〟、〝天空寺〟、〝白雪〟？お前ら、どうして？」
「何が、どうして？や！あんな怪獣が現れてアンタらがここ辺におる聞いたから探しに来たんやで！」
「そうか・・・っ！來人は!?」
「隣にいるよ」
天空寺が俺の隣を指差したので見てみると、來人がガールフレンドの白雪の大きな胸部に顔を埋めていた。
「舞姫ぇ～、超疲れたぁ～、癒してくれぇ～」
「來人くん、無事で良かったです・・・・！」
白雪は相当心配していたのか、自分の胸元に顔を埋める來人に嫌な顔せず、むし

ろ来人の頭を抱き寄せていた。どちらかと言うと内気な彼女にしては大胆な行動だ。

初めて会った時から来人とお互いに一目惚れしたらしく、恋人として付き合っている。

まさか勉強&研究大好きで、恋愛興味０だと思っていた来人に彼女ができるなんて、俺も〝叔父さん〟も驚いた。まだ両親や妹には言っていないが。

「所で二人とも、何これ？」

天空寺が俺達の近くに落ちていた『２つのジャイロ』と『クリスタルホルダー』を見せる。

「ああ実はな・・・・」

「待った烈人。その話は後にしよう。もうすぐ警察とマスコミが来る」

白雪の胸元から頭を離した来人が、遠くから聞こえるヘリコプターとパトカーのサイレンが近づいているのを教えた。

「そうだな。みんな、ここを離れよう」

俺達はその場離れた。何だかまた大変な事になってしまったが、この時俺は知ら

なかった。翌日、俺達兄弟とずっと疎遠になっていた『星乃 雲母』と、これから待ち受ける戦いの事を。

光の戦士の兄弟の力を受け継いだ兄弟が、『感情を食らう害虫』、『紛い物の黒き戦士』、『光の兄弟の妹』、『自分達の妹の真実』、そして、『暴走する宇宙の白血球』と戦う事になる。

ー『R／B・エグゼロス』ー

君の笑顔と勇気、それは希望と未来。守らなきゃ全部宝物。僕の君の声が重なり合えばきっと行ける。決して絆を諦めない。決して明日を諦めない。この瞬間起こった奇跡は嘘じゃない。繋がり重なる未来へ。

「俺色に染め上げろ！ ルーブ!!」

ウルトラマンR/B$|$ループ$¿$終了です。
ちなみに、あの『パチモンオーブ』が雲母達に勝手に点けたの評価を紹介しますが。
雲母・「ヒーローを真面目にやってない不届き者！」
百花・「姉へのコンプレックスから逃げる為にヒーローやってる不埒者！」
宙・「オタクのガキんちょがヒーローを気取るな！」
舞姫・「一流のヒーローはオドオドしない！」
あのパチモンならこれ位言うと思います。勿論、雲母達もあの『オーブの偽物』の事は蛇蠍の如く嫌っている設定です。

# アズールレーンＴＳｔｏｒｙ０Ｉ

ウルトラマンタイガは、『アズールレーン』です。アニメでのキャラソンでバディって単語が良く出ていましたから。
オリ主の指揮官。ストーリーはアニメ アズールレーンの始まる前。

---

その惑星は地球ではない。地球に良く似た惑星であった。
世界の７割を海洋が占めるその惑星にて、突如、『セイレーン』と呼ばれる謎の海洋勢力が出現した。奴らの使う未知のテクノロジーと兵器により、人類は９割の制海権を喪失した。
この強大な海の脅威に対抗するため、『ユニオン』、『ロイヤル』、『鉄血』、『重桜』、『東煌』、『北方連合』、『アイリス』、『ヴィシア』と言った国家は、これまで各国家間で生じていた問題を棚上げし、四つの国家が主軸とされた。
自由と共生を尊ぶ民主連合合衆国、『ユニオン』。

貴族による栄光の歴史を誇る立憲君主制国家、『ロイヤル』。
高度な機械技術の研究が続けられる軍事帝国、『鉄血』。
そして、東に位置する列島で、独自の文化を育む和の国、『重桜』。
これらの主要四大国家を中心とした軍事連合が結成される事となった。
その名を、『アズールレーン』。
人類は『セイレーン』に対して、この軍事連合による反抗を開始しようとしていた。
そしてこれは、『重桜』の母港に着任する１人の若き指揮官の物語。

ｌ〝指揮官〟ｓｉｄｅｌ

軍母港に向かう船の船首に立った若者は、青空と太陽が彩る水平線の向こうを眺めていた。
「やれやれ、軍母港の指揮官に配属とはついてないな。ま、『セイレーン』と戦う艦隊の指揮官なんて危険な仕事、〝落ちこぼれ〟にやらせるのが一番安全だと思ったんだろうけどな・・・・」

その若者は軍の士官学校を卒業してここにいた。

『セイレーン』の出現によって、世の中は一変してしまい、軍の士官学校で劣等生のような成績を修め、士官学校で〝成績優秀な主席達〟は、〝重桜の中央司令部〟で勤務となり、主に外交や各母港の命令権が与えられ、若者のような〝落ちこぼれ〟は危険極まりない母港指揮官を任命された。

主要四大国家の一角である重桜でも、『セイレーン』との戦いを指揮する指揮官など、危険な職務に付きたいと望む人間は少なく、若者が選ばれてしまったが、若者自身はその事を気にしていなかった。

「『指揮官』。軍港はまだなのです？」

若者に隣に立ち、話しかけてきたのは、１人の少女だった。

クリーム色の髪をポニーテールに纏め上げ、瞳は血のような紅色。頭からは赤と白の装甲板で出来た耳か角のような物が覗き、重桜海軍の流れを汲むセーラー服に身を包んでいるが、上着の裾は短く下から覗けば適度に膨らんだ乳房の下乳が覗けそうで、スカートの丈も短く中身が見えそうで見えない魅惑があった。と、ここまで言えば露出の激しいセーラー服を着た少女軍人のよつに見えるが、その手には、

少女の身の丈位の巨大な刀を握り、背中には艦船のような装備を装着した、異質な少女だった。

「もうすぐ到着するぞ、『綾波』」

「はいです」

『綾波』と呼ばれた少女は静かに頷くのを見て、『指揮官』と呼ばれた若者は隣に立って水平線の向こうを見つめる少女・『綾波』をチラッと見る。

「(『セイレーン』と対抗するために開発された素体、『艦船KAN―SEN』、か・・・・)」

『アズールレーン』が結成されて時を同じく、『メンタルキューブ』と呼ばれる特殊な素材から、とある画期的な行動素体が開発された。

その名は、艦船KAN―SEN。

人間の少女と変わらない外見を持つが、その身体能力は人間よりも優れており、個々に違った能力と艤装と呼ばれる武装を持った、人類が『セイレーン』に対抗しうる存在である。

艦船KAN―SENと呼ばれる少女達は、かつてこの惑星で起こった人類

間の大戦の史実を元に再現された艤装を使い、普通の人間とは比べ物にならないほどの力を有していた。

「・・・・・・・・・・・・」

そして目の前にいる少女こそ、特型駆逐艦吹雪型・十一番艦、『綾波』。

初めて指揮官が出会った艦船である。

「綾波」

「はいです」

「お前は、この水平線をどう思っている？」

「？？？」

指揮官がそう言うと、綾波はキョトンっと、首を傾げた。

「どう見るってどういう意味なのです？」

「あぁだから、潮風の感触とか、空や海の色とか、そういうの感じてどう思う？」

「・・・・綾波は〝兵器〟なのです。そんなものに感傷を持ったりしないのです」

綾波は一瞬逡巡するように顔を俯かせるが、直ぐに顔を上げて指揮官に向かってそう言った。

それを聞いて指揮官は少し肩を落とす。
「つまんない生き方だな・・・・」
「つまんない、ですか・・・・？」
首を傾げる綾波に指揮官は口を開く。
「ああつまんない生き方だよ。聞いたけど、お前ら艦船$|$KAN—SEN$¿$って、昔の大戦で活躍した艦船を元に、『メンタルキューブ』から生まれたんだよな？」
「はい・・・・」
「せっかく人間の身体を手にしたんだからさ。人間の身体を楽しめば良いんだよ」
「楽しむ、ですか？」
「そう。綾波はご飯を食べて美味しいと思ったか？」
「・・・はいです」
指揮官の質問に、綾波は少し考えると、肯定するように首肯した。
「綺麗な風景を見たとき、綺麗だと思ったか？」
「・・・はいです」

「おもいっきり身体を動かして、疲れたって思ったか？」

「・・・・はいです」

それから指揮官が色々と〝ヒトの身体〟を得てからの綾波の経験を聞くと、綾波は小さく首肯していた。すると、指揮官はそれを見て小さく口角を上げた。

「それで良い。旨い飯を食って美味しいって感じるのも、身体を動かして疲れたと感じるのも、綺麗な風景を見て綺麗と感じるのも、生きている人間だからこそ感じる感覚なんだよ」

「・・・・綾波は戦うための存在なのです」

「ではお前は何のために戦う？ 誰のために戦うんだ？」

「・・・・綾波は・・・・綾波は兵器なのです。そんな考え持たないのです」

「頭の固いヤツだな。ま、今はそれでいいさ」

指揮官は綾波の頭にポンッと手を置いて優しくクリーム色の髪を撫でる。

「指揮官・・・・？」

「今はまだ分からなくても良いさ。これから学んで行け。お前たち艦船$|$ＫＡＮ—ＳＥＮ$?$の〝可能性〟や、内に秘めた〝気高さ〟をな」

「可能性に、気高さ、ですか？」

「ああ」

綾波はニッと笑う指揮官を見据える綾波は、ふと指揮官の〝右腕に巻き付けたブレスレット〟に目を向ける。

「指揮官。そのブレスレットはなんなのですか？」

「あぁ、子供の頃にいつの間にか持っていたんだ」

≪おい、そろそろ見えてきたぞ≫

〝指揮官の頭にいつの頃か聞こえる声が響き〟、水平線の先を見ると、〝目的地の島〟が見えた。

重桜の象徴ともいえる桜が咲き乱れる。およそ軍母港に似つかわしくない風光明媚な島だった。

「見えてきたぞ綾波。あれが俺達の基地だ」

「はいです。『海守友行ﾐﾅｶﾐﾄﾓﾕｷﾐﾅｶﾐﾄﾓﾕｷ』指揮官」

≪トモユキ。これからがお前の始まりだな≫

トモユキと綾波、そして〝トモユキと一心同体となっている存在〟の物語が始

まった。

＊＊＊

それから一年の月日が流れ、トモユキが指揮官として華々しい戦果を上げ、いつの間にか、ある異名で呼ばれるようになった。

『海原の軍者』とーーー。

「ん、ああ？」

トモユキが朝を迎え、眠りから目を覚ますと目の前に、白く大きく深い谷間が目に入った。

「・・・・『赤城』か？」

「はい、指揮官様。おはようございます♥」

トモユキの目の前には、黒い長髪の頭の上に狐の耳に生やし、裏地が赤の雀色の羽織を肩にかけ、胸元を大きく開き、肩を丸出しにし、白い肌を晒した露出度の高い格好で、背面から伸びたのは九尾の狐の黒い尻尾が生えた。つまり。

九尾の黒狐。

そしてその目元に赤い化粧が施され、艶やかかつ蠱惑的で自虐的な印象を受ける美しい女性が横になっているトモユキの布団に四つん這いになり、トモユキを覆い被さろうとしているようだった。

「おはよう。そしてこれはどういう状況？」

「はい。指揮官様があまりにも可愛らしい寝顔だったので、『赤城』もついつい見いってしまったのですわ」

「ふむ、そうか」

『重桜第一航空戦隊所属正規空母・赤城』

重桜でも精鋭部隊の一角を座し、重桜の軍港においては宰相的な重要ポジションに立っていた。

が、トモユキ指揮官に対しての情愛がとてつもなく大きく、トモユキが他のＫＡＮ―ＳＥＮと仲良くしているだけでも怒気を放つほどである。

「・・・・・・・・」

トモユキは少し目線を下げて、赤城の四つん這いになってただでさえ大きな胸部

がさらに大きくなったように見え、赤城の大きな胸部をジィッと見据える。
「あら指揮官様？　赤城のおっぱいが気になりますか？」
「ウム。確かに赤城のおっぱいは魅力的だからな。このおっぱいに見惚れない男がいるならば、その場で男を廃業しろって気持ちだ」
「ウフフありがとうございます。でしたら、触っても良いですわよ、指揮官様♥」
「ナヌッ？」
「ウフフフ・・・」
明らかに、〝罠〟である。
ここで赤城のおっぱいをまさぐるように、揉みしだくように触れば最後、一生赤城だけのトモユキになってしまう。
トモユキもそれは分かってはいるが、赤城の美巨乳を見るとその手を伸ばしそうになりーーー。
「姉様。指揮官は起きました・・・」
そこで指揮官の自室の扉を開いて入室してきたのは、白銀の狐耳が生え、白銀の髪を肩口まで伸ばし、厳かで戒めの雰囲気を含んだ声色に、スラッとした高い背丈、

赤城と同じく露出の高い青い着物からは真白く、赤城と同じ位の胸の谷間が垣間見え、氷を思わせる眼差しは気高く、背面から覗くは白い九本の尾。

赤城が九尾の黒狐ならば、こちらは九尾の白狐。

赤城の妹、『重桜第一航空戦隊所属正規空母・加賀』であった。

「「・・・・・・・・・・・・」」

加賀は目の前で姉の赤城が、指揮官に覆い被さり今にも夜這いイヤ、朝掛けをしようとしている姿に硬直し、赤城もどうしたものかと固まるが、トモユキはポンッと手を叩くと。

「ウム。よし加賀お前も来い。カモンっ」

「・・・・・・・・・・・・カモンではない」

とりあえずボケてみたトモユキに、加賀はこめかみに指を当てながら頭痛を堪えながら、呻くように呟く。

◇

トモユキ指揮官は軍服に着替えると、赤城と加賀を引き連れて、桜が咲き乱れる場所に置かれた神社の社で小さい二人とその二人の護衛のように佇むＫＡＮ―ＳＥＮと話をしていた。

二人の小さいＫＡＮ―ＳＥＮの一人は、『ＢＩＧ ＳＥＶＥＮ』の１隻にして、神木《重桜》の神子でもあるり、『第四代重桜艦隊旗艦』。艶やかな黒髪と丸い頬、そして犬や猫と比べて、所謂モフモフ感に秀でた狐の耳をした可愛らしい少女、『長門型戦艦一番艦・長門』。

もう一人は長門と似た容姿をしているが、髪型はショートヘアーにした長門の妹、『長門型戦艦二番艦・陸奥』。

そして神子の長門と妹の陸奥の護衛として佇む銀髪の少女は、『白露型駆逐艦九番艦・江風』であった。

トモユキは重桜軍上層部からの報告書を読むと、渋面を作り、それを見て長門が口を開く。

「指揮官。上層部は何と言ってきておる？」

「あぁ、鉄血が妙な動きを見せている。このままじゃいずれ、アズールレーンを脱

退し、新しい陣営を設立するかもしれない」

『っっ!?』

トモユキの言葉に長門達も驚く。今はセイレーンと言う人類共通の脅威が迫っていると言うのに、四大国家の中でも科学技術が発展している鉄血が脱退する事に驚いたからだ。

「・・・・・・・・・・・・・」

「指揮官様。上層部は他に何を書いておりますの？」

「鉄血がアズールレーンを脱退するおそれがある故に、これから軍本部で緊急議会を開くから、俺に単身で本部に赴くようにってさ」

「大丈夫なのか？」

「鉄血がどう動いた時の対策を練る議会さ。行ってくる」

≪トモユキ。上層部はお前の事を嫌っているからな、気を付けろよ≫

海守友行と、トモユキの体内にいる存在の言葉を聞きながら、社を離れた。

それが、『運命の分岐点』になることを知らずにーーーーーー。

オリジナル主人公・『海守友行$|$ウミモリ トモユキ$¿$』

CV・小野大輔（テニスの王子様・徳川カズヤ。宇宙戦艦ヤマト２１９９・古代進）

容姿・『うたの☆プリンスさまっ♪・皇綺羅』の髪の色を茶髪にして、髪型を『Ｋ・夜刀神狗朗』にした容姿。

性格・クールでスケベなおっぱい星人。しかし内に熱い想いを持ち、艦船$|$ＫＡＮ―ＳＥＮ$¿$達全員を大切にしている。

タイガ・タイタス・フーマとは一心同体のバディ$|$相棒$¿$と思っている。

能力・指揮能力は高く。他にも〝特殊能力〟を持っている。

大まかな設定ではこうですね。次回でタイガに変身し、トレギアとも遭遇してから、『アニメ アズールレーン』が本格スタートする設定です。

正直連載してみたいです。

# アズールレーンＴＳｔｏｒｙ０Ⅱ

タイガ編はこれにて終了です。
トモユキはナレーションと、タイガスパークの声も担当しています。

---

まだセイレーンが現れていない時代。
海守トモユキがまだ小学生位の子供の頃。
トモユキは漁師の父と母の三人暮らしだった。トモユキには、１つの秘密があり、今日もその秘密と遊ぼうと近くの海岸に向かうとーーー。
【チビスケ！】
【こらっ！大人しくしろっ！】
【キュァァァ・・・・！】
トモユキが住んでいる町の近くの海岸に、ナマズのような姿をした動物がひっそりと生息しており、トモユキはその動物と親に内緒で何度も遊んでいた。

そして今、作業服を着た、〝頭部が長く、上下にずれた目をした異形の人間？〟に連れ拐われそうになっていた。

【やめろ！　チビスケを離せっ!!】

何か光の柱が異形な人間を包むと、異形な人間はチビスケを連れて天に昇って行く。それを見たトモユキは昇って行く異形な人間の足を掴んでぶら下がった。

【うわっ！　なんだこの小僧っ!?】

【チビスケが嫌がっているだろうっ！　チビスケを離せよっ!!】

【えぇいっ！　喧しいっ!!】

【うわっ!!】

異形な人間がトモユキを蹴っ飛ばすと、トモユキは手を離してしまい、既に地上から１０００メートルも離れた上空からまっ逆さまに落ちていった。

【うわあああああああああああああああああああああああああッ！！！】

悲鳴をあげて落ちていくトモユキの身体を、空から降りた〝赤い光の粒子〟が包み込んだ。

そして、トモユキは気がつくと、自分は海岸で横になっていた。

～現在～

セイレーンの技術を利用する事を提唱する鉄血がアズールレーンを脱退し、独立した組織を作ろうとする動きが見られる事が問題となり、重桜上層部は、鉄血と同盟を組むか、アズールレーンに残るかを協議する為、アズールレーン脱退に反対派の筆頭であるトモユキ指揮官にも出席するように通達がきた。

しかも、護衛として艦船§§ＫＡＮ―ＳＥＮ§§の同行は認めないとも書かれていた。

「指揮官様。よろしいのですか？上層部の命令通りにお一人で出席して？」

「確かにな。でも赤城。これを無視したら、アズールレーン脱退に賛成派が勢いづくだけだからな。俺が行かなきゃならんだろう」

本土に向かう連絡船に乗り込もうとするトモユキに、赤城が心配そうな顔色を浮かべていた。トモユキは赤城を安心させるように笑みを浮かべる。

『指揮官!!』

「おう皆」

今度は、他の艦船$|$KAN—SEN$¿$達が、トモユキ指揮官を見送ろうと集まってきた。

「・・・・・・・・・・・」

赤城は不承不承とトモユキから離れると、とびきり小柄な少女が二人、トモユキの足にしがみつくように抱きついた。

重桜の中でも最も幼い『睦月型駆逐艦』で、特徴とも言える園児服を着用した最年少組の艦船、黒髪の天真爛漫な睦月と桃髪で内気な如月だ。

「しゅきかん！ すぐにかえってくるよね?!」

「しきかん・・・い、いかないで・・・・ううう・・・・」

睦月と如月がトモユキを行かすまいと、ギュッと掴むが、トモユキは二人の頭を優しく撫でる。

「大丈夫だよ。ちゃちゃっと会議なんてすぐに終わらせてくるさ、睦月、如月」

トモユキに今度は黒髪のポニーテールに頭に犬耳を付けた艦船・時雨と灰色がかった白い髪にピョンと生えた犬耳を付けた野性味ある艦船・夕立、銀髪に小柄な艦船・雪風が近づく。

「指揮官！　さっさともどってきなさいよね！」
「この雪風様が見送りに来たのだ！　感謝するのだ！」
「早く帰ってこいよな指揮官！」
「分かってるよ、時雨、雪風、夕立」
三人を下がらせると、今度はウサギ耳を頭に付け、眼鏡をかけた青い長髪の女性・蒼龍、同じようにウサギ耳をつけた銀髪の女性・飛龍が近づく。
ちなみに二人は赤城・加賀の一航戦の次の二航戦。
「指揮官。まだ書類が残っているのですから、すぐに帰って来て下さい」
「皆待っているからね」
「おう。蒼龍、飛龍」
次に、フワフワとした黒髪の女性と黒髪をポニーテールに結わえた侍然とした女性、二人とも豊満なバストとグラマラスな肢体をした艦船・愛宕と高雄である。
トモユキは二人の豊満なバストに視線を向ける。
「指揮官、すぐに帰って来てね。お姉さん心配しちゃうから♪」
「指揮官。待っているからな」

「分かってるって愛宕、高雄」

愛宕がトモユキの顎の下を優しく撫で、高雄が愛宕の首根っこを掴んで一緒に下がった。

次に、美しい白い髪に巫女服のような服を着用した女性と少し露出のある格好をした茶髪のポニーテールに侍然とした女性、五航戦の翔鶴と瑞鶴が近づく。

「ハァ、指揮官が居なくなったら、一航戦の鬼のような先輩達の訓練が始まるわ～」

「まぁそう言うなよ翔鶴。先輩からの愛の鞭だと思えよ」

「そうだよ翔鶴姉。訓練頑張ろう！」

「瑞鶴、お前はもう少し肩の力を抜けよ」

お淑やかなに見えて毒舌家の翔鶴、生真面目な性格の瑞鶴に苦笑いを浮かべるトモユキ。

トモユキに次に近づくのは、緑色の長髪に猫耳を付け、袖の長い上着を着た小柄な少女、明石だった。

「指揮官。借金の返済はどうするにゃ？」

「さて、次の艦船にちゃんと挨拶を・・・・」

「借金はどうするにゃ？」
艦船達の新衣装の為に結構明石に借金を作っているトモユキは、明石から目を外すと、見送りに来た長門達を向く。
「指揮官。気をつけて行ってくるのじゃ」
「ああ。必ず戻るよ長門」
そして他の艦船の女性陣と一言話を終えたトモユキは、赤城と加賀に向き直る。
「赤城。ここを任せる」
「承知しましたわ」
「加賀。赤城をしっかりと支えてくれよ」
「無論だ」
頼もしい二人に頷くと、トモユキは最も古参メンバーである、綾波に向き合った。
「よぉ綾波」
「指揮官。・・・・その」
「俺が言ってた〝言葉の意味〟、少しは〝答え〟が出たか？」
「・・・・なんとなくですが」

綾波は仲間の艦船§§KAN―SEN§§達を見渡す。
「指揮官が言っていた言葉、少し分かった気がするのです」
「そっか。んじゃ続きは帰ってから聞くな？」
「はいなのです」
艦船§§KAN―SEN§§の皆に見送られながら、トモユキ指揮官は連絡船に乗り込み、本土へと向かった。

＊＊＊

『ギュワァアアアアアアアアッ！！！』
「なんなんだよこれはっ！」
母港を離れ、間もなく本土にたどり着く前に、海の中から巨大なナマズのように丸っこい顔に、全身に刺々しい棘が大量に伸び、青黒い身体に若干黄色いっぽいラインがある怪獣・『海獣 キングゲスラ』が連絡船に襲い掛かった。
『ギュワァアアアンンンッッ！！！』

キングゲスラが手を上げて、連絡船に振り下ろした！
「うわあああああああああッ!!」
ゴワシャァアアアアアアンンッ!!
連絡船が破壊されると同時に、赤い光が連絡船から飛び出し、光が大きくなり、巨人となった！
銀色の身体に赤いラインがあり、胸の中心に青く光る丸い水晶を付けたプロテクターを身に付け、銀の顔にはトサカと牛のような角をつけた巨人だった。
『「ここは、一体どこなんだ・・・・？」』
トモユキは、自分の周りが赤いオーラの宇宙空間にいた。
『危ないところだったなトモユキ』
『「お前は?! 子供の頃からいつの間にか聞こえていた声か・・・・？」』
『ああ！ 俺は、タイガ。光の勇者！ ウルトラマンタイガだっ!!』
『「ウルトラマン、タイガ・・・・？」』
『俺はお前、お前は俺。俺達は、一心同体だぜ！』
『「一心同体・・・・」』

『さぁ！　一緒に戦おうぜ!!』

ウルトラマンタイガは、キングゲスラに向かって構えると、空高く飛び上がり、右足にパワーを集中させ、急降下し、キングゲスラに向かう。

『父さん直伝！『タイガキック』!!』

急降下した飛び蹴りをキングゲスラの頭部に撃ち込んだ！

『ギュワァアアア！』

キングゲスラは大きくのけ反りながら倒れると、水飛沫を上げた。

『シュアッ！』

大きく反転したタイガは海に着地（着水？）すると、こちらも水飛沫を上げて、キングゲスラに向かって構えた。

『キングゲスラの棘には、毒が仕込まれているって聞いたことがあるぜ』

『「という事は、接戦戦は避けるべきだな。タイガ、で良いんだよな？」』

『ああ。それにしても、もうこの状況に順応したのかよ？』

『「かなり特殊な事態なのは分かったが、こちとらセイレーンなんて謎の侵略者と戦う艦船§§ＫＡＮ―ＳＥＮ§§達の指揮官をしているんだ。こんな異常事態に一々

狼狽えていたら身が持たないぜ」』

『なるほどな！』

『ギュワァアアアアアアアッ!!』

キングゲスラが起き上がると、タイガは腕を十字に組んで、ブレスレットから光弾を連続で発射した！

『『スワローバレット』！』

タイガから放たれた光弾が、キングゲスラに当たった！

『ギュゥゥゥゥ！』

『よしこのまま一気に！』

『「っ？　まてタイガ！」』

『っ！　なんだよトモユキ？』

トモユキは、痛みで悶えるキングゲスラを見据える。

『クゥゥゥ！　キュゥゥゥゥッ！』

『「・・・・・・・・・・・・・」』

トモユキの脳裏に、幼い頃助けられなかった動物の友達の姿が、キングゲスラと

重なった。

『「チビスケ・・・・？　チビスケなのか？」』

『ギュワァアアアアアアアッ!!』

キングゲスラはタイガに向かって行こうとする。

『「・・・・・・・・・クンクン、パッ！」』

『っっ!?』

トモユキはタイガの身体を使って、手を二回上下に振って、パッ！の所で大きく手を広げる芸を見せた。

その瞬間、キングゲスラの身体がピクッと静止した。

『「クンクン、パッ！」』

『クゥゥゥゥ・・・・』

『「クンクン、パッ！　クンクン、パッ！」』

『キュゥゥゥゥ』

キングゲスラは大人しくなり、タイガにすり寄るように身を寄せた。

『「チビスケ、やっぱりおまえなんだな？」』

『キュウゥゥゥ』

『「ハハハハハ。大きくなったなぁ！」』

トモユキはタイガの身体を使いながら、毒棘に気を付けながらキングゲスラ、チビスケの頭を撫でた。

『スゴいな。怪獣を倒さず大人しくさせるだなんて』

タイガは怪獣を大人しくさせたトモユキに素直に驚いていた。

『さて、チビスケをこのままにしておく訳にはいかないな。・・・・そうだなぁ、ウチの母港には閉鎖された洞窟のドッグがあったな。あそこなら綾波や赤城と加賀くらいしか知らないし、広さ的にもチビスケが入れるからソコでしばらくチビスケを・・・・』

『っ！トモユキ!!』

『「ん？」』

トモユキがタイガの言葉に反応するとーーーーーー。

ズシャ・・・・！

『ギュアッ!!』

チビスケの身体から、〝鋭い爪が伸びた青い腕が、チビスケの身体を貫いていた〟。
『「チビ、スケ・・・・??」』
トモユキはいきなりの状況に愕然となった。
『トモユキ！』
タイガが後方に大きく飛び退くと、チビスケの身体を貫いた腕がチビスケの身体から引っこ抜かれると、チビスケの身体が横に倒れ・・・・。
『キュゥゥゥゥ・・・・』
チビスケはそのまま瞼を閉じると、静かに息をひき取り、海の底へ沈んでいったーーー。
『「チビスケ・・・・！　チビスケーーーーーーーーーーーッッ！！！」』
トモユキはインナースペースの中で、チビスケの死に涙を流し、両膝をついた。
そんなトモユキに向かって、暗く、冷たい声がかけられた。
『つまらない展開は止めて貰いたいな・・・・『海原の軍者』？』
『お、お前はっ！！？』
チビスケの後ろに立ち、たった今チビスケの身体を貫いてその命を奪った腕を払

う巨人を見て、タイガは憎悪と憤怒を混ぜた声を上げた。

『トレギアーーーーーッ!!!』

青い身体に胸の水晶には×印のプロテクターに身体には鎧を身に付け、手足にはベルトのようなものをつけ、全身に拘束具を付けたような姿。

顔には仮面のようなものを被り、仮面の瞳は血のように真っ赤になっており、額はクリスタルのようになっており、足のつま先の先端が反り返るような形状をしている。顔の輪郭や耳の形は鋭く伸び、黒い戦士のようにも見える巨人。

〈ウルトラマントレギア〉。

タイガは怒りを込めた拳を突き出して、トレギアを殴ろうとするが、トレギアは余裕でその拳を掴んだ。

『フフフフ』

トレギアはタイガの拳を握ったまま、不気味に笑い声を上げると、上体をのけ反らせるように動いて、タイガを見上げる。

『クゥッ！シュワッ!!』

『ふん』

タイガはトレギアを拳から離れると空中を翔び、トレギアも追撃した。
それから2体は空中を高速で飛びながら何度もぶつかり合って上昇する。
『なぜ殺した!? あの怪獣を殺す事なんて無かっただろう!?』
『せっかく面白そうなものが見れると思ったのに、台無しにしてくれた役立たずを始末しただけだよ？』
『ふざけるなぁ!!』
『「・・・・・・・タイガ。アイツは一体何者だ？」』
それまで黙っていたトモユキが、トレギアを睨みながらタイガに聞く。
『アイツは、『ウルトラマントレギア』。闇の道に堕ちた悪のウルトラマンだ！』
『ふん。正義だの悪だの、光だの闇だの、そんな風に区別するのが、君たち光の国のウルトラマンの浅はかさだね』
『うるさい!! お前は許さない！ 俺の仲間だけじゃなく！ トモユキの友達までっ!!』
『「っ！ タイガ・・・君もなのか？」』
『あぁ！ 俺の仲間、〈タイタス〉と〈フーマ〉は、アイツに殺されたんだっ!!』

【『グァアアアアアアアアッ!!』】
【『タイタスゥゥゥゥゥッ!!』】
【『ウワアアアアアアアアッ!!』】
【『フーマァァァァァッ!!』】

タイガの脳裏に、仲間達の死に様が、鮮明に甦った。
そしていつの間にか、タイガとトレギアは、成層圏を抜けて、宇宙空間に飛び出し、距離を空けて睨み合った。
『「そうかタイガ、君も友達を、仲間を奪われたんだな・・・・」』
『トモユキ・・・・』
『「討とうぜ。君の仲間を、俺の友達を奪ったあのクソヤロウをなっ!!」』
『ああっ!! フゥゥゥゥッ!』
タイガは右腕を天高く掲げると、両手を頭上で合わせて腰にぐっと引き寄せた。
すると、タイガの全身に光が集まっていき、タイガの身体が虹色に輝く。
『ストリウム! ブラスター!!』
右の拳を下から左手の平に当ててT字を作ると、右腕のから虹色の光線が発射

された！
『トレラアルティカイザー！』
それを迎え撃つように、トレギアは全身のエネルギーを両腕に集めて、青黒い光線を打ち出す！
２つのエネルギー光線が一瞬拮抗するが、徐々にトレギアの光線がタイガの光線を押していくーーー。
『フフフフ、ハハハハハハハハハハっ!!』
トレギアの『トレラアルティカイザー』がタイガを押し飛ばされた。
『クゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥっ！』
『く、くっそぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ!!』
『「(・・・ゴメンな綾波、みんな・・・どうやら、帰れそうに、無い・・・・)」』
トモユキとタイガはそのまま光線に押されて大気圏を落ちていったーーー。
『フフフ、良き旅の終わりを・・・タロウの息子よ』
落ちていくタイガに向かって、トレギアはそう言ってお辞儀した。

ーロイヤル近海の島ー

そこは、ロイヤル近海にある小さな島。

その島に、先日宇宙から落下した物を調査するためにやって来たロイヤルの艦船§§KAN—SEN§§達が、浜辺に倒れている重桜の軍服を着た若者を引き上げた。

その時、若者の左手の甲に、薔薇のような痣が浮かんでいた。

ー綾波ｓｉｄｅｌ

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、ハァ・・・」

綾波は、息を切らせながら、重桜軍港を見渡せる丘へ向かった。

丘へ到着した綾波の目に、トモユキの姿がーーー。

【見ろよ綾波。これが俺達の、俺達が作った重桜軍港だぜ】

「指揮官っ!!」

綾波は、トモユキに触れようと手を伸ばすが、トモユキの姿は消え、綾波の伸ばされたその手は、虚しく空を切っただけだった。

「・・・・・指揮官・・・・・!!」

綾波の瞳に涙が浮き始める。

先日、重桜本土へ向かった指揮官は、セイレーンとはまったく違った謎の巨大生物によって船は沈められ。

海守トモユキ指揮官は行方不明とされた。

それを聞いて、重桜の艦船達はＫＡＮ―ＳＥＮ達は悲しみに打ちのめされた。

ある艦船はその場で泣き崩れ。

ある艦船は信じないと茫然自失になり。

ある艦船は指揮官が帰ってくると言って軍港でずっと座りっぱなしになった。

他の艦船達もそれぞれにショックを受けていた。

綾波は、遮二無二に、指揮官との思い出がある丘へと走った。しかし、その場に指揮官の姿は当然無かった。

「指揮官・・・・！指揮官・・・・!!」
綾波もまた、その場で両手で顔を覆って泣き崩れ、重桜軍港では、艦船達の嗚咽とすすり泣く声が響いていたーーー。

ー赤城ｓｉｄｅｌー

「・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「姉さま・・・・」
赤城もまた茫然自失もなり、トモユキが行ってしまった水平線を見つめていた。
加賀も気持ちでは赤城と同じだった。
「うふふ、うふふふふふ・・・・」
「姉さま？」
「大丈夫よ加賀。指揮官さまは必ず帰って来てくださるわ。その為にも、〝あの計画〟を始めましょう」
「っ！〝あの計画〟を!? アレは指揮官も難色を示していたではないですかっ!?」
「このまま指揮官さまの不在が続けば、上層部の愚か者共が、別の指揮官を寄越す

わ。この軍港の、この重桜の指揮官は、指揮官さま只お１人。安全な場所で喚くしか能がない有象無象共が来ないように、私たち艦船がこの軍港を守らなければならないわ。そして〝あの計画〟が成功すれば、〝あの人〟も帰ってくる。指揮官さまの〝帰る場所〟を守る為にも、〝あの計画〟を進めるわ。そうよ、この重桜艦隊の指揮官は、海守トモユキさまだけ、あの方がお戻りになる為にも、この場所は誰にも汚させない！重桜上層部だろうと、鉄血だろうと、アズールレーンだろうとね・・・・・！」

「・・・・・・・・・」

赤城のその瞳に宿る狂気を帯びた光りに、加賀は息を飲むが、トモユキと最後に交わした会話を思い出した。

【加賀、赤城をしっかりと支えてくれよ】

「（指揮官・・・・）」

加賀もまた覚悟を決めて、赤城を支える事を決意した。

l???　ｓｉｄｅｌ

ロイヤルに保護されたその若者が目を覚ますと、ベッドの上だった。

「・・・・・・・・・・・・」

若者はベッドの上で上体を起き上がらせると、ベッドのある部屋を見る。どうやら個室らしい、ベッド以外には小さなテーブルと椅子が置いてある簡素な部屋だった。不意に若者の頭に声が響いた。

≪トモユキ！　起きたんだなっ!?　無事でなによりだぜ！≫

「っっ！!?」

そう、若者は重桜指揮官、海守トモユキだった。

タイガの声が頭に響くが、トモユキは身体をビクッ！と強ばらせて、キョロキョロと辺りを見回す。

「???」

≪トモユキ？　どうしたんだ??≫

「っ？・・・・・・・・・」

トモユキはタイガの声に戸惑っているかのような態度だった。

ガチャ・・・・。
「？」
≪？≫
部屋の扉が開くと、部屋の中に入ってきたのはーーーーーメイドだった。
「お目覚めになられましたか。お加減はどうですか？」
そのメイドは実に美しい女性だった。
絹のような精細な白髪。
フリルに彩られたステレオタイプのメイド服と、首には小さく破断した鎖を垂らしたチョーカーを首輪のように身に付け、凛としていながらも、どこか柔和さと艶やかさを兼ね備えた瞳が魅力の美少女だった。
「・・・・・・・・・・・・」
トモユキは、目の前のメイドに見惚れていた。
「いかがなさいました？」
メイドはにこやかに微笑みながら、トモユキの視線に気づいていると言わんばかりの態度だった。

トモユキはメイドを見つめながら、ようやく言葉を発した。
「あの、聞きたいんですけど・・・・・」
「はい、何でしょうか？」
「〝僕は一体、誰なんですか〟・・・・・？」
「っ?!」
≪なっ!?≫
トモユキの言葉に、メイドとタイガは驚いたように目を見開く。
「失礼します」
メイドはトモユキの近づき、トモユキの額に手を当てた。
≪トモユキ！　お前、まさか記憶が・・・・・！≫
「っ・・・・・！」
≪どうしたトモユキ?! 何か思い出したのかっ!?≫
「・・・・・・・・・・・・・」
トモユキの目線の先には、メイドの胸元が開かれたメイド服から、今にもこぼれんばかりの白く大きく、形も整った巨乳に注いでいた。

「(でっかくて綺麗な胸だな・・・・)」
≪あっ、スケベ心は忘れてないのか≫
記憶は失ってもスケベの心を失っていないトモユキに、タイガはガクンっとずっこけた。
「・・・・・・・どうやら、嘘は言ってはいないようですね」
「貴女は、誰ですか？　そしてここは・・・・？」
トモユキがそう聞くと、メイドは二歩・三歩後ろに引くと、スカートの両端を両手で摘まんで優雅にお辞儀をした。
「これは失礼しました。ここはロイヤル。そして私は、このロイヤルを守るロイヤルメイド隊の艦船、名を『ベルファスト』と申します」

～半年後～
トモユキは、重桜の指揮官であったその指揮能力をロイヤルの旗艦『Q$|$クィーン$¿$・エリザベス』に認められ、名を『カイン・オーシャン』と名乗り、アズールレーンの指揮官として、新たに設立された基地に向かう船に乗り込もうとしてい

た。

「ご主人様。服が少々乱れております」

「あぁ、すまないなベル」

ベルファストを愛称のベルと呼び、ベルファストに服を直してもらった。

「ご主人様にご同行できないのは、メイドとしてあるまじき行為なのですが・・・」

「仕方ないさ。メイド隊のメイド長のベルがいないと、陛下が基地に来たとき格好がつかないしな」

「そうでしょうか」

「それに大丈夫だよ。向こうにはすでにウェールズにイラストリアス、それにユニコーンもいるんだ。何か起こっても対応できる」

「ご主人様がそうおっしゃるならば、これ以上は言いませんが。私どももすぐにそちらに向かいます」

「あぁ。待ってるぜ」

船に乗り込んだカインこと、トモユキは水平線の向こうにある筈のアズールレーン基地を見据えていた。

「（・・・・不思議だな、前も誰かと、こんな風に水平線の向こうを見ていた気がする・・・・・）」

≪（トモユキ・・・・お前の心は覚えているはずだ。重桜の皆の事を・・・・・！）≫

そして、アズールレーン基地に潜入しようとしていた外套に身を包んだ綾波は、不意に水平線の向こうを見た。

「指揮官・・・・」

小さく、そして切なそうに呟いた綾波は、外套のフードを目深に被って、基地へと向かった。

カイン・オーシャン、海守トモユキとウルトラマンタイガは、再び戦場に戻ってきた。そこで彼らは、艦船達に新たな力と、タイガの仲間達と出会う事を今は知らない・・・・。

「行くぜ、タイガ！」

『ああ！』

「タイタス！」
『うむ！』
「フーマ！」
『おうよ！』
『カモン！』
「光の勇者！　タイガ!!」
『ハァアアッ!!』
「力の賢者！　タイタス!!」
『ヌゥゥンッ!!』
「風の覇者！　フーマ!!」
『フゥゥゥッ!!』
「バディー！　ゴーーーー!!」

この青く美しい海の星に、宇宙人達が密かに住んでいる事は、誰も知らない。
これは、戦いの大海原で出会った若者達と、気高い艦船達との絆の物語である！

ー『アズールレーンＴ』ー

誰かに笑われたって構わない。自分の信じる物を貫け。そびえる壁の向こうへ、手を取り合って行けるなら怖くはないさ。君だけの答えが待つ銀河へ今すぐ飛びだそう！

『生まれた星は違っていても！』
『共に進む場所は一つ！』
「永遠の絆を胸に！」
『我ら四人ッ！』
『『「トライスクワッド!!」』』

---

これから、アニメアズールレーンの第１話に繋がります。
いずれは連載したいですね。

# 光に選ばれし勇者達

著者　BREAKERZ

発行日　2023 年 10 月 8 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
https://syosetu.org/novel/140332/

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。